愚者達の戦記

藤森応輝

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
愚者達の戦記

【Ｎコード】
Ｎ７８５７Ｕ

【作者名】
藤森応輝

【あらすじ】
宿敵カルディ帝国との数百年に及ぶ戦いの末、ランリエル王国はついに帝国を打ち倒した。ランリエル王国の次なる目標はバルバール王国。大国コスティラに接し、攻め寄せるコスティラ軍を幾度となく退けてきた小さな国である。ランリエル王国稀代の名将サルヴァ・アルディナと、バルバール軍総司令官フィン・ディアス。知略をかけた２人の戦いの幕が上がる。

プロローグ

「サルヴァ殿下は何処！」
「総司令官は御健在なるか！」
ランリエル軍の各所から悲痛な叫びが発せられた。

大陸歴６２８年も開けてすぐ、ボルディエス大陸の東方に位置するランリエル王国、ベルヴァース王国の連合軍９万４千は、そのさらに東に国境を接するカルデイ帝国帝都ダエンへと攻め寄せた。
カルデイ帝国軍は４万５千。

連合軍は帝国軍の２倍を超える勢力を誇り決戦すれば勝敗は明らかだった。しかし、長大強固な塀に囲まれた城塞都市である帝都に篭られては攻略は困難である。

しかし帝国軍が堅牢な帝都に立て篭もるであろう事など、ランリエル王国第一王子にしてランリエル軍総司令官、サルヴァ・アルディナには本国を発した時どころか帝国侵攻の計画を立てた段階から予測出来た事だった。

その為帝都攻略の「ある秘策」を持って帝都まで進撃し、一ヶ月間帝都を包囲しながら秘策の準備を行なったのである。

そしてその秘策は実行された。勝利の確信を持って……。

だが帝国軍を率いる敵将は、サルヴァ王子必勝の秘策発動の隙を突いて攻勢に転じ、逆にランリエル軍を窮地に陥れたのである。

その秘策が見破られる事は無いと確信した上でさらに万全を期し

ていた。秘策の準備中に敵に攻撃されても撃退出来るだけの備えは、整えられていたのだ。

にも拘らず、かの帝国の敵将は、王子の策を読んだ上でその策の準備作業を放置した。そして策が発動した瞬間の隙を突いて攻撃に転じ、ランリエル軍に痛撃を与えたのである。

ランリエル軍は総司令官の所在不明という大混乱に陥った。全軍敗走せずに持ち堪えられているのはベルヴァースの老将セデルテ・グレヴィが指揮する軍勢により、何とか敵を食い止めているからに過ぎない。

いつまでも持ち堪えられるものではない。いずれはベルヴァース軍も戦線を維持できなくなるだろう。

グレヴィが敵を防いでいるその後方で、総司令官不在の中、幕僚達は必死で体勢を立て直すべく兵士を叱咤していた。その彼らに泥だらけの兵士が近づいた。

「貴様！　こんな所でうろちょろせずに自分の所属部隊の指揮下に戻れ！　指揮官の場所が分からないなら、あそこに固まっている兵士達と合流し、その指揮下に入れ！」

叫ぶ幕僚に兵士は泥だらけの兜を脱ぐと、泥にまみれた憮然とした顔を見せ付けた。

「でっ殿下！　申し訳御座いません！　しかし良くぞご無事で！」

ランリエル軍総司令官はその幕僚に
「ああ」と短く返答すると、水を持ってこさせて頭から被る。そし

て他の者にも自分の鎧に水を浴びせる様に命じた。

総司令官が泥だらけでは軍勢の士気にかかわる。兵士達の前には毅然たる姿を見せなくては成らないのである。

あらかた泥が落ちるとサルヴァ王子は改めて兜を被り、用意させた馬に跨り、将兵を鼓舞すべく前線へと戻ろうとした、その時、従者が呼び止めた。

「殿下！　これを！」

従者が差し出したのは、総司令官の印である外套と普段被っている兜である。万一の場合にと予備が用意されていたのだ。

外套を脱ぎ捨てており、兜も普段被っている王子に相応しい精緻な装飾がなされた兜ではなく、なぜか実用一点張りの不恰好な兜でその頭を守っていたのである。

外套を引っ掴むと馬の腹を蹴りその場を飛び出した。そして馬を走らせながら外套を身に付け、王子は前線へと急いだ。

第1話：小国の総司令（1）

大陸歴６２８年秋。

夕日に照らされ赤く染まりながら、バルバール王国軍総司令官フィン・ディアスは、馬上からコスティラ王国の軍勢が退却していく様を眺めていた。

バルバール王国国境に攻め寄せたコスティラ軍は、数千の死傷者を出したにもかかわらず遂に国境を突破する事叶わず、敗北したのだった。

バルバール軍の損害はその１０分の１にも満たない。

「毎度の事だが、よく飽きもせずに攻めてくるものだ」

ディアスは呆れながら胸中でごちた。

すると彼の乗馬が彼の心中を察したかの様に小さく嘶く。苦笑し、首の当たりを撫でると、馬は気持ち良さそうに嘶いた。

男は、茶色の髪と同じ色の瞳を持ち、武将としては小柄な体格だが、一般的には中肉中背と言ったところだ。

今年で３５歳になるが、バルバール王国の王族に名を連ねるでもなくこの年齢で一国の実働部隊の頂点に立っている事からも、その有能さが伺える。

ひとしきり乗馬の首を掻き峯ると、コスティラ軍へと視線を戻した。

バルバール王国は西にコスティラ王国、東にランリエル王国に隣接し、北にはコルス山脈があり、南は海である。

コスティラ王国と国力を比べれば、ランリエルの国力はその9割ほどと言われている。そして、バルバールの国力はコスティラの約半分でしかない。

確かにディアスは武門の名流の血筋ではある。だが、強大な2国に挟まれている王国の現状をかんがみれば、血筋だけで地位を得られるほど甘い状態ではない。

彼自身は特に軍人になりたい訳でもなかったが、武門の名流に生まれた以上、他の人生の選択肢はすべて閉ざされていた。

しかし、積極的に軍人を目指したのではない彼に、武術の鍛錬に身が入る訳もない。戦時に徴収され訓練もそこそこに出陣させられる一般兵にはかろうじて勝てるだが、日々鍛錬している本職の騎士にはまったく歯が立たない。一戦士としては、その程度の腕しかなかった。

その所為もあり、一国の総司令という身分でありながら、身を固める鎧は鉄板を張り重ねた極平凡な物だった。

「もし敵に本陣まで攻め込まれた時、目立つ鎧なんて着ていたらかっこうの目印になって危ないじゃないか」

彼は平然とそう嘯(うそぶ)いていた。

ではそのディアスがなぜ実働部隊の頂点に上り詰める事が出来たかと言えば、皮肉にも武門の名流に生まれたからだった。

その初陣にしてから、ディアス家一族挙ってはせ参じ、数百の私兵を率いた仕官として出陣した。幕僚も経験豊富な一門の将軍揃いであり、それを率いる彼を除けば国軍を統率するに足る面々である。

元々指揮する事に天賦の才を持っていたディアスは、それら経験豊富な将軍に囲まれ才能を開花させた。そして一族の者達がもう良かろうと独り立ちした頃には武功を重ね出世し、一族の力を借りなくても一軍を率いる身分となっていたのだ。

毎年の様に攻め寄せるコスティラ軍に対し、バルバール軍は同じ数だけ迎撃を行ってきた。今回の戦いも、何度目か誰も把握していないと言われるコスティラ王国からの侵攻が行われ、連勝記録は更新された。もっとも、何連勝なのかも、誰も把握はしていないのだが。

コスティラに比べ、国力が約半分でしかないバルバールは、一敗し国境を越えて敵軍に雪崩れ込まれれば劣勢を挽回する事は不可能に近い。一度の敗北で王国は地図から消滅する。

つまりバルバール王国が存続している間は連戦連勝でしかありえないのである。

もちろん、バルバールの王都が占領され国王が討たれても、王族の血を引く貴族や民衆が数年に渡って抵抗するだろう。だが、元々の国力で太刀打ちできず、他国から支援を受けられないと言う状況では、いずれ鎮圧される事になる。

しかも西のコスティラだけではなく、東には……。

「敵もよく飽きもしないものですな」

ディアスが己の思考は中断させた声の主へと視線を動かすと、先ほどの彼と同じ感想を洩らし馬で近づいてきたのは、バルバール軍

の猛将グレイスだった。

短く刈った黒髪に無精髭を延ばし鍛えられた体躯を持ち、ディアスとは違い、如何にも猛者と言った貫禄である。背も彼より頭半分ほどは高いだろう。

「ああ。まったくだ。もっともおかげで、我らは廃業せずにすむというものだがな」

肩をすくめ、不謹慎な言葉を悪びれず吐き出した彼に、猛将は大きく笑った。

「はっはは！　相変わらずですな。確かに奴らが攻めて来ねば、後はめったに無い反乱ぐらいなものですからな」

コスティラとの戦いが毎度の事とはいえ勝利で終わり気が高ぶっているのであろう。グレイスはすこぶる機嫌が良い。

無精髭の奥から白い歯を覗かせ、豪快に笑う。

「しかし、これで今年の戦いは終わりですかな？」

「そうだな。いくら大国でも年に何度も侵攻する力は無い。年内にもう一度攻めてくる事はないだろう」

「では、後はゆっくりと寝て過ごしますか」

グレイスはさらに豪快に笑ったが、ディアスの表情に気付き再度口を開く。

「どうなされなしたか？　表情が優れないようですが」

「いや、コスティラは良いとして、反対側のご隣人が気に掛かってな」

ディアスの言葉に、グレイスも顎に手をやり考え込む様な表情になる。

「ランリエルですか……」

「ああ、グレイス将軍も聞いているだろ？　ランリエルは去年宿敵カルデイ帝国を征服する事に成功した。そうなれば今度はこっちに攻めてきかねない」

今までランリエルに攻められなかったのは、そのさらに東にある宿敵カルデイ帝国との戦いに手こずっていた為だった。しかもその両国にはさらにベルヴァース王国という小国も隣接し、戦いは複雑さを増し、今まで決着が付かなかったのだ。

だがその戦いに終止符が打たれたとなれば、かの国が次に狙うのはバルバールだろう。

だが意外にも軍で、それを案じている者は少なかった。グレイス将軍もその一人だったのだ

「ですが……。それは考えすぎと言う物では無いですか？」

ディアスに遠慮がちに言ったが、しかしこれはグレイスが能天気の楽天家という訳ではない。

実はランリエル、カルデイ両国の長い戦いの歴史では、今までも片方の国がもう片方の国を征服しかけた事など、今までにも何度もあったのだ。

しかし、両国の国力は、ほぼ同等だった。

征服されそうになるたびに、それぞれの王家、皇家の血を引くと称する貴族達が新国王、皇帝を名乗り立ち上がり、さらに民衆もあちこちで蜂起する。しかもである。そこに両国の戦いに決着が付いては次は自分達が狙われると考えるベルヴァースも介入し、形勢不利な方に援助を行うのだ。その為、結局は国が再建されるという事を繰り返していたのだ。

それゆえ、今回のランリエルによるカルデイ征服もどうせ最後には失敗すると考える者は多かった。それどころかランリエルは帝国との戦いにてこずり、むしろ東の国境は安全になるという考えが主流だったのだ。

「しかし、もしランリエルが攻め寄せてきては、我々は2倍の敵を前後に受ける事になる。しかもコスティラが我が国に攻め寄せる時は陸海の両路とも天険の地形が我が国に利するが、ランリエルはそうはいかない。陸路はともかく海路に地形の恩恵はない」

彼の言うとおり、陸路においてコスティラとの国境は険しい渓谷が続き、この渓谷に強固な関を築き少数の軍勢で易々と守る事が出来たのである。

そして海路も、国境付近の沖合い近くにはマレビアナ半島がせり出している為、バルバール王国沖は非常に狭い。

特にコスティラ王国沖からバルバール王国沖へと入る海道は１０隻も船が並べば互いに衝突しかねないほどだった。

海戦は艦艇の船首に衝角と呼ばれる金属の角を取り付け、敵艦に体当たりして穴を開けて敵艦を沈めるという衝角戦法が主流だった。

そして衝角戦では敵の船側を突く事が重要である。

この様な戦いでは船の旋回能力が重要な鍵となる。その為、軍艦の殆どは帆船ではなく多数のこぎ手を必要とするガレー船である。帆船では風向きによって旋回方向や進行方向が制限されるのだ。

コスティラ海軍が船団を縦に並べて狭い海道を突破すると、その出口を封鎖する様にバルバール海軍の艦艇が待ち受けているのだった。

海道を出たところで包囲され、敵艦から船側を隠す事もままならず、コスティラ艦隊は次々と海の藻屑と消えていくのである。

このあまりにも不公平な地理条件にコスティラ軍部は神を呪ったが、バルバールにしてみれば国力に差があるのだから地理条件ぐらいこっちに有利にして貰わないとたまらない。これで釣り合いが取れているだろうよ。と言う所だった。

そしてランリエルに対しても国境付近の陸路は山々に囲まれ守るに易いのだが、海路はコスティラとは違い大きく開け放たれているのだった。

「それはそうですが、ランリエルには大規模な海軍はありません」

「それは分かってはいるが、我々の様な小国に油断は許されない。万一の事にも対策は考えて置くべきだろう」

「確かに……」

とは言うものの、グレイスの表情は何か納得しかねている様だった。

ディアスは微かに苦笑した。
ここでグレイスと議論してもしょうがない。

「まあいい。とにかく今日は勝ったんだ。敵が引き上げたのならこちらも退却……と行きたい所だが、敵が引き返して来る事も考えられる。今日はこのままここで夜営をしよう」

「確かに。では早速その準備を致しましょう」

ディアスの言葉にグレイスは素直に頷く。

グレイスはその指令を自らの部隊と同僚の諸将へと伝えるべく馬首を返し、馬の腹を蹴ってその場を立ち去った。

第1話：小国の総司令（2）

数日後ディアスは、バルバール王国王都チェルタに凱旋し、さらに王城へと馬を進ませた。

国王が座する王城は付近で産出される石の色の為褐色の肌を持ち規模も小さく、一国の王城としては残念ながら威厳や荘厳、ましてや優雅といった表現とは無縁だった。

遠くから王城にふさわしい白石を運ばせるのも、巨城を建設するのも小国バルバールの財政では不可能だったのだ。

ディアスは入城するとすぐさまバルバール王国国王ドイルに謁見し、膝まずいて戦勝の報告を行った。

国境へと攻め寄せた敵軍を撃退した。という簡潔な内容を多少の装飾を施して報告する。

彼にしてみれば「敵を撃退してまいりました」とだけ報告して終わらせたいのはやまやまなのだが、そこは宮廷作法という物なので仕方がない。

それに対しドイル王から労いの言葉を賜った。

「そなたの此度の働きまことに見事である。しばらくはゆっくりと身を休ませるが良い」

まことに独創性の欠片もないお言葉である。だが、度重なるコスティラ王国との戦いで、歴代の国王が気の利いた台詞を言い尽くしまった。と言われていた。

気の利いた台詞を使った挙句先人の真似と言われるくらいなら、何度使い回しても非難されない無難な言葉を下す方が楽と言うものである。

昇進や恩賞についての言葉はないが、ディアスに不満は無い。

軍事において総司令官の位と言えば、軍務大臣しかない。だが軍務大臣とはいえば聞こえが良いが、実際は裏方の総元締めであり、彼にとってはなりたいと思う役職でもない。

そして他者からも、彼は総司令官としての才覚は認められているが、裏方の総元締めなどという任務には向かないだろうと評されていたのだ。

そして、なんら得る物のない防衛戦の勝利に恩賞を出す経済的余裕は、小国バルバールには無いのである。

だが、この事についても彼に不満は無い。

「その分戦争の無い時は楽をさせて貰っている」そう考えているのだった。

もっともまじめな軍人であれば、平時にこそ自己を鍛錬する時と、楽をさせて貰っていると言うディアスの考えを真っ向から否定するであろうが。

彼のドイル王への人物評価は言うなれば「お人よし」と言うものだった。とはいえ、国王の評価が低いというわけでない。むしろその逆である。

臣下を疑うという事を知らず、政治、財政そして軍事のあらゆる国家運営について、任命した人材にすべてを任せるこの国王は「賢王」と言っても良いだろう。彼はそう考えていた。中途半端な知識で口を出されては現場の者がやり難くて仕方が無い。

「国王陛下のお言葉、ありがたく承ります」

ディアスは跪いたまま型どおりの礼儀に則った返礼の口上を述べた。さらに礼儀に則った一礼をし国王の前から退出した。

自身の邸宅へと帰ったディアスとその従者を、数人の使用人、それに従弟のケネスが

「ディアス将軍お帰りなさいませ」と出迎えた。

ケネスは叔父の次男で17歳の少年だった。

父の弟であるケネスの父は、どうせ武門の名流であるディアス家を継げないのならと商家へと婿入りした。だが、叔父の2人の息子達は父と同じ考えにはならず、軍人になりたがった。

だが長男は商家を継がせない訳には行かない。そしてその事は長男も十分承知していた。その為、それならばせめて弟だけでもと兄弟共々叔父を説得したのだ。

こうしてディアスの元へと預けられたケネスだったが、残念ながら軍人として恵まれた体格とは言い難い。

軍人としては小柄なディアスより、ケネスの方が身長は高いのだが、体の厚みはその身長に見合ったものではなかったのである。

ディアスよりもさらに薄い茶色の髪は、その頼りなさげな体格をさらに弱々しい印象に補完しているのだった。

その体格のひ弱さは身体を鍛えればどうにかなるというものではなく、骨格からして苛烈な戦闘には耐えられそうになかった。
いくら肉を鍛えても、その骨は敵が渾身の力で振り下ろす大剣を支える事が出来ないだろう。

その為17歳という年齢にもかかわらずケネスはまだ初陣を迎えておらず、今回の戦いでも邸宅の留守を守っていたのだった。
だがそれでも軍人になる事を諦めず、ディアスの元で軍略の勉強に励んでいたのだ。

「ディアス将軍の様に帷幕の中で勝利を決する武将になりたい」

それが少年の目標だった。だがこの言葉を聞いたディアスは、何を言っているんだ。とばかりにため息を付き首を振った。

「それは実際の戦場での私を知らない者が言っている事だ。戦場に出た私がいかに勇敢に先陣を駆け戦っているのか、お前に見せてやりたいものだよ」

ケネスはこの言葉にディアス将軍の事を見損なっていたのかと赤面した。だが、後日長年ディアスと共に戦っているというある武将から次の様な言葉を聞いた。

「総司令が先陣を駆けるだって？　総司令が敵の矢の届く距離に入った事すら見た覚えが無いぞ？」

この言葉を聞いたケネスは驚き改めてディアスに問いただすと、彼は悪びれずに肩をすくめた。

「私は総司令官なんだぞ？　私が討たれれば戦は負けなのに、どう

して死ぬ確率が高い場所に行かなくてはならないんだ？」

そう言って不思議そうに少年を見つめたのだった。

「それは確かに将軍の仰るとおりかも知れませんけど、どうしてわざわざ僕に嘘をつく必要があるんですか！」

普段は大人しいケネスもさすがに怒気を発した。それに対してもディアスは悪びれる事も無くもっともらしく諭した。

「軍人を目指すなら、策を立てその策を持って勝つという軍人を目指すなら、まず人から聞いた事をそのまま信じるのではなく、ちゃんと事実を確認する癖をつけた方が良いからさ」

こう言われてはケネスもぐうの音も出ず、引き下がらざるを得ない。

もっともこの話を聞いたディアスを知る多くの人々は、単に素直で真面目な少年をからかっただけに違いない、と信じて疑わなかった。

とはいえ、ディアスもケネスを邪険に扱っているわけではなく、それなりに可愛がり兵法について色々と教授する事もある。

例えばこう言う事があった。

ケネスが居間で椅子に座り、兵法の書物を一生懸命に読んでいるとディアスが不意に話しかけた。

「守る方は攻める方の１０倍の兵力が必要と言う言葉を知っているか？」

ケネスはキョトンとし、そしてしばらく考え込んだ後笑い声を上げた。バルバール王国軍総司令官ディアスたろう者が、兵法の講釈で言い間違えたのだと思ったのである。

「それは攻める方が。の間違いですよね？　勿論知っていますよ。城や砦に篭って守る方が有利と言う事ですよね」

すると、ディアスは上手く引っかかったとほそく笑んだ。

「間違いではないんだ。守る方が攻めるより兵力が必要なのさ」

戦いとは守る方が有利である。これがケネスが今まで勉強した兵法での常識だった。だがディアスはそれが違うという。

いくらディアスのいう事でもにわかには信じられない。という様子の少年に、ディアスは机上演習の用意をするように言いつけた。

「あまり複雑ではない地形の地図と駒を沢山持ってきてくれ」

そして地図と駒を持ってきたケネスから、５つだけ駒を受取り、他の駒はすべてケネスに持たせる。

「この地図全域をお前の領地としよう。地図の真ん中がお前の城だ。そしてその周りには多くの村々があるとする。私は国境から駒を進ませて村々を略奪するので、お前は略奪されないように守るんだ」

その説明通りに机上演習が始まったが、ディアスは５つの駒を駆使して攻め込んでくる。

まず１つの駒で突っ込んできたのでケネスも１つで迎撃に向かう。

だが、地図の真ん中の城から出陣してもディアスの駒はすぐに逃げ去ってしまった。

なので国境付近に駒を一つ常駐させる事としたが、するとディアスは駒を5つに増やして攻めてきた。

仕方が無いので常駐させる駒を5に増やす。

すると今度はまったく別の方向から領地に侵入してきた。やむを得ず四方八方に駒を5つずつ常駐させねばならなくなった。

「これで何処も攻められませんよね？」

少年は得意げに言ったが、もっともこの時点ですでにディアスの数倍の数の駒を使用していた。だが10倍までには達していない。一応面目は保ったと思ったのだ。

しかしディアスは、意地の悪い笑みを浮かべるとさらに机上演習を続けた。

まず一つの駒で出撃して来たので、ケネスも近くの拠点に置いた5つの駒の内から一つの駒を出撃させた。

するとディアスは増援を派遣し、1対5でケネスは負けてしまった。その後村は略奪された。拠点に残る4つの駒では、ディアスの5つの駒に勝てないのである。

次にまた一つの駒で攻めてきたので、今度はやられないぞとケネスは拠点から5つの駒を出撃させた。

するとディアスの駒はそのまま国境を越えて逃げ去ってしまう。そしてディアスの残りの駒は、手薄になった拠点付近の村を略奪してしまったのだった。

結局完全に守りきる為には各拠点に１０以上の駒が必要となり、ケネスが使用した駒はディアスの１０倍を遥かに超えたのだった。

「どうだ、守るのに１０倍の兵力が必要だっただろ？　もっとも実際の戦争ではこうも上手く部隊を連携させて動かすのは難しいがな。まあ、こう言う考え方もあるという事さ」

ディアスは肩をすくめてそう言ったが、少年が唖然としたままなのに気付いてさらに説明を続けた。

「これが兵法の「吾が与に戦う所の地は知るべからざれば、則ち敵の備うる所の者多し」という考え方だ。確かに城や砦という「点」を攻める時は守る側の方が少ない兵力で守れるが、領地という「面」を攻める時、こちらの攻める場所を敵が察知できないなら守る方が兵力を必要とする時があるんだ」

ケネスは改めて尊敬の眼差しを送り、ディアスはその様子を見て満足したのだった。

しかし、少年は気付いていなかった。この様な兵法の授業はディアスがケネスをからかって怒らした数日後に行われる傾向がある事を。

第1話：小国の総司令（3）

邸宅に帰ったディアスは、今回の戦いについて聞きたがるケネスに、勿体ぶりながらも居間でその話を聞かせてやっていた。

勿論その話の中でのディアスは、敵陣に一騎で踊り込み雲霞の如く攻め寄せる敵兵をばったばったと切り倒し、幾人もの敵将を討ち取った事になっている。だが、ケネスもそのあたりはわきまえたものだ。

ディアスが自ら剣を取って戦ったという部分については話半分ならぬ話零分で聞いていた。

常に敵からの矢が届かない距離に居る人間が、雲霞どころか1人の敵とも戦っている訳が無いのである。

だがそれでもケネスは楽しく話を聞いていた。すると従者が、各国の情勢について調べさせていた者から連絡が入ったと、ディアスに伝えてきた。

「この話の続きはまた今度にしよう」

ケネスは話が中断される事に残念がったが、総司令の職務を邪魔する訳には行かないと大人しく引き上げた。

ディアスはすぐさま自分の書斎へと部下を招きいれる。

強国2つに囲まれた小国の将軍として情報の収集と分析は、実際に軍勢を率いる事に劣らぬ重要な任務なのである。

部下がもたらした報告とは、バルバールの東に国境を接するランリエル王国の動向についてだった。

ランリエル王国とさらに東にあるカルデイ帝国とは過去数十世代に渡り相争って来た間柄である。

だが近年ランリエルが帝国の軍勢を決戦にて打ち破り、帝国内深く進攻してその帝都まで占領する事に成功した、との情報が入っていた。その為さらなる調査を行うべく部下を派遣していたのである。

もっとも、長いランリエルと帝国との戦いの歴史の中で、一方が他方を滅亡寸前まで追い詰めるたという事は幾度と無くあった。だがそのたびに滅亡寸前のランリエルなり帝国の貴族と民衆は徹底抗戦を続け、数年間をかけて遂には勝利者を追い払うことに成功する。という事を繰り返していたのだ。

そしてその結果、勝利者だったはずの国が、数年間に及ぶ国外出兵に国内経済が破綻し弱体化した。という事態が発生するのである。

それ故バルバール王国の軍人の中には、ランリエルが帝国の国内奥深く軍勢を侵攻させた事について
「これで我が国の東の国境は十年は安心していられる」と発言した者も存在した。

どうせ今回も数年間戦った挙句失敗すると考えたのだ。そして同意見の者は少なくなからず存在したのである。

だが部下からの報告は、あまり愉快なものとは言えないものだった。どうやらランリエルは長年争いなびく事を知らなかった帝国を、夫に逆らえぬ力ない貞淑な妻にする事に成功しそうだと言うのだ。

「なぜ、その様な事が可能なのだ？　なぜ、ランリエルの支配を不

服として帝国の貴族や民衆達は抵抗しない？」

だがその疑問に対する部下の答えは、ディアスの想像を超えていた。

なんとランリエルは、強引に帝国貴族達の独立を認めさせたのだ。こうして「大国」カルデイ帝国は、複数の小国に周りを囲まれた「中国」となり果てたのだった。

そしてさらに帝国に毎年多額の賠償金を支払う様に命じた一方、増税はしないように言い渡したのである。

あくまで対抗し続けるなら、帝国は多額の増税をおこない軍備増強に励まなくてはならない。だがそれでは民衆にはたまったものではない。

ランリエルが増税しないように言ってくるなら、それに従えば良いのだ。

こうなってはランリエルに抵抗しようにも、帝国は民衆すら敵に回しかねない。

そして増税をせずに多額の賠償金を支払うには、帝国は軍備を大幅に縮小するしかなかったのである。こうして帝国はランリエルに対抗する力をまったく失ったのだった。

当然、この様な手段をとれば、カルデイ帝国全域を支配する事に比べれ実入りは減る。

「だが、支えきれぬほど大きな果実を無理に取ろうとするより、手中に納まる獲物を確実に取りにいった……。と言うわけか」

「はい。それでもランリエル王国の国力はかなり増強されたと思われます」

そして部下からさらに詳しく報告を受けた結果、どうやらランリエルの国力は3割増にはなるであろうと推測された。

だが3割増とはあくまでも現時点での話である。これから数年から十数年をかけてランリエルの帝国支配は強まっていくだろう。

未だ帝国に組する貴族達に難癖をつけて取り潰し、ランリエルに組した帝国貴族とて隙あらば取り潰して自領へと組み入れる。

カルデイ帝国の存続は民衆の反乱を懸念し、かろうじて許されるだろう。だが、その領土はやはり無理難題を押し付けてでも削り取っていくに違いない。

そうなれば今の3割増どころか5割増、6割増の国力となり、その時西に強敵を有するバルバール王国はさらに東にも強敵を抱える事になるのだ。

だがディアスは、ランリエルの国力が増すという事よりもさらに恐れるべき事に気付いた。ランリエルに、長きに渡る、帝国との戦いに終止符を打つ事が出来た「人材」が出現した、という事にである。

「カルデイ侵攻の計画と指揮を執ったのはどのような人物か？」

「ランリエル王国の第一王子です。名はサルヴァ・アルディナ。歳は27で御座います」

「王族、しかも第一王子という事は次期国王か……」

なるほど、それでここまで大胆な方法を取れたという訳か。

いくら有能でも一将軍ではカルデイ帝国征服について、過去の政策からあまり逸脱した事は出来まい。次期国王にして軍人であればこそ、ここまで自由な裁量が振れたのだ。

だが勿論、軍人且つ王子であれば誰にでも出来た事ではない。

ランリエルによる帝国支配が安定するであろう十数年後、まだかの王子は４０代の働き盛り。その時バルバールはかつて無い危機に直面するだろう。

ランリエルを刺激しない様に細心の注意を払いながら、密かにランリエル王国側国境に迎撃拠点を建設する必要がある。

暗雲たる気持ちでディアスはそう考えたのだった。

第2話：灼熱の王子（1）

「エクエル子国のファシェル子爵にグリエス男爵の討伐を命ぜよ」

ランリエル王国第一王子は王都フォルキアにある軍部の執務室にて、カルデイ帝国への支配体制を強化すべく配下のギラルデ・ムウリ将軍ら幕僚達に指示を与えていた。

しかし……と王子は自身の言葉に皮肉な笑みを浮かべる。

王が治める国が王国であるように、公爵が独立し一国をなせば公国、侯爵ならば侯国である。当然子爵が一国をなせば子国なのであるが、自分が認めた事とはいえ子国などとうものが存在するという事に、笑い出しそうになったのだ。

もっとも実は子爵より下の爵位の男爵にすら王子は独立を認めており、男国すらも存在するのだが……。

王子は頭を一振りすると、脱線しそうになった思考を軌道修正させた。

鍛えられ長身といえる体躯、漆黒の長い髪を後ろで束ね、瞳の色も同じく漆黒に輝く。このサルヴァ・アルディナ王子こそがランリエルの長年の宿敵たるカルデイ帝国を組み敷き、貞淑な妻にしようとする張本人だった。

もっとも組み敷かれた方も大人しくしていると見せかけ、時おり背に隠した刃にて斬りつけようとするので油断は出来ない。

今回の処置も、後何本隠しているか分からない刃の一本を取り上げる為のものだった。すべての刃を取り上げた時こそ、かの国は真に貞淑な妻へと変貌するだろう。

王子は未だ帝国に忠誠を誓う帝国貴族への監視及び討伐は、帝国から独立した各独立国に命じる方針をとっていた。

実利を考えればランリエル軍に制圧させる方が当然実入りは多い。独立国に命じれば恩賞としてそれなりの分け前を与えねばならない。だが、王子は長期的な国力強化よりも、短期間での支配力強化を狙ったのだ。

確かに帝国貴族の討伐をランリエル軍で行えば丸々その貴族の領地を手に入れる事が出きるだろう。では、独立国に討伐させればどの様な利点があるのかと言うと、カルデイ帝国の分裂の促進だった。

今回ランリエルからの依頼で男爵を討伐するファシェル子爵は、二度と他の帝国貴族及び帝国自体と相容れる事は出来ない。

独立国の戦力が参戦しない以上、カルデイ帝国は以前と同等の戦力を整える事は不可能になる。

そして独立国は今後さらにランリエルに擦り寄っていかざるを得ない。そうなれば所詮独立国など名ばかりとなり、こちらの要請に応じて軍勢の派遣すら断れまい。

王子にとっては独立を認めた分税収が減ろうが、軍勢さえ提供するのであれば独立国も、他のランリエル貴族と変わるところはないのだった。

もっともそれはさすがにまだ先の話だ。それにはまだまだ帝国と独立国の関係を悪化させる必要があった。

「しかし、この様に性急に事を運んで大丈夫なのですかな？」

ムウリ将軍がサルヴァ王子の指示に疑問を呈した。彼は配下の将軍の中でも思慮深さに定評があった。

「早急にとは？」

「帝国を征服し、またすぐにバルバールを攻めるという事についてです。我らがバルバールを攻めている時に、折角征服した帝国に叛かれては元も子もありません」

そう、ディアスはランリエル王国によるバルバール王国侵攻は十数年先と考えていたのだが、王子は準備が整い次第バルバールへと攻め寄せる計画だったのだ。

その為に、カルデイ帝国への支配力強化を急いでいるのだ。

王子の身体には飽くなき覇気が満ちていた。

ランリエル王国の北にはベルヴァース王国があり南は海。東にある帝国のさらに東と南には海が広がっている。

ベルヴァース王国、カルデイ帝国との三竦みの状態から抜け出したものの、今またベルヴァースにまで手を出せば、弱体化したとはいえ帝国も黙ってはいまい。帝国が大人しくし従っているのは曲がりなりにも存続が認められているからなのである。

ベルヴァースにまで手をさせば、帝国はその存続にすら危機を覚えるだろう。ならば攻めるとしても、ベルヴァース以外の国を狙わなくてはならない。

カルデイ帝国のさらに東北には草原が広がっていて、その地域は遊牧民が暮らすのみ。サルヴァ王子の征服欲は刺激されなかった。そもそも帝国領土を越えての遠征など成功しても統治が難しい。

次に攻めるならばランリエル王国の西に接するバルバール王国。王子はそう定めたのだった。

「問題ない。その為にも多くの帝国貴族達の独立を認めているのだ。十分我らの為の防波堤の役割を果たしてくれるだろう。彼らは今更帝国と手を結ぶ事は出来ないのだからな」

「しかし我が国には、バルバールに対するだけの海軍がありません」

商船の行き来は盛んだが、今まで主敵だったカルデイ帝国とは小高い山岳地帯を国境として接し、その戦いも陸戦が中心だった。

ランリエル、帝国双方の王都、帝都も内陸にあり船舶で運べる程度の軍勢を海上から移送しても効果的な奇襲が行えるわけでもなく、その為両国とも海軍は発達しなかったのだ。

そしてバルバール王国との国境は、帝国との国境よりもさらに険しい山岳地帯で区切られていた。もっともこれは奇しくもと言うほどでもない。

国境とは山なり川なり海なり、そして時には砂漠なりで、人々の生活圏が区切られたところに自然と成り立つものだ。国境が踏破困

難な地形なのは珍しくないのだった。

まったくの平地に国境が引かれる事があるとすれば、それは戦争や政争の結果、領土が割譲された場合だ。

そしてコスティラと海戦も行っているバルバールは海軍も整備されている。その為、国力はランリエルより遥かに劣るにもかかわらず、バルバール海軍はランリエル海軍よりも多数の艦艇を揃えているのだった。

「勿論それは分かっている。その為急いで海軍の増強を行っているのだ。なに私も軍艦の建造が一朝一夕で出来ない事など分かっている。それはでは辛抱強く待つさ」

王子の言葉に、ムウリ将軍は引き下がった。

王子は秘中の策を他に漏らさぬ傾向がある事を、長年王子に仕えてきたムウリ将軍はわきまえていた。何の策も無く行動を起す方ではない。自分が懸念を進言し、それでも実行するというならば何か考えがあるのだろう。

すべての指示と裁決を終えると、サルヴァ王子は執務室においてある自らの兜を一瞥した後、執務室を後にした。

鎧の他の部位は戦時に備え保管されているのだが、兜のみは常に執務室の机の傍に置かれているのだった。

大国の次期国王である王子の鎧は金銀で見事に細工がなされ、曇り一つ無く磨かれた見事な物だった。だがこの兜は奇異な事に一切の装飾が無く、傷だらけで実用一辺倒の物だった。

鎧とは、兜から籠手やすね当にいたるまで統一されて作られるものであって、兜のみまったく別の作りという事は通常ありえない。王子も初めは鎧の胴体部分に見合った華美な兜を使用していた。

だがカルデイ帝国との最終決戦時ランリエル軍は一時劣勢に立たされ、王子も所在不明になるという危機に直面した。そして、その所在が知れた時、装飾がなされた兜ではなく現在の兜をかぶっていたのだ。

その後体勢を立て直したランリエル軍は帝国軍を撃破し、それからはこの兜を常に手元の置いているのである。

その為人々は「王子の身代わりとなる為兜を交換し、戦場で散っていった騎士」の存在を夢想し、その美談を噂した。だが、その噂を耳にしたサルヴァ王子は苦笑で応じた。

そして本当のところは？　と問いかけられた王子は「そんなにいい話ではない」と一言洩らしただけで真相を語ろうとはしなかったのだった。

第2話：灼熱の王子（2）

配下の者達への指示が終わった後、サルヴァ王子は執務室から王城内にある自室へと向かった。だが、途中で気が変わり王城に建つ４つの塔のうち西側にある塔へと昇る。

そこから西を、つまりバルバール王国の方角を眺めた。

勿論バルバール王国が見える訳は無い。いや、それどころか王都の外すら見えない。

ランリエル王国王都フォルキアは長年続いたカルデイ帝国との戦いの歴史で何度も攻められた経験から、王都の周りを高い塀でぐるりと囲んだ城塞都市なのだ。

これは帝国も同じ事だが、それはもはや過去の話だった。帝国が屈した時にカルデイ帝都の塀はすべて撤去された。いざという時に立て篭もって抵抗されない為だ。

王城から外を眺めても見えるのはその塀だけなのだが、王子の思考は塀どころか距離すらも超越しバルバール王国へと飛翔した。

バルバールには自分の強敵たらんとする名将が存在するのだろうか？

カルデイ帝国は征服した。しかしその戦いは接戦だった。

帝国との最終決戦時、それまでの戦闘の結果、戦力は2対1にまで有利となっていた。にもかかわらずサルヴァ王子は、最終決戦で

敗死寸前まで追い込まれたのだ。

しかもその戦いで帝国軍を指揮した将軍を討ち取ったかと言えば、討ち取ることすらも出来なかったのだ。

帝国軍に大打撃を与え帝都の塀を突破し突入はしたものの、敵将は残った僅かな軍勢をまとめ帝都の奥に位置する城に立て篭もった。

戦いが終結したのは、カルデイ帝国皇帝が劣勢に恐怖しサルヴァ王子の降服勧告に応じた為なのだ。

王子はその将軍を助命し、我が部下にならないかと誘ったがその将軍は首を振った。

「ランリエルに仕えれば帝国兵士と戦う事になるかもしれない。そしてそれは出来ない事」

その将軍はそう言って誘いを断ったのだ。

最終決戦時に帝国軍を指揮したその将軍に、自分は勝てたといえるのだろうか？　バルバール王国にも彼に匹敵する者が居るのだろうか？

バルバールの国力はランリエルの半分ほど、いや今回帝国を屈服させたことによりその差はさらに広がっている。

だが油断は出来ない。バルバールにかの将軍に匹敵する者が居れば、その優位を覆される事も考えられるのだ。

しかし、覇気あふれるサルヴァ王子も当初から軍人を目指してい

たわけではなかった。軍人を目指したのはある時期からだった。

父である現国王クレックスは今年４０歳となった。王子は２７歳である。親子の歳の差は１３歳でしかない。

現国王の祖父の時代ランリエル王国は大規模なカルデイ帝国討伐を計画し、見事カルデイ帝都を占領した。当初は成功するかとも思われた。だが、先例に洩れず数年間帝国内で戦った挙句撤退し、ランリエル王国は戦費の負担により経済が破綻した。

その為王室は、国内で屈指の資産家だった、とある公爵家からの援助を受ける事になったのだ。しかし、その公爵は自分の孫娘と当時まだ１２歳だったクレックス王子との結婚を条件に付けたのだった。

しかもすでに老齢だった公爵は、孫娘が王家を継ぐべき男子を産むのを見届けねば死んでも死にきれないと、１２歳のクレックス王子に見合う年齢の孫娘ではなく、７歳も年上の出産に適した１９歳の孫娘マリセラを引き合わせたのだ。

クレックス王子は反発したが財政難は乗り越えねばならない。結局結婚は強行され、そして翌年にサルヴァ王子が生まれたのだった。

もっとも幸いな事にクレックス王子は、年上の妻に愛され夫婦仲は良好だった。ではクレックス王子の方はと言えば、結婚前までは反発していたものの、１２歳の少年が１９歳の女性に手玉に取られない訳が無かったのだった。

そして現在、クレックス王と王妃の間にはサルヴァ王子を筆頭に、３人の王子と２人の王女に恵まれていた。

だが王妃と関係が良好とはいえ、クレックス王も財政難の所為で臣下に結婚を強要された。という事についてはやはり納得できず不満を洩らし続け、サルヴァ王子もその父の姿を見て育った。

そしてバルバール王国を財政難に陥らせた曽祖父の時代の戦争について知れべているうちに、勝気な王子が自らも軍人を目指すようになるのに時間は掛からなかったのだった。

サルヴァ王子は１５歳の時に初陣を向かえた。

初陣にもかかわらず、大隊長「格」として一隊を授けられたサルヴァ王子は「持ち場から一歩も下がらず持ち場を守り続けた」と伝えられている。

だが事実は「未熟な為まったく戦況がつかめず、いつの間にか戦闘が終っていた」のだった。持ち場から下がらないも何も、真実は王子の所まで敵は攻め寄せてきさえしなかったのだ。

それを次期国王たるサルヴァ王子におもねる臣下達が、都合の良い部分だけを虚構の額縁に入れ、さらに真実の上から賛美の絵の具で塗りつぶし、事実を作り上げたのだった。

自らの未熟さに人知れず嗚咽を洩らした王子が、真に軍人を目指したのはこの時だった。あまりにも無残な初陣を飾ったが故に、稀代の名将たらんと誓ったのだ。

サルヴァ王子の胸中には矛盾が存在した。国々を征服し領土を広げようという征服欲と、自分と匹敵、いや凌駕するほどの強敵と戦いたいという欲求がせめぎあっているのだ。

領土を広げるならば強敵など居ないにこした事はない。しかし稀代の名将たらんとする少年時代の誓いが、強敵を欲するのだ。弱敵に勝ったからと言ってそれがどうだというのか。

だが稀代の名将であるなど厳密に証明出来る訳も無い。各国すべての名将と呼ばれる武将達と同一条件で戦って勝つなど現実には不可能なのだ。だがそれは生理的欲求と言ってよいほどの渇望だった。この世に生理的欲求に抗えるものなど居るだろうか。

そして遂にランリエル王国の悲願だったカルデイ帝国討伐を成功させたサルヴァ王子だったが、その覇気は治まるどころか、さらに激しく燃え上がったのだ。

帝国には勝利したが完勝には程遠い結果が、内包する炎を燃やしつくし昇華させるどころか、さらなる戦いを欲したのだ。

だがサルヴァ王子には、存在的な更なる矛盾を察しながらも、あえて無視している事があった。

苦戦しない敵に、自分に完勝を許す程度の敵に勝ったところでこの炎が燃え上がる事など無いという事を。

完勝せねば燃え尽きず、完勝では燃え上がらないとなれば、その先には世界を征服しきるか、それとも自分が敗死するしかのどちらかの結末しかないという事を。

第3話：総司令の花嫁

その日ディアスは叔父の訪問を受けていた。

とはいってもケネスの父親ではない。ディアスの父親は三人兄弟の長男であり、ケネスの父親は三男である。

今日訪ねて来たのは父のすぐ下の叔父ゲイナーだった。武芸に励み、身長はディアスと同じ程度ながらも、よほど逞しい体つきをしている。髪の色は血縁なだけあって、ディアスと同じく茶色だった。

「お前ももう35だ。嫁の一つも貰って死んだ兄を、いやお前の父を安心させてやろうとは思わないのか？」

「二つも貰ったら重婚ですよ」

テーブルを挟み葡萄酒を満たした杯に手も付けず熱心に結婚を勧める叔父に、うんざりしながら答えた。これがまったくの善意からというなら多少は真摯に耳を傾けたであろうが、叔父の心底が見え透いていた。

つい最近まで叔父は、結婚の話などまったく持ち込んでこなかったのである。それが結婚を勧めるようになったのは、ディアスの邸宅にケネスが住むようになってからだった。

すっぱりと軍人への道を諦めて商家へと婿入りしたケネスの父と違い、ゲイナーは軍にしがみ付いていた。

そしてもしディアスが結婚もせず跡継ぎを残さずに戦死でもすれ

ば、武門の名流ディアス家を継ぐのは自分だ。

ゲイナーはそう考えていたのだが、なんと弟、つまりケネスの父親は息子をディアスの元へ送り込んだのである。

弟がディアス家を乗っ取ろうと目論んでいるのだと看破した。少なくともゲイナーはそう思った。そして、そうさせてはならぬと、ディアスの元へ結婚話を次々と持ち込んでくるのだった。

自分が家督を継げないなら、結婚を世話して恩を売った方がましと考えたのだ。ゲイナーにも娘はいたが残念な事にすでに結婚しているのである。

恩と言っても、ディアスが素直にその恩を感じる手合いではないのは分かっている。だが、結婚する嫁の実家は十分ゲイナーに感謝するはずだった。

ディアスは次々と持ち込まれる縁談をそれと同じ数だけ断っているのだが、彼は武門の名流の現当主にしてバルバール王国軍総司令である。

まさに引く手あまたの優良物件であり、叔父からの縁談を断り続けているにもかかわらず、いっこうに玉切れを起こす気配が無い。

娘の意思などより「この相手と結婚指せた方が我が家の為である」と親が考えた相手と結婚させるのが当然の時代である。

現在決まった相手が居ない妙齢の女性の親なら、誰もがディアスに嫁がせたいと望むといっても過言ではないのだった。

特に上流階級の者ほどその傾向は強く、ゲイナーにとって恩を売

るに足る名族を選りすぐってもまだまだ持ち玉は豊富だったのである。

とはいえディアスも「自分の身分ではなく、ありのままの自分を愛してくれる女性と結婚したい」などと考えるほど純情ではない。

ちょうどディアス自身もそろそろ身を固める必要を感じ、結婚相手の女性を適当に見繕う積もりだったのだ。ではなぜゲイナーがもってくる縁談を断り続けているのかと言えば、単に気に食わないからである。

ディアスが戦死すれば自分がディアス家の家督を継げるとゲイナーは考え、ディアスが戦死する事を願っていた。と言うことはディアスも察していた。

それをケネスが来たからと言って今度は縁談を進めるゲイナーの魂胆に、ディアスは

「お前の思い通りにしてやるもんか！」という子供じみた意地になっているのである。

「お前はディアス家の当主なのだぞ！　跡取りも残さず戦死してしまってはどうする積もりだ！」

自分自身つい最近まで望んでいた事をあまりにもぬけぬけと言い放った叔父に、ディアスはつい笑い出しそうになった。だが、葡萄酒を満たした杯に口をつける事で、何とか笑いを誤魔化す事に成功した。

しかし、ここまで言われると断るだけでは飽き足らず、反撃をしてみたいという欲求に駆られる。この様な時に行う反撃と言えば、

やはり絶対に不可能な条件を突きつける事だろう。ディアスは内心にやつきながら、神妙な表情を作りおもむろに口を開いた。

「信頼する叔父上だからこそ打ち明ける事なのですが……実は私は女性の趣味が特殊でして結婚など出来ないと諦めているのです」

「趣味が特殊だと？　いやいや、お前に娘を嫁がせたいと考える者などいくらでもいる。遠慮せずに言ってみろ」

今までずっと断るばかりだった甥がやっと、断りの言葉以外の台詞を言った事に、ゲイナーは身を乗り出し食いついた。だがディスはもったいぶった口調で叔父を焦らせる。

「いえ……。そればかりはいくら叔父上でも言うわけには行きません」

「いやいや、いいから言ってみろ。わしが必ず世話してやろう」

ディアスはさらに神妙な表情を浮かべて見せながら重々しく口を開いた。

「そこまで仰るなら……実は年甲斐も無く若い娘が好きなのです」

「わっはははは！　なんだその様なことか。お前もなかなか……。いやいや、嫁は若い方が良いものだ。安心しろわしが責任を持って縁談を紹介してやろう」

ゲイナーはもったいぶったわりに、ディアスのいう特殊な趣味が他愛も無い事に拍子抜けした様子で機嫌よく笑った。だが、勿論ディアスもここで話を終らす気は無い。

「ありがたいお言葉ですが、叔父上は何歳くらいの娘を私に世話してくれる御積もりなのですか？」

「うーん。そうだな……。二じゅ……いや十代の……１６ではどうだ？　十分であろう。いやさすがに若すぎるか？　ん？」

だが自信満々で答えたゲイナーに、ディアスは大げさにため息を付いた。

「やはり……。叔父上にも無理なようですね……。もっと若い方が良いのです……」

その言葉にゲイナーは目を見開いて驚きの表情浮かべた。しかし甥の視線を意識し、一瞬で表情を改め再度口を開く。

「心配するな。じゅう……しの娘を用意しようではないか」

だが甥はがっくりとうな垂れるばかりで答える事すらしない。

「まさか１２、１３の娘が欲しいなどというのではなかろうな！いくらなんでもその様な話、どの親にも話を持ちかけられんわ！」

王族同士の多分に政略的意味合いの強い結婚ならば、１２歳の娘と３０過ぎの男との結婚も珍しくは無い。奇異に感じても人々は政略結婚なのだからと納得する。

それに人とは当然歳を取るものである。１２歳の娘も１０年経てば２２歳であり妙齢の女性である。

だが、政略結婚ではなしに１２歳の娘と結婚したいというなら、

それは１０年後ではなく現時点で１２歳の少女を抱きたいという事であり、娘の親とすればその様な変態に娘を嫁がせたいと考えないだろう。

なにせ娘が年齢を重ね少女ではなく「女」となれば、少女好きの変態に娘が棄てられるのは、目に見えているのだから。

ゲイナーは、ディアスがうな垂れこちらを見ていない為、自分の甥がその様な変態だったのかと嫌悪感もあらわに見つめた。

「ですから、いくら叔父上でも無理だと申し上げたのです……」

ディアスはがっくりとうな垂れたまま力なさげな言葉を吐いたが、その実うな垂れゲイナーから隠れているその顔は、まさに笑いを堪えるのに必死であり爆笑寸前だった。

「もう少し、年上で我慢する事は出来んのか？」

なだめる様に言うゲイナーに、甥はうな垂れたままやはり首を振った。

「これはどうしようもない事なのです。それが可能であれば私はとっくに結婚しております」

そしてなんとか笑いの衝動を抑えきり、神妙な表情を作って顔を上げると、ゲイナーを正面から見据えてとどめの一撃を放った。

「ですから私はもう結婚というものを諦めているのです。家はケネスにでも継がせます」

「ケネスに継がせるだと！　その様な馬鹿な話があるか！」

あまりの事に色をなして叫ぶゲイナーに、ディアスは諭す様に宥めた。

「何が馬鹿な話なんです？　仕方が無いではないですか、他に継がせられる相手も居ない事ですし」

ゲイナーは二の句が継げず強く歯を噛締め沈黙した。だがしばらくして、不意に席を立つとディアスから背を向ける。

自分から背を向けた叔父に、表情を作る必要がなくなったディアスは、にやにやと笑いながら口調だけに気をつけ叔父の背に声をかけた。

「お帰りですか？」

「……ああ」

振り返りもせず力なく答え邸宅を後にした叔父に、ディアスは自分の放ったとどめの一撃の言葉の威力に満足したのだった。

もっともディアス自身本当にケネスに家を継がせようと本気で思っている訳ではない。叔父が諦め叔父からの縁談の話が来なくなれば自身で嫁を探す積もりだ。そして息子が生まれればその息子に家名を継がせるだろう。

もし息子が生まれなければ、その時こそケネスに継がせる事になるであろうが、それはまた別の話である。

それから数日後ディアスは新兵の訓練の視察に向かった。

コスティラとの戦いで大勝したものの損害が皆無という訳も無い。損害を出しただけ新兵を召集し、訓練しなければならないのである。

王都から７０００サイトほど離れたところにある訓練地で数日間新兵の訓練状況を視察した。

※１サイト＝成人男性の平均的な身長の２分の１程度、１ケイト＝１００００サイト。

兵士に求められるのは際立った武勇ではなく、如何に統一された動きが出きるかが重要である。槍の穂先を並べ敵に突進し、盾を並べて敵の攻撃を防ぐ。その時に１人勇猛果敢に戦われては隙が出来るというものだ。

士官の号令に従い、槍を水平に並べ盾を構えて前進する新兵達の姿に、ディアスは満足げに頷いた。

「訓練は順調の様だな」

訓練の責任者である武官に労いの言葉をかけると、総司令官直々のお褒めの言葉を賜ったその武官の面目は大いに保たれ、武官は「これからもいっそう励みます！」と力強く答えた。

その後、訓練地から邸宅へ帰る道すがら、見事に新兵の訓練を行った武官について考えていた。

あれだけの統率力があるのならば一軍の部隊長として抜擢すべきか、いやいや新兵の訓練は重要なのだからこれからも新兵の訓練を任せるべきだろうか。と思案を重ねた。

邸宅に戻るとケネスが困惑した表情で出迎えた。

「どうした。私が留守の間になにかあったのか？」

その言葉に遠慮がちにケネスは

「それが……」と口を開く、そして話を聞いたディアスは、自室へと急いだ。

ディアスがゲイナーに放った「ケネスに家を継がせる」という一撃は、確かにゲイナーに打撃を与えた。だが与え過ぎた。

その一撃はゲイナーの世間体、嫌悪感、その他諸々の常識と感情を打ち抜き通り過ぎてしまったのである。

ディアスが自室に辿り着くと、そこには腰まである長い黒髪の美少女が待ち受けていた。そう１２歳くらいの。

第４話：王子の兜

サルヴァ王子が執務室でその名称にふさわしく執務を取っていると、副官のルキノが来客を告げた。

「ほう。どの様な用件だ？」

ランリエル王国第一王子たる自分の仕事を中断させるほどの重要な来客ならば、誰が来たか？　ではなく、どの様な用件か？　が重要なはずだった。たとえ公爵と言えども重要な用件でなければ王子の執務を邪魔させない。ルキノにも取り次ぐなと言ってある。

身分だけでそれが出きるのは父である現国王クレックス王だけのはずだが、その場合はルキノも来客とは言わないだろう。

だが王子の考えとは違い、ルキノの返答は芳しくなかった。

「それが……要件は聞いておりません」

「聞いていないだと？　では、誰が来たというのか？」

要領の得ない副官の言葉に、苛立ちを含んだ口調で重ねて問いただした。客に用件も聞かずに取り次ぐなど、有能な副官にしては常に無い不手際だった。

だがルキノが来客者の「身分」を伝えると、王子は連れてくる様に言いつけた。そして一度退室し、しばらくすると妙齢の女性を案内し戻ってきた。

歳の頃は２２・３といったところだろうか。身長は王子より頭半分近くは低いが、それは王子の背が高い為だ。女性としてはむしろ高い方と思われる。少し癖のある赤毛と茶色い瞳で絶世とはいかないまでも十分水準以上の美人だった。

ルキノは女性を案内するとすぐに部屋を後にした。王子は女に席を勧める事もなく自分自身も立ち上がり、執務室に置かれた兜へと視線を移すと早速本題に入った。

「あの兜の持ち主の婚約者というのは本当か？」

そうルキノが用件も聞かずに取り次いだのは、この「身分」の為だった。王子が現在被っている兜が何か訳有りである事は周知の事実である。もし取り次がずに追い返し「どうして取り次がなかったのだ！」と叱責されてはたまったものではない。

だが問いかけられた女性は、その問いかけに答えず、目を細めて王子を見つめた。女は恐れ多くも一国の王子、しかも次期国王である第一王子サルヴァ・アルディナを睨みつけたのだ。

王子は目を閉じ小さく息を吐くと、発しそうになった怒気を沈めた。今はこの無礼な女と争う気は無いのだ。

「何か問題でもあるのか？」

「私の名は聞かないのですか？」

王子と女性の間で視線がぶつかり、数瞬間の沈黙が訪れた。だがここでも王子は忍耐力を発揮し譲歩した。

「失礼した。名を聞かせて貰おう」

「アリシア・バオリスです」

王子の問いかけに、女はさらに目を細めながら名乗った。サルヴァ王子は女の無礼さに我慢をしている積もりだった。だが、アリシアに言わせれば王子の態度こそがあまりにも尊大過ぎた。王子という身分を差し引いてでもである。

だが実は王子は急いでいたのだ。兜の事に心が奪われていたのである。だが王子は自分を睨む女の視線に再度忍耐力を発揮した。

「それで、お前はあの兜の持ち主の婚約者なのか？」

「それよりもリヴァル・オルカという名をご存知ですか？」

どうしてこの女は自分の質問に答えないのか？　焦れた王子だったが、女が口にした名には興味を引かれた。

「兜の持ち主の名か？」

「持ち主の名も知らずに持ち歩いているのですか？」

質問に答え続けない女に、遂にサルヴァ王子の忍耐力も限界に近づいた。

「なぜ、私の質問に答えない？」

またもや視線がぶつかったが、今回はアリシアが折れた。ややな

げやり気味に。

「私は兜の持ち主の婚約者であり、兜の持ち主の名はリヴァル・オルカです。これでよろしいですか？　王子様」

この女はわざわざ喧嘩を売りに、いや死にに来たのか？　一国の次期国王にこれだけ無礼な態度をとれば死罪を免れない。王子が許しても他の者が

「示しが付きませぬ！」と許さない。勿論他に目撃者が居ればであるが。

どちらにとって幸いかは分からぬが、幸いにも今執務室に居るのは2人きりだった。

通常はいくら人払いをすると言っても、実際は常に別室に警護の者が控え、不測の事態に備えている。だが「兜の持ち主の婚約者」という事で、あえてその警護の者達すら下がらせたのだ。客人が女性という事もある。戦場の雄である王子が、女性に危害を加えられる事もないだろう。

「それで、今日は何の用件で来たのだ？　まさか私が婚約者から兜を盗んだと思って、兜を返せと言いに来た訳でもあるまい？」

「それよりも先に聞きたい事があります。王子様はリヴァルから兜を譲り受けたのですか？　盗んだのですか？」

殿下という敬称を使わず、王子様と言い続ける女にサルヴァ王子は眉をひそめた。

「先に私の質問に答えよ。「はい」か「いいえ」が言えぬ訳でもな

かろう」

「王子様がリヴァルから兜を譲り受けたと言うなら「いいえ」です。盗んだと言うなら「はい」です。これでよろしいですか王子様？」

相変わらず無礼な態度をとり続けるアリシアだったが、王子はあえて構わず問いかけに答えた。今はこの女の無礼な物言いを一々気にしている時ではない。

「……どちらでもない」

「どちらでも？」

王子の返答はアリシア予想の範疇を超えていたらしく、一瞬きょとんとした。その表情は意外にもあどけなかったが、すぐにまた目を細め睨みつける。

「譲り受けたのでもなく盗んだのでもないと言うならどうしたというのです。まさか天から降ってきたとでも言うのですか？」

「地に落ちていた。お前の婚約者はすでに死んでいたのだ。戦いの最中（さなか）兜を失った私は、すでに戦死していたお前の婚約者の兜を借りた。そういう事だ」

実際には、もう少し複雑な事情があるのだが王子にそれを語ってやる積もりはない。予想外の言葉に立ち尽くすアリシアに改めて問いかけた。

「他に何か用があるのか？」

冷たい言葉である。もう様は済んだのだろう？　という意味を込めて問いかけたのだ。

勿論王子とて初めは、兜の持ち主の婚約者というなら出来るだけの便宜を計ってやろう。将来の生活も保障してやろうではないか。と考えていた。だがアリシアの無礼な態度にその思いも吹き飛んでいたのである。

アリシアはサルヴァ王子から問いかけられてもしばらく呆然としていたが、ぽつりと一言洩らした。

「兜を……」

「兜？」

「兜を返して下さい」

見つめるアリシアの目に先ほどまでの鋭さは無く、儚げに揺れた。それが目に涙を浮かばせている為だと気付いたが、王子は首を振った。

「いや。あの兜はすでに私の物だ。返す積もりはない」

返さないという言葉に、アリシアが激昂するのではと王子は予想したがその予想ははずれた。アリシアはゆっくりと視線を兜へと移すと歩を進ませる。

女が兜を奪って逃げる積もりではと王子も兜へと進むと、アリシアは立ち止まり、またゆっくりと王子へと視線を移した。

「……触るくらいいいじゃないですか」

「あ……ああ」

アリシアに気圧されるものを感じた王子は立ち止まり、彼女はそれを確認すると、歩を進ませ続け兜へと辿り着いた。そして大事そうに兜をその胸に抱いた。

アリシアは、兜を胸に抱いたままその場に泣き崩れ嗚咽を洩らし、サルヴァ王子は、彼女が泣き止むのを待ち続けたのだった。

第5話：憂鬱な総司令

少女の名は、ミュエル・ハッシュと言った。

「本当に12歳なのか？　童顔で12歳に見えるけど、実は18歳じゃないのかい？」

ディアスはわらにも縋る思いで問いかけたが、自分は正真正銘12歳だと少女は断言した。

腰まである長い黒髪と同じ色の黒く大きな瞳。12歳にしては若干細面だったが、それ故将来の美貌が想像できた。成人すればすらりとした美しい女性になるだろう。それには後6年ほど待たなくてはならないであろうが。

いや、6年待たなくとも少女は十分他を圧する美貌を有していた。ただしあくまでも12歳の少女としての美貌であり、少女嗜好ではないディアスにして見れば、少女はどこまでも少女でしかない。

父は伯爵だが爵位は高くとも経済的にも社交界的にもあまりぱっとしない。

叔父のゲイナーは対象範囲を上流階級から大幅に広げ、少女嗜好の甥の希望にあう（とゲイナーが信じた）条件の美貌の少女を探し当てたのだった。

いや、この段に及んでは、ケネスに家名を継がせるのを防ぐ事だけを考え、親の地位などには目もくれなかったと言うのが正解だった。

しかも返答も聞かず「これならば文句が無かろう」とディアスが不在にもかかわらず邸宅に少女を置いていったのだった。

少女の両親も、武門の名流にしてバルバール王国軍総司令ディアスに娘を嫁がせる事が出きるならと、

「良き縁談だ」と娘を送り出したのだった。もちろん、ディアスが少女嗜好の変態であるという、ディアスが聞けば全力で否定するであろう事は、ゲイナーに巧みに誤魔化された。

お父様から、ディアス殿はこの国で一番の結婚相手なのだと教え込まれた少女は、この事態に呆気にとられたディアス家の従者や使用人、そしてケネスを尻目に方々へと「ディアス様の妻になるミュエルと申します」と挨拶をして回った。

そしてなんと、その挨拶を受けた人々も少女の言葉を信じてしまったのだ。

王族や国で一、二を争う大貴族を除けば、条件的には他の追従を許さぬ程の優良物件のディアスが、３５歳にもなって未だに独身なのには何か理由があるのでは？　と常々噂になっていたのだ。

「なるほどなるほど、それならば今までディアス殿が独身だったのも頷ける」

「しかし、あのディアス殿がまさか少女嗜好だったとは」

「人は分からぬものですな」

この様な人々の噂はたちまち王都中を駆け巡ったのだった。さすがのディアスもこの事態には頭を抱えた。

居間で頭を抱えながら椅子に座っているディアスに、ケネスは困惑気味に問いかけた。

「あの女の子と本当に結婚なさるのですか？」

「まさか……そんな事出きる訳がない」

ケネスの問いかけに頭を上げ、視線を移したディアスは、少年の顔が赤いのに気付いた。

自分には断じて少女嗜好は無く、いくら美しくても１２歳の少女になど食指は動かないが、１７歳のケネスにとっては十分恋愛の対象ではないのか？　少年の赤い顔を見たディアスはその事に気付いたのだ。

ミュエルは他に類を見ない美しい少女だ。ケネスが恋心を抱くのも当然と言える。しかも一つ屋根の上に住んでいるのだ。

「ミュエルを呼んで来てくれないか？」

そう言い付けミュエルを連れて来させ椅子に座らせると、ケネスにも座る様に促した。そして２人が椅子に座ると、出来るだけ優しげにミュエルに話しかけた。

「お前との結婚についてだが、さすがにすぐにとは行かない。お前はまだ１２歳なのだからね」

「そうなのですか？」

お父様からは、すぐにでもディアスと結婚するかの様に聞いてい

たミュエルは首を傾げた。だが、夫となるディアス様がそう言うならそうなのだろうと素直に頷いた。

「それに結婚するまでには、お前にも色々と学ばなくてはならない事が沢山ある。その勉強はこのケネスが見てくれるから安心しなさい」

「え！？」

その言葉にケネスは驚きの言葉を発した。だが、ミュエルがケネスに向かって素直に「ケネス様、よろしくお願いします」と頭を下げ微笑むと、少年は真っ赤になりながらも頷き返した。

ディアスもその様子に満足げに、うんうん、と頷いたのだった。

さらにミュエルの部屋も便利だろうと、ご丁寧にケネスの部屋の隣りとしたのだった。ここまでお膳立てをすれば、2人が自然と恋仲になる日も遠くないだろう。

そうなって自分とミュエルとの縁談が破談となり、改めて妙齢の女性と結婚すれば、周囲に流れた自分が少女嗜好だという噂も自然と無くなる筈である。

ディアスはそう考えたのだった。

こうしてその翌日から、ケネスはミュエルの家庭教師となった。

勿論ケネスに花嫁修業としての教師になど出来ないが「将軍の妻になるのならば学問も出来なくてはいけないんだよ」とミュエルに言い聞かせたのだ。

少女は「はい。分かりました」と素直に頷き、ケネスの元で勉強

に励んだのだった。

そしてケネスの方はというと、最近なにやら身だしなみに気を付けている様である。ミュエルを意識しての事なのは一目瞭然だった。

これで2人の仲が進展したところで「ミュエルの御両親には私から話を付けて置くので、私に構う事はない」と持ちかければ万事上手く行くだろう。ディアスは満足げに頷いた。

ミュエルの事についてはこれで一安心と気を休めていたディアスだったが、どうやら神やら創造主やらは彼を嫌っているらしい。

ディアスが軍部で嫌いな事務処理を行なっていると、ランリエルに派遣していた部下から看過しえぬ情報がもたらされたのである。

「多数の軍艦を建造しているだと?」

「はい。帝国から巻き上げた賠償金のすべてを、軍艦建造に充てているのではと思えるほどです」

軍艦を建造してどうするのか? などと考えるのも馬鹿馬鹿しい。バルバールに侵攻する為に決まっている。

ランリエルにはカルデイ帝国以外にもベルヴァース王国が接しているが、ランリエルとベルヴァースを繋ぐのは陸路しかない。

無論、何れバルバールに食指を伸ばすであろう事は、ディアスとって当然の認識だったが、それは十数年先の話と考えられていたのである。

だがこれほど急速に海軍増強を進めていると言う事は、その計画

も早まろう。

「その軍艦の数は分かるか？」

ディアスの問いに部下が答えた数字は、バルバール海軍の軍艦の数の2分の1といったところだった。

「そうか……。ランリエルが建造する軍艦の数に注意して逐次報告してくれ」

「かしこまりました」

改めて指令を受けた部下が立ち去ると、ディアスはさらに思案を重ねる。

ランリエルに対して陸戦戦力は元々太刀打ちできない。だが海軍ならばこちらの方が強い。帝国との戦いで、海戦を行なってこなかったランリエルは、金のかかる軍艦の建造を必要最小限に抑えていたのである。

不要な軍艦の建造に資金を回した挙句、陸戦戦力が減り、その為に帝国に遅れをとりでもすれば目も当てられないのだ。

だがそれも過去の話、帝国はすでにランリエルの軍靴の元に跪いている。

そしてバルバールを攻めるとなれば海軍は必要不可欠だ。国境の山岳地帯は大軍が展開するには不向きで、兵力差をかんがみても容易に超えられるものではない。海軍の働きで戦局は大きく変わるだろう。

ランリエルはバルバール海軍の軍艦数を把握しているのか？　把握しているとして軍艦を同数まで揃えた時点で攻め寄せてくるのか？　凌駕するまで攻めてこないのか？

それによってランリエル軍総司令官というサルヴァ王子とやらの力量も知れると言うものだ。

軍艦の運用には高度な技術を要する。船を進ませる為にオールを漕ぐという基本的な事からして漕ぎ手全員が一糸乱れぬ動きをしなければ、オール同士がぶつかり破損して船は立ち往生するのである。

コスティラ海軍と長年戦い続けているバルバール海軍に対し、殆ど戦った事のないランリエル海軍が同数の艦艇で挑んだところで勝負になるはずが無い。

敵船の船腹を如何に突くかという衝角戦において、船足と旋回能力の差は決定的なのだった。

それも分からず艦艇数が同程度になった時点で攻め寄せるならば、サルヴァ王子とやらの力量も高が知れていると言うものだ。

だが……。とディアスは考える。

長年誰にも成し得なかったカルデイ帝国を平伏させる事に成功したという者の力量が、その程度であるはずが無い。そう確信していた。

それにしても、帝国の支配をもっと強固にしてから攻め寄せる方が確実であろうに、この様に性急に事を運ぼうとするとは……。

第6話：兜の花嫁（1）

アリシア・バオリスは16歳の時に、下級貴族であり騎士の称号を持つリヴァル・オルカの生家へと引き取られた。

彼女の両親が流行病にて相次いで無くなり、遠縁を頼ってオルカ家にやって来たのだ。

本来なら孤児となった娘を引き取って世話してやるほどの縁は、バオリス家とオルカ家には無かった。だが、この時オルカ家の長男のリヴァルは18歳で「息子の嫁にちょうど良いだろう」という思惑もあってオルカ家は彼女を引き取ったのだった。

もっとも彼女自身は、引き取られたからと言って嫁になどなってやる気などさらさら無かった。だが1人で暮らす生活力を身に付けるまではと猫をかぶる事にした。

「アリシア・バオリスです。よろしくお願い致します」

オルカ家についたアリシアがにこやかに挨拶をすると、将来の夫になると計画されている青年は顔を真っ赤にし、どもりながら「リヴァルだ」と名乗った。

他愛も無い奴。それがリヴァルへの第一印象だった。

猫をかぶった彼女は、リヴァルの両親から言いつけられた家事をそつ無くこなした。そして「良い妻になるだろう」とお褒めの言葉を頂いた。そして内心馬鹿馬鹿しいと思いながらも

「私などにリヴァル様の妻など勿体無いですわ」と、にこやかに謙

遜して見せたのだった。

ここで万一リヴァルの両親が「確かにその通りだ。では息子にはもっと相応しい相手を探そう」と言ってくれれば万々歳なのだが、残念ながらそうは成らなかった。

もっとも、では初めから言いつけられた家事をわざと失敗し続ければ、息子の嫁にしようなどと言う気も無くなったかも知れない。しかし、義理堅いアリシアは、まがりなりにも衣食の世話になっているのだからと、さすがに家事に手を抜く気にはなれなかったのだ。

そしてその一方自分の両親が健在の時には敬遠していた裁縫なども積極的に学んだ。いずれオルカ家を出た時に、職を手にする為にだ。

リヴァルの方と言えば、彼女に一目惚れし夢中になっていた。

当時、彼はすでに軍隊に入隊しており、家に帰るのは数ヶ月に一度といった具合だった。だが、そのたびに熱心にアリシアに話しかけたのだった。

もっともその話す内容と言えば、彼女を褒め称える言葉でもなく、気の聞いた口説き文句でもない。自分の軍隊生活を一生懸命に話すのだ。

猫をかぶっていた彼女はにこやかにその話を聞いていたが、内心リヴァルを馬鹿にしていた。

怖い上官が馬に乗っている時、突然飛び出した鳥に馬が驚いて暴走し、その上官が田んぼに落ちて泥だらけになった。という話を私

にしてどうしようというのだろう？　不思議でならなかったが、猫をかぶる彼女は仕方なく笑って見せた。

彼女が笑った事に気を良くしたリヴァルは、さらに熱心に「軍隊での笑い話」を聞かせ、彼女をうんざりとさせたのだった。

そしてアリシアが１８歳、リヴァルが２０歳の時、リヴァルは彼女に求婚した。

自分こそが２０歳になればオルカ家を飛び出そうと考えていたアリシアは、まだ時期が早いのではないかと返答を濁したがリヴァルの決心は変わらない。

「剣術の大会で優勝すれば、お前に求婚しようと決めていたんだ！」

ああ、そう言えばこう見えて結構強いんだっけ？　とアリシアは思ったが、そうは言われてもこちらにも都合がある。

そしてのらりくらりと返答をかわそうとしたが、やはりリヴァルの意思は変わらない。そしてその熱意に彼女の心も動いた。勿論リヴァルとの結婚を承諾する方へと心が動いたわけではない。

「申し訳ありません、リヴァル様。私はあなたと結婚する気はないのです。私は２０歳に成ればこの家を出る積もりです」

自分を想う彼の気持ちに心苦しくなり、計画を正直に答えたのだ。そしてこの先の苦労を考えて気が沈んだ。２０歳で家を出る積もりだったが2年早まる事になる。今家を追い出されて生活できるだろうか？

だが、その言葉に愕然としながら問いかけるリヴァルに、アリシアは改めて考え込んだ。

「そんなに俺のことが嫌いなのか？」

この言葉にアリシアは、あれ？　と首を傾げたのだ。引き取ってやったのだから嫁になれというのが気に食わないのであって、改めて彼の事が嫌いかと聞かれれば、嫌いな訳ではない事に気付いた。もっとも、軍隊の話ばかりするリヴァルの事を、好いているかと言えばそうでもない。

結婚相手として考えた事がなかった。と言うのが正直なところだった。

「リヴァル様が嫌いな訳ではありません。ですが、引き取って貰ったから嫁になるというのが嫌なのです」

この返答にリヴァルは
「分かった」と一言言うと、その後は口を噤んだ。

そして彼の口からその両親に、アリシアに結婚する意思はないという事は伝わらず、彼女は無事２０歳までオルカ家で生活をする事が出来たのだった。

２０歳になり置手紙を残しオルカ家を出た彼女は、町に出て僅かばかりに蓄えたお金で部屋を借り裁縫の仕事を探した。

裁縫の仕事は賃金は安かったが１人で暮らすには何とかやっていけた。そして１年も過ぎ彼女が２１歳になった時、どうやって探し当てたのか、アリシアの部屋にリヴァルが訪れた。

「俺と結婚して欲しい」

彼を部屋に招きいれ、何の用件で来たのかという問いに、リヴァルはこう答えたのだ。

「どうして、今更そういう事を言うのですか？」

自分の事を諦め切れなかったのなら、あの時に強引に手に入れる事も出来ただろう。

彼女はオルカ家の世話になっていたのだ。近所の者に「アリシアが恩知らずにも逃げようとしている」と言って回れば、近所の住民すべてから監視され、逃げる事も叶わず、強引に結婚を強行する事も難しくなかったはずだ。

「お前は、俺の家に世話になっているからという理由で俺と結婚する。というのが嫌だったんだろ？　だからお前が家を出るのを待っていたんだ」

あ。こいつ馬鹿だ。アリシアは瞬時にそう思った。確かに世話になっているからと言って結婚するのは嫌だとは言ったし、嫌いでは無いとも言った。だが好きと言った訳では断じてない。

それをこの男は何を勘違いしたのか、２年間も彼女が独立するのを待ち続け、さらに１年かけて彼女を探し当てたという。

そしてアリシアは、自分は男の趣味が悪いらしいという事を発見した。彼女はこの夜、自分の為に３年間掛けたという馬鹿な男を迎え入れたのだ。

もっともたまたま自分の男の趣味が悪かったから良かったものの、これがまともな趣味の女だったら、リヴァルは勘違いするなと言われて部屋から追い出され、ただの道化となっていただろう。アリシアはそう思ったが、優しい彼女は、リヴァルに言わないでおいてあげた。

第6話：兜の花嫁（2）

リヴァルとアリシアは結ばれ、彼は休暇のたびに彼女の部屋を訪ねる事になった。こんな事だったら、オルカ家で世話になっていれば良かっただろうに馬鹿な2人だ。と他の者は笑うだろうが、彼らにはその様な事どうでも良かった。

リヴァル家にアリシアが養われたから結婚するのではなく、リヴァルとアリシアが愛し合ったから結ばれる。それが2人には重要だったのだ。

だがアリシアにはリヴァルについてどうしても我慢出来ない事があった。

「サルヴァ王子は素晴らしい名将であり、その指示に従って戦えば勝利は間違いない」

この様な事を言い続けるのだ。どうやら劣勢の戦いをその王子の指揮により逆転勝利してから、王子に心酔したらしい。

しかも日のある内に話すのならばいつもの軍隊話だ、と聞き流しても居たが、夜の営みの終った後、寝物語とするにはあまりにも無粋すぎた。

「私の前で、二度とその王子の話をしないでね」

裸でベッドに横たわりにっこりと微笑みながらリヴァルへそう告げると、顔は笑いながらも目がまったく笑っていない彼女の表情に彼は凍り付き、二度と王子の話はしないと誓ったのである。

そしてその様な日々が2年ほども続いたころ、避けては通れない問題に2人は直面した。リヴァルは下級騎士ながらも跡取り息子である。嫁を貰って家を継ぎ、さらに子を産ませて子に家を継がさなくてはならない。彼ももう25歳になっていた。そろそろ嫁を貰う時期だった。

「私を愛しているのなら家を捨てて！」

などと言い出すほどアリシアは非常識ではないのだ。

それに帝国がここ数十年無かった大規模な攻勢を隣国ベルヴァースにかけ、援軍としていたサルヴァ王子の作戦宜しく、帝国軍に大打撃を与えて撃退する事に成功した事もある。

これでしばらく帝国も大人しくなり、戦いもなくなるだろう。今までの長い戦いの歴史で相手の国を併呑するなど不可能だと分かっているはずだ。帝国は大攻勢をかけるという馬鹿な事をしたが、こちらから帝国へは攻め込まない。そう思われたのだ。

2人は覚悟を決めてそろってオルカ家へと向かい、リヴァルとその父親との決闘などを経て、晴れて2人は結婚する事となった。

だが結婚式を翌月に控えた時、リヴァルに出兵命令が下ったのだ。

帝国軍に大打撃を与えた余勢をかって、今度はこちらから帝国に攻め込むと、かのサルヴァ王子が言い出したというのだ。

「サルヴァ王子って馬鹿なんじゃないの！」

叫ぶアリシアをリヴァルは必死で宥めた。

「サルヴァ殿下が攻め込むというならきっと勝算があるんだ。心配する事はない。必ずランリエル軍は勝つよ」

しかし、数十年前にも行なわれ帝国への攻勢は、数年間に及んだという。リヴァルが帰ってくるのはいつの事になるのか。

彼女の不満は募ったが、出兵拒否など出きる訳も無い。こうしてリヴァルはサルヴァ王子と共に帝国領内へと出兵したのだった。

そして戦いの結果はリヴァルのいう通りとなった。戦いはランリエル軍の勝利に終わり、長かったカルデイ帝国との戦いにも終止符が打たれたのである。ただし、リヴァル・オルカが帰って来る事は無かったが。

勝利に凱旋するランリエル軍を、アリシアは部屋の窓辺に座り、眺めるとも無く眺めていた。だが……。

「リヴァル！」

彼女は、なんとそこにリヴァルの姿を見つけた。

まさか！　そう思って目を擦り改めて凱旋する隊列を見ると、宝石を散りばめた馬具で飾った白馬に乗り、鎧も見事に装飾がなされた騎士が、兜のみ飾り気の無い実用一辺倒と思われる物を被っている事に気付いたのだ。

そのありふれた物に鉄板をさらに巻きつけ補強された兜は、リヴァル・オルカの物に間違いなかった。どうしてあの騎士は彼の兜を

被っているのか？

アリシアは急いで階段を駆け下りたが、軍勢を歓呼の嵐で迎える群衆の為近寄る事が出来ない。だが人々はその騎士にこう声援を贈っていたのだ

「サルヴァ王子万歳！」と。

どうしてサルヴァ王子がリヴァルの兜を被っているのか？

確かめねばならない。だが相手は一国の王子。しかも次期国王たる第一王子である。そう簡単には会えないだろうと、行動力のあるアリシアにして数ヶ月間思い悩んだ。

その間にリヴァルの生家であるオルカ家に身を寄せる事になった。彼女には1人で暮らす事も出来たが、リヴァルを亡くしたその両親はすっかり生気をなくし、ふさぎ込み、時には寝込んでいると言う。

婚約者の親でもあり、そしてまがりなりにも自分を２０歳までは面倒を見てくれた人達である。彼女はオルカ家でリヴァルの両親の面倒を見る事にしたのだ。

だがやはり兜についての疑問に、アリシアは遂に我慢しきれず王城へと向かった。そして

「サルヴァ王子が被っている兜の持ち主の婚約者」と身分を告げると、拍子抜けするほどあっさりと王子の元へと通されたのだった。

アリシアもサルヴァ王子の所為でリヴァルが死んだとまでは思ってはいなかった。だが、顔を合わせた王子の尊大な態度に好感を持ち得なかった。

一国の王子に対し、不敬な態度を取れば命はないという事は分かっていた。だがリヴァルを失い。さして生きたいとも思っていなかった彼女には何の枷にもならない。王子の態度に相応しい受け答えをしてみたが、何故か殺されることは無かった。

兜がリヴァルの手からサルヴァ王子の元へと渡った経緯を、どうせ兜を失った王子にリヴァルが自分から差し出したりしたのだろう。そう予測していた。だが、なんとサルヴァ王子が言うには、死んでいたリヴァルから王子が勝手に借りただけの事だと言う。

予想外の事実に唖然としたアリシアだったが、とにかくリヴァルの兜を返して貰わなくてはならない。王子に兜を返すように言ったが、兜は返さないという。

一国の王子に返さないと断言されては手も足も出ない。別に死んでも良いのだが、兜を抱えて逃げた挙句に、部屋を出た瞬間捕まって切り殺されるのはあまりにも無意味だ。そう思ったアリシアは、せめて兜に触ろうとゆっくりと兜の元へと歩き出したのだ。

そしてお優しいサルヴァ王子様は寛大にも兜に触る事は許してくれたので、彼女は兜を抱えて存分に泣いた。王子様に涙を見せるのは癪だったが、この場合は仕方が無いだろう。

その後オルカ家に戻り、変わらずリヴァルの両親の面倒を見ていたが困った事があった。金が無いのだ。

2人の面倒を見なければならない彼女は、働く事もままならない。しかしリヴァルが亡くなりその両親もふさぎ込んでいる以上、収入など殆ど無い。早晩オルカ家は破産するだろう。

そんなある日、城からの使いという者がやってきた。もしかして、サルヴァ王子への無礼な振る舞いに、やはり打ち首になるとでも言いに来たのだろうか？

それならばいっそ清々する。リヴァルの両親の事はあるが、死んだ後の事まではさすがに面倒見切れない。そう考えていたアリシアだったが、その使者が持ってきた用件に笑い出しそうになった。

その使者はアリシアにこう言ったのだ。

「ランリエル王国第一王子たるサルヴァ殿下が、あなた様を後宮に迎え入れたいと申しております」

第7話：強敵

その日サルヴァ王子は海軍の軍港へと視察に訪れていた。

バルバール侵攻に際しては海軍の力が大きく影響する。王子自身は海戦についての知識など殆ど無いが、今のランリエル海軍の質がバルバール海軍の質に太刀打ちできない事は分かる。

質で太刀打ちできないならば、数で補うしかあるまい。

だが軍艦の建造には、金も時間も掛かるものである。船を建造するにはまず船を船渠（ドック）が必要となる。そしてその船渠の数ずつしか船を建造できず、船を一隻建造するのも一朝一夕で出きる物ではない。

「ご指示通りの数を揃えるには、さすがに年内には無理で御座います。来年の春過ぎになるでしょう」

造船所の責任者の返答は満足出来るものではなかったが、無理を言っても仕方が無い。

「出きるだけ急げ」とだけ言い置いて視察を終えた。

この間にも帝国への支配強化は進んでいる。帝国軍の軍施設も何やかやと理由をつけて取り上げた。

サルヴァ王子を苦戦させた帝国の将軍は、現在その縮小された予算の中で苦労しながらも、帝国軍の再建に力を尽くしているという。

だが現在帝国では、軍縮により職をなくした兵士達が町に溢れている。その者達による狼藉や、大きいものになると反乱まで起きて

いた。そして僅かばかりの数となった帝国正規軍により、元帝国軍兵士達は討伐されていると言う。

帝国軍兵士と戦う事は出来ないという理由で、サルヴァ王子からの誘いを断ったかの将軍にしてみれば皮肉な現実であろう。

職にあぶれた帝国軍の元兵士達を傭兵として雇うという案も出されたが、王子はその案を現時点では却下した。

いくら職にあぶれたとはいえ、彼らはまだランリエルの為に戦うというには感情の整理は付いていないであろう。もう少し感情が収まるなり、生活がさらに窮するなりして、ランリエルの為に戦う事に抵抗がなくなるまで待つ必要があった。

その為、今回のバルバール侵攻には間に合いそうも無い。帝国人傭兵部隊を使う事があるとすれば、この次になるであろう。そうバルバール王国との戦いの後に控える、次の戦いに……。

数日後バルバール王国に調査に向かわせていた部下から、看過しえぬ情報がもたらされた。

「バルバールが我が国との国境に砦と関を建設しつつあります。さらに軍艦の刷新も図っている模様」

部下からの報告にサルヴァ王子は一瞬眩暈を覚えた。急速に体中の血がざわめいたのだ。バルバールはランリエルが攻め込むであろう事を察知した。察知出きる者がバルバールには居る。その事実に王子の血が反応したのである。そして王子の口元がある形に歪んだ。

「どうなされましたか？」

部下は怪訝な表情で問いかけ、その声に王子は口元を手で隠した。

「いや、なんでもない」

そう言って誤魔化したが、部下はやはり不審げな目線を王子に投げかけた。こちらにとって不利と考えられる情報を伝えたのにも拘らず、ランリエル軍総司令官たる者が口元に笑みを浮かべていたのだから、部下が不可解に思うのも無理は無い。

「それで建設しているという砦と関の規模は？」

「小国のバルバールにしてはかなり大掛かりな物です。軍勢が通れそうな道はすべて関を建設し、それを援護する様に要所々々に砦が配置されております」

「例えばだが……現在わが軍が全軍で国境に殺到したとすればどうなる？」

その問いに部下は静かに首を振った。

「元々国境は険しく大軍の展開には不向きです。それをさらに建設中とは言え関や砦で固められては、にわかにの突破は難しいでしょう」

「うむ」

王子は部下の見解に頷いた。戦争とは情報が重要な鍵となる。それは僅かでも軍事に携わるものならば常識である。バルバールに派

遣していたこの部下も、選りすぐった逸材でありその判断に間違いは無いだろう。

陸路が難しいとなれば後は海路という事になるのだが……。

「では、軍艦の刷新とは具体的にどの様な事をしているのだ？」

「老朽船を破棄し、新造船を建造して艦隊の能力向上を狙っているとか。艦隊の速度は一番船足の遅い船が基準になってしまいます。足の遅い型の古い船を新たな船と入替えている様です」

「なるほどな……」

こちらは質の差を数で補おうとしているのだが、あちらはその質をさらに上げ様と言うのか。

軍人として質の高い軍勢を率い、質の高い敵兵と雌雄を決したい。その欲求は甘美なものだが、現実はそう甘くはない。ランリエル海軍は質よりも数で補うしかないのだ。

その数が揃うのは来年の春過ぎだと言う。今はまだ冬を迎えたばかり、後半年は掛かると言う事だ。とは言えこれでも急ぎに急いでいるのだ。造船所の責任者には出来るだけ急げとは言ったが、実際にこれ以上の計画の前倒しは困難だ。

「国境の状態とバルバール海軍の艦艇数に気を配れ、旧式と新式の船を入替えると言っても、それにまぎれて数も増やしているのかもしれんのだからな」

「心得ております」

王子は部下の言葉に満足げに頷き、部下が退出した後も執務を行った。そしてそれも終ると私室へと足を向けた。

私室の扉をくぐり、後宮を管轄する役人を呼び寄せた。そしてしばらくするとその役人がやって来た。

「アリシアが私の求めに応じて素直にやってきたらしいな？」

サルヴァ王子は意外そうに感想を漏らした。アリシアの無礼な態度に生活の面倒を見てやろうという気は失せてしまっていたのだが、リヴァルの兜を胸に抱いて泣き崩れる彼女の菅田に再度気が変わったのだった。

そして生活の面倒を見てやるつもりで後宮に上がる様に申し付けたのだ。

もっともアリシアを後宮に入れたとは言え抱く積もりはない。取りあえず後宮で暮らせば衣食の不自由はないだろうから、後宮に住まわせる。

そして、あの様子ではリヴァルの事を忘れるのも難しいかもしれないが、もし今後結婚を望んで平凡に暮らしたいと言うなら、それなりの相手を世話してやっても良い。そう考えていたのである。

だが前回面会した時のアリシアのあの気丈な様子では、形だけでも後宮に入るという事を断るのではないか？　いやおそらく断るだろう。そうも考えていたのだ。

現在後宮にはアリシア以外に２３名の女性が暮らしていた。すべて王子に媚を売ろうと考えた臣下の貴族などが押し付けてきた者達だった。そして、わざわざ断る必要も感じず受け入れ、いくら若く精力的な王子とは言え２３人も女が居れば十分だった。一夜ごとに新しい女を求めるという異常な性癖は王子にはないのだ。

だが、意外そうに問いかけた王子に、役人は、王族の下の世話をする者に相応しい卑俗な笑みを浮かべた。

「はい。はじめは関心のなさそうな表情でしたが、後宮に入れば多額の年金が支給されると話した瞬間目の色を変えまして、直ぐに承知いたしました」

「なんだと！」

金で転んだと言うのか！？　アリシアの態度に不快に感じながらも、自分を恐れぬその態度に、ある種興味を覚えても居たのである。それが金であっさりと転ぶ程度の売女だったというのか。

しかし、そう言えば……と気になる点があった。

「後宮に入れるのは形だけという事は伝えたのであろうな？」

この事を伝えているとなれば、また話は違ってくる。だが王子の胸に芽生えた微かな「希望」は裏切られた。

「いえ。それが……」

「伝えていないと言うのか！」

声を荒げた王子に、役人は低頭し言い訳をする。

「申し訳御座いません。こちらの条件を提示しそれでもかの女性が断れば、サルヴァ殿下には、その意思が無いと言って安心させる積もりで御座いました」

そして下げていた頭を上げ、ちらりとサルヴァ王子の顔を覗き込む様に見ると言葉を続けた。

「はじめから軽い条件を提示されて断る人間でも、はじめに悪い条件を提示した後に軽い条件を提示されれば、悪い条件よりはマシなのだから。と人はその条件を飲むものです。今回もその積もりで交渉したのですが……かの女性は殿下がお手をつける御積もりが無い事をこちらが言う前に、年金の話をした途端に後宮に入る事を承諾なされたのです」

くっ！　ではやはりあの女は、金で抱かれる事を承知したと言うのか！　王子の胸に失望の黒いシミが広がる。気丈な女だ。そうも考えていただけに落胆も大きい。

その程度の女と言うなら、その程度に扱ってやろうではないか！

「今夜にでもアリシアの部屋に行くぞ！　その積もりで準備せよ！」

怒鳴り付けるように役人に言いつけ、役人は深々と頭を下げながらにんまりと笑った。

いくら手をつけないと言ってもどうせ気が変わると分かっていた。あの女に王子が手をつける積もりなどないと言わなくて本当に良かった。役人はそう考えたのだった。

その夜、アリシアにあてがわれた部屋を訪れたサルヴァ王子を、王族を迎えるに相応しい絹のベッドの縁に座るアリシアが出迎えた。だがその目には、後宮の女が宿すべき媚びた色はなく、はじめて会った時以上の不遜な光が宿っていた。

金で身を差し出す売女がどうしてその様な目をするのか！　サルヴァ王子はそう思いアリシアを蔑んでいた。だが、アリシアこそがサルヴァ王子を蔑んでいた。この王子様は、金と権力にものを言わせて女を抱こうと言うのだから。

王子は無言でアリシアを押し倒した。彼女も抵抗はしない、ここまで来てしまった以上抵抗するのも馬鹿馬鹿しい。

愛情など一片も通わぬ行為にアリシアの身体は悲鳴を上げたが、彼女はその悲鳴を音声にして洩らす事には耐え切った。

事が終わると王子は直ぐに、もう用は済んだとばかりに立ち上がって衣服を整える。そして部屋を出る時に振り向きもせず、この部屋に入ってからはじめて口を開いた。

「売女ならばもう少し楽しませてくれると思ったのだがな？」

王子の言葉にアリシアもこの夜はじめての言葉を発した。

「その売女の上で懸命に腰を振っていたのは、どこの王子様なのでしょうね？」

部屋の扉が開かれ、そして叩き付ける様に閉じられた後、アリシアはその扉をしばらく見つめていた。

第8話：黒髪の少女（1）

ミュエル・ハッシュは冴えない伯爵家の家に生まれた。

伯爵と言えば貴族の中でも低い身分では無く、以前はそれなりの権勢を誇っていた。しかし、栄枯衰退の御多分に漏れずミュエルの祖父の代に没落した。

ミュエルのお母様のヘルガは新興の商人の出で、よくある話だが、にわかに金を手に入れた成金の娘と、身分は高いが金の無い貴族のお父様のサムエルとの政略結婚だった。

だが母方の成金商人からそれなりの援助を受け生活は持ち直したものの、豪遊するほどの援助までは受けられる訳もない。全盛期のハッシュ家を知るお父様には物足りない。

そして成金商人の実家に居た時は大勢の使用人に囲まれていたのも関わらず、嫁いだ貴族の家で突然質素な生活を強いられたお母様も物足りなかった。

もっとも、一般庶民に言わせればどこが質素だ。と言われる生活ではあるのだが、実家での生活との落差が激しすぎたのだ。何せ実家では２０人以上居た使用人がこの家では６人しか居ないのである。お母様が物足りないと思うのも仕方がない。

とは言え、２人の間にミュエルが生まれるとその様な不満は吹き飛んだ。ミュエルは赤ん坊の頃から美しかった。目が大きくパッチリと開き唇は形よく、顎を縁取る線も滑らかだった。

夫妻は争う様に娘を抱き、育児経験豊富な乳母に、首も据わらない赤ん坊をあまり抱き抱えるものではないと注意を受けたのだった。

ミュエルを可愛がり育てる事に夢中になったお父様とお母様は、使用人が少ないなどといった不満など忘れてしまった。だいたい使用人が多くては、娘の世話を自分達が出来なくなるではないか！

ミュエルはお父様の黒髪黒眼を引き継いでいたが、金髪碧眼のお母様はお人形の様で大好きだった。

「私の髪と目はいつになったらお母様の様な綺麗な色になるのですか？」

自分はお母様の娘なのだから、大きくなればきっとお母様の様な髪の色と目の色になるに違いない。ミュエルはそう思ってお母様に聞いてみた。

だがお母様は笑ってその問いには答えず、

「お前の黒い髪と瞳の方が、とっても綺麗ですよ」

とミュエルの頭を撫でた。

とはいえ、ミュエルはお父様も大好きだった。お父様には良くだっこをねだった。

素直な性格のミュエルはお父様とお母様のいう事をよく聞いて、面倒をかける事も無い。

使用人達にも優しく、夏の盛りに庭の草むしりをしていた老僕のベネルが暑そうだと、日傘をさしてやってきて老僕を強い夏の日差しから守り、老僕に涙を流させた。

家中の者達すべてがミュエルを愛した。

いや、それどころか美しく素直で優しいミュエルはどこに行っても可愛がられた。

「我が家にもあの様な娘が欲しい」

訪問した先の主人、或いは訪問してくる客にそう言われる度に、お父様とお母様は娘を誇らしく思うのだった。

他をはばかりあえて吹聴しなかったが、ミュエルはバルバール王国一の娘である。お父様とお母様はそう思っていた。

バルバール一の娘にはバルバール一の婿が必要だった。だが娘には良き相手を世話してやることは出来ないだろう。

貴族の結婚とは家と家との利害関係の総和である。お互いの家が結婚により結びつく事により、どの様な利益がなされるか？　それが重要なのだ。

ハッシュ家と結婚してどの様な利益がなされると言うのか？　伯爵という地位のみである。そして地位を欲しいだけの相手にバルバール一の娘をやるのは勿体無い。

だが、伯爵の地位などに目もくれない相手となれば、当然それ以上の地位と権力を持ち、今度は相手の方がハッシュ家など相手にしないのだ。

このままでは折角のバルバール一の娘には、お父様と同じ様に地

位目当ての成金商人との結婚が待ち受けているだろう。成金息子を婿に取りハッシュ家を継がせる事になるのだ。

成金商家から嫁いで来たお母様は自分の事を棚に上げ、それではあまりにも娘が不憫だと涙した。

バルバール一の娘なのに！　自分達の地位が高ければ、公爵家の奥方にも相応しく、国王の后にも不足は無いであろう。なのに！　それなのに！　と、美しい娘を見るたびにお父様とお母様は娘に申し訳ないと思うのだった。

そこへ美貌の１２歳の少女の噂を聞きつけたゲイナーが、縁談を持ち込んできたのだ。

「私はバルバール軍総司令官フィン・ディアスの叔父、ゲイナーと申す者です。今日はその甥と貴方様の御息女との縁談を持ってまいりました」

軍務大臣のエドヴァルドはすでに既婚者である為、総司令官フィン・ディアスと言えば、現在のバルバール軍部では最高峰の優良物件。

まさに娘に相応しい婿ではないか！　とは言え……、

「ディアス殿は私よりも年上ですよね？」

３５歳のディアスに対して、お父様は３４歳なのである。

だがお父様のその懸念をゲイナーは笑い飛ばした。

「何を仰います。上流階級同士には、親子ほどの歳の差の結婚など

よくある事では有りませんか」

確かに親子ほどの歳の差の結婚もない話ではないが、実際それが行われる時にはそれに見合った利害関係が発生した時である。

なんの利も無いハッシュ家にはまったく当てはまらない話なのだが、気にするほどの事ではないと笑い飛ばしたゲイナーに、お父様とお母様はそれももっともと釣られてしまったのだった。

ケネスに家を継がせる事だけは防がなくては！　との執念に囚われたゲイナーはハッシュ家の事を調べつくし、どの様な甘言を弄すれば美貌の少女の両親を篭絡出来るか考え抜いてきていた。

そしてその甘言をたらいで水を汲むかの様にお父様とお母様に浴びせかけた。

ミュエル殿はバルバール一の美貌を誇り、バルバール一の御息女にはバルバール一の婿が相応しい。ディアスはバルバール軍の頂点に立つ男であり、ミュエル殿が産む子供はいずれバルバール軍の頂点に立つ事になるのだ。

ゲイナーの甘言にお父様とお母様の心は大きく揺れ動いたが、なにせ娘は１２歳である。子供が産まれればと言われても、子供が子供を産む様であまりぴんと来ない。

だが前もって周到に計画していたゲイナーの交渉は巧みだった。

「もっともフィン・ディアスともなれば他にもいくらでも良い話は有ります。こちらからの申し出でにも関わらず申し訳ありませんが、他家からも話が来ているのです」

こう言って、あえて勿体ぶったのだ。だがこれは少し話がおかしい。

「他家から良い話が来ているにも関わらず、どうして私達の元へ縁談の話を持ち込んで来たのですか？」

ゲイナーは引っかかったと内心にんまりと笑った。だが、それを表情には出さず、むしろ真摯な視線をお父様に投げかけた。

「先ほども申しましたが私はフィンの……、いやバルバール軍総司令官ディアスの叔父です。私には娘は居ますが息子はおりません。甥を我が息子とも思っております。叔父として甥に、いえ、我が息子にバルバール一の娘と結婚させてやりたいと思うのは当然ではないですか」

我が子に最良の相手を！　自分達と同じ気持ちではないか！　ゲイナーの言葉にお父様とお母様は感動した。しかも我が娘をバルバール一の娘と見込んでこの話を持ち込んだと言う。そしてさらに、他家からの話も有ると言う事に焦りを覚えた。

早く決めてしまわなくては、折角のこの良縁が流れてしまう可能性がある。

だがあまりにも急な話だ。いずれは愛しい娘を嫁にやる日が来るのは覚悟していたが、それはまだ数年先の話。そう思っていたにも拘らず突然この様な話がやってくるとは、にわかに返答出来る事ではない。

「すみません。まことに良いお話だとは思いますが、一晩だけ返答

をお待ちして頂けないでしょうか？」

「それはもっともなお話。よろしいですとも良くお考え下さい」

ゲイナーは内心の焦りを抑えて頷いた。あまり性急に答えを要求するものではない。答えを出せないにも関わらず無理に回答を急いては纏まるものも纏まらない。ゲイナーは一旦引く事にし、ハッシュ家を後にした。

ゲイナーがハッシュ家を辞した後、ハッシュ家では家中のそこかしこで縁談について話し合われた。お父様とお母様だけではなく、使用人達の間ですら喧々諤々の論議がなされた。

「お嬢様がこの家から居なくなるなど我慢できん！」

老僕のベネルが叫んだが、女中のヒルマは猛反発した。

「あんたは老い先短いから死ぬまでミュエル様に傍に居て欲しいんだろけど、ミュエル様には将来があるんだ！　女ってはね。良い男を捕まえなきゃ行けないんだよ！」

女中の仕事に追われ婚期を逃してしまったヒルマは、自分自身の後悔もあってミュエル様の為には今回の縁談を受けるべきと主張したのである。

家の主人を差し置いての使用人達の論議など意味を成さないはずだったが、自室で静かに思い悩んでいたお父様とお母様に、大声で叫ばれたヒルマの主張が耳を打った。

ミュエルの将来の為……。

自分達のミュエルに傍に居て欲しいという我がままで、ミュエルの将来を犠牲にしても良いものだろうか？　お父様とお母様はそう考えたのだった。

実際に自分達を鑑みれば、お互いバルバール一の相手ではなくとも素晴らしい娘に恵まれ幸せに暮らしているのだが、良き相手と結婚させるのが一番と考えられている時代である。深層意識に刷り込まれた価値観にはあらがい難かった。

２人はミュエルを呼び寄せ言い聞かせた。

「お前は、バルバール軍総司令官のフィン・ディアス様の元へ嫁ぐ事になったんだよ」

「私はお嫁に行くのですか？」

ミュエルはきょとんとして問い返した。自分はまだ１２歳だ。お嫁に行くなどずっと先の話では無いのか？　そう考えていたのである。

首を傾げるその仕草すら愛しい娘を、お母様は涙を流して抱きしめ、お父様は娘とお母様をあわせて抱きしめた。

「ディアス様はこの国で一番の婿なんだよ。その妻となれるお前は幸せなんだ」

「でも、お父様もお母様も泣いています」

幸せという事は喜ばしい事のはずなのに、どうしてお父様とお母

様は泣いているのだろう。ミュエルはそう思って問いかけた。するとお父様とお母様はさらに強くミュエルを抱きしめた。

「当たり前だ。お前と離れて暮らさなくてはならないのだからね。でも、お前の幸せの為なら仕方がないんだ」

お父様とお母様と離れて暮らす……。今までミュエルには考えもしなかった事だ。突然にして突きつけられた事態にミュエルの頭は混乱し、そしてそれが飲み込めてくるとミュエルはポロポロと涙を流した。その形の良い頬を雫が伝って流れ落ちる。

「私もお父様とお母様と離れて暮らすのは嫌です。どうしてもお嫁に行かなくてはならないのですか？」

だが、ミュエルはそれ以上の言葉は飲み込んだ。お父様とお母様が自分の問いに答えず嗚咽を漏らしながら泣き崩れたのを見て、ミュエルは察したのだ。自分が不満を漏らせば、お父様とお母様をさらに悲しませるのだと。

「お父様、お母様。分かりました。私はディアス様のところにお嫁に行きます」

こうして、素直で優しく他人を思いやる心を持った美しい１２歳の少女は、自分の心を押し殺してディアスの元へと嫁ぐ決意を固めたのだった。

第8話：黒髪の少女（2）

翌日再度現れたゲイナーに、お父様とお母様が縁談を承諾する旨を伝えると、瞬く間に準備は進められた。ミュエルは連れ去られるかの様にディアス邸へと連れて行かれた。

ハッシュ家を出るとき、お父様、お母様だけではなくすべての使用人にも見送られ、ミュエルは用意された馬車で生まれ育った生家を後にした。

ミュエルは、自分の夫となるディアス様という男性の事はあまり知らなかった。

このバルバール王国の軍隊で2番目に偉く、しかも実際に戦場で戦う軍人さんの中では一番偉いのだと言う。そしてなんとお父様よりも一つ年上だと言うのだ。

素直で物怖じしないミュエルだったが、さすがに怖い人だったらどうしようかと不安を胸にディアス邸にたどり着いた。だが、なんと当のディアスは仕事に出ており数日不在だと言う。

ゲイナーはミュエルを馬車の中に待たせてディアス邸に入り、しばらくするとミュエルを差し招いた。そして玄関の扉をくぐると挨拶をするように言った。

「ミュエル・ハッシュと申します。ディアス様の元に嫁ぎに参りました」

ミュエルが挨拶をすると、ディアス家の人々は事態がよく飲み込

めて居ない様で、ぎこちなく頷くばかりだった。

ゲイナーは呆然として物の役に立たなくなっているディアス家の人々を尻目に次々と話を進める。このディアス邸の現当主は甥であるが、彼にとっても勝手知ったる生家なのだ。ミュエルを引きつれ邸宅内をどんどんと進みディアスの寝室へと案内した。

「ここがお前の旦那の寝室だが、まあ今後はお前の寝室でもある」

ゲイナーはミュエルが持参した荷物をすべてここに運ばせ、そしてもう用は済んだとディアス邸を後にしたのだった。

行き成り知らない家にぽつんと取り残され不安に泣きそうになったミュエルだったが、ここで泣いてはお父様とお母様を困らせる事になる。あえて気丈に振舞った。

自分はディアス様の妻になるのだから、それらしく振舞わなくてならない。ディアス邸の近くの住民やディアスが不在中にディアス邸を訪れた人々にも、

「ディアス様の妻になるミュエルと申します」

と挨拶を行った。妻たるもの挨拶くらい出来なくては夫に恥をかかせるのだ。

そしてそうこうする内に、その夫がやっと帰ってくると言う。

遂にこの時が来た！　ミュエルの小さな胸は、緊張にどきどきと高鳴った。

本来妻ならば玄関まで出て夫の帰りを出迎えるべきなのだろうが、夫の従弟のケネスという青年がとりあえず部屋で待っている様に言

うので素直に待っていた。

しばらくするとディアス邸では今まで見た事がない男性が部屋に飛び込んできた。という事はこの人が自分の夫なのだ。軍で一番偉いというからとても怖そうな人を想像していたが、ちっとも怖そうではない。

ミュエルは嬉しくなって微笑みながら夫に挨拶を行った。

「妻になるミュエルと申します。これからよろしくお願いいたします」

だがこの妻の挨拶に夫であるディアスはしばらく呆然とし、ミュエルが不審に思って首を傾げた頃やっと口を開いた。

「……あ。ああ。よろしく」

その様子がおかしくてミュエルはつい形の良い唇に手をやりクスクスと笑ったが、直ぐに夫を笑うなんてと思い直し、勤めて表情を引き締めた。

ミュエルの夫は挨拶をした後も、しばらく口を開きかけそして噤むという事を繰り返していたが、やっとの事で言葉を発した。

「本当に１２歳なのか？　童顔で１２歳に見えるけど、実は１８歳じゃないのかい？」

おかしな事を言うものだ。どうして自分の事を１８歳などと言うのだろう？　ミュエルは首をかしげながらその問いに答えた。

「いえ。私は12歳ですよ？」

「そうか……。いや、良いんだすまない」

夫はため息を付いてミュエルに少し待っている様に言うと、部屋を後にした。

どうしたのだろう？　ミュエルの小さな胸は不安に押しつぶされそうになった。お父様とお母様と離れるのは嫌だったのに。その思いを押し殺してやってきたのに。にも関わらず夫となる人はちっとも嬉しそうに見えないのだ。

しばらくすると夫が帰ってきた。そして部屋に戻ってくるなり口を開いた。

「私は別の部屋で寝るから、お前はここで寝なさい」

「別の部屋……ですか？」

ミュエルは、そう言いながら探る様な目でディアスの顔を下から覗き込むんだ。やっぱり、自分は要らないのと思われているのだろうか？　ミュエルの胸にさらに不安が広がる。

ミュエルの言葉に、改めてその顔を見直した夫は、少女の目に不安の色を見て取ったのか、慌てて弁解した。

「……ああ。夫婦になるといってもまだ正式に結婚をした訳では無いのだからね。それまでは別の部屋で寝るんだ」

……よかった。自分が嫌われているからではないのだ。ミュエル

は安心し微笑んで頷き、夫も頷いた。

そして夫との結婚する日を少女は待ち続けたが、一向にその日はやってこず、ある日夫の従弟のケネスと言う青年に呼び付けられた。夫が呼んでいるのだと言う。

ミュエルはその青年の後に続きながら、自分が夫と正式に結婚すればこの年上の青年は自分にとっても従弟になるのだろうか？　と不思議な思いにかられた。

夫の元へ案内され年上の従弟と共に椅子に座ると、夫は自分を呼び寄せた用件を話し始めた。

夫が言うには、１２歳ではさすがに結婚には早いと言う。確かにその通りだと自分も思うけど、ではどうしてお父様とお母様の元を離れなければならなかったのだろう？　ミュエルには不思議でならない。

だがその疑問は、ミュエルが問う前に夫が解き明かした。

自分には結婚する前に学ばなくてはならない事があるので、従弟から色々と教えて貰わなくてはならないらしい。きっとその勉強をしなければならないので、この家に来る事になったのだろう。

そしてミュエルの部屋はディアスの寝室から、勉強するのに便利だからと従弟の部屋の隣に改めて割り当てられた。

こうしてミュエルと年上の従弟との勉強の日々が始まった。

従弟は優しく丁寧に勉強を教えてくれ、そして時折夫の事も話し

て聞かせてくれた。

夫は国一番の軍人にもかかわらずちっとも怖くは無く、従弟にも優しくしてくれると言う。だが、夫には問題があるとも聞いた。時々ほらを吹くらしい。

ミュエルは夫の話を聞くのが嬉しく、従弟に何度もねだった。ミュエルが従弟の服の袖を引っ張りねだると、従弟は顔を真っ赤にしながらも色々と話してくれる。

どうして従弟はいつも顔を赤くしているのだろう？　ミュエルには不思議でならない。具合でも悪いのだろうか？　もしそうなら大変である。

「ケネス様。御風邪でも弾いているのですか？」

「あ。いや。直ぐ顔が赤くなる体質なんだ」

従弟はさらに顔を赤くしながらそう答え、素直なミュエルは、そうなんだ。と素直に納得したのだった。

そして日が暮れ、夫が帰ってくると夫を出迎える。

「ディアス様、お帰りなさいませ」

ミュエルが笑顔で出迎えると、夫も笑顔で答える。

「今日もちゃんと勉強したかい？　ケネスとは仲良くやってるんだろうね？」

「はい。ちゃんと勉強いたしました。　ケネス様とも仲良しです」

ミュエルは微笑みながら答える。妻たる者、夫の親類とは上手く付き合わなくてはならないのだ。勿論、従弟といやいや付き合っているわけではなく、従弟は優しい青年なので、例え夫の従弟でなくとも、仲良くなれただろう。

夫はミュエルの頭を撫で、家の奥へと進んだ。ミュエルはその後に続く。そしてその後、夫と従弟、そしてミュエルとの三人で夕食を行い、その後は別々の部屋で寝る事になる。

でも、ミュエルは夜、部屋で一人になると泣いてしまう事がある。まだ12歳の少女が行き成り他人の家に一人でやってきて、不安や寂しさを感じずにいられる訳が無いのだ。だが家の人達にそれを言う訳にはいかない。

この家の妻になる自分がそんな事を言っては、妻が勤まる訳が無い。そうすればお父様とお母様もお困りになるだろう。

素直で優しい少女は、この夜もその小さい身体ではもてあます大きな寝具に身を沈め、一人眠りに付いたのだった。

第9話：両雄の前哨戦（1）

「我がバルバールをランリエルが狙っているのは、間違いないと考えて良いだろう。そしてその為の対策も進められている」

バルバール王国軍部にて、ディアスの発言に幕僚達の視線が集中する。この日、バルバール軍の国土防衛戦略会議が行われているのだ。

「だがみなも十分に分かっているだろうが、我らの敵は東のランリエルだけではなく、長年の仇敵コスティラが西に控えている。なかなか愉快とはいえない状況だ」

重々承知な事とは言え、改めて事態を確認すると、幕僚達からうめき声が漏れる。

自国の2倍を超える国力の大国に東西を挟まれていると言うこの状況に、楽観的になり得る者が居ればよほどの大物か大馬鹿者だろう。

そして、バルバール軍総司令官フィン・ディアスはその大物か大馬鹿者らしかった。

「とはいえ、そう悲観的になる事も無い。両方を一度に相手にせねば何とかなるだろう」

大物か大馬鹿らしい総司令官の発言に幕僚達は、それは確かにと頷く一方、とはいえそう上手く行くものだろうか？　と首を傾げた。その内の幾人かは、大馬鹿の方かも知れない。そう考えた。

頷きながら首を傾げるという奇妙な動きを行なう幕僚を尻目に、ディアスは説明を続ける。

「敵が攻めてくれば国境で待ち構え天険の利を活かして撃退する。これがバルバールの基本姿勢だ」

幕僚達は再度頷き、そして今回はその攻め寄せる相手が東西2つとなり、同時に攻め寄せて来てはどうすれば良いのかと、頭を悩ませているのである。総司令官は同時に相手せねば良いと言うが、攻め寄せてくる時期をこちらの都合の良い様に制御出来るものなのだろうか？

ディアスは幕僚達の懸念を読み取ったかの様ににやりと笑い「だが……」と前置きをすると、さらに言葉を続けた。

「こちらの都合の良い時に戦いたいなら、何も相手が攻めてくるのを待つ必要はない。こちらから攻めれば良いのだ」

バルバール軍総司令官は、長年バルバールの基本姿勢だった専守防衛からの転換を示したのだった。

理屈は分からないでもない。しかし自国の2倍以上の国力がある相手に攻め寄せるという大胆な発言に幕僚達は言葉も無い。

だがしばらくの沈黙の後、幕僚の1人がやっと口を開いた。

「しかし、2倍の国力の相手に攻め寄せて勝てるものなのでしょうか？」

そしてその当然とも言える疑問にディアスは、質問者だけではなく幕僚全員に言い聞かせる様に、みなを見渡しながら答える。

「少数で多数に勝つにはまず機先を制する事。そして局地的な戦力の優位を保つ事だ。全戦力では負けていても一局面においての数の優位を確保する」

幕僚達もなるほどと頷いたが現時点ではあくまで机上の空論である。それを実現させるには実務によってどれだけ理想に近づけるかが重要となる。それをわきまえている幕僚の1人が早速名乗りを上げた。

「なるほど。しかし機先を制するならば、極秘裏に準備を進める必要がありますな。敵に気取られずに戦の準備を進めるのはなかなか難しいですが、是非ともそれは私めにお任せ下さい」

だがディアスは、折角名乗りを上げた者の耳を疑わせる返答を、いや幕僚全員が唖然とする発言を行なったのである。ディアスはこう言ったのだ。

「いや、ランリエルに盛大に喧嘩を売ろうかと思う」

数日後、バルバール王国王都チェルタから5千の軍勢が出陣し、ランリエル側国境を固めた。将はカーニック。派手なところは無いが指令に忠実で、守りを固めて守勢に徹するといった任務にはうってつけの男と言われている。

出陣せずに守れと命ぜられれば、敵がいくら挑発しても絶対に打って出ない。攻める側にはやりにくい男である。もっとも同僚から

「勝敗が決した後の追撃すら命令が無ければ行わない男」と陰口を叩かれる事もあるのだが。

そしてその一方、文官のクッコネンを使者としてランリエル王国王都フォルキアへと派遣し、こう口上させたのである。

「ランリエルでは近頃軍艦の建造が盛んだとか。まさか軍艦を率いて陸続きであるベルヴァース王国を攻めるなどとは申しますまいな。我がバルバール王国を攻める積もりであろう事は明白。しかし今まで我が国が貴国に害をなした事はありません。ランリエルは何を持ってその様な非道をなさろうと言うのか？」

この使者の口上にサルヴァ王子は皮肉な笑みを浮かべた。

こちらの準備が整わぬ内に開戦する積もりか？　しかしならば使者など派遣せずとも行き成り攻めて来ても良さそうなものだ。つまり奴らも開戦を望んでいる訳ではない。と言う事である。少なくとも現時点では。ではこちらも付き合ってやろうではないか。

「御使者の言い分はあまりのも見当違い。平時から陸海の戦力を備えるのは国家として当然の事。然るに我がランリエルは近年までカルデイとの戦いのに海軍戦力を整える事が出来なった。そのカルデイとの戦いも一応の決着を見た今、改めて相応の海軍戦力を整備しているに過ぎん」

さて、開戦する積もりが無いバルバールはどう出るか？　内心の嘲笑を隠し、不満げな表情で王子は言い放ったのだ。

それに対してクッコネンも毅然と言い返す。

「他国を圧する軍事力はそれだけで周辺諸国を威圧するもの。そもそもランリエルに海で接するはバルバールのみと言っていい状況で、戦力を備えると申して、どこの国に対して海軍を備えているので御座いましょう。よもやバルバールがランリエルに攻め込んでくる。そうお考えでは御座いますまいな。ランリエルの海軍増強はバルバールに対する威圧となる事ご考慮下さい」

他国を超える戦力を持てば威圧とは言ったものだ。その理屈では周辺諸国でもっとも国力の低い国に軍備を合わせねばならぬでは無いか。王子はさらに反論する。

「他国の心象を気にして自国の備えを怠るなどあまりにも馬鹿げた話。海を超えればバルバールのみが我がランリエルに攻め込める国ではあるまい。もし海軍の不備で他の国にランリエルが攻め込まれればバルバールはどう責任を取ってくれると言うのか？　いや、その必要はない。ランリエルの事はランリエルで守る。その為の海軍戦力の整備なのだからな」

「海運で運べる兵員など高が知れておりましょう。このランリエル王都フォルキアは内陸にあり、僅かの兵力に海岸から上陸されたところで何ほどの事がありましょう。その様な愚行、行う国があるとも考えられませぬ。その様なご心配は杞憂であり、資金の無駄というもので御座いましょう」

「何、備えとは常に最悪の状況を想定するものよ」

「それはこちらとて同じ事。ランリエルの海軍増強はバルバールへの侵攻が目的ではないか？　バルバールにとって最悪の状況を想定いたしますれば、この様に考えるのも無理からぬ事と思し召し下さい」

「先ほど申したとおりだ。他国の心象を気にして自国の備えを怠る積もりはない。バルバールが最悪の状況を想定するのはバルバールの勝手。そちらはそちらで最悪の状況に備えればよろしかろう」

「とは申されましても、その最悪の状況に備えるにはランリエルに匹敵する海軍力をバルバールは持つ必要があります。バルバールの国力でそれを備えよとはあまりにも理不尽なお言葉」

「我がランリエルに、他人の財布の中身にまで考慮してやらねばならぬいわれは無い」

冷たく突き放したサルヴァ王子だったが、こちらの返答に対し執拗に食い下がるバルバールの使者に違和感を感じた。これは結論が出ない様にあえて問答を引き伸ばしているのではないのか？

それならそれで、もう少し付き合ってやっても良い。そう考えた王子だったが、この様な交渉を引き延ばすだけの茶番に自身で対応するのはさすがに辟易する。

「御使者の言い分、こちらでも検討させて頂こう」

そう言って無理やりその日の交渉を切り上げ使者を帰すと、次の日からは部下に対応させたのだった。そして対応させた部下とクッコネンとの問答も、やはり結論は出ず悪戯に日が過ぎて行ったのである。

第9話：両雄の前哨戦（2）

一向に結論が出そうに無い交渉とは違い、バルバール本国では着々と戦の準備が進められている。と言う情報がバルバールに派遣している部下から王子の元へともたらされた。

「戦の準備と言うがどの程度の規模なのだ？」

「バルバールの全軍と言ってよろしいかと」

硬い表情で述べた部下の言葉に、王子は眉をひそめた。

バルバールの全軍と言えば陸戦兵力が約５万。いや、国内の拠点への守りを残せばもう少し減るだろう。そして海軍の艦艇は約６０隻ほどのはず。

カルデイを征服し国力が増している今、ランリエルは陸戦兵力１３万。そして艦艇は現在こちらも６０隻ほど。陸戦兵力は圧勝であるが海軍は互角。しかし、海軍において、その質を考慮に入れれば到底勝利はおぼつかない。

だが……。実はバルバールがランリエルを攻めるに当たっては海戦でランリエルがバルバールに負けても致命傷とはならないのである。

なぜならバルバールの使者が言ったとおり、海運で運べる兵力など高が知れている。もしバルバール海軍がランリエル王国沖の制海権を得て、海から軍勢を上陸させても勝敗の決定打にはなりえないのだった。

ランリエルにはバルバール軍5万に備え、国境に同数の5万を展開させてもなお、8万の軍勢が控えているのである。海運で運べる兵力に備えるなど造作も無い。

だがもしランリエルが海戦に勝利し、バルバール王国沖を制圧してランリエルの軍勢を上陸させる事に成功すればバルバールには大打撃である。

バルバール王都チェルタはランリエル王都フォルキアと違い城塞都市ではない。海上から軍勢が上陸してくるとなれば、王都防衛の為に多数の戦力を王都に駐留させる必要が出てくる。

そして王都と国境を守るので精一杯のバルバールは、いい様に国内を荒らしまわされるだろう。

戦うにはあまりのもバルバールは不利。それは彼らにも分かっていよう。にも関わらず戦の準備を進めているという。

「……面白い」

サルヴァ王子はそう呟くと、改めて部下に監視する様に命じた。バルバール軍がどの様に戦うのかを。

その夜サルヴァ王子は後宮にいる寵姫の1人の部屋を訪問した。バルバールとの戦いに思いを馳せ高ぶった血が、その高ぶりを発散する事を欲したのである。

その寵姫は王子の動きに敏感に反応し心地よい音色を奏でた。そ

れに比べてあの金で転んだ売女は、うめき声一つ上げずなんとつまらない事か。

あれからアリシアの部屋は訪問していない。金で転ぶ売女をそれに相応しい扱いをしたが、それ以上執拗に訪問する積もりはなかった。

金で転んだとはいえ、アリシア自身王子に抱かれたい訳では無い事は分かる。そして王子も反応の無いアリシアを抱いても心楽しくない。嫌がらせの為に、わざわざ抱いて楽しくも無い相手を抱きに行くほど、王子は陰湿ではなかった。

だが売女は売女である。その考えに変わりも無い。

血の高ぶりを抑える為何度も寵姫を求め、寵姫もそれに応え続けた。いつしか2人は折り重なりながら眠りに付いたのだった。

翌朝、王子は身を整えると寵姫の部屋を後にした。覇気に相応しいだけ女は抱くがその為に執務を滞らせる事はない。女を抱いて翌日昼まで眠るなどという体たらくでは、軍での名声も傷付こう。その様な事で築き上げた名声が台無しになるなど馬鹿馬鹿しい事である。

後宮から一旦私室へと戻るべく廊下を進む王子の視界に、売女の姿が入った。アリシアにも王子の姿は見えているはずにもかかわらず黙って通り過ぎ様とする。

王子は自分の横を過ぎるアリシアを呼び止めた。

「挨拶ぐらい出来ないのか？」

呼び止めた王子にアリシアは、何の感情も読み取れぬ顔を向けると、感情の読み取れぬ平坦な声で答えた。

「おはよう御座います。昨晩は、お励みだったようですね、王子様」

相変わらず気に食わん女だ。金で転んだと言うならば、その金を出している者に相応の態度が出来ないのか？

「お前にはかなりの金を渡しているはずだが、それにしてはみすぼらしい格好ではないか」

王子はそう言うが、アリシアの服装は後宮で用意されている上等な物であり、粗末な物では無い。だが他の寵姫と比べると華やかさが無く、確かにみすぼらしい。という印象を与えた。

彼女と寵姫達の何が違うかというと、服の他に身に付ける宝石などの装飾品をアリシアはまったく身に付けていないのである。

寵姫達は王子の気を引こうと、実家からの援助、さらに後宮に入る事によって支給される年金で、争う様に装飾品を買い求め身を飾っているのだった。

アリシアは再度王子に答えた。だが、今度の返答の表情と声には嘲笑の色が存分に含まれていた。

「残念な事に、ここには身を飾ってまで気を引きたいと思う男性が居ないので御座います、王子様」

そして、やれやれ困ったものだ。とでもいう様に少し両手を広げながら肩をすくめて見せた。

この女！　激高した王子は、アリシアの服ごとその肩を右手で掴み壁に押さえつけた。鍛え上げられた王子の膂力に右手一本で壁に縫い付けられた彼女の服が肩のところで裂ける。

「身を飾る必要がないならこの服も要らんのではないか？」

アリシアの肩を押さえつけながら、怒気を含んだ王子の声が彼女の頬を叩く。だがアリシアは苦痛に眉をしかめながらもサルヴァ王子の目を見据える。そして苦痛に堪えながら答えた。

「お……のぞみならば……裸になりましょうか？　王子……様」

王子が右手を大きく振ると、肩で裂かれたアリシアの服がさらに破れ左上半身が露になった。そしてアリシアはその場に崩れ落ちる。だがその視線は王子から逸らさない。

王子は自分の右手に残された衣服の破片を呆然と見つめた。そして我に返ると背を向けて足早に立ち去った。

その場には、左肩に掌の形にくっきりと痣を残したアリシアが残された。

サルヴァ王子は大股に私室へと急いだ。不意に自分が如何にも矮小な存在に思えたのだ。そしてそれと同時に脳裏に浮かんだ考えを、懸命に打ち消した。自分よりもあの売女の方が気高いのではないか。などという事を考えるのはあまりにも馬鹿馬鹿しいはずだった。

第１０話：総司令の攻勢（１）

バルバールでは戦の準備に追われていた。

今まで大国からの侵略に守るだけだったバルバールが、逆に２倍の国力の国へと侵攻するのである。この今までに無い快挙に、心を高揚させる者と悲観的に暗く沈む者は半場した。

ディアスは高揚する楽観主義者達を実働部隊の指揮官として任命し、沈む悲観主義者達に戦争準備と後方支援を担当させた。

楽観主義者は臆する事無く敵国内でも勇んで戦い、悲観主義者はそれだけに細心の注意を払いながら準備に勤しむだろう。

こうして整えられた戦力は陸戦兵力４万５千。ただし王都チェルタの守りに５千の兵を残すので出陣する戦力は４万。軍艦は王都から一番近い軍港に１０隻を残し他はすべて出撃させる。

すべての準備が終わり出陣の日、ディアスは邸宅を後にする時、妻になるといってやってきたミュエルからの挨拶を受けた。

「ディアス様。御武運をお祈りしております」

おそらくケネス辺りから教えて貰ったのであろう武人の妻らしい台詞を、ミュエルは緊張しながら言葉にした。

良い子だ。ディアスは素直にそう思った。そしてミュエルの頭を撫でた。

「私にもしもの事があれば、ケネスを頼りなさい。お前にはちょうど良い」

十分に計画はなされているが今回の戦いは綱渡りの部分も多い。万一の事もある。そう思っての言葉だった。

「私にはちょうど良い？」

きょとんとするミュエルに、ディアスは微笑みながらさらに頭を撫でた。

今まで暮らしていた中でミュエルが「とても良い子」であるという事は分かった。短期間のうちにディアス邸に住むすべての者達がミュエルを愛していた。色々な意味で。

誰もこの子を嫌う事は無いだろう。もし居るとすればその者の心の方が歪んでいるに違いない。

この子は幸せになるべきだった。自分の様な親子ほど年の違う相手ではなく、つりあった相手と一緒になり幸せになるべきなのだ。

「ああ。もしケネスの事を好きになったのなら、私に構う事はない」

ディアスはそう言い残し出陣すべく背を向け、その場にはミュエルが1人残された。呆然として。

司令部へとついたディアスは、そこで幕僚達と落ち合うと簡単に打合せを行い夜を待った。そして夜になると軍勢が次々と王都を発

する。

一直線に国境に向かえば街道を進む旅人達などの目撃者が増える。その為、国境へは一直線に向かわずに大きく迂回しながら目指した。一晩で進む予定の場所までに点在する村には、先行させた騎士に御触れを出させた。

「軍勢が通過した事は他言を禁ずる。その禁を犯した者は厳罰に処する覚悟せよ！」

威丈高な物言いだが、隠密行動は今回の作戦の重要なカギである為仕方が無い。こうして軍勢は数日をかけて国境手前まで辿り着いた。

そして軍艦も同じ様に夜密かに出向された。

夜間の軍艦の航行など危険な為通常は行なわれない。各艦は衝突せぬように前後左右に明かりが灯され、そして海岸線を走る騎士の持った松明の火を頼りに航行する。

こうして予定の位置まで密かに進んだのである。

すべての戦力が所定の位置についた次の日、またも夜を待って行動を開始する。

バルバール軍４万は一気に国境を突破し、僅かばかりに配置されていた監視の敵兵は瞬く間に蹴散らされたが、それでも王都へと敵襲を知らせるべく伝令を走らせた。

ディアスはそれには構わず一隊を海岸線へと走らす。

「我が国の海岸線を誘導した様に、松明の火で出きるだけ敵国深く

まで艦隊を誘導するんだ」

他の軍勢はさらに数部隊に分かれ、それぞれ進軍する。

城や砦の軍事拠点は、一攻めしてみて落せそうならば落し、難しそうならば捨て置いた。敵国を混乱させ被害を与える為の戦いなのであって、占領する為の戦いではないのである。

万一敵が追撃してくれれば、その時は逆激に転じる。敵拠点に篭る兵力よりバルバール軍一隊の方が数は多い。野戦になれば打ち破るのは難しくない。

攻撃に参加している部隊の兵士は数日分の腰兵糧を携え、弓兵も背に大量の矢を背負っている。拠点を攻めるに当たってもなるべく矢の消費を抑え、時には落した拠点から食料や矢を拝借した。

行軍速度向上の為、物資を輸送する足の遅い輜重隊を率いずの進撃だった。

だが敵にも有能な者が居るらしく、軍上層部からの命令を待たずに独断で周辺の領主の兵力を糾合し、バルバール軍を迎撃すべく出陣した者が居た。

レオニード・アウロフ将軍である。

彼は集めた5千の軍勢でもって、ディアス率いる本隊を狙ったのだ。

各地を攻める為分散し、ディアス率いるバルバール軍本隊は４千。

兵力を集中すべしという兵法の基本には反するが、今回の戦いは

敵領地に打撃を与える事が目的である以上仕方がない。兵力を集中していては、効率が悪すぎるのだ。

夜が明け辺りが白み始めた頃、ディアスは前方に戦塵またたくのを発見した。

「ディアス将軍。敵襲です！」

ディアスと同じく戦塵を発見したらしい幕僚の一人が傍らで叫びディアスは、

「ああ。分かっている」と落ち着いて返した。そして敵があげる戦塵を注意深く観察する。

「『戦塵低くして広きは、歩兵なり』……か」

ディスはそう呟くと、前方に弓兵を配置し、左翼に歩兵、右翼に騎兵を並べた。

とはいえ、前方に配置した弓兵は幅が広く敵軍すべてに対峙している

兵科と言うものは一般的に、弓兵は騎兵には弱い。騎兵の突進速度に弓を放つのが追いつかないからである。

歩兵は弓兵に弱い。隊列を組み槍衾（やりぶすま）を作って進軍する事が持ち味の歩兵は進軍速度も遅く、弓兵のかっこうの的となるのだ。

敵は急な出撃に何とか歩兵は集める事は出来たが、騎兵を多く集める事は出来なかった様である。

ちなみに騎兵は歩兵に弱かった。騎兵の持ち味はその突進力であるが、槍衾を作る歩兵に突進するなど自殺行為である。

もっとも各兵科とも横からの攻撃には弱いが、その中でも歩兵が一番弱い。整列し長槍を構える歩兵はすぐには攻撃方向を変えられない。一人一人が向きを変えても意味は無く、すぐには隊列が整わないからである。

両軍の距離は瞬く間に近づき、アウロフ将軍は突撃を敢行する。ディアスはそれを弓兵で持って迎撃させた。

ここでは矢の消耗を考えてはいられず、空を覆うばかりの矢を敵軍へ降り注ぐ。敵兵は盾で矢を防ぐもののすべてを防ぐ事は不可能だった。

多くの兵士が朱に染まり、歩兵の前進の速度が弱まる。勿論彼らも歩兵の盾の隙間から矢を打ち返すが、進みながらの射撃では劣勢にならざるを得ない。

「っち！　何をやっておるか！　構わず進め！」

この状況にアウロフ将軍は叫んだ。

一見この命令は無策とも見えるが、勝利を目指すなら他に方法は無かったのだ。状況が突撃以外の選択をアウロフから奪っていた。

彼は、バルバール軍が軍勢を分散させている事を逆手に取り、逆転の一手として勝負を挑んできている。いつ分散したバルバール軍が再集結してくるか分からない以上、強引でも短期決戦を挑むしか選択肢がなかったのだ。

そして口先だけの命令では兵士が動かないのは、愚将ではない彼にも分かっていた。

「我に続け！」

アウロフ将軍は兵士を鼓舞する為、前線へと向かい、自らが突撃を敢行した。

将軍の勇敢なる行動に兵士達の士気も上がり、

「うぉーー！」と雄叫びを上げ、突撃の速度があがる。だが、それでも隊列を崩してまでの、なりふり構わずの速度は出せない。隊列を崩せばバルバール軍右翼の騎兵は、綻びを生じた歩兵の槍衾をやすやすと破るだろう。

それに対しディアスは前を向いたまま、傍らにいる副官に呟いた。

「左翼前進」

「左翼歩兵前進！」

ディアスからの命令を副官が大声で発し、左翼へと指示を伝えるべく伝令は飛び出すように本陣をたつ。

バルバール軍左翼は敵右翼と衝突し、長槍を絡ませあい、さらに近づいて盾同士ぶつけ合う様にして押しあった。その為敵右翼の前進は止る。だが、前方のバルバール軍からは相変わらず矢が降り注ぐ。

アウロフ軍は、やむを得ず中央、左翼のみで前進を続けるしかない。立ち止まっては、バルバール軍弓兵の的となるだけなのだ。だが、その為アウロフ軍に段差が生じたのである。

「右翼騎兵を弓兵の後方から回り込ませ、左から敵中央を横激」

このディアスの命令を、副官はまたも大声で復唱し、伝令が飛ぶ。

本来自軍の右翼に守られるべき右（バルバール軍からみて左）からの突撃に、敵中央軍の歩兵は慌てて右に旋回しようとする。しか

し、その手にした長槍は味方同士絡みあい、そして思わず右に向けた盾の間隙を縫って、正面から降り注ぐ矢の餌食となった。

中央軍は瞬く間に混乱し、その混乱はすぐに左翼にも広がった。バルバール軍左翼と戦っていた右翼歩兵はむしろ最後まで持ち堪えたが、それも僅かな時間差でしかない。

「静まれ！　このまま突撃せよ！」

アウロフ将軍は最後の賭けとばかりに叫んだ。しかし、将軍の命令を全軍に伝えるべき伝令達も散り散りとなり、その命令を聞いたのは将軍の周辺にいる僅かな者達のみ。

そしてその僅かの者達も将軍の命令を実行したのは皆無だった。兵士達は、勝敗が決した以上自分の命を守る為、我先にと逃げ出したのである。

最後まで踏みとどまったアウロフ将軍は討たれ、その軍勢は壊滅した。

そして他のバルバール軍はこの間も各地を巡り、夜の内に存分に敵国内を荒らしまわったのだった。

艦隊も海岸線を進む一隊に誘導されて奥へと進む。途中に点在する漁村は攻撃するのも時間の無駄と捨て置かれ、村民は幸運にも被害を免れた。

そして夜が明ける頃には、国境に近いベサントという名の軍港の手前まで辿り着く事に成功した。出撃時の利便性を考えて作られたこの国境に近い軍港には、敵の軍艦の半数近くが投錨されている。

港にも、深夜の内にバルバール軍の侵攻が伝えられ、続々と海兵や漕ぎ手が集まってきている。だが、まだまだ全兵が集まっていると言うにはほど遠い。

そこへバルバール軍が突撃を行なった。

敵襲など想定されていない軍港への攻撃に、海兵や漕ぎ手達は大混乱に陥り我先に軍艦へと乗り込む。だがバルバール軍は、その軍艦に陸上から存分に火矢を浴びせかけ、次々と燃え尽きて沈んでいく。

火をかけられては堪らないと、海兵や漕ぎ手が乗り込んだ軍艦は続々と港を離れるが、適正人員に達せぬまま急いで出向した艦艇は如何にも愚鈍だった。

そこにバルバール艦隊が襲い掛かった。元々軍港に投錨されていた艦艇数で言えばほぼ互角だったが、敵艦は出港すら出来ず、虚しく湾内で燃え尽きた艦も多い。出港した艦艇も人員不足で船足遅く旋回能力も悪かった。

衝角戦を行なう海戦において、船足が遅く旋回能力も悪いとなれば致命的である。しかも逃げるように出港した敵艦隊には、それを統率すべき提督も定まっていなかったのである。

敵艦は次々と沈み、バルバール艦隊に殆ど被害は無かった。

そして敵艦がすべて海の藻屑と消えると、バルバール軍は船渠（ドック）もすべて燃やしつくし、バルバール艦隊はさらに奥へと進む。

敵海軍の艦艇は、集結すればまだバルバール艦隊に匹敵する艦艇

数を誇るであろうが、一番大きなベサント軍港の艦隊を消滅させた今、他の艦艇はそれぞれ少数に分かれて各港に投錨されているのみ。

敵艦艇に集結させる間も与えず進撃すれば、打ち破るのは容易いであろう。

こうしてバルバール軍による突然の攻撃に、その日の朝には大打撃を受けた「コスティラ王国」だった。

第１０話：総司令の攻勢（２）

思いも寄らぬバルバール軍の侵攻に、コスティラ王国王都ケウルーは大混乱に陥っていた。

「敵の規模は！？」

「被害状況はどうなっておる！」

「敵は今どこにいるのだ！」

怒号が飛び交うが、その問いに答えられる者は誰も居ない。輜重隊を率いないバルバール軍の行軍速度と戦いが夜間行われた事もあって、今だに状況が掴めないでいた。

そこへ確実と思われる情報が、伝令からもたらせられた。だが、その情報に心躍った者は誰一人いなかった。

「ベサントに投錨していた艦艇はすべて撃沈！　港は、すべての施設を焼き払われその機能を失いました。バルバール艦隊はさらに西へと進んでいる模様」

この情報に諸将は呆然となったが、その中でいち早く我に返った海軍の将ライストが叫んだ。海軍所属とはいえ全員が軍港に詰めている訳ではなく、彼は王都にある海軍本部勤務だった。

「すぐさま各港に投錨している艦艇を、一箇所へ集結させよ！」

「かしこまりました。ですが、何処の港へ集結いたしましょう」

彼は、少し考えてからラーへ軍港と答えた。ラーへはコスティラ

でも一番西にある軍港である。東から来るバルバール艦隊を逃れ集結するには、もっともな選択と言えた。

命令を受けた伝令は、急いで同僚達にもその指令を伝え、彼らは各港へと向かうべく王都を飛び出した。

そしてライストは海軍本部へと赴き、集結させた艦隊の提督たらんと任命を受けた。いくら数だけ集めても、それを指揮する者が居なくては、数ほどの力は発揮できない。

各港に集結している艦隊にもそれぞれ提督は居るが、それはみな同格の提督である。その上に立って全艦を指揮する者が必要なのだった。辞令を受取ったライストは自身もラーヘ軍港へと急いだ。

海軍については、ライストに任せるしかない。その場に残された陸戦兵力の将軍達は、とにかく兵力を集めるべく奔走し、その一方、バルバール軍による侵攻に愚痴をこぼした。

「ランリエルとの国境を固めて抗議の使者を送り、軍勢を王都に集結させて置きながら、まさか我が国へと攻め寄せるとは……」

それは諸将みなの気持ちを代弁した言葉だった。そしてその後に「卑怯な」という単語を付け加えないだけの分別はあった。

今まで散々バルバールへと攻め寄せたコスティラである。それが攻められたからと言って、文句は言えまい。さらに言えば、ランリエルに攻め寄せると見せかけてのコスティラへの侵攻も、優れた軍略といえた。引っかかったこちらが悪い。その程度の見識はあるのだった。

愚痴ばかりも言っては入られないと、諸将は対策の為軍議へと入った。

「いつまでも手を拱いては入られん。敵の兵力が掴めんと言っても、バルバールの全兵力は今までの戦いからおおよその検討は付いておる。ランリエル国境を固めた兵と本国を空にはしまいという事を鑑みれば、奴らに動かせるのは、どうあがいても最大４万程度のはず」

「なるほど。それに比べ我が軍は全兵力を集結させれば１０万を超えます。勿論、今回の奇襲でかなりの損害を受けておりますが、それでも2倍以上の戦力」

「しかし、全軍の集結をまっては入られますまい。この間も被害は広がっておるのですからな」

「そうはいっても、１万、２万の軍勢を派遣しても敵４万によって簡単に撃破され、無駄に損害を増やすだけだ」

「そもそも敵が４万であるという事は、確実なのでしょうか？」

「そんな事分かる訳がない。しかし、最悪の状況を想定して計画するしかなかろうが」

「確かに……」

結局、バルバール軍は最大に見積もり４万であると想定した。その同数の４万が集結すれば、王都と国境までの中間地点まで進撃し、そこで牽制させ、さらに集まってくる兵力を順次合流させる。そしてバルバール軍の倍の８万まで集まった時点で、国境に進撃させる事と決まった。

同数の４万で戦ってもし負けては、巻き返すのが難しくなる。戦うのであれば、確実に勝てる戦力で戦う必要があった。

国境を塞いでしまえば、コスティラ国内のバルバール軍は袋のネズミ。そうなればどうとでも料理できるのだ。もっとも敵も馬鹿ではあるまい。そうなる前に撤退するだろうが、それならそれで敵を追い払うという目的は達成されるのである。

「だが、兵力が集結するまでに、相当な被害を受ける事になるであろうな……」

今まで、一方的にバルバールを攻めるだけだったコスティラ国内の軍事拠点は、はっきり言って脆弱である。設備もそうだが、そこに篭る兵士達自体が防衛戦など訓練以外では、まったくの未経験なのだった。

コスティラ諸将はその受けるであろう被害を考え、暗く沈んだ表情で俯いた。

ディアス率いるバルバール軍はその間も村々と軍事拠点を荒らしまわっていた。

「敵軍の集結具合に注意を払いながら、各所を荒らしまわる。敵が集結し出てくればこちらも集結し、作戦は次の段階に移る」

ディアスの指令通り各隊は、コスティラ領内東部を駆け巡った。

村々の家々を焼き払い、田畑も焼いた。むこの民衆をと言われる

かも知れないが、コスティラは数え切れないほどバルバールに攻め寄せてきている。今まですべて勝っているから良いものの、もし負けていればバルバールの民衆が同じ目にあっていただろう。そう思えば、手控える気にもならない。

今回ここで大打撃を与えておかなければ、近い将来コスティラとランリエル両国を一度に相手しなくてはならなくなり、その時には敗北は必至となる。今敵国民に手控えて、その代わりに自国民が被害を受ける事になるなど、あまりにも馬鹿馬鹿しい話だった。

勿論不要に虐殺などはしないが、必要ならばやむなし。そういう事である。

今回の作戦でランリエルを攻めるという選択肢もあったが、ディアスはその選択を棄てた。

理由は幾つかある。

まず、帝国と長年しのぎを削る戦いをしてきたランリエルより、一方的にバルバールを攻めていただけのコスティラの方が防衛体制が甘いのである。

次に、バルバール軍将兵の戦意であった。あえて悪い言葉を使えば、バルバール将兵には長年わたり積りに積ったコスティラへの恨みがある。それは暴走させずに制御出来るならば、強大な武器となるのである。

そして最後に、長年の帝国との戦いに終止符を打ったサルヴァ王子が居るランリエルより、長年のバルバールとの戦いに終止符を打てずにいるコスティラとを比べた場合、こちらの作戦が読まれる確

率がコスティラの方が低いと判断した為である。むしろこの事がコスティラを攻めた一番の理由と言ってよかった。

他の2つの条件など、作戦が読まれるかもしれないという事に比べれば、何ほどの事も無い。

そして事実ディアスの作戦を読める人材はコスティラには居なかった。いや、厳密に言えばバルバール軍が国内に侵攻した後とはいえ、アウロフ将軍はバルバール軍の意図を読み、分散したバルバール軍の本陣を突いて来た。だがその彼ももはや討ち取った。

そしてディアスの作戦を読める者が居なくなったコスティラは、バルバール軍に、いい様に国内を蹂躙され損害を出し続けたのである。

第１０話：総司令の攻勢（３）

バルバール艦隊も、コスティラ海軍に甚大なる被害を与え続けていた。

ライストはラーヘ軍港への艦隊集結を指示したが、東部よりにある３箇所の軍港は、その命令が届くよりも早くバルバール艦隊が押し寄せたのだった。

数に劣る各港のコスティラ艦隊は、出港せず湾内に縮こまった。こうなっては、うかつには手が出せない。今回は陸戦戦力の援護は無いのだ。

うかつに港に入れば、バルバール軍艦こそが陸からの火矢による攻撃で損害を出しかねない。だがそれもバルバール艦隊には想定内の事だった。

バルバール艦隊は数隻の艦に火を点けて湾内に突入させたのだ。湾内で身を縮こまらせていたコスティラ軍艦は逃げる事が出来ず、火は燃え移り海の藻屑と消えた。

この作戦によりバルバール艦隊は８隻の軍艦を燃やしたが、コスティラ海軍は３７隻の艦を失ったのだった。

結局ラーへ軍港に辿り着いて集結し、ライストの指揮下に入ったコスティラ艦艇は、バルバール艦隊の半数でしか無かった。

ライストは半数の艦艇にもかかわらず善戦したが、戦力の差を覆す事は敵わずバルバールのライティラ提督が率いる艦隊に敗北し、

逃げ道も塞がれ囲まれたコスティラ艦隊は、その半数が降服したのだった。

ディアス率いる陸戦戦力がコスティラ王国東部を荒らしまわるに対し、制海権を制圧したバルバール艦隊は、西部海岸線から海兵を上陸させ荒らしまわった。

海兵の数は2千程度と多くは無いが、東部に目を向けていたコスティラ軍は、西部が手薄になっていたのだ。2千の海兵でも十分攪乱させる事が出来た。

こうして数日に渡り、バルバール軍によっていい様に国内を陵辱されていたコスティラだったが、遂に4万の軍勢を集結させる事に成功した。

コスティラ軍4万は王都ケウルーから国境へと進軍した。コスティラ軍の動向に警戒していたバルバール軍もすぐにそれを察知する。

「敵は4万か……、もう少し多勢で来るかと想定していたんだがな」

ディアスはそう呟き軍勢を集結させた。そして国境を越えてバルバールへと戻ってしまった。さらに国境をその軍勢で固める。

「なんだというのだ！　結局荒らしまわる事だけが目的だったのか！」

最終的には敵も撤退するとは思っていたが、あまりにもあっさりと撤退し過ぎる。

コスティラ諸将は激怒したが、また舞い戻られてはかなわない。

コスティラ軍４万も国境まで進み、国境で両軍は対峙したのだった。

そしてコスティラ軍が国境に到達した翌日、もう夜も明け様とする頃、ディアス率いるバルバール軍３万は夜襲を行なったのだった。

だがコスティラ軍とて夜襲には警戒していた。慌てふためく事などない。

「迎え撃て！」と落ちついて命じ、混乱する事無く迎え撃った。

両軍は月明かりを頼りに矢を射掛け合い、そして盾を並べて矢を防ぎながら槍兵が進軍する。両軍負傷者が出れば後退させ新手を繰り出し、一進一退の戦いを繰り広げられた。

「夜襲などにかかると思ったか！」

コスティラ軍は深夜の戦いにもかかわらず整然と戦い、バルバール軍の夜襲は失敗したかに思えた。

だが、突如コスティラ軍の後方で、兵士達が悲鳴を上げ、混乱しだしたのだ。

「後ろから敵襲だと！」

猛将グレイス率いるバルバール軍１万が、コスティラ軍の後方を襲撃したのだ。

コスティラ軍諸将は驚愕した。敵軍はどうやって後方に回り込んだというのか。敵軍はすべて目の前に居るはず。そう簡単に後ろに回りこめるはずはないのだ。

このあり得ない状況に、コスティラ軍は混乱の局地に陥った。今

まで整然とバルバール軍と戦っていた軍勢も、このままでは前後から挟撃されると浮き足立つ。

バルバール軍は全軍が国境を超えずに1万の軍勢を山中に隠していたのだった。勿論、あまり国境近くではコスティラ軍の偵察に見つかる為、かなり離れた山中に潜み、厳重に警戒した。不幸にも軍勢を目撃したコスティラの民衆はすべて捕まえ、逃げようとした者は仕方なしとすべて討ち取った。

そしてその軍勢は日が沈むとすぐに隠れていた山中から発進し、明け方に行なわれる本隊の攻撃に合わせて、コスティラ軍の後方を襲ったのだ。

このディアスによる兵法で言うところの『人の及ばざるに乗じ、不虞の道に由り、其の戒めざる所を攻むるなり』の作戦通り、思いも寄らぬ自国方向からの襲撃に、コスティラ軍は浮き足立つ。

「持ち堪えよ！　ここさえ持ち堪えておれば戦線は維持できるのだ！」

コスティラの指揮官は、懸命に兵士を叱咤する。夜間の戦闘で敵軍の数を目視できないが、冷静に考えれば、バルバール軍が4万を超えるはずはないのだ。前後から攻撃されたとはいえ、騒然と対応すれば迎撃は不可能ではない。

しかし、兵士達には、とっさにそこまで考えが及ばない。

「ここの戦線を維持できても前後から攻められてはお仕舞いではないか！」

と兵士達は我先にと持ち場を離れ、戦線は崩壊した。コスティラ

兵は逃げるに邪魔な長槍を投げ捨て、懸命に走る。

「追撃せよ！」

ディアスの激がバルバール軍に響き、敗走を始めた敵軍に襲い掛かる。戦闘の損害とは戦闘そのものより、敗走時に追撃を受けた時にもっとも増大するものだ。

バルバール軍騎兵は逃げるコスティラ軍に襲い掛かった。まだ夜が明けきらぬ薄暗い世界に、馬蹄の響きが辺りを圧し、それがなおの事コスティラ軍兵士に恐怖を植えつける。

コスティラ軍は必至で逃げ、それだけに戦いは一方的なものになった。

逃げるだけのコスティラ兵に攻撃するだけのバルバール兵。時折立ち止まって反撃を試みるコスティラ兵士も居たが、他のコスティラ兵士は逃げさるのみ。

結局その勇敢な兵士は敵中に1人取り残され、多勢の敵兵に囲まれいとも容易く討ち取られた。

だが、その逃げる先もグレイスの軍勢に押えられている。コスティラ軍は殆どの将兵が逃げる事が出来ず、からくも突破した者も、バルバール軍は執拗に追撃を行った。その為、多くのコスティラ軍将兵が屍をさらしたのだった。

コスティラ軍はこの戦いで、3万5千の死者を出した。死傷者ではなく、死者がである。戦闘開始当初以外は追撃戦に終始したこの戦いに、バルバール軍の損害はほとんど無い。

バルバール軍は戦勝に沸いた。ここまでの圧倒的な勝利は長いコスティラとの戦いでも稀どころか、皆無と言ってよかった。

戦闘が終わり別働隊を率いてたグレイスも本隊と合流し、将兵は身分の差も忘れ近くに居る者同士抱き合って、かつて無い大勝の喜びを分かち合う。

「これで、しばらくはコスティラは軍事行動を起こせないだろう」

「まったくですな！」

大勝に気を良くしたグレイスは力強く頷いた。だが疑問もある。

「しかし、この様にコスティラに大勝出来るならば、なぜ今までこの作戦を行なわなかったのです？」

これだけの戦果。このグレイスの疑問は、誰もが思う疑問である。ディアスは首をすくめて答えた。

「そりゃあ、今まで出来なかったからさ」

「今まで出来なかった？」

「ああ、今回、全軍を集結させるなんて派手な真似をしてもコスティラに警戒されなかったのは、ランリエルに喧嘩を売って、ランリエルと戦う為と思わせる事が出来たからだ。ランリエルが敵とは言えなかった時には出来ない作戦だ」

もっとも、ランリエルが敵とならなければ、コスティラには専守

防衛をしていれば良く、この様な作戦自体が不要だったのである。ランリエルが敵となった為、この様な作戦が必要になったのは皮肉だった。

そして浮かれている諸将を尻目に、ディアスは胸中付け加えた。

この作戦は一度きりしか成功しない。今後はコスティラも警戒する。そしてこの作戦が利かないならば、コスティラが軍備を再度整えた時、ランリエルと共に東西から攻められればバルバールは滅亡するのだ、と。

それを回避するには、バルバールがコスティラを滅ぼすか、ランリエルを滅ぼすか、それとも……。

第１１話：国内の敵

「そこまでの大勝だったか」

部下からの報告を、軍部の執務室で受けたサルヴァ王子は目を見張り、素直に感嘆の声を洩らした。

その報告とは、派遣した部下による、例の「バルバール軍がどの様に戦うのか」の報告である。

そうサルヴァ王子はディアスの作戦を読んでいたのだ。

だがディアスとて、ランリエルには作戦が読まれるかも知れないと考えてコスティラを攻めた。サルヴァ王子が作戦を読むという事を、読んでいたという事になる。

もっとも、バルバールがコスティラを攻めている時に、ランリエルがその背後を討つという事も考えられた。これもディアスが懸念した通り、綱渡りの要素の多い作戦ではあった。

だが今回、王子はあえてそれを行なわなかった。

ランリエル軍が出撃すればバルバールはすぐに察知し、出撃したバルバール軍は引き返す。ランリエル側国境に配置された兵力は５千であるが、軍勢が引き返してくる程度の間ならその５千で持ち堪えられてしまう。

そして、バルバール海軍が行なった艦隊の夜間航行など、ランリエル海軍には出来ない芸当なのである。当たり前の様に昼間に航行

するしかなく、気付かれずにバルバール王国沖に突入するなど夢のまた夢なのだ。

奇襲を計画するなら、戦時体制を取る訳にも行かず商船の行き来を制限出来ない。それらの船舶に、昼間に航行するランリエル艦隊は容易に発見される。そして情報を得たバルバール艦隊は、ランリエル艦隊がバルバール王国沖に突入するまでに引き返してくるのだ。

つまりランリエルがバルバールの背後を襲っても、コスティラ侵攻の邪魔をする。といった程度の意味しかなさないのである。それよりもバルバール軍に好きな様に戦わせ、その手の内を存分に見させて貰おう。サルヴァ王子はそう考えたのだ。

さらに言えば、コスティラ王国とて王子にとっては存在的な敵国である。その国力が削がれるのは望むところだった。

勿論、バルバールが敗北する事もありえ、その場合はバルバール王国侵攻がかなり楽になるのだが……。そうなれば王子にとっては興醒めもはなはだしかっただろう。

だが幸いな事に、バルバールは2倍の国力のコスティラに大勝し、強敵である事を示した。望むところだった。

「バルバール軍の総司令官は、確かディアスという者だったな？」

王子の問いに部下は正確に答えた。

「はい。フィン・ディアスと申す者で、バルバールの武門の名流の当主です。年は35歳になる男です」

誰も軍の総司令を女性とは思わないであろうに、わざわざ男と付け加える辺り、この部下の報告も徹底している。王子は部下からの報告に満足しさらに問いただした。

「ほう……。それでどの様な御仁か？」

「かなり変わった人物と言われております。これはあくまで噂ですが、いくたびも戦場に出ているのもかかわらず、自ら剣を持って戦った事が無い、とも言われております」

部下は敵の総司令官の軽い醜聞を、王子に聞かせて見せた積もりだった。だがそれを聞いた王子は、部下の思惑通りその話を面白がったりはしなかった。

「その噂の真偽は？」

と、かなり深刻そうに問いただしたのである。部下は予想外の反応に、戸惑いの表情を浮かべた。

「いえ……実際には幾度かは戦った事がある様ですが、そういわれても仕方が無いほど、出陣した戦場の数に比べ、その数が少ないのだと……」

総司令官は、自ら剣を持って戦うものではない。それは、実はサルヴァ王子も同じ考えなのだった。

だがサルヴァ王子は、戦った事は無いなどと噂されてはいない。王子は実際多くの戦場で、剣を持って戦ってきた。たとえ王子といえども、産まれながらにして総司令官だった訳ではない。一士官、一武将として戦った時期も有り、その当時は存分に剣を振るったのである。

そして武門の名流とはいえ、産まれながらにして総司令官でないという事は同じのはずだ。総司令官になったというのなら、比肩される者が居ないほどの武勲を立て続けたはずなのだ。それが剣を持って戦った事が無いと噂されるなど、どういう事なのだろうか？

いや、分かっている。それは類稀なる指揮能力を有しているという事なのだ。これは単に勝機を見出す事に優れている、と言うだけに留まらない。

どれほど剣を振るう積もりが無くとも、剣を振るわざる得ない時がある。それは敵の攻撃を許し自分の間近にまで敵の接近を許した時である。かのバルバールの総司令官は、劣勢に立たされる事すらも、ほとんど無いという事なのだ。

……暑い。冬の最中というのに暑苦しさを感じた。かつて無い強敵の予感が王子の体温を急激に押し上げた。熱した体を冷やす為、襟に指を引っ掛け、冷たい冬の空気をその内に取り込んだ。

そしてバルバール軍総司令官ディアスへの興味は尽きない。

「他に面白い話は無いのか？」

王子の様子は、とてもではないが面白がっていた様には見えないが、部下は忠実にその注文に答えた。この話はとっておきに面白い話のはずである。

「実は、ディアス総司令には少女嗜好があるらしく、このたび１２歳の少女と婚約したとか」

「１２歳……」

これにはさすがの王子も唖然とし、記憶違いでなかったかと部下に問いかけた。

「確か……ディアス殿は３５歳と言わなかったか？」

部下は王子の反応に満足し、口元の微かに笑みを浮かべながらはっきりと答えた。

「はい。３５歳で御座います」

「そっそうか……」

王子は呟く様に言葉を洩らしたが、一瞬混乱していた頭がはっきりとし、正確に話が飲み込めると、部下がもっとも望んだ反応を見せた。

「３５歳の男が、１２歳の花嫁とはな！」

と大いに笑ったのだった。

その後、部下を下がらせたサルヴァ王子は、しばらくのち執務室でダヴィーデ将軍の訪問を受けた。

ダヴィーデ将軍は６０を超える老将で、その落ち着いた指揮は、王都防衛という任務にうってつけと評価されている。サルヴァ王子のカルデイ帝国侵攻の際も留守を任されていた。

王都には近衛隊が存在するが、それとは独立した留守部隊の将と

して不測の事態に備え、時には遠征軍への援軍を含めた臨機応変な対応に、ダヴィーデは定評が有った。

当然、来春にも行われるであろうバルバール王国侵攻時にも王都の留守を任せる。それは人事を発表するまでも無く、サルヴァ王子を含めたみなが当たり前の事として認識しているほどだった。そしてそれは、ダヴィーデ本人もであるはずだ。

だが、訪問した老将の用件に、王子は我が耳を疑った。

「引退するだと？」

「はい。家督は息子にでも譲って、私は引退しようかと考えております」

サルヴァ王子の視線が老将を軽く射抜いた。だが、当の本人はまるでそれに気付かぬ風に、むしろ破顔して言葉を続けた。

「息子夫婦に子供が生まれましてな。いやいや、お恥ずかしい事で御座いますが、これがまた可愛ゆうございまして。殿下のお陰をもちまして我が国の悲願であった帝国との戦いも終わり、この老体の役目も終りました。後は可愛い孫をあやして暮らさせて頂こうかと」

バルバール侵攻時の留守居役を任される事など、分かっているはず。その台詞と穏やかな口調の裏の真意は苛烈だった。ダヴィーデは、王子が計画するバルバール侵攻を真っ向から批判しているのだった。

その批判にサルヴァ王子も内心は心穏やかではなかった。だがバルバール侵攻を中止する積もりはない。王子は構えて平然と言い返

した。

「まだかっこうの獲物が西に居るではないか。手の届くところに武功が転がっているのだ。武人として取らぬ手はあるまい？」

帝国を組み伏せた今、ランリエルの国力は、バルバールの2倍を超える。手の届くところにある武功。そう言っても大言壮語とはいえまい。

だが、老将は静かに口を開く。

「バルバールをも打ち倒せばランリエルの力はさらに増し、そのさらに西にあるコスティラなども倒すのは容易いのでしょうな。そしてコスティラを倒せば、さらにその先ですかの？　その頃にはランリエルの男子は死に絶えているかも知れませんの」

そう言えば……。とサルヴァ王子はダヴィーデについて一つの事を思い出した。息子に家督を譲るといってもその息子とは娘婿のはずだ。だがダヴィーデに息子が居なかった訳ではない。しかしその実の息子は、帝国との戦いで戦死しているのだ。

息子を戦でなくした老将は、静かに王子を見つめた。その視線には深い憂いを含んでいた。戦えばランリエルも無傷では済まされない。たとえ勝とうが戦いが続く限り、死者は量産されるのだ。

息子を戦で失った老将にとって戦いとは、せずに済むものならば、せずに済ませるべき事なのである。彼が、今まで引退せずに居たのは、武門の名門の当主であるゆえに引退出来ずに居たに過ぎない。

「老将軍の言う事も分からぬでもない。しかしだ。万一バルバール

がコスティラに敗れその下に跪けばどうなる？　その時はまた帝国の様に、同等の国力を有する国と国境を接するという事になろう。そして今度はコスティラとの永きにわたる戦いを始めると言うのか」

「バルバールとコスティラとの戦いが、どれほど永きにわたり行われてきたか、知らぬ訳でもございますまい。俄かに決着が付くものでは無いと思いますがの」

「ああ。去年の今頃には、ランリエルと帝国との戦いが、終わると思っている者も居なかったであろうがな」

覇気に溢れた王子と、憂いを秘める老将の視線が衝突し、両者の中央で火花が散った。

帝国との戦いに終止符が打たれたのは、王子の様な類稀なる人材が出現したがゆえであり、その様な者がそうそう現れる訳は無い。現れないからこそ今まで決着が付かなかったのだ。と言うのがダヴィーデの考えだった。だが、その考えを口に出すのは王子におもねるかの様で、彼の気骨が抵抗する。

それゆえダヴィーデは口をつぐんだが、再確認するかの様に王子が口を開いた。

「私は、自分に出来た事を、他の者に出来るはずが無いと思うほど、うぬぼれてはおらんぞ？」

王子の言葉はダヴィーデの考えの裏返しなのだが、実際は王子の願望と言ってよかった。王子の強敵を欲する心が、自分に匹敵する者が居るはず、と思考を誘導するのだ。

とはいえ、王子とて願望により理屈にあわぬ妄想を抱いている訳ではない。論理的に考えた上で無限にある可能性の中から、自分の意にそう答えを選択しているに過ぎないのである。

ダヴィーデの思考も、戦えばランリエルにも被害は出る。戦わずに済むなら戦わずに済ませるべき。という彼の願望から論理的に考えた上で、自分の意にそう答えを選択しているのだ。

だがそれゆえに両者の意見は平行線をたどる。論理的に思考し答えを出した者同士の対立は、水掛け論になるのが常である。ダヴィーデとてそれが分かるだけに無駄な議論はしない。自分の言うべき事は言った。後は王子がどう判断するかである。

ダヴィーデは視線をサルヴァ王子から外し、黙って一礼し、退出の許可を得ずして踵を返し執務室を後にした。王子もそれをとがめずに老将の背中を見送った。

だがダヴィーデの様に、戦わない方がランリエルの為と言う考えではなく、己の為にバルバール侵攻に反対する者も多数居た。彼らは次の様に主張した。

「なぜバルバールを攻める為に帝国内の独立国を優遇せねばならんのだ。バルバール侵攻を止めれば、帝国の領地を我々が手に入れる事が出来るではないか！」

まったく己の利益しか考えぬ発言であるが、なんと王子はこの意見に押されていた。無論王子が彼らに口舌で劣っている訳では決してない。それについての反論を、王子が「言う訳にいかない」為である。

「急いてランリエル貴族が帝国の支配者として乗り込んでも反発を招くだけ。今は帝国貴族同士の対立を煽り、修復不可能となってから、彼らの領地を取り上げるべきだろう」

この考えを軽率に口に出し、もし帝国内の独立国の領主やランリエルに取り入る帝国貴族の耳に入れば、彼らはランリエルから再度帝国に寝返ろう。それゆえサルヴァ王子は、詰め寄る彼らに言葉を濁すに留めていた。だが愚かな彼らに、王子の真意は分からない。

いや、王子の真意が分からないゆえに、自己利益の発言を繰り返しているのだから気付かないのは当然だった。そして王子が反論する言葉を持たないのだと勘違いし、さらに自説を声高に叫ぶのである。王子にしてみれば、まったく馬鹿馬鹿しい話だった。

王子は自分の意見が、帝国貴族に届くのを懸念し口を噤んでいる。だが、それを分からぬ愚かな者共が、帝国内の独立国を優遇するなと声高に叫び、ランリエルに組する独立国や帝国貴族達の不安を煽っているのだ。

彼らは、戦って勝てば領地を分け与えられて当然と考え、帝国との戦いが、なぜ長年にわたり決着が付かなかったのか、まったく理解していないのだ。

今まで、帝国を滅亡寸前にまで追い詰めても最後には失敗していたのは、それをやってきたからで無いか！

帝国の諸勢力に一致団結して抵抗させない為、王子は苦心してそれらの分裂を謀っている。だが、その足を引っ張り続ける彼らには、さすがに辟易する。いや、すでに辟易などという言葉ではすまされない状況になっていた。このままでは帝国の統治にも支障が出る。

たとえランリエル貴族であろうと、害になるならば排除せねばなるまい。サルヴァ王子は密かにそう決断したのだった。

第１２話：壊れた心（１）

コスティラとの戦いで、かつて無い大勝をもたらしたディアスは、にもかかわらずその気持ちは沈んでいた。

最近、ミュエルの元気が無いのである。

数日前、王都に凱旋し、いつも通り国王陛下からお褒めの言葉のみを頂いたディアスが邸宅に帰ると、ミュエルとケネスが出迎えた。

ミュエルはディアスが無事に帰ってきた事が嬉しく、美貌の少女は花の様な笑顔を見せた。そしてケネスもはにかんだ笑顔を浮かべていた。

「ディアス様お帰りなさいませ」

「はは。２人で並んで仲が良いな」

ディアスは揃って挨拶を行なう2人に笑いかけた。２人が仲良くする事はディアスにとっても嬉しい事だった。この2人には是非幸せになって欲しいものだ。心からそう願ってたいた。

そして先に立って邸宅の中へと進んだ。２人もその後に続く。ケネスは仲が良いといわれて照れているのか顔を真っ赤にしていた。だが、ミュエルの表情は明るいとは言いがたかったのである。

無事にお帰りになった旦那様の為、料理人は腕を振るいその日の晩餐は豪華な物だった。貧しい戦場での食事に飽き飽きしていたディアスは、その料理に舌鼓を打った。

しかし、ミュエルの方を見るとあまり食が進んでいる様に見えない。

「どうしたミュエル？　嫌いな物だったか？」

そう言われたミュエルは、慌ててぶんぶんと首を振り、

「そんな事は御座いません」と料理に手を付けた。

そして、その様子を侍女から伝え聞いた料理人が飛んできた。ミュエルに

「料理が御口に合わなかったので御座いましょうか？」

と問いかけると、またぶんぶんと首を振った。

だがその日を境にミュエルの様子がおかしくなったのである。人と居る時は笑顔を絶やさぬのだが、1人でぽつんと居る時が多くなった。そしてその様な時に笑顔を見せる事はなくなった。

1人で居る時に笑顔を見せるなどと言われるかもしれないが、ミュエルは小鳥が居れば小鳥に笑いかけ、花を見れば花に微笑む。その様な少女だった。ディアス家の人々はその様子を遠くから見るのが大好きだったのだ。

それが笑顔を見せない。ディアス家の者達はみなミュエルを心配した。ディアスも心配したが、あえてケネスに様子を伺わせた。この様な時にこそ、力になってくれた者に心引かれるものだろう。

「ミュエルの様子を見てきてくれ。お前が力になってやるんだ」

だが、その言いつけに、ケネスは戸惑いの表情を浮かべた。

「ですが、僕で良いのでしょうか？　ディアス将軍が行かれた方が良いのでは……」

ディアスにミュエルと結婚する気が無いのは知っている。だが一応ミュエルはディアスの妻になる予定となっている。それを差し置いて、自分が彼女と仲が良くなるのは不味いのではないか？　そう思ったのだ。

「いや、お前が行って励ましてやってくれ」

こうはっきりと言われては、ケネスも断る事は出来ない。そして事実ケネスはミュエルに好意を抱いていた。ディアス家でミュエルに好意を抱いていない者等、存在しないのであるが、ケネスの好意ははっきりと恋愛感情だった。

ミュエルを探し、使用人達に聞いて回ると、ミュエルは庭に散歩に出ているらしいと聞き当てた。庭に行くと果たしてミュエルが沈んだ表情で歩いていた。

好きな女の子に声をかけるという行為に、自分の胸がドキドキと高鳴るのを感じた。数瞬躊躇ったが、意を決してミュエルに近づいた。

「ミュエル。大丈夫かい？」

「ケネス様……」

名を呼ばれたミュエルは、はっとして顔を上げてケネスを見たが、その表情に普段の明るさは無い。しかし、すぐに笑顔を見せた。そ

のあまりにも分かりやすい意識しての笑顔は、17歳のケネスにも彼女が無理をしているのだと、容易に察せさせた。

「最近元気が無い見たいだけど」

「いえ。大丈夫です。ありがとう御座います」

ミュエルは笑顔で答える。一瞬その笑顔に見とれそうになったがすぐに我に返った。自分はミュエルを励ますという使命を帯びて来たのだ。

「みんなミュエルの事を心配しているんだ」

「お気遣いありがとう御座います。でも本当に大丈夫なのです」

ミュエルは笑顔で答え続けるが、それだけにミュエルの心が見えない。ミュエルを励まし続けるべく、再度口を開いた。

「ディアス司令官もミュエルの事を心配しているんだ。早く元気になる様にって」

「ディアス様が？」

「うん」

「それで……ディアス様はどちらに？」

「え？　書斎に居ると思うけど？」

「書斎……？」

「そうだけどどうして？」

「ディアス様は私の元へは来て下さらないのですか？」

さっきまで笑顔だったミュエルの表情が、はっきりと翳っていた。その表情の変化にケネスは悟らざるを得ない。自分ではダメなのだと。だが、やはり彼女への恋心は諦めがたい。

「ミュエル……、でも僕はミュエルの力になりたくて」

だが取り乱すミュエルに、その言葉は届かず、その目にはみるみると涙が溜まる。そして溢れ出し静かに頬を伝った。

「どうしてディアス様ではなく、ケネス様が来るのですか？　旦那様は、妻の心配をして下さらないのですか？」

「……ミュエル違うんだ。ディアス様はミュエルの事を心配して僕を……」

ミュエルに恋心を抱くケネスも、ミュエルとディアスを仲違いさせたい訳ではない。必至でミュエルを宥め様としたが、ミュエルの中で何かが弾けた。

「ミュエル様です！　私はこのディアス家の当主の妻です！　ミュエルではありません！」

普段は大人しいミュエルが大声で叫び、その声に数羽の小鳥が飛び立った。

だがこの叫びに驚いたのは、ケネスよりもむしろ彼女の方だった。自分自身の急激な激高がもたらした叫びに、ミュエル自身信じられなかった。そして、まるで彼からその言葉を浴びせられたかの様に、ケネスに驚きの表情を向けた。

ミュエルは、ケネスを見つめたまま自分の口に手を当て、数歩後ずさると背を向け走り出した。

ケネスは、逃げる様に走り去った少女を追いかける事に躊躇した。その小さな背中がさらに小さくなり視界から消え去るのをただ見送る事しか出来なかったのだ。

第１２話：壊れた心（２）

ミュエルは走りながら、ケネス様になんて事を言ってしまったのだろうと後悔し、涙が頬を伝った。自分はこの家の当主の妻なのだから自分の方が偉いのだ。などと言いたい訳ではなかった。フィン・ディアスの妻として見て欲しい。それだけなのだ。

庭を駆け抜けて屋敷に辿り着く。普段は大人しいミュエルが駆けている事に驚く使用人達から涙に濡れた顔を背け屋敷に入り、そしてさらに駆け続けて自室へと飛び込んだ。

ミュエルの心は乱れに乱れていた。自分の小さな身体では持て余す大きな寝具に身を投げ出すと、枕に顔を埋めて嗚咽を洩らした。

ディアス将軍に嫁ぐのだと言われ、大好きなお父様とお母様と引き裂かれてこの屋敷にやって来た。本当はお父様とお母様と離れるなんて嫌だったのに……。

ディアス邸の人々は自分に優しくしてくれる。それは彼女にも分かっている。でも、それで両親と離れて暮らさなくてはならなくなった１２歳の少女の心が癒されるというものではない。

しかし、それでも堪えてきた。自分が弱音を吐いてはお父様とお母様を困らせる事になる。そんな事は嫌だった。だからミュエルはがんばった。

寂しさに堪え、言いつけ通り毎日勉強をし、ディアス邸の人々とも仲良くしている。ミュエルは一生懸命にがんばったのだ。

なのに！　それなのに！　夫となるはずの男性は、いっこうに自分を妻として見てくれない。いや、それどころか夫は、従弟と仲良くする様に言うのだ！　ミュエルの心は悲しみに満ちていた。

夫となる人は、自分が勉強をちゃんとしたというと、良くやったと頭を撫でてくれる。でもそれがどうしたと言うのだろう？　ただの居候とどう違うと言うのだろう？　そう思うとミュエルの心はさらにその輝きを失った。

素直で優しく思いやりのある光り輝く少女の心が、次第に冷え、その光を失っていく。

自分はディアスの妻でなく、ただの居候……。その事にミュエルは「気付いた」のだ。

ディアスは彼なりに、ミュエルの事を考えている積もりだった。自分の様な、父親よりも歳をとった男より、相応の年齢の男と一緒になった方がミュエルには幸せ。ミュエルの事を思いそう考えていた。

ディアス邸に彼女がやってきてから、まだ僅かな期間でしかない。そしてその短期間で、もミュエルを娘の様に思っているなどと言う訳ではない。

誰にでも笑いかけ素直で優しいこの少女は、誰もがその幸せを願わずには居られない。ミュエルはその様な娘だった。しかし、ディアスのした事は、結果的に、ミュエルの「存在の否定」でしか無かったのである。

妻としてやって来たミュエルを、彼は妻として扱っていないのだ。

これ以上の侮辱が有るだろうか？　ミュエルは、自分の夫になるはずの男に「要らない」と言われているのである。

自分は、どうしてこんなに酷い仕打ちを受けているのだろう？　酷い仕打ちを受けても仕方が無い悪い娘なのだろうか？　悪い娘だからディアス様は妻にしてくれないのだろうか？　ここに居る間ずっとこの仕打ちに堪えなければならないのだろうか？　ミュエルの心に黒い染みが広がっていく。

――心が苦しい。こんなに苦しい事にずっと堪えなければいけないの？　そう思うと心はますます冷えた。暗く、果てしなく長い洞窟に迷い込んだ様な絶望が、心を支配する。どうすれば自分は楽になれるのだろう？

逃げたい……。ミュエルはそう思った。でも、実家に戻れば、お父様とお母様はお困りになるだろう。

ならば……楽になれる方法はひとつしかなかった。

ミュエルの心から一切の輝きが失われた。

庭から走り抜けて自室へと飛び込んだミュエルに、ディアス邸のみなが心配していた。

ケネスから、ミュエルとの会話の内容を伝え聞いたディアスも、みなと同じ様に心配し、そして心を痛めていた。

もっとミュエルとよく話して、自分にはお前を妻にする積もりは無いんだという事を、ちゃんと伝えるべきだったか……。それを言

わなかったが為に、彼女に期待を抱かせたのかも知れない。ミュエルが落ち着いたら2人でじっくり話し合おう。ディアスはそう考えていた。

だが、晩餐の時間になってもミュエルは現れない。みなはさらに心配したが、今はそっとしておいた方が良いのではないか？　そう考え、この夜の晩餐は、ミュエル抜きの寂しいものとなった。

夜も深けた頃、侍女の1人がミュエルを心配し、多少なりとも食べた方が良いのではないか？　そう考えて果物と飲み物を持って、ミュエルの部屋に向かった。

部屋の前で扉を叩こうかと考え手を振り上げたが、拳が扉に当たる寸前で思いとどまった。ミュエル様が寝ていらしたら、起こしてしまう事になるだろう。

音がならない様にゆっくりとノブを回して扉をあけ、部屋の中に入った。明かりも付いていなかったが、室内は月明かりでぼんやりとは見て取れる。

ミュエル様は寝ているのだろうか？　そう思ってベッドの上の寝具を見たが、掛け布団は乱れてはいるものの、寝ているにしては盛り上がりが少ない。

ミュエル様はどこにいらっしゃるのだろう？　この部屋の中に居るのは間違いないのだ。目を凝らして部屋中を見回すと、ベッドの横にミュエルが倒れているのを発見した。

ミュエルの様子がおかしかったという事は、彼女も知っている。もしかして、ベッドの縁で泣いて、そのまま泣き疲れて床に寝てし

まったのだろうか？　そう考え、持ってきた果物と飲み物が乗った盆を一旦床に置いて、ミュエルに近づいた。

ミュエルを起こすのには一瞬躊躇したが、さすがにこのまま床で寝ていては身体を壊してしまう。小さくミュエルの身体を揺すった。だが起きない。仕方が無くもう少し強く揺する。さっきと同じだった。

そうこうしている内に、目は暗い室内にも慣れてきた。そしてあるものを発見した。

「っひ！」

短く悲鳴をあげ、その場にへたりこんだ。侍女が発見したのは、ミュエルの左の手首から床に広がる黒い染みだった。

第１３話：寵姫（１）

サルヴァ王子は、その日厄介な問題に頭を悩ませていた。

帝国侵攻後、いち早くランリエル側におもねり独立して公国をなしたコルデーロ公爵と、いまだカルデイ帝国に組するカーサス伯爵との間で領土問題が発生したのである。

事の発端は、帝国に属するハシント侯爵が、ランリエルに対抗すべく準備を進めているのが露見した事だった。

サルヴァ王子は、帝国貴族同士を対立させるという基本方針にのっとり、ハシント侯爵の討伐をコルデーロ公爵に「依頼」したのである。公国は一応は独立した一国という立場の為、実質はともかく形の上では命令ではなく依頼するという事になるのだ。

そして公爵は依頼に基づき、一族や既知の貴族を総動員してハシント侯爵領へと雪崩れ込んだ。

この時、動員依頼に承知し軍勢を派遣した者の中には、それまで帝国側についていた貴族も多数含まれていた。帝国からランリエルに乗り換える時期を逸し、帝国の凋落ぶりを感じながらも仕方なく組していた貴族が、公爵からの出陣依頼にこれ幸いと応じたのだ。

それに対しハシント侯爵の方はと言えば、同じく一族、既知に総動員をかけたにもかかわらず、ほとんどの者達は侯爵を見捨てたのだった。ネズミは沈む船から逃げるというが、ましてや沈む船に乗り込むネズミが居るはずもないのだ。

こうして多数の貴族を擁した公爵の軍勢に、孤立無援の侯爵は一戦で討ち取られ、その領土も瞬く間に蹂躙され占領されたのである。勿論、カルデイ帝国が侯爵を支援すれば話は違ったであろうが、帝国もその様な事が出来るはずもなく、侯爵を見捨てざるを得なかったのだ。

それどころか、ランリエルからの「両国の和平の条約を破ろうとする輩を排除する事に同意して頂きたい」との要請に対し、「承知した」と返答したのである。

まさにサルヴァ王子の思惑通りに事は運んだ。

帝国にしてみればやむを得ない仕儀だった。だが、忠節を尽くしても、支援を受けられず孤立無援で滅ぼされるだけ。この現実を目の当たりにし、それでもなお、帝国に尽くそうという貴族がどれほど居るだろうか？　カルデイ帝国の解体は急激に進むはずである。

そしてハシント侯爵の甥にカーサス伯爵が居た。この伯爵は近年、侯爵から領地の贈与を受けていたのである。だが、贈与を受けるほど可愛がられたこの伯爵も、侯爵からの出兵依頼を断り、中立を守ったのだった。

そして公爵の軍勢が占領した領地の中に、なんとそのカーサス伯爵の領地が含まれていたのだ。伯爵の本領は遠く離れているが、侯爵から贈与を受けた伯爵領は、侯爵領と隣接していたのである。その為に誤認されたのだが、コルデーロ公爵は占領した伯爵領の権利を主張したのだった。

当然、カーサス伯爵は猛抗議を行なった。

「中立を守った私の領地が、どうして占領されなくてはならないのか！」

だがコルデーロ公爵は、その抗議を聞き入れ様とはしない。

「世話になった自分を見捨てる者に領地を譲ってしまったと、ハシント侯爵もあの世で悔やまれていよう。良くもぞずうずうしくも領地の権利を主張できるものよ」

公爵は伯爵を嘲笑したが、自分で侯爵の殺しておきながら、その侯爵の気持ちを代弁して見せるあたり、どちらがずうずうしいのか分からない。

だが力では伯爵を凌駕する公爵も、確かに中立を守った伯爵を打つのは憚られる。とはいえ領地を返す積もりもない。総動員した貴族達に分け与える領地は多ければ多いほど良いのだ。貴族達に分け与える領地が少なくては、公爵の面子が立たないのである。

そして勿論伯爵も領地を諦める気は無く、こうして領地問題は、サルヴァ王子の判断に任されたのだった。

王子にはこの問題を見事決裁する必要があった。気付くものはほとんど居ないが、これは歴史的に画期的な事なのだ。

なにせ「帝国内の領地問題」をランリエルの王子が裁くのである。この事は帝国の実質的な支配が、すでにランリエルに移ったという事に他ならないのだ。

そしてその裁決に、王子は頭を悩ませていたのである。決裁にしくじれば、ではやはりカルデイ帝国に決裁を任せよう。という事に

もなりかねない。

ハシント侯爵を討伐する分には、帝国からも了承を得ており問題は無い。だがその侯爵を見捨てて中立を守った伯爵については、侯爵の世話になっておきながら、という心情的な問題を排除すれば、理屈的には伯爵が正しいのである。中立を守った伯爵の領地を、公爵が占領する根拠は無いのだ。

だがコルデーロ公爵は帝国国内最大の協力者である。しかも占領した伯爵領は、今回、帝国からランリエルへと乗り換えた貴族に分け与える事になっている。むげには出来ない。

サルヴァ王子は、自分を公明正大な人間とは思っては居ない。他国を侵略し征服するという「非人道的」な事を行ないながら、聖人を気取るほど王子の面の皮は厚くはなかった。

つまり、正当性を無視してでも、コルデーロ公爵に有利な裁決を行おうと考えていた。

公爵に有利な決裁を、みなに納得させるには、伯爵の落ち度を探さなくてはならない。侯爵を見捨てたのなら、侯爵から贈与を受けた土地に権利など無い。この主張だけでも十分人々の心情には訴えられるが、もう一押ししたいところだった。

勿論、武力で伯爵から領地を取り上げるのは論外である。その様な事をすれば帝国国内の貴族達が一斉に立ち上がるだろう。彼らにも、上手く立ち回っていれば生き残る事が出来るのではないか？という希望を持たせ続けなければならない。

一番良いのは、伯爵自身から領地の権利を放棄させる事だ。

部下を派遣し、伯爵の人となりを改めて探る必要を王子は感じた。領地の為に叔父を見捨てるなど強欲なだけではないか！　ともいえるが、裏を返せば冷徹に状況判断が出来る計算高い人物とも言える。

伯爵がただの強欲か、冷徹な現実主義者か。それによって交渉の余地も出てくるだろう。

王子はその対応に、部下のサントリクィドを呼寄せた。

軍略だけに留まらず、政略、策謀にも長けた王子の腹心には、文官も多い。サントリクィドもその文官の１人だった。

サントリクィドは３０を過ぎていたが、その表情は温和で若々しく２０代後半、いや２０代半ばでも十分通じるだろう。だがその温和な表情の裏に冷徹な刃を秘めていた。

彼はよく王子の代理として数々の交渉に当たってきたが、当初は当たり障りの無い対応を続け、相手のペースで話が進んでいると思わせながら、いつの間にか自分に有利に交渉を誘導する。又は最後の最後で相手の喉下に刃を突きつける逆転をしてみせる。その様な交渉が得意技だった。

まもなく王子より僅かばかり背が低いサントリクィドがやって来ると、彼は、自身を若く見せている一因である、肩まで伸びた真っ直ぐな黒髪の頭を下げ一礼した。

「カーサス伯爵の元へと向い、その人となりを観察せよ。そして、可能であれば領地の交渉も行なえ。長期的に見れば、領地の権利を放棄した方が身の為だとな」

サントリクィドは顔を僅かに上げ、王子を見上げながら問いかけた。

「伯爵が領地の放棄について、代償を求めればいかが致しましょうか？」

「放棄する領地に見合う額の金銭を提示せよ。代替地を与えるなどと言質を与えれば、また面倒な事になりかねんからな。もし他の条件を提示してきたなら一度こちらに連絡をよこせ」

「承知いたしました」

サントリクィドは、僅かに上げていた頭を再度下げ王子に一礼をする。そして執務室を辞すると、早速カルデイ帝国内の伯爵領へと向かったのだった。

第１３話：寵姫（２）

サルヴァ王子はその夜、またもや後宮へと足を運んだ。
特に淫乱の気がない王子でも、若く鍛えられた身体は戦が無い時は力を持て余し、つい後宮へと向かう回数は増える。

王子は１人後宮の奥へと通じる廊下を進んだ。後宮の女達にも準備がある為、寵姫の部屋を訪問する前には後宮を管理する役人に命じ、訪問を伝えさせる。だが、女の部屋に行くのに案内など不要である。むしろ煩わしいだけだった。

後宮は奥へ行くほど身分が高く、寵愛の篤い女の部屋が置かれている。アリシアの部屋は一番手前にあった。

王子はお気に入りの寵姫の元へと向かう途中、アリシアの部屋の前で足を止めた。意図して止めたのではなく、つい止まってしまったのだ。

そして、ほとんど無意識に自分の右の掌を見つめた。その手にアリシアの衣服の破片は無いが、脳裏にあの時の事がまざまざと浮かんだ。自分の存在が矮小に感じられた、あの時の光景がである。

右の掌を強く握ると、舌打ちをしその場から離れた。まるで女の家庭教師から罪を隠す少年の様に、と言えば王子は屈辱を感じただろう。だが、その歩みは確かに足早というにも早すぎた。そうまるで何かから逃げるかの様に。

まもなく、セレーナという寵姫の部屋の扉をくぐった。

セレーナは後宮に入って2年になる21歳の女性だった。胸まである金髪はウェーブし緩やかに広がる。それがいっそう彼女を華やかに見せた。そして青い瞳を嬉しげに輝かせている。

「サルヴァ殿下。良くぞいらっしゃいました」

セレーナは微笑みながら王子を出迎えた。アリシアの様に寝具の縁に座ったまま出迎えるのではなく、立って出迎える彼女に、王子は満足そうに頷く。

「何か、お飲み物は如何で御座いましょう?」

葡萄酒を頼むとセレーナは一旦奥に下がった。かと思うとすぐに葡萄酒のビンとグラスが乗った盆を持って戻ってきた。王子の求めにすぐに答える為、予め何種類もの酒を奥に用意していたらしい。アリシアと違いなんと行き届いた女なのだろうか。

セレーナは王子を愛していた。望んで後宮に入った訳ではない。王子に取り入ろうとした公爵である父親に、三女だった彼女が差し出されたのだ。だが、彼女はすぐにサルヴァ王子に恋にした。

サルヴァ王子はその身分を差し引いたとしても、鍛え上げられた肉体と、帝国との戦いに終止符を打った智謀を生み出すその知性。そして、それに裏付けられた自信に満ちた立ち振る舞いは、若い娘を虜にするには十分だった。もっとも男の趣味の悪いアリシアにしてみれば、その自信に満ちた立ち振る舞いは「偉そう」でしか無かったのであるが。

王子は葡萄酒を満たした杯に一口つけて味わうと、残りを一気に干した。そしてセレーナを抱き寄せる。逞しい胸に抱かれた彼女は、

両手を王子の胸に当て、その胸の厚みに身体が火照るのを感じた。

セレーナの首筋に唇を這わせると、滑らかな感触と微かな苦味が舌に残る。だがその苦味の代わりに甘い香りが鼻腔をくすぐる。セレーナは王子を迎えるにあたり、自らの身体に香水を振り掛けていたのだ。それに比べてアリシアの肌はろくに手入れもされておらず、微かにざらつき、香水もつけない。興醒めも良いところだった。

セレーナをさらに抱き寄せると、膝の裏に右手を回して軽々と彼女を抱え上げた。彼女の体重など感じていないかの様な王子のよどみない動きに、彼女の胸はさらに高鳴った。この逞しい男に今から存分に抱かれるのだ。

王子はやや乱暴に寵姫を寝具の上に投げ出した。だが、その振る舞いすらセレーナには頼もしさを感じさせた。恥かしげに顔を背けていたセレーナが、ちらりと王子に視線をかすめさせると、王子はその一瞬を逃さず、その視線に込められた期待の色に満足した。

恥じらいながらも男を求めるセレーナの姿は、羞恥心などあるのか無いのかも分からないアリシアとは、比べ物にならないほど、情欲を誘う。

王子は乱暴にセレーナの衣服を剥ぎ取ろうとしながら、彼女の身体に手と舌を這わせる。その愛撫にセレーナは敏感に反応しながら身体をくねらせ、衣服を剥ぎ取るのを絶妙に助ける。

一糸纏わぬ姿となったセレーナに覆いかぶさった。それに応え、彼女も王子の背に手を這わせ、汗ばむ肌を撫でた。

アリシアとは違い反応の良いセレーナは、王子を精神的にも楽し

ませる。その肌もアリシアとは比べ物にならず滑らかで、その声はアリシアと比べ物にならないほど美しい。そしてアリシアとは違い……。

不意に王子の背に回されていたセレーナの手が王子の胸に移動し、その身体を強く押した。彼女に覆いかぶさっていた王子は、動きを中断され怪訝そうな表情で口を開いた。

「どうしたのだ？」

セレーナも自分の行動に驚いた様に口に手を当てた。彼女自身にとっても、ほとんど無意識の行動だったのである。

「い……いえ。何でも御座いません」

中断され少し興醒めした王子だったが、再開するとその事はすぐに忘れ、またセレーナの身体を存分に楽しんだ。

そしてセレーナの横で眠りについた。だが心地よい疲労に身を任せ、深い眠りについた王子は、その傍らで彼女が洩らす嗚咽には気付かないのだった。

翌朝、王子が部屋から立ち去ると、セレーナはすぐに侍女を呼寄せた。

「最近、確かアリシア様という方が後宮に入ったみたいね」

「はい。その様に聞いております」

セレーナは王子が自分を抱きながらも、他の女の事を考えていた事を敏感に察した。なぜ感じられたのかと言えばそれは彼女にも分からない。それは彼女の知性がもたらしたものではなく、王子を愛しているがゆえに、王子のいつもとの違いを、女の本能が敏感に感じ取ったのだ。だが、それだけに彼女は確信した。

セレーナとて、時にはサルヴァ王子が他の寵姫の元へと通うのは仕方が無いと考えていた。それでも自分の元へと来た時は自分の事だけを愛してくれている。それを感じられていたから我慢も出来ていた。それが自分を抱きながら他の女の事を考えるとは……。

今までに無かった事が起こったのなら、今まで後宮に居なかった者が原因だろう。これは彼女の知性が告げた。最近後宮に入った女性と言えばアリシアしか居ないのである。

まず初めに心を占めたのは、怒りでもなく屈辱でもない。自分以外の女を思い浮かべながら抱かれているという悲しみだった。だが、ひとしきり涙を流した後、湧き上がったのは、尊厳を傷つけられたという屈辱であり、怒りだった。

しかしセレーナはサルヴァ王子を愛していた。だから王子を憎む事は出来ない。憎むのなら、王子が自分を抱きながら思い浮かべたという女性を憎むべきだった。理不尽な様だが、セレーナの心に勤める裁判官は、彼女の精神のバランスを保つ為、そう判決を下した。

王子を愛しながら王子を憎む。それには彼女の精神が持たないと、それをしてしまっては心が壊れると、そう判断されたがゆえ、アリシアへと憎悪の矛先は向けられたのだ。

「どの様な女性なの？」

「何でも、かなり身分の低い女性と聞いております」

「かなり低いとは……その方のお父上が男爵とかなのかしら？」

男爵は爵位の中で最下位に位置する。公爵を父に持つセレーナには、低い身分と聞けば、真っ先に男爵が思い浮かぶ。

「いえ、それが……爵位すら持たぬ下級貴族の……さらに遠縁の者とか」

セレーナは不審そうに眉をひそめた。勿論彼女も爵位をもたぬ貴族の存在を知らぬ訳ではない。しかし、それでは……。

「どの様なつてで、この後宮に入る事が出来たというの？」

王子は多淫では無い。後宮に女性を入れるのも断りきれない場合に限って迎え入れているのはセレーナも分かっている。それだけに、時おり新たな寵姫が後宮に入るのは仕方が無いと、諦めもついていた。しかし、爵位を持たぬ下級貴族の願いを、どうして王子は断りきれなかったのだろう？

侍女は言い難そうにセレーナの顔色を探りながら、恐る恐る口を開く。

「それが……、サルヴァ殿下から望んで後宮に迎えられたとか……」

その言葉に、セレーナは口に手をあて目を見開いて驚きの表情を見せた。信じられなかった。王子から求められた女性が居るというの？

手が小刻みに震える。それをもたらした感情は、怒りであり、そして恐怖だった。今までサルヴァ王子に尽くして来た自分を差し置いて、つい最近現れた身分の低い娘が、王子を奪い取ろうとする怒り、そして王子を失ってしまうという恐怖。

「そのアリシアという女性の事を、よく調べてちょうだい……」

教養と節度から、「その女」と呼ぶ事はかろうじて抑制し、侍女に命じた。

ただただサルヴァ王子を愛し、王子に抱かれる事だけで幸せを感じ心を満たしていた女性が、その平穏な心の楽園から、一歩外へと足を踏み出した瞬間だった。

第１４：誓い

ミュエル・ハッシュは一命を取り留めた。

手首を切れば命を絶てる。そうとだけ思っていた少女の左手首の傷は、傷口も小さくすぐに血は凝固してその流れを止めた。貧血を起こしただけで命に別状は無かったのだ。

再度自殺しないようにと、看護婦の監視の中寝かされていたミュエルは、手首を切った四日後にディアスの訪問を受けた。

バルバール軍総司令たるディアスも、どう声をかけたものかと思いあぐねた。自殺を試みた者に

「もう良くなったようだね」「具合はどうだ？」などと声をかけるのもおかしいだろう。ディアスは

「入るよ」とだけ言うとミュエルの部屋の扉をくぐった。

そして看護婦を遠ざけて、ミュエルと2人きりになる。

ミュエルは寝具から上体を起こしながらも、シーツを強く握り俯いたままディアスの事を見ようとすらしない。

ディアスは重い雰囲気の中、口を開く決意をした。彼にとっても気が進まない事であるが、逃げる訳にも行かない。彼がすべき話なのだ。そう思い寝具の横にある椅子に座った。

「どうして自殺なんてしたんだ？」

だがやはりミュエルは口を噤み、沈黙が訪れる。

ディアスは辛抱強く声をかけ続けた。諦めて帰るという事が許される状況ではなかった。

「ケネスからも聞いたよ。ディアス家の妻として見て欲しいと」

だがディアスは３５歳であり、ミュエルは１２歳である。実際無理がある。そう思っていたが、今はそれを言う時ではない。今は彼女から話を聞く時なのだ。

「しかし、ミュエルが本当に私の妻になりたいか、私にも分からなかったんだ」

その言葉にミュエルがピクリと反応した。そして強く握っていたシーツをさらに強く握る。そして頭を振り乱し叫んだ。

「知りません……。そんな事私にだって分かりません！　でも、私はディアス様の妻になるのだと言われてこの屋敷に来たのです！　だからがんばったのに！」

１２歳でも恋を知っている少女も居る。だがミュエルは同年代の少女と比べても奥手だった。恋も知らない１２歳の少女が、人の妻になるのだと言われて３５歳の男の家に連れて来られたのだ。その戸惑い、困惑は計り知れない。

だがそれでも大好きなお父様とお母様の事を思い、その言葉に従った。しかしミュエルの心は限界にまで来ていた。いや、限界を超えた故に、自らの命を絶とうとしたのだった。

夫となる男の言う事に従い、一生懸命尽くすミュエルだった。だ

が、その男はいっこうに自分を妻として見ようとはしない。何の成果ももたらさない努力に、１２歳の少女は疲れ果てていたのだ。

「ディアス様はそんなにも私の事がお嫌いなのですか……。だったらお家に帰し……」

だがここまで言ったところで、ミュエルは大きく首を振った。

「いえ……お家に帰ればお父様とお母様が……」

ディアスの妻となる為家を出た自分が戻っては、お父様とお母様を困らせる。それは嫌だった。

ミュエルはその小さな両手で小さな顔を覆うと嗚咽を洩らした。その手の隙間から止め処なく涙が伝う。

ディアスはその姿に胸が痛んだ。この様にして泣く１２歳の少女を見た事がなかった。この年頃の少女といえば、笑うときは大きな声で笑うかクスクスと笑い。泣く時はえーんえーんと泣くものだ。そう思っていた。

だがミュエルは悲しみに言葉にならない嗚咽を洩らし、涙を流している。あの花の様に笑う素直で優しい少女がである。

バルバール軍総司令官フィン・ディアスは、自らを智謀に優れた男と自惚れていた。勿論他に類を見ないとまでは言わない。だが人より頭一つ優れていなくて、総司令官は務まらず、コスティラに大勝する事も出来ないだろう。

だが……。自分がいかに愚かであるか認めない訳には行かなかっ

た。叔父ゲイナーに対するただの嫌がらせの為だけの言葉を発端に、愚かな判断をし続け、恋も知らない１２歳の少女に死を望ませるほど、追い詰めてしまったのだ。

だが実際、今更ミュエルをハッシュ家に戻せない理由があった。ディアスの妻としてやって来たミュエルは、ディアスやミュエル本人がいかに否定しようと、すでにディアスの「お手つき」と見られるだろう。

そうなれば、たとえ今からハッシュ家に戻っても将来の結婚に障害となる。その意味もあってディアスがミュエルの事をその対象と見ていないと知るケネスに、彼女の相手が出来ないかと考えたのだ。

だが、その愚かな判断がミュエルを、１２歳の純粋な少女の心を、粉々に打ち砕いたのだ。

そして結局ディアスは、ミュエルだけではなくケネスの心すら玩んだ事になるのだ。今からしようと考えている事を実行すれば。

ディアスは椅子から立ち上がるとすぐにその場に跪いた。そして両手を床に付けて頭を下げ額をも床につける。

「すまなかった……」

顔を手で覆っていたミュエルは一瞬それを一瞥したが、すぐにまた顔を背け、手はシーツを握り締め、視線はその手元へと移った。

３５歳の一国の軍総司令が土下座し頭を下げたのである。１２歳の少女の悩みなど、いかほどの事もなく許すべきなのだ。他の者が見ればそう思っただろう。

しかし、死を望むほど傷付けられた少女が、頭を下げられた程度でそれを許すはずもなく、死を選ばせるほど追い詰めた男も、この程度でそれが許されるとは思ってはいなかった。

土下座をしたのはそうせずには居られなかったからに過ぎず、言うなればただの自己満足だった。そしてそれはディアス自身が一番分かっていた。ディアスがしなければならない事は、これからだった。

ディアスは起き上がると、ミュエルの小さな顔をその両の手で優しく包みこちらを向かせた。ミュエルも抵抗はしない。

そして顔をこちらに向かせると、その手を離した。ミュエルの行動を束縛しない。ミュエルにも最後の選択を自分の意思で選んで欲しかった。

ディアスの顔がゆっくりとミュエルの小さな顔へと近づく。拒絶するならばミュエルを拘束するものはなにもない。顔を背けるだろう。

だがミュエルは微動だにせず、12歳の少女の唇は35歳の男の唇を迎え入れたのだった。その情欲をまったく感じさせない触れるだけの、だが確かな接吻はしばらく続いた。

ディアスはミュエルから唇を離すと、美しい少女へと誓った。

「お前は私の妻だ」

結婚の準備が進められる事となった。

とはいえバルバール軍総司令官の結婚式である。招待客も多い。招待客の都合も考えればそうすぐには出来ない。遠くの者に招待状を出すだけでも数日掛かるのである。そしてそうなれば年末も近くなる。

年末年始はみなも忙しく色々と都合があろう。その時期に招待客を呼んで結婚式を挙げるのはあまりにも非常識である。その為、式は年が明けた大陸歴６２９年の２月と決まった。

ディアスには大勢の招待客を呼んでの結婚式など煩わしいだけだった。だが、バルバール軍総司令官たる者に、その様なわがままは許されない。

ミュエルの傷も癒え落ち着くと、彼女は部屋を引き払った。ディアスの部屋に移り一緒の部屋で寝起きする為だ。ディアスの妻なのだから当然の事である。

そして２人は一つの寝具で並んで寝た。夫と妻が別の寝具で寝る方が不自然と言うものだ。勿論、いくら不自然でも夜の営みはないのだが。

この様な事態になり、ディアスはケネスと改めて話した。

「お前にも色々とすまないことをした」

頭を下げる軍総司令に、今だ一兵士にすらなっていない軍人志望の少年は首を振った。

「いえ。将軍が悪いわけでは有りません。僕がミュエルに振られた。それだけです。僕がちゃんとミュエルの事を振り向かせていれればそれで良かったのに、それが出来なかったんですから」

ディアスがついケネスの顔を見直すと、ケネスは苦笑を浮かべていた。

今回の事がケネスにも一皮剥けるさせたのか、今までディアスが見損なっていたのか、ディアスにはケネスが自分の記憶にある姿より一回り大きく感じられたのである。

ディアスは、口元に微かに笑みを浮かべた。

「次の戦いには、お前も出陣するがいい」

だが、遂に初陣という言葉にケネスが喜び勇むと思っていたディアスに、ケネスは微かに不満げな視線を投げかけた。

「もしかして、今回の詫びにって言う訳ではないですよね？」

ケネスも早く初陣を飾りたいとは思ってはいたが、お詫びの印に出陣させて貰うとなると不満も残る。自分の力が認められて出陣したいものだ。

その様子に、ディアスは口元の笑みを少し強くした。

「いや、私の留守の間、私の妻に気があった男と妻を、一つ屋根の下に残すのが危険だからだ」

面食らった表情のケネスに、ディアスは大きく笑ったのだった。

第１５：伯爵領

サルヴァ王子から指令を受けてカルディ帝国に入国したサントリクィドは、早速カーサス伯爵の館へと向かった。そして訪問を告げるとすぐに屋敷の中へと通された。

現在カルディ帝国で、王子の使いと名乗る者に目通りを許さない貴族など居ないのである。

「よくおいで下さいました」

伯爵はサントリクィドへソファに座る様に促すと、自身もテーブルを挟んで対面するソファへとその身体を沈めた。

サントリクィドは勧めに従い、ソファに座りながら伯爵を観察する。

顔はサントリクィドよりも老けているが、これは彼が童顔の為である。実際は同じ年頃と言った所だろうか。だがその黒い髪は年の割りに白髪が多く、窓から漏れる日の光に照らされ時おり銀色に輝いた。

表情は引き締まり愚鈍な気配は感じられない。どうやら目先の欲だけで侯爵を見捨てた訳ではなさそうだ。そう思ったサントリクィドは気を引き締める。

サントリクィドが伯爵を観察していた様に、伯爵もサントリクィドを観察していた。だがおもむろに口を開く。

「それでサルヴァ殿下は私にどの様なご用件で御座いましょうか？　コルデーロ公爵に不当に占拠されている我が領地の権利を認めて下さる。と言うならば嬉しい限りなのですが」

「いえ。それが……」

サントリクィドはあえて言葉を濁す。交渉相手の主張を引き出す為の彼の常套手段だった。はっきりとこちらの主張は口にせず、相手の言い分のみを引き出すのである。

「出来ないと？　私は中立を守ったのですぞ？　中立の者の領地を占領するなど、無法者のする事ではないですか。それが許されるなら、帝国貴族の領地はすべて切り取り放題という訳ですかな？」

伯爵の言い分は確かに正しい。ハシント侯爵に組しなかった貴族の領地も占領して良いのなら、そういう事になる。

「決してそういう訳では……」

「ならば一国も早く公爵に、我が領地から軍勢を撤退させろと、通達して下さい。それですむ話ではないですか」

「しかし、何分公爵様はあくまで公国の公主であり、ランリエルが命令できる立場では……」

その言葉に、伯爵は皮肉な笑みを湛えた。そしてその笑みの意味はサントリクィドにもよく分かる。ハシント侯爵の討伐を公爵に命じておきながら何を言っているのか！　その笑みは雄弁にそう語っていた。

だが相手の皮肉に一々反応していては交渉などやっていられない。構えてその皮肉な笑みに気付かないふりをして再度口を開く。どうやら伯爵の主張は終ったようなので、彼はこちらのカードをちらりと見せる事にしたのだ。

「命令は出来ないまでも、公爵様には自重して頂くようにお願いはしております。ですが、それでも公爵様は軍勢を撤退させぬので御座います」

つまり、公爵が軍勢を引き上げる事は無いので領地は諦めろ。と言う事である。

「そうは言われても、簡単に領地を諦められるものではありません。ましてや正当性はこちらにあるのですから」

伯爵のもっともな言い分に、さらにカードをちらりと見せる。

「はい。伯爵の言い分はもっともです。サルヴァ殿下も伯爵が不憫であると心を痛めておいでです」

「そのお心には感謝致しますが、とはいえ公爵の軍勢を引き上げさせて頂ける訳では無いのでしょ？」

「はい。サルヴァ殿下もそればかりは難しいと……」

サントリクィドの言葉に、それではまったく意味が無いではないか。という様に、伯爵は大きくため息を付いた。

落胆した表情の伯爵に、サントリクィドは内心にんまりとし、カードをめくって見せる事にした。落胆したところに手を差し伸べて

やるのが効果的というものである。

「ですがサルヴァ殿下も何かしらのお力になりたいと、公爵が占領している伯爵の領地に対して、何らかの保障をお考えとの事でございます」

その言葉に伯爵が片眉を上げ、探る様な視線を彼に投げかけた。

「それはありがたいお話ですが、どの様な保障をお考え頂けておるのですかな？」

サルヴァ王子からは相応の金銭とは聞いているが、伯爵の要求が他に有れば報告する様にも言われている。ここは構えて伯爵の要求を聞いてみる事にした。

「伯爵こそ、どの様な保障ならばご満足頂けますでしょうか？」

この時伯爵の顔に微かに笑みが浮かんだ。その笑みはすぐに消えたが、サントリクィドは見逃さなかった。そして背筋が凍りつく。

その笑みはサントリクィドがよく知っている笑みだった。彼はその笑みを実際に見た事は無かったが、どの様な時に作られる笑みかを肌で実感していた。

カーサス伯爵からの要求を携え、サントリクィドはランリエルへと急いだ。サルヴァ王子からは伯爵が金銭以外を要求すれば連絡を寄越せと言われ、彼自身に戻って来いとまでは言われてはいなかった。だが、構えて自身でサルヴァ王子と話す必要を感じたのだった。

カーサス伯爵が浮かばせた笑み。それはサントリクィドが交渉相

手に対し「引っ掛けてやった」時に浮かべる笑みと同じものだったのである。

ランリエル王都フォルキアに戻ると、早速サルヴァ王子に面会を求め、王子もすぐに目通りを許す。

2人はサルヴァ王子の執務室で顔を合わせた。重厚な机に両肘を付き、両手を組み合わせた王子は、探る様に、というには少し鋭すぎる視線をサントリクィドに向ける。

「おまえ自身が戻ってくるとは、伯爵の要求とはそれほど意外なものだったのか？」

早速本題に入った王子に、サントリクィドは俯き加減に答えた。

「はい。正直私には思いもよらぬ要求で御座いました」

その言葉に王子は興味深げな笑みを浮かべた。自分の腹心であるサントリクィドの予想を超える要求とは、どの様なものだろうか。

「それでその要求とは？」

「カーサス伯爵は、ランリエルに亡命を希望するとの事で御座います」

「亡命だと！？」

確かに伯爵の要求は予想できないものだった。なぜなら領地が惜しくて、伯爵は公爵に抗議していたのである。亡命しては、その領

地どころか本来の自身の領地すら手放す事になるではないか。

「まさか、公爵に命を狙われると脅えて、ランリエルに逃げ込もうというのではあるまいな？　自分から公爵に敵対しておいてその様な事では、拍子抜けも良いところではないか」

だがサントリクィドは王子の問いに首を振った。

「伯爵は侯爵から譲り受けた領地はともかく、自領まで手放す気は御座いません。自領を保有したまま、ランリエルに亡命したいと申しております」

「それは随分都合の良い話だな。自分の身は安全なランリエルに置き、領地は遠隔統治すると言うのか」

あまりの都合の良い伯爵の言い分に、サルヴァ王子の顔は不快げに歪む。とはいえ心情的にはともかくその程度の要求なら飲んでやっても良いだろう。腰抜けと笑われるのはどうせ伯爵なのである。

だが王子の言葉に、サントリクィドは再度首を振ったのだった。

「いえ。伯爵は自領に留まるとの事です」

「なに？　それはどういう事だ？」

亡命とは政治的、思想的な問題で自国の外へ逃げる時に使われる言葉である。帝国内に留まるなら亡命とは言わない。

さすがにサルヴァ王子にも、伯爵の要求は理解しかねた。これでは要求と行動がちぐはぐではないか。

サントリクィドは大きく息を吐くと、次に伯爵の要求を一気に吐き出した。

「伯爵は、自分の領地をランリエル領に加えて頂きたいと申しているのです。そして、帝国からランリエルに亡命した自分はランリエル領である自領に留まるのだと」

なんだと！　と伯爵の要求に一瞬息を飲んだ王子だったが、すぐにその意図を察した。

こいつは……先手を打ってきたと言う事か。

現在、ランリエル国内では、バルバール侵攻を中止し、帝国の独立国や貴族から領地を取り上げろと言う声が大きくなっている。

帝国統治を懸念するサルヴァ王子は、その声を統治に支障がでるものとして押えようと考えているが、まだそれは実行されていない。そもそも王子とて、将来的には帝国の独立国や貴族から領地を取り上げる事を計画しているのだった。

だが伯爵は、その前にランリエル内での、自分の立場を強化する事を目論んだのである。

亡命しランリエル貴族の一員ともなれば、先祖代々のランリエル貴族とは差があるものの、帝国内の独立国の領主や、ランリエルに味方する帝国貴族、などといった中途半端な者達よりは、よほど立場は強い。

ランリエルによる帝国の統治が強まるその時、伯爵は支配者の列

に並び生き残る積もりなのだ。

帝国にも、なかなか面白い奴が居るではないか。サルヴァ王子の顔に不敵な笑みが浮かんだ。

「いいだろう。伯爵の要求を飲もう」

王子が笑みを浮かべながら命じると、サントリクィドは「かしこまりました」と一礼早速帝国に向かうべく、執務室を後にしようと背を向けた。だがその背に王子が声をかける。

「伯爵に、一度ランリエルにお招きしたいと伝えてくれ。伯爵がランリエル貴族の一員となった祝いの宴を開かせて頂きたいとな。伯爵もランリエル貴族となるならば、顔を売っておくのも悪くはあるまい」

サントリクィドは王子に向き直るとまたも「かしこまりました」と返答し、改めて背を向けた。そして今度こそ執務室を出て帝国へと向かったのだった。

第１６：武門の名流

この日ケネスは、ディアスの従者としてバルバール王都チェルタにある軍部に来ていた。そしてディアスの執務室の横にある控え室にいた。

次の戦いでケネスに初陣を命じたディアスだったが、一兵卒として出陣させる積もりはない。これは贔屓というより、現実問題として体質的に弱いケネスには一兵卒として戦う能力が無い為だった。

とはいえ、今まで何の実績も無い者を行き成り参謀の一員として迎えては、それこそ贔屓と言うものだ。ならばケネスを戦場に連れて行くには、ディアスの従者に任命するしか無いのだった。

そして従者として戦場に出るなら、今から従者として仕える方が良いだろう。と言う事になったのである。

ディアス邸を出る時、ディアスとケネスにミュエルは、にこやかに「いってらっしゃいませ」と挨拶した。

元気になったミュエルに、良かったという思いと、微かな胸の痛みを感じるケネスだった。

ミュエルの事はすっぱりと諦めたが、それはあくまで理性との折り合いの話であって、感情を説き伏せるのにはまだ時間が掛かりそうだ。

ディアスはケネスの表情からその複雑な心境を微かに感じ取った。だが、あえて何も口にはしない。この様な問題は時にその解決を任

せるべきだろう。

従者とて、いつも仕える者の傍で直立不動で立っているというものではない。そんな事をされては主人の方も気が散るというものだ。普段は執務室の隣りにある控えの間でその名の通り控えており、主人に呼ばれた時に飛んでいくのである。

そして主人に来客が来た時に取り次ぐのもその役目だった。取次ぎ用の小部屋の扉が軽く叩かれると、ケネスは飛び上がり、急いでその扉へと向かった。

扉を開けると、バルバール軍の将軍の１人であるシルヴェンが立っていた。

こげ茶の波打った毛を肩まで伸ばし、瞳は黒い。体格はディアスよりも縦と横に一回り大きかったが、その身体は逞しさよりたるんだ印象を与えた。年齢はまだ３０歳にもなっていないはずだが、蓄えられた口ひげにより、ディアスよりも老けて見えた。

ケネスはシルヴェンが嫌いだった。ディアスの悪い噂を、有る事無い事撒き散らしていると言われているからである。

ディアスはバルバール王国の武門の名流の当主であり、現総司令でもある。だが武門の名流はディアス家のみという訳ではなく、血筋だけで言えばディアス家に匹敵する。あるいは凌駕する名家も存在するのだった。

その中でディアスが現総司令なのは、実力で勝ち取ったものであるが、他の武門の名流の血筋の者の中には、それを認められない者も多数居たのである。

そしてシルヴェンはその代表格と言ってよい男だった。その血筋から武門の名流の筆頭といわれ、ディアスに嫉妬する事においても筆頭といわれる男なのである。

だが、それでもケネスの判断でディアスに取り次がない訳にも行かない。シルヴェンに

「しばらくお待ち下さい」と頭を下げディアスの元へと向かった。

「シルヴェン将軍が起こしになっております。お会いになられますか？」

ケネスは内心、断われー。断われー。と呪文の様に唱えていたが、ディアスは一瞬嫌な顔をしながらも通す様に言いつけた。ディアスにとっても会いたい相手ではないが、軍総司令として断わる明確な理由も無く、訪ねてきた将軍を追い返す事は出来ない。

ケネスに案内されて執務室に通されたシルヴェンは、執務を行なう為の重厚な机の椅子に座るディアスを見下ろした。

「私にも椅子ぐらい勧めて欲しいものですな」

血筋はともかく、軍での立場としては一将軍でしかないシルヴェンが、総司令であるディアスに尊大に要求した。

ディアスが意地悪で椅子を勧めなかったのかと言えば、もちろん意地悪で椅子を勧めなかったのである。だが、シルヴェンはそうとは思わず、たんに気の利かない奴と思っただけの様だった。

聖人君主でないディアスは、自分に対し明らかに敵意を持ってい

る人間に、親切にしてやる必要を感じなかったのだ。

だが、ここで「お前に勧める椅子など無い！」と口論するのも馬鹿馬鹿しい。ケネスに命じて椅子を持ってこさせてシルヴェンに勧めた。

シルヴェンは持ってこられた椅子に座ると
「硬い椅子ですな」とその椅子に愚痴を洩らしディアスを睨みつけた。

シルヴェンには、ディアス家如きの当主が、なぜ総司令官の重責を担っているのか！　と理解できない事だった。

だいたいディアスなど自らは戦おうともしない、小手先の小細工が得意なだけの男ではないか！　自分ならば攻撃する時は先陣を切って飛び出し敵を突き崩し、軍勢を手足の様に操り敵を分断し殲滅して見せるだろう。自信満々にそう思っていたが、残念ながら彼以外の者はそう思わず、軍部での評価は低い。

勇猛果敢に突撃すれば勝てるのであれば誰も苦労はしないし、兵学という学問も存在しない。そして現実は、軍勢を手足の様に操るなど不可能なのだ。

万の軍勢を率いて敵に向かって突撃している時に、打ち合わせに無い方向転換を右に左にと2回も行なえば、隊列は散々に崩れてしまう。そして一旦崩れた隊列はそう簡単には戻らない。

それが出来るとすれば
「俺について来い！」の命令で済む、小勢の集団ぐらいなものである。

もしシルヴェンに指揮を任せれば、バルバール軍は敵軍の前で勝手に奇妙にのた打ち回った挙句、隊列は崩壊し、敵のかっこうの餌食になるのは目に見えていた。

ディアスは、自分を睨みつけるだけで本題に入ろうとしないシルヴェンに、椅子の愚痴を言いに来たわけでもあるまいに、と思いながら口を開いた。

「それで今日はどの様な用件で来たんだ?」

シルヴェンがバルバール一の武門の名流であろうがディアスにとっては部下の1人でしかない。敬語を使う必要を感じない。

だがシルヴェンはそうは思わず、ディアス家の当主如きが、シルヴェン家の当主に無礼な。と不快げに顔を歪めた。

上官にすら敬意を表せないなど軍人以前に人間として不適合である。だが、そのシルヴェンが曲がりなりにも将軍を名乗っていられるのは、名流の血にものを言わせ山賊、野盗退治など、余程の事が無ければ負けない相手に武勲を重ねた結果だった。

コスティラ、ランリエルといった大国に挟まれたバルバールに血筋だけで出世できる余裕は無いはずだった。だが、それをやってのける辺り、シルヴェンの血筋がそれほどのものという事を表す。

だが実はその様に手配しているのはシルヴェン自身ではなく、その父だった。父は息子の能力を正確に見抜き息子が山賊、野盗程度にしか勝てないと分かっていたのだ。だがそれすらもシルヴェンには気に食わない。自分の父すら自分の能力を認めようとしないのだ。

ずっと口を開かないシルヴェンに、ディアスは一瞬このまま放置すればどうなるだろうという誘惑にかられたが、すぐに考え直した。シルヴェンに付き合って執務を滞らすのは明らかに時間の無駄である。うんざりしながらも、やむを得ず再度口を開く。

「わざわざ訪ねてきたのだ。何の用も無い訳ではないだろ？」

シルヴェンもさすがにここで口を開かねば、話が先に進まないと思ったのか口を開く。だがその口は下品な嘲笑に歪んでいた。

「なに。お祝いを述べに来たのですよ。私には理解出来ませんが、総司令殿が幼女を嫁にし閨を共にしていると聞きましてね。これでディアス家はすぐにでも跡取りが出来、万々歳でございましょう」

実際ディアスはミュエルと一緒の寝具で寝ているが、この場合の閨を共にとはそういう意味ではなく、ディアスがミュエルを性的に抱いているという意味を指す。

ミュエルを妻とする事で、彼女を抱いていると思われるのは仕方が無いと考えていた。当然と言える。だが１２歳の少女を、あえて「幼女」と言い表すその品性が気に食わない。

だがここでこの男と言い争う気は無い。言い争う価値もない男なのだ。少しでも早く視界から追い出すに限る。

「それはありがとう。では、用件がそれだけなら引き上げて貰えるかな？　仕事が溜まっているんだ」

ディアスが素っ気無く答えると、シルヴェンはディアスの反応の

悪さに不機嫌な表情になった。まったく分かりやすい男である。だがシルヴェンは席を立とうとはせず、再度口を開いた。

「いえ実はそれとは別に用件がありましてね。なにやら、次にはランリエルとの戦いがひかえているという話ではないですか。是非とも、私もその戦いに出陣させて頂こうかと思いましてね」

人の口に戸は立てられないとは言うが、シルヴェンの様な者にまで次はランリエルと戦う事になるだろうという話は伝わっていた。しかし、総司令に嫌味を言った後に、抜け抜けと要求するとは面の皮が厚いにもほどがある。しかも、出陣させて欲しいではなく出陣させて「頂こう」なのである。

ディアスの背後に控え、その会話を聞いていたケネスが、彼のその厚い皮を剥げば、実は痩せているのではないか、と考えたほどだった。

まったくバルバール一の名流の血筋がどれほどのものなのかとディアスは思う。だいたい現在の一般的な評価は、ミュエルのお父様がディアスをバルバール一の婿と評した様に、バルバールの軍事の名門と言えばディアス家なのだ。

そもそも武門の名流という評価は実績の積み重ねである。そしてシルヴェンがいうシルヴェン家こそがバルバール一の名門というのは過去の実績でしかない。それに対しディアスは現在実績を積み続け、しかもつい最近コスティラに対し、かつて無い大勝利をもたらした。

名実共にディアス家がバルバール一の名門となる日も近いのである。ディアス自身は名門の血筋を鼻にかけ偉そうにする気は無いが、

シルヴェンの様な輩に会うとつい対抗してしまう。その点ディアスも、子供っぽいところがあった。

ディアスはもうシルヴェンの相手はもううんざりだと、

「検討させて貰おう」

と言質を与えずに追い返した。

「まったく嫌な奴ですね！」

シルヴェンが去った後、ケネスは不機嫌に声を荒げ、それに対してディアスは肩をすくめて答える。

「だが、ああいう奴も軍隊には大勢いる。時にはああいう奴が自分の上官になる事も有り得るんだ。軍人になるならその覚悟も必要だぞ」

ケネスはシルヴェンが自分の上官になった光景を思い浮かべて、心底嫌な表情をした。それを見てディアスが笑いかけた。

「どうした？　軍隊が嫌になったか？」

「いいえ！　そんな事ありません！」

慌てて首を振りながら答える少年に、ディアスはさらに大きく笑った。

だが数日後、ディアスの元へ、シルヴェンを幕僚の1人に加える様にと軍務大臣のエドヴァルドから通達があった。幕僚の任命権は

総司令にあるが、軍務大臣からの要請であればむげにも出来ない。

私が幕僚に加える積もりが無いのを察して、父親にでも泣きついて大臣に手を回したか……。シルヴェンは普段自分の力を認めない、自身も好きではない父にやむを得ず泣きついたのだ。それだけにシルヴェンも今回の出陣には意気込んでいるのだと、ディアスに察せさせた。

シルヴェンの父は現軍務大臣の昔の上官だったのである。シルヴェンの父はすでに引退しているが軍隊という上下関係の厳しい世界では、引退した後もその精神的上下関係の束縛からは容易に抜け出せないのだった。

しかし、この知恵を軍事に回せていれば、多少なりともまともな武将になれるものを……。幕僚達を招集する定期的な軍議で毎回シルヴェンと顔を合わせねばならないのかと、さすがのディアスも大きくため息をついた。

第１７：深奥の宴（１）

「今宵お招きしたカーサス伯爵を、ランリエル貴族として迎える事が出来、まことに喜ばしい限りである。伯爵はランリエルと帝国との新しい関係の礎となろう」

サルヴァ王子は宣言し、杯を掲げた。他の者達もそれに倣う。みなの視線を受けた伯爵は礼儀正しく一礼した。

カーサス伯爵を帝国から招いたサルヴァ王子が、歓迎の宴を催したのである。

国王を除けば、現在王子はランリエルで最大の権力者であり、将来的には除く者の居ない最大の権力者となる。その招きを断る貴族は皆無であった。それどころか招かれる事が名誉と考え、宴には多くのランリエル貴族が出席した。

だが、その招きに応じながらも王子に反感を持つ者も居る。帝国支配の方針について、王子と意見が対立している者達である。

彼らにしてみれば帝国の領地などすべて取り上げて、ランリエル貴族に分配すべきなのだ。それでなくては何の為に数百年も帝国と戦ってきたというのだ！

だがサルヴァ王子にとってはあまりにも馬鹿馬鹿しい言い分だった。

貴様達が数百年の寿命を持ちその数百年を戦ってきた訳では無かろう。そして占領したならば全土を取り上げる、などという考えだ

からこそ、数百年もの間勝負が付かなかったのだ。欲をかけば全土どころか、寸土も手に入らなくなるという事が、どうして分からないのか！

だが、この様に声高に不満を叫ぶ貴族達について、ある意味潔いと関心もしていた。現在ランリエルで一番敵に回してはいけない王子に対し、真っ向から反対しているのはある意味いい度胸である。勿論あくまである意味、であって、所詮度胸の使いどころを間違っているとしか言い様がない。

始末が置けないのは、表面的には王子に従っているふりをしながら、内心不満を募らせている者達である。

不満を募らせるだけなら良いが、その様な者達の常として、中には策謀によって王子の失脚を謀る者達も現れよう。その者達を炙り出す必要があった。

その為、今回の宴に先立ちサルヴァ王子はカーサス伯爵と面会していた。

王子の執務室で顔を合わせたカーサス伯爵は、丁寧に挨拶をし頭を下げた。

「私の要求を認めて下さり。ありがとう御座いました。また今宵は私の為に宴まで開いて頂けるとは、感謝のしようも御座いません」

カーサス伯爵の型通りの挨拶に、サルヴァ王子も

「私もカーサス伯爵をお招き出来嬉しく思う」

と無難に応じ、早速本題に入る。

「カーサス伯爵には、是非ともやって頂きたい事がある」

前置きの無い正面からの言葉に、伯爵は気を引き締め襟を正す。

「私にやって欲しい事で御座いますか？」

「ああ、ランリエルにも私の敵は居る。貴公にはその者達を炙り出して欲しい」

その言葉に、伯爵は少し俯き考える様なしぐさの後口を開く。

「炙り出す……と仰るからには、サルヴァ殿下への不満を声高に叫んでいる方々とは別の者……という事ですかな？」

サルヴァ王子の顔に笑みが浮かんだ。察しの良い男は嫌いではない。しかし炙り出すの一言でここまで洞察するとは、ランリエルの内情について、伯爵は以前より情報を収集していたと言う事だろう。抜け目の無い男である。

「その通りだ。その手の者達にはすでに監視の者を付けている。もっともその様な者達がこそこそと裏で何かしているとも思えんがな」

「なるほど。すると私は誘蛾灯（ゆうがとう）と言った所でしょうか？」

王子の顔にまた笑みが浮かぶ。

「ああ。伯爵には、真に帝国との友好を考えて近づく者も多いだろうが、その中に、伯爵の落ち度を探そうとする輩も多数潜んでいるだろう。貴公を失脚させれば、築きかけたランリエルと帝国との関係も元の木阿弥だからな」

伯爵は軽く一礼した。
「かしこまりました。私に群がる者達の中から毒蛾を見つけ出し、殿下に御報告させて頂きましょう」
「ああ。よろしく頼む」
察しよく話の早い伯爵に、王子は満足げに頷く。だが、話はここで終らず伯爵は再度口を開いた。
「しかし、私を失脚させ様とする者達をあぶり出し、逆にその者達を失脚させるとしてどの様な容疑でそれを行なう御積もりでしょうか？」
今まで神妙な顔で対応していた伯爵の表情が、探る様なものに変わる。まさか、私と相打ちさせる気ではないでしょうな？　と言ったところだろう。伯爵にしてみれば、その者達に自分を害させ殺害容疑で捕らえよう、などというならば堪ったものではない。
王子はまた笑みを浮かべる。用心深い男を相手するにはこちらにも相応に緊張感を持って対処しなくてはならない。そしてこの様な緊張感は王子にとって心地良いものだった。
「私は、手を尽くしてくれた者を遇する事を知っている男だぞ？人材を使い棄てるなど、長期的に見れば自分の手足を切り捨てる様なものなのだからな」
「つまり、私を長期にわたりこき使うお積もりと？」
王子は苦笑した。

「はっきりという奴だ。だが、確かにその通りだな」

王子は伯爵にはっきりという奴、と言うが、王子の返答も随分はっきりとしたものである。つい伯爵の顔にも苦笑が浮かんだ。

「かしこまりました。では、長いお付き合いが出来る様、働かせて頂きましょう」

「うむ。それにこれは貴公にとっても悪い話ではなかろう。貴公を失脚させ様と企む者に対抗する名分を、貴公は得る事になるのだからな」

「確かに」

カーサス伯爵は、笑みを浮かべて頷いた。

形は臣従であるが実態は利害の一致した者同士の契約である。カーサス伯爵は深々と頭を下げ、こうして王子の敵を炙り出すべく暗躍する事となったのだった。

王子が催す宴には、後宮の寵姫達も顔を出す。

寵姫達は色とりどりの衣装を纏い、髪を美しく結い上げ宝石で身を固め、珍しい鳥の羽で作られた少し大きめの扇を手に優雅に微笑している。

華やかに着飾った２３の蝶に男達はため息を洩らし、王子に羨望の眼差しを向ける。

自分の娘を差し出す貴族達も、王子の心を捕らえられなくては意味が無い。我が娘ならば！　と王子に差し出される者達は、いずれも容姿自慢の美女ばかり。

その選りすぐりの美女達を、王子は独り占めしているのである。男達が羨ましがるのも無理は無い。

そして、本来２４番目の蝶となるはずのアリシアは、１人その群れから離れて壁際に佇んでいた。

他の寵姫達はこの日の為、数日前から肌の手入れに励み、衣装を用意し、装飾品を購入して万全の体制で臨んでいる。だが彼女は、いつもの衣装に毛が生えた程度の赤いドレスに、申し訳程度に首を飾るネックレスのみだった。

それとて、後宮を管轄する役人から、アリシアの装いがあまりにも地味という事で支給された物なのだ。

アリシアは小さくため息を付いた。このつまらない宴はいつまで続くのだろう。

宴に参加する貴族達は、時おりアリシアに奇異な目線を投げかける。みな華やかに着飾り、にこやかに過ごしている中で、地味な服装の女が１人不機嫌そうに佇んでいるのである。華やかさとは別の意味で目立っていたのだ。

そして、地味な女であるからこそ落しやすいだろう。適当に遊ぶには持って来いだ。そう考えたらしい冴えない貴族が声をかけてきた。

「この様なところで佇んでおらず、私の相手をして頂けると嬉しいのですがな」

普段ならば、その様な男など無視するのだが、一応は後宮の寵姫という事になっている。それなりの対応をする様に言いつけられていた。馬鹿馬鹿しい話だが後宮に入る事で年金を貰っている身では、最低限いう事は聞かざるを得ない。

聞かずに済むならば、そもそもサルヴァ王子に抱かれてなどいないのである。もっとも王子にいわせれば、それなら、私への口の聞き方にも気をつけろ、と言う所だろうが。

アリシアが、一応相手をしてくれている事にその貴族はいい気になり、ダンスに誘った。

さすがにそれは溜まったものではない。しかしこの貴族はしつこそうだ。アリシアはやむを得ず、断りきれなかったときに言えと、役人から言われていた台詞を繰り出した。

「わたくしは、サルヴァ殿下の寵姫で御座います。お相手するならば、殿下のお許しを頂かなくてはなりません」

言葉の上だけとは言えサルヴァ王子様に助けを求める様で気に食わないが、この場合は仕方がない。そう考えたが、残念ながらこの台詞は思った様には効果を発揮しなかった。

「貴女がサルヴァ殿下の寵姫ですって？」

貴族はそう言うと視線を移動させ２３人の着飾った蝶達を一瞥し、

またアリシアに視線を戻した。その目には疑わしげな色と、僅かに嘲笑の色を湛えていた。

あの美しく着飾った貴婦人達と、地味な貴女の何処が仲間だと言うのだ。とその目が語っている。

アリシアには予想外の屈辱だった。屈辱を感じながら発した言葉だったにもかかわらず、その言葉すら信用されなかったのだ。屈辱の上塗りである。

この屈辱を晴らす方法は簡単だ。にこやかに微笑み、

「それでは、サルヴァ殿下にお伺いしてまいりますね」

そう言ってサルヴァ王子様に近寄って行けば、この者は慌てふためくだろう。アリシアにはそれが分かっていたが、これはまさに王子様に助けを求める様で実行する気ならない。

だが意外なところから助け舟がやって来た。もっともこの船は表面的には味方の軍旗をはためかせてはいたが、船内には敵兵を充満させていた。

冴えない貴族からの視線を感じたセレーナが、その方向に顔を向けアリシアの存在に気付いたのである。

第17：深奥の宴（2）

白いドレスに身を包み、美しく髪を結ったセレーナは、アリシアに近づくと悠然と微笑み美しい唇から鈴の鳴る様な音色を発した。装飾品もアリシアとは比べ物にならず胸元のネックレスは大きなルビーが赤く輝き、その白い肌をいっそう際立たせた。

「これはサルヴァ殿下の御寵愛あついアリシア様。この様な部屋の隅で如何なさったのです？　アリシア様がこの様なところに居ては、殿下が寂しがっておいででしょう」

サルヴァ王子が、もっとも足繁くその元へと通っていると噂されるセレーナの言葉に、冴えない貴族は呆然と口を開け、そして次にアリシアを見つめた。

この地味な女は、本当にサルヴァ王子の寵姫の1人だというのか？

しかもセレーナの、王子から寵愛あつい、という言葉も本当だとすれば、この女から王子への
「宴でとても無礼な男が居たのですよ。懲らしめてやって下さいまし」という一言で、自分など瞬く間に貴族社会の日陰者に成り果てる。

サルヴァ王子がこの貴族の心を読めば
「俺が、女の言葉に篭絡され他を罰する様な男と思うてか！」と激怒しただろうが、所詮人は自分の品性にそった考えしか出来ない。貴族は自分の品性に相応しい、無用の恐怖に脅えたのだった。

貴族はセレーナとアリシアとに、あたふたと交互に顔を向けて傍

目にも滑稽に動揺していた。だが、セレーナは初めからアリシア以外眼中になく、アリシアの意識もすでにセレーナへと向いていた。貴族にしてみれば不幸中の幸いだった。

貴族は2人が自分に関心がないのを見て取ると、こそこそと逃げる様に立ち去った。

だがアリシアとセレーナは、もはや貴族の事などお構いなしに対決を続けている。

セレーナとて、態度に表しているほど内面は穏やかでは無い。本来セレーナは心優しい女性であり、他の女性に嫌味をいう様な事はないのだが、サルヴァ王子をアリシアに取られはしまいかと、焦燥にかられているのだった。

だがセレーナは、貴族社会の、それも男を取り合っての女同士の戦いの、あえて余裕を持った態度をとってみせる。という駆け引きを、淑女の「たしなみ」として身に付けていた。

だが、その様な宮廷女性の駆け引きなど、アリシアにはその存在すら知らない事である。

寵姫の間にも格差がある。

それはサルヴァ王子からの寵愛の度合い、家柄などで決まるが、セレーナは現在そのもっとも上位に立つ女性である。そしてアリシアは、役人から自分より上位の寵姫を立てる様にと言いつけられていた。

だが、彼女にしてみればその様な順位付けなど、あきれ返るばかりだった。

かかわらなければ立てる必要もないだろう。と他の寵姫と会わない様にしていたのだが、遂に顔を合わせてしまった。しかも一番の上位者とである。

しかも、そのサルヴァ王子様の御寵愛一等賞の寵姫は、最下位の自分に「御寵愛あつい」などと「嫌味」を言っているのである。セレーナに好意の持ちようがなかった。嫌味の一つも言い返したくなったが、なかなかよい言葉が思い浮かばない。

彼女から見ても、セレーナは女性として完璧だった。

その髪は黄金に輝き白い肌に映え、鼻筋から唇にかけての形も良い。青い瞳も美しかった。自分とセレーナと比べれば男ならば誰もがセレーナを選ぶだろう。そうサルヴァ王子様も。

不意にアリシアの顔に苦笑が浮かんだ。よくよく考えれば、サルヴァ王子様との事で嫌味を言われて、どうして自分が腹を立てねばならないのか。

アリシアは、セレーナの「御寵愛あつい」という嫌味に対して、心のそこからの本心を笑顔で吐露した。

「私などよりも、セレーナ様こそがサルヴァ殿下に相応しいのですから、その様な事を仰るものではありませんわ」

アリシアにしてみれば、セレーナに対抗する意思などまったくなく、自分に嫌味など言わずどうぞ王子様とお幸せに。という積もりの言葉だった。

だがセレーナの、というよりアリシアを除いた寵姫達全員の、サルヴァ王子からの寵愛を独占したく無いわけが無いという価値観か

らしてみれば、アリシアの言葉は宣戦布告でしかなかった。

「貴女にこそ王子に相応しい」とは、何という痛烈な言葉だろう。この言葉に比べればセレーナの「御寵愛あつい」「殿下が寂しがる」という攻撃は、春のそよ風の様なものだった。

このアリシアという女性にとって、寵姫達みなが身を焼くほど焦がれるサルヴァ王子の寵愛はそれほど軽いものだというの？　それとも簡単に取り返せると考えているの？

それとも……サルヴァ王子を「貸してくれる」と言っているの？

セレーナの脳裏に、王子にアリシアの事を思い浮かべられながら抱かれた屈辱が甦った。自分はアリシアの代わりとして王子に抱かれたのだろうか？

宮廷女性の駆け引きを、たしなみとして身に着けてはいるが、実際セレーナがサルヴァ王子の寵愛を受けているのは、その駆け引きの手腕によってではなく、あくまで王子に対する献身的な奉仕の賜物だった。セレーナは生来の心根により王子の寵愛を受けているのである。

だが、戦いの火蓋は切って落されたのだ。セレーナはサルヴァ王子を愛していた。心優しい敗者となり王子を失うなど論外である。セレーナは、アリシアの痛烈な攻撃に対し、反撃を試みた。

「ですが、たまにはサルヴァ殿下とて、気晴らしをしたい事も御座いましょうし、私もそれには賛成ですわ」

貴女など王子にとっては気晴らしに過ぎない。そして自分の方こそが、サルヴァ王子を貴女に貸してあげているのだ。

扇で口元を隠し、クスクスと笑いながら発したセレーナの言葉は、その余裕あるしぐさに比べ内容は直線的だった。セレーナにも見かけほどの精神的余裕は無いのである。

そして言われたアリシアも、さすがにこの言葉には気分を害す。自分がこの美しい女性の足元にも及ばないのは認めるが、それでも「気晴らし」とは言い過ぎだ。

だがやはりよい言葉が思い浮かばない。サルヴァ王子相手ならばいくらでも言葉が出るのが、宮廷女性との戦いは勝手が違う。やむなく目を細めてセレーナを睨んだ。

これはセレーナにも予想外の反応だった。

心の内を表情に出さず、余裕を持って笑顔で嫌味を応酬するのが宮廷女性の「ルール」である。そして、余裕を失って笑顔を崩した方が負けなのだ。

笑顔を崩してしまった女性は、踵を返しその場から退場し、残った女達はその姿を上品にあざけ笑う。それが宮廷というものなのである。

それなのにアリシアは、笑顔を崩したにもかかわらず立ち去る事もなくセレーナを睨み続ける。だが、セレーナも負けるわけにも行かない。ここで睨み返せば自分こそが敗者である。セレーナはさらに悠然と微笑み返す。

宴の会場の一角に異様な雰囲気が生まれ、睨む女性と微笑む女性の対決を、周囲の者達は遠巻きにした。

同じ会場に居る、サルヴァ王子もその異変に気付いた。人だかりの中心に顔を向けると、2人の寵姫の対決の場面が目に入った。

前回アリシアと衝突した一件以来、サルヴァ王子はアリシアと顔を合わせない様にしていた。だが、さすがに棄てては置けない。何をやっているのかと小さくため息を付くと、王子は2人に近寄った。

「お前達どうしたと言うのだ?」

2人の中間地点に歩み寄り、声をかけた王子に、セレーナが驚いた顔を向け、そして次の瞬間自然と王子に微笑んだ。

その驚きによって一瞬、作られた表情を脱ぎ捨てたセレーナの素顔に、アリシアは目を見張った。アリシアには今までの作った笑顔のセレーナよりも、自然と微笑む彼女の方がよほど美しく感じられたのだ。

だが、サルヴァ王子に

「何でもありませんわ」と答えたセレーナは、また仮面を被ったかの様に悠然と微笑んでいた。

セレーナのあまりの変わりぶりに呆気に取られたアリシアは、キョトンとした表情でサルヴァ王子とセレーナを見つめていた。そこに王子の視線がこちらに向いた。

「お前は?」

不意を突かれた彼女は、ついいつも通りに口を開く。

「何でもありませんわ。王子様」

だが、この様な席でサルヴァ王子を殿下と呼ばず「王子様」呼ばわりはさすがに不味い。王子はつかつかとアリシアに近寄ると耳打ちした。

「馬鹿か。　殿下と呼べ。他の者も居るのだぞ」

馬鹿呼ばわりされ、むっとしかけたアリシアだが、確かに今回は自分に非がある。

「失礼致しました。サルヴァ殿下」

と、王子にそう言って丁寧に頭を下げた。

リヴァルの事もあり、サルヴァ王子には条件反射的に突っかかる傾向があるアリシアだが、決して非常識と言うわけではなく、場はわきまえている。

そして王子もこのアリシアの態度には案著した。ここで食って掛かられては面倒と言う事もあるが、前回のアリシアとの衝突について、王子は内心引け目を感じていたのだ。

とはいえ王子には、高い身分として生まれ、かしずかれて育てられた者の常として素直に謝れぬ癖がある。

次にアリシアと顔を合わせた時、どういう態度をするべきかと気まずく思っていたのだ。だがそれは、どうやらどさくさにまぎれて、うやむやになりそうだ。と安心したのだ。

その為

「まあ、良い」と言った王子の顔にも、微かに笑みが浮かんでいた。

アリシアは、王子様が自分に笑顔を見せるなど珍しいものだと、その顔を覗き込んだが、王子はついと顔を背けた。そして次には不機嫌そうな表情を彼女に向ける。

人の顔を覗きこむな。と言ったところだろう。

そしてアリシアはアリシアで、さっきまで笑顔を向けていた相手から、次の瞬間には不機嫌そうに睨まれ、憮然とした表情を返す。

だがそれも一瞬の事で直ぐに笑顔を返した。こんな場所で王子様と睨みあってもしょうがない。

この光景にセレーナは孤独を感じた。サルヴァ王子とアリシアとの関係は、自分と王子との関係とはあまりにも違いすぎた。彼女は、この場に取り残された様な感覚を覚えたのだ。

セレーナは献身的にサルヴァ王子に使え、そしてお褒めの言葉を頂き、可愛がってもらう事に喜びを感じていた。それが自分の幸せなのだと彼女は考えていた。いや、彼女だけでは無く、後宮の寵姫達すべての考えと言っていい。

だがそれは、あくまでも主人とそれに仕える者の関係だった。主人が仕える者から顔を背けたり、仕える者が主人に憮然とした表情を見せるなど、どういう事なのだろう。

いや、セレーナは気付いた。そもそも主人と仕える者ではないのだ。有り得ない事にこの2人は「対等」なのだった。

サルヴァ王子はアリシアの事を自分と対等とは考えていない。アリシアも自分が一国の王子と対等など夢にも思わない。にも拘らず、セレーナの気付きは当たっていた。

他の者がサルヴァ王子と対峙した時に持つ、権力者に対する恐れや取入ろうとする下心。そしてその才能についての称賛も、死んでも構わないと考えるアリシアにとっては、意味のないものだった。アリシアには一国の王子もただの人でしか無かったのである。

王子に対して一応の礼儀を守ろうと言うのは、それが無意識下での常識であるからに過ぎない。

そして王子にしても、自分の地位や才能に怯まず向かってくるアリシアには、それらを除いた素の自分で対応せざるを得なかった。

他の者がどう思おうと、多少無礼な振る舞いをされたからと言って処罰しようというほど、王子の心は狭くないのだ。

その為2人は、意識せずに自然と対等の関係を築いていたのだった。

そう言う意味では、セレーナとて一歩踏み出し王子との壁を突き破って見せれば、王子と対等に近い関係になれるかも知れなかった。

だが、宮廷のしきたりが血となり流れる由緒ある貴族のセレーナには、それはなしえない事だったのだ。

その主人は、仕える者の中で、一番のお気に入りの寵姫に右手を差し出した。

「セレーナ。私と踊ってくれ」

宴の雰囲気を仕切り直す為、一区切り付けようというのだ。王子

から差し出された手に、セレーナは笑顔で手を添えて応じる。

自分の考え過ぎなのだろうか。やはり王子はアリシアより、自分の方をこそ気に入っているのだ。そうでなければ彼女をを差し置いて、自分をダンスに誘ったりはしまい。

王子にエスコートされ、にこやかに進むセレーナは、後ろを振り返った。その場に残されたアリシアがどの様な表情をしているか確かめたくなったのである。

自分ではなくセレーナが誘われた事に彼女が悔しがっていれば、セレーナの溜飲は大いに下がっただろう。だが当のアリシアは、興味なさげにその場から立ち去るところだった。

第１８：総司令の日常（１）

バルバール王国軍部で定期的に行われる軍議の席にて、自身の提案へのディアスの返答に、シルヴェンが噛み付いた。

「検討させて貰おう」

「いつもそればかりではないですか！」

もっともシルヴェンが激するのも当然と言えた。彼からの提案に対しディアスは尽く

「検討させて貰おう」と言うばかりでその実まったく無視しているのだ。

では非はディアスに有るのかと言えば、やはり非はシルヴェンにあった。その提案がすべて愚にもつかないものばかりだからである。

シルヴェンは、時には自分を副司令官に任じ、ディアスの代わりに全軍を指揮させろと要求し、ある時は予算を無視して軍を増強させるべきと提案した。

そして現在、どうせランリエルが攻め寄せて来る事が分かっているならば、敵の準備が整わぬうちに、こちらから攻めるべき。と主張しているのだ。

シルヴェンの意見も一理ある。

ランリエルとの戦いは海戦での勝敗が大きな鍵となると予想される。そしてランリエル海軍は日々増強されている。

その意味ではランリエルとの開戦は、早ければ早いほど良い。とも考えられる。

しかしディアスには、それが出来ない理由は十理ほどあった。

まずランリエルを攻めるにあたって、コスティラに行なった様な奇襲は利かない事があげられる。

もしコスティラと戦うかの様に見せかけておいて、その実ランリエルを攻める。などという事をしたところで、成功する訳は無い。バルバールは一度その手でコスティラを攻めているのだ。あのサルヴァ王子ならば間違いなく見破るだろう。

これはなにもランリエルに限った事ではなく、コスティラにも同じ事だった。今後はコスティラも引っかかりはしないはずだ。あれはあくまで一度きりの策である。

そしてバルバール艦隊は敵国内での夜間航行も出来ない。あれは海岸線を誘導する陸戦部隊が居てこそ可能なのだ。陸戦部隊が奇襲で国境を突破できないのであれば不可能だ。

当然、敵軍港への陸戦戦力での攻撃も出来ない。

そうなるとバルバール艦隊は、白昼堂々ランリエル王国沖に進出する事になるが、ランリエル艦隊はバルバール艦隊を迎撃してくるだろうか？

してくればしめたものだが、敵も現時点では勝てぬと分かっているから攻めて来ないのだ。艦隊は軍港奥深く潜むだろう。

出撃してこなければ、バルバール艦隊は手も足も出ない。

コスティラの軍港を攻める時、火の点いた艦を港内に突入させたが、ランリエルはその事についても対策を立てており、主だった軍

港の入口にはすべて水門を建築したという。これでは艦を突入させる事も出来ない。

では、ランリエル艦隊が出てこないを幸いに、海兵をランリエル領内に上陸させてはどうだろうか？

僅かばかりの海兵を上陸させたところで戦いの決定打にはならず、それどころか海兵を上陸させた後にランリエル艦隊が出撃してきて、万一海戦に負ければ、海兵は敵国内に取り残される。その様な危険はおかせない。

いや、それどころかバルバール艦隊を指揮するライティラ提督からは、

「ランリエル艦隊が出撃して来るならば手の打ち様もありますが、軍港内に潜まれては手も足も出ません。開戦の時期は敵が攻めてるに任せて欲しい」とも要請されているのだ。

バルバール軍総司令官のディアスも、海戦に置いてはライティラに任せるしかない。

バルバール海軍とランリエル海軍との質を鑑みライティラと検討した結果、互角に戦える戦力比はバルバール艦艇1に対し、ランリエル艦艇1．5という結論になった。

それほど、バルバール海軍の艦艇の船足と旋回能力は卓越していた。

陸戦に置いて兵士の質だけで1．5倍もの数を補うなど至難の技なのだが、その陸戦にしても兵士の動きが敵よりも、1割ほど早いと仮定すればそれも可能だろう。

戦いに置いて動きが早いと言う事は、それだけ決定的な差を生み出す。

つまりランリエルにはバルバールからは攻め寄せず、ランリエルが攻め寄せて来るのを待つ。これがディアスの基本方針である。

だがシルヴェンの様な男は、自分の案に一理でもあると他の事に耳を貸さず自案に固執する。

それゆえディアスはシルヴェンとまともに議論する気にもなれず、シルヴェンの提案を、検討するとだけ言って聞き流していたのだ。だがそれに対して遂にシルヴェンが噛み付いたのだった。

ディアスは、やれやれと内心ため息を付き、うんざりしながらもシルヴェンへの説得を開始した。

「シルヴェン将軍の提案にも一理あるが、ランリエルに対し効果的な攻撃が出来る公算は低い。それよりも迎え撃つ方が手も打ちやすいと、海軍提督のライティラからの進言もあるんだ」

だがシルヴェンはディアスの発言を鼻で笑い、言葉の端々に嘲笑の音を潜ませ、さらに自案を重ねた。

「戦う前からその様な弱気で、どうすると言うのです？　戦ってみなくては敵の本当の力量など分かり様もありますまい。総司令が懸念されるほど、敵の力量が高くないかも知れないではないか」

シルヴェンの発言に、ディアスは目眩がしそうになった。我が耳を疑うとはまさにこの事だろう。

兵法にも「兵は国の大事にして、死生の地、存亡の道なり」という言葉がある。

攻められた時はともかく、古来戦いとは、やむを得ない時に万全の準備を整え必勝の態勢を持って開戦するものである。戦ってみないと分からないから戦う。とは常軌を逸している。

前回コスティラに攻め込んだのも、そうしなければランリエルと戦う時に東西から攻められる可能性があり、やむを得ず行ったのだ。さらに長年の戦いからコスティラ軍の能力をかなり正確に掴んでいた事もある。

この男は、戦ってみた挙句、その戦いに負ければ国が滅ぶ。と言う事すら分かっていないらしい。

この程度の事が分からぬ相手を説得させるのは、逆に難しい。だが説得しない訳にも行かず、ディアスは辟易しながらも口を開いた。

「敵の力量。特にランリエル海軍については、部下を派遣し調査させている。急速に増強しているランリエル海軍は海軍兵も新兵だ。その質が高くない事は分かっている」

戦わずして相手の力量を含めた情報を得る為に、古来名将と呼ばれる者達は情報の収集に苦心している。そしてディアスもその点抜かりはない。

武門の名流の嫡子だけあって知識はあるが、それを活用する知性が足りないシルヴェンは、得意げにその知識を披露した。

「何を言っているのです、それは推測に過ぎないではないですか。百聞は一見にしかず、百見は一考にしかず、百考は一行にしかず。のことわざ通り、敵の力量を知るには実際に戦ってみるのが一番です」

ディアスはシルヴェンに対し、よくそんなことわざを知っていたな。と言う事だけに関心した。だがそのことわざから導き出した答えは見当違いも甚だしい。

「確かに敵の力量は、一度戦ってみれば良くわかるだろう。だが戦いとはやり直せるものではない。その一度の戦いで敵の力量が分かっても、負けてしまっては意味が無いだろう」

「ですが、負けるとは限らないでしょう」

シルヴェンはなおそう言って食い下がった。その顔色は赤く染まり、もはや意地になっている。という事は、傍から見ても分かるほどだった。

こいつは自分の言った言葉すらもう忘れたのか？　とディアスは呆れ返った。負けるとは限らないから戦う。と言うなら、シルヴェン自身の、敵の力量を見るために戦ってみる。と言う提案の意味すら無くなる。

「それでは結局、勝つか負けるかを運に任せて戦う事でしか無いだろ」

ディアスの冷たい視線がシルヴェンを射抜き、さすがにシルヴェンもたじろいた。

だがシルヴェンは引き下がらない。

「勝敗は兵家の常と言うではないですか。武人が敗北を恐れてどうするというのです！」

遂に精神論で来たか！

ディアスは、むしろ笑い出してしまいそうになるのを堪えるのに必死となった。

そしてこの海面に種を蒔く様な、何の実りももたらさない事は分かりきっている不毛な議論は、なおも続いたのだった。

第１８：総司令の日常（２）

軍議の後、ディアスは軍務大臣のエドヴァルドに対し上申書を書き上げた。
内容はシルヴェンの無能を訴えた解任要求である。だが、ディアス自身効果を期待している訳ではなかった。

そもそもシルヴェンの無能さは軍部で有名なのだ。
軍務大臣も、それを分かった上でシルヴェンを幕僚に加えるように言って来た。そうである以上、いくら無能を訴えたところで意味は無い。

それでも上申書を書くのは、半分は腹立ちを紛らわす為と、残り半分は万一の場合の保険だった。
「だからシルヴェンを解任する様、上申書を提出していたではないですか！」
もしシルヴェンの無能が原因で問題が発生した場合、そう主張する為である。

ディアスも、我ながら狡い手とは思う。だが、それ以上に、シルヴェンに引きずられて被害を受けるのはごめん被る。という気持ちの方が強かったのだ。

「ではケネス。これを軍務大臣に届けて来てくれ」
そう言って、上申書を従者であるケネスに託し、軍務大臣へと提出した。その後、揃って邸宅へと向う。

「今日も大変でしたね……」
邸宅へと帰る道すがら、ディアスの乗馬の轡を引きながらケネス

が口を開いた。勿論今日の軍議でのシルヴェンに付いてである。

「ああ。まったくだよ……」

と応じるディアスの声も力ない。

「やっぱりシルヴェン将軍を解任する事は難しいのですか？」

「元々の任命権は私にあるが、一旦任命した後の解任はそう簡単には出来ないからな」

ケネスが轡を引きながらもディアスへと顔を向け、驚いた様に言った。

「そうなのですか？」

任命権があるという事は、解任も自由と思っていたのだ。

「ああ、あまり自由に任命、解任が出来るとなると、やろうと思えば意図的に特定の人物を閑職に追いやる事が出来てしまうからね」

「閑職？」

「そうだ。みなそれぞれ役目が決まっている。それをその役目から引き抜き幕僚に加えて、他の者がその役目を引き継いでから幕僚を解任したらどうなる？」

「仕事がなくなりますね……」

「そう言うことだ……」

その為に軍務大臣に、シルヴェンを解任する上申書を提出してるのだ。だがその上申書の効果は期待できない。シルヴェンが失敗し

た時の保険としての役割もあるとはいえ、実際その失敗で軍勢に被害が出るとなると見過ごせず、全力でその失敗を回避させなくてはならない。

そう考えるとディアスの気はますます沈む。

総司令と従者は、しばらくしてディアス邸へとたどり着いた。

「ディアス様。ケネス様。お帰りなさいませ」

ミュエルが玄関で2人を笑顔で出迎えた。すると、突然ディアスがミュエルを抱き上げた。

「ディッ、ディアス様！」

普段とは違うディアスの行為にミュエルは赤面したが、ディアスは構わずそのまま玄関を潜った。

ケネスもあっけに取られつつその後に続く。

「あの……どうしたのですか？」

戸惑いディアスに問いかけるミュエルにディアスは

「いいから。いいから」と聞く耳を持たずそのままずんずんと進み続けた。

結局ディアスはミュエルを抱き抱えたまま自室まで進み、そこでベッドの上にミュエルをちょこんと置いた。

「ディアス様。本当にどうなさったのです？」

不思議そうに問いかけるミュエルの、その問いには答えず、彼女の頭を少し強く撫で、その横に座った。

シルヴェンの事で不満が鬱積していたディアスは、笑顔で出迎えるミュエルに心弛び、つい抱き寄せてしまったのだ。だが、なにぶんミュエルの身長はディアスの胸の辺りまでしかない。抱きしめるには高さが合わず、いっその事と抱き上げたのである。

「ミュエル、私は本当にお前には感謝しているよ」

「本当ですか？」

「ああ。本当だ」

ディアスがそう言ってミュエルのほほに口付けると、ミュエルは恥ずかしげに身を竦ませた。だが、決して嫌と言う訳ではない。ディアスがこの様に触れてくれる事は、自分がディアスの妻である事を意識させ、彼女を安心させるのだった。

ディアスに妻として見られない事で傷を負ったミュエルの心には、やはり微かな傷を残していた。時折ディアスに対し、妻としての扱いを求めて止まなくなるのである。

ディアスは改めてミュエルを抱き寄せると、ミュエルの頬に自らの頬を擦り付ける。

ディアスは髭が濃い方ではないが、それでも３５歳の男として相応に髭は伸びる。仕事が終わり邸宅に帰る頃になると、それなりに伸びている。

その髭の感触にミュエルの頬はちくちくと微かな痛みを感じたが、それだけにディアスが自分の夫である事。自分の男である事を意識させた。

もっともディアスには、まだミュエルを性的な意味で抱く積もりはなく、ミュエルにしてもそれ以上を望んでいる訳ではない。
だがこの様な行為により、ディアスとミュエルの間に夫婦なのだという意識が強まっていく。

ミュエルは優しく素直な少女である。ミュエルにはそのまま優しく素直で、美しい女性に「育って欲しい」と願っていた。
それは自らの心を韜晦(とうかい)せずに言えば、娘に対する愛情だった。

だがミュエルの事を「幸せになって欲しい」とは思っていない。
ディアスは、ミュエルを「幸せにする」そう考えていた。そしてそれは妻に対しての愛と言えた。

ディアスはミュエルの事を、娘に対する様に愛情を注ぎ、妻として愛していた。ただし女として欲するのは、まだ少し先になるだろうが……。

思えば不思議な関係である。世の夫婦の関わりとはかなり違っていた。普通は、女として求めて愛し、そして妻とし、生まれてきた子供に、娘なり息子なりの愛を注ぐものなのだろう。だが、ミュエルとの関係は、それとは順番がまったく逆になっている。

ディアスは目を細めてミュエルに微笑みかけると、改めてその頭を撫でた。

「では、そろそろ夕食にしよう。ケネスもお腹を空かせているだろうからね。今日はどんな料理なんだい？」

総司令の奥方ともなれば、毎日使用人に料理させる事も可能ではある。だが、いざという時の為、ミュエルも料理を習いだしたのだ。

もっとも、まだ下ごしらえを手伝っている段階なのであるが。

「鶏肉のオレンジソース煮とチーズスープです」

ミュエルは目を輝かせて答えた。自分がディアス家の家事を手伝う事も、彼女には嬉しい事だった。

「それは旨そうだ」とディアスはミュエルを抱き寄せたまま立ち上がり、その場にミュエルを下ろした。

そしてミュエルと共に食卓へと向かうと、ケネスはすでに待ち構えていた。

ディアスはミュエルも作るのを手伝ったという料理に舌鼓を打ち、「美味しいよ」とミュエルに言うと、彼女は嬉しそうに喜んだ。

そして晩餐も済むと、ディアスは書斎へと向かう。そこで本を読むなり思案にふけるなりするのがディアスの日課だった。

ミュエルはと言えば、これから半刻ほどケネスに見てもらいながらの勉強である。ケネスがディアスの従者として勤めているので、夜に勉強する事となったのだ。

そしてそれが終わるとミュエルは自室に戻り、ディアスもそれに合わせて自室へと向かう。

その後2人は、一つのベッドで眠るのだった。

だがミュエルは眠りの浅い体質で、夜中に時折目を覚ます事がある。その様な時横で寝るディアスを見ると、バルバール軍総司令官の夫はいつもだらしなく口を大きく開けているのだ。

ミュエルはクスリと笑うと、微かに乱れた寝具を夫にかけ直してやりまた眠りに付いた。

第１９話：後宮の邂逅（１）

「どうして私が後宮に入らなくてはならないのですか！」

普段は父のいう事を素直に聞く娘の怒声に、ランリエル王国の大貴族であるフェデリコ・カスティニオ公爵は眉をしかめた。

自分に対して不満を殆ど言わないセレーナが、これほど抵抗するとは予想していなかったのである。

書斎に娘を呼び寄せ、やってきた娘を立ち上がって出迎えた公爵は、彼女に後宮に入る事が決まったと伝えたのだ。

「いいから私のいう事を聞きなさい」

取り乱す娘に落ち着いた口調でそう言うと、鋭い目で娘を射抜いた。その眼光に娘はたちまち怯えて身を萎縮させる。内心他愛無いと思いながらも、今度は出来るだけ優しげに語り掛けた。

「何、これはお前にとっても悪い話ではないのだよ。後宮に入り子をなせば、お前の子が国王になる事もあり得るのだからね」

あまりにも分かりやすい飴と鞭に、娘はたちまち緊張をほぐしたが、やはり不満げに

「ですが……」と口ごもった。

「どうしたのだ？」

「国王陛下には、既に3人もの王子がいらっしゃいます。今更陛下のお子を産んだところで……」

娘の言葉に、公爵は「ふっ」と軽く噴出した。娘の言っている事の可笑しさにではない。自分の迂闊さを笑ったのだ。

公爵は笑みを湛えたまま、軽く両手を広げ、娘に弁解した。

「すまない。肝心な事を言い忘れていた。後宮と言っても国王陛下の後宮に入ると言う訳ではないのだ」

「陛下の後宮ではない？」

父の言葉にセレーナは首を傾げた。その様な仕草ですら美しい娘に公爵は満足げに頷く。娘の美貌は親の欲目を差し引いても、十分他に抜きん出ていた。

「ああ、そうだ。お前はサルヴァ殿下の後宮に入るのだ」

「殿下の後宮？」

セレーナはまたも首を傾げ、しばし考えている風だったが、次に笑い出した。

「嫌ですわ、お父様。その様な冗談を仰るなんて」

とクスクスと笑う声も美しく響く。

この美しい娘ならば、必ずやサルヴァ王子の寵愛を独占し次期国王、いや次々期国王を産む事になるだろう。ならば我が家の宮廷内の権勢は、弥(いや)が上にも高まる。

「いや、冗談ではない。サルヴァ殿下の後宮がなされる事になったのだ」

冗談としか思えない事を、そうではない言い切る父に、セレーナは目を丸くした。

「ですがその様な話、聞いた事がありません」

セレーナが驚く様に、本来後宮とは王子が持つものではない。国王が持つものであって、歴史あるランリエル王国にも、過去に一度とてなかった。

「お前が不思議に思うのももっともだ。だがお前も知っているとは思うが、現国王であらせられるクレックス陛下は後宮を構えておらん」

国王が後宮を持つには基本的に2つの理由がある。ひとつは単純に性的欲求を満たす為、そして次に跡取りを残す為である。

現国王と王妃の仲は良好であり、国王が他の女性を求める事は無く、そしてセレーナが言う様に国王には3人の王子、そしてさらに2人の王女がいる。

クレックス王は12歳の時、当時19歳のマリセラ王妃と結婚した。そして現在に至るまで浮いた話ひとつない。一国の王として君臨なされる方が、生涯一人の女性しか知らぬとは。と嘲笑する声も聞かれる。勿論表立ってではなく、影に隠れて密やかにである。

そう言われる国王に対し、国王を独占し3人もの王子を産み我が子に王位を継がせられる事が確定したと言って良いマリセラ王妃は、歴代で最も成功した王妃の一人と言われていた。

「だが、次期国王と目されるサルヴァ殿下は戦を好まれる。万一子

をなさぬ前に戦で命を失っては一大事と、国王、王妃両陛下がご心配なされ、特別にサルヴァ殿下の後宮が整えられる事になったのだ」

公爵はそう娘に説明したが、正確には少し違う。

次期国王と目されるサルヴァ王子に娘を差し出し、王子に取り入る事を思いついた公爵を含めた数人の貴族達が、両陛下の不安を煽ったのである。

早く孫の顔が見たい。孫の顔を見せる前に息子が死ぬなど持ってのほか、と考える親の情には王族も一市民も変わるところが無いのだった。

本来ならば娘を王子の妃にと言いたい所だが、それは中々敷居が高い。次期国王の婚姻ともなれば外交の大きな材料ともなり、軽々と決められるものではないのである。しかし後宮に入れる寵姫の一人であれば、潜り込ませるのは易い。

子さえ生まれればこっちのもの。

勿論、正式な妃の子ではない為庶子ではあるが、戦好きの王子の事である。正式な妃と子をなす前に亡くなる可能性も高い。

万一、妃を向かえ子をなしたとしても、王子が亡くなりさらに国王も崩御された時、その世子が幼少であり、庶子が成人していたならば、庶子でも十分王位継承に名乗りをあげる事は出来る。

それに、寵姫から妃となる事もあり得るではないか。そうなれば勝利は間違いない。

それにはまず、ゲームに参加する事が必要だ。娘を手札としてゲームに参加しなくてはならない。しかも自分の手札は中々のものだ。

と公爵は考えていた。

娘の容姿は申し分なく、声も美しい。気立ても良く、年齢もサルヴァ王子にちょうどつり合う。勝算の高いゲームに参加しないなど、あまりにも愚かな事である。

現在宮廷で最も権勢を誇っているのは、かつて王国の財政難のおり援助を行い、現国王に孫娘を娶らせたフォルト公爵である。

当時のフォルト公はとうの昔に亡くなっているが、フォルト公爵家はいまだ権勢を誇っているのだ。

だがこのゲームに勝てば、そのフォルト公爵家を抑える事も可能だろう。

しかし肝心の娘は

「ですがそれでも後宮などには入りたくありません」

と、表情を曇らせ難色を示した。

いざともなれば、頭ごなしに怒鳴りつけてでも後宮に放り込む積もりだが、平和裏に事が進むに越した事はない。娘の、後宮での立ち振る舞いにも影響してくるだろう。公爵は、優しげな口調で娘に言い聞かせた。

「お前がサルヴァ殿下の子をなせば、我が公爵家にとってどれほど為になるか、お前も分かってくれるね？」

家の利益の為、その身を捧げろと隠す事無くセレーナに伝えた公爵であるが、娘の方もその事について別段腹を立てる事もない。

家の為に身を捧げるという、そんな「当たり前の事」は、貴族社会に育ったセレーナも言われるまでもなく理解している。

はじめに後宮に入るのを嫌がったのは、3人の王子を持つ国王の寵姫になったところで、一生日陰者になるのが目に見えていたからである。それでは家の為にすらなりはしない。

そしてサルヴァ王子の後宮に入るのを嫌がったのは、純粋に王子の事を好きではなかったからだった。

サルヴァ王子に会った事はない。だが王子が戦を好むという事は聞いていた。心優しいセレーナは乱暴な男は好みではない。もし現国王のクレックス王に子がなければ、サルヴァ王子より、穏やかな人柄と評判のクレックス王の方が良い。そうとまで思っていた。

いくら家の為とはいえ、一緒に居て苦痛であろう相手に仕えるのは避けたいところだった。

「恐れ多い事とは思いますが、私はサルヴァ殿下のお心に添えないと思うのです」

と、控えめに拒否したが、公爵は辛抱強く娘に語りかける。

「サルヴァ殿下はそれは見事な若者であり、容姿も優れている。戦にも強いのはお前も知っていよう。恐れ多い言いようだが、たとえ王族でなかったとしても、年頃の娘ならば誰もが焦がれる立派で勇ましい男子なのだよ」

娘が、どうして王子の事を拒絶するかを理解しない公爵は、その嫌悪感に油を注ぐ。

勇ましい男子と聞いて、ますます後宮に入る事を渋る娘と父との話は、平行線をたどった。だが、結局家長である公爵のいう事には

逆らえない。
公爵も穏便に娘を送り出す事を諦め、最後には怒鳴り付けて娘を送り出したのだった。

こうして19歳のセレーナ・カスティニオ嬢は、ため息を付きながら馬車に揺られ、サルヴァ・アルディナ王子の後宮へと向かったのだった。

第１９話：後宮の邂逅（２）

後に２０名を超える人数となる後宮も、当初はセレーナを含めて１０名にも満たなかった。だがセレーナにしてみれば、一人の男性が相手にするには１０名でも多いのだが。

もっとも歴代の王の中には、四桁を超える美女をかき集めた者もいた。抱いた女の数を誇る事が男の甲斐性と考える者達の間では、「１０名足らずとは、勇猛でなるサルヴァ王子も控えめな事よ。意外と器の小さなお方かもしれん」と嘲笑の種ともなっていた。

サルヴァ王子は後宮に寵姫を入れるにあたり、出来るだけ断る方針を取っていた。これは王子が女嫌いや、ましてや男色の趣味がある。という訳ではない。

ランリエル王国の長い歴史の中で、唯一王子の頃から後宮を持った者として名を残す事になった事態に、うんざりしていた事もあるが、それならば精々役にたって貰おうと考えた為だった。

王子が断ったにもかかわらず、強引に娘を押し付けてくる者は二通りと考えられる。

一つは王子の味方になろうと取り入ろうとする者。これは当たり前の事だが、問題はもう一つの方。それは、敵意を持ち、王子の事を探ろうとする者である。

取り入ろうとする者は王子に媚を売り、探ろうとする者は媚を売った上さらに色々と聞き出そうとするだろう。しばらくは精々注意深く様子を探ろう。王子はそう考えていたのだった。

今年サルヴァ王子は２５歳となるが、現国王のクレックス王が王位に就いたのは、王子が１２歳の時である。

それでもクレックス王は、まだ現在のサルヴァ王子と同じ２５歳だった。そして、後宮はその当時から現在までの１３年間閉ざされたままとなっていた。

後宮の扉を開け、１３年間に積もりに積もった埃を払い、隅々まで塵一つなく磨き上げられ、装飾一式も新調した。

１３年前に後宮を管理していた役人や女官の中で、現在も現役で働いている者は皆無である。

後宮の管理方法を調べる為、古い書類を引っ張り出し、時には当時の担当官を探し当て、高額の報酬を約束して老体を召還し、指導させた。

こうして万全の体制を持って寵姫達を迎える日がやって来たのだが、やはり行き届かず、早速問題が発生したのだった。

翌年帝国との戦いで、ランリエル軍総司令そして出陣するサルヴァ王子も当時はまだその職にはなく、軍部では二番手、三番手、と言ったところだった。その王子の執務室に後宮を管理する役人が転がり込んだ。

「サルヴァ殿下！　申し訳ございません。恐れ入りますがお越し頂けますでしょうか……」

役人は急ぎつつも控えめにそう延べ、王子の出陣を要請したのである。

「何が起こったのだ?」と聞く王子に役人は状況を説明する。

後宮にあるそれぞれの寵姫の部屋の場所は、彼女達の家柄、それに後宮の主からの寵愛の度合いによって決まり、それが後宮内の序列ともなる。

後宮の一番奥にある部屋が、もっとも序列が高い寵姫の部屋だった。

これは万一後宮の主が事の最中に敵襲にあった場合、建物の一番奥にいる方が安全だろう。ならば一番足げく通う寵姫の部屋を一番奥にすべき。という実質的な意味があったが、他を出し抜こうとする寵姫達に取っては、心理的な意味合いが重要だった。

何せ一番奥にある自分の部屋に主が来るという事は、その途中にあるすべての部屋を素通りしてくる事になる。最奥の部屋の寵姫にとって、これほど優越感に浸れる事はない。

だが何分寵姫達は、今日はじめて集められたのである。

後宮の主、つまりサルヴァ王子からの寵姫の度合いなど分かる訳もなく、取り合えず家柄のみで序列が付けられる事になっていたのだ。

その為一番奥の部屋は、集まった寵姫達の中で唯一の公爵令嬢であるセレーナが入る事になっていた。

だがその配置に、ダルベルト侯爵令嬢のヴァレリア・ダルベルトが異論を呈したのだ。

「確かにセレーナ様は公爵令嬢。侯爵家など塵芥（ちりあくた）の様に思われるのも仕方がありません。ですが私はフォルト公爵の孫娘。マリセラ王妃とも従姉妹となります。お分かりですわよね？」

ヴァレリアはそう言いながら、笑みを浮かべた目をセレーナに投げかけた。

自分は公爵家より家格が下位の侯爵の出ではあるが、現在最も権勢を誇っているフォルト公爵家の血族に連なり、王妃の従姉妹でもある。自分こそは後宮の最上位となるに相応しい。そう主張しているのである。

当時まだ宮廷内の駆け引きなど身に着けていなかったセレーナは、その発言を素直に受け取り、塵芥と思っているなんてとんでもない。それほど仰るなら部屋を代わりましょう。

と言いかけたが、その声は両家の侍女や使用人、そして管理する役人との怒鳴りあい、貶め合い、そして仲介の声にかき消されてしまったのだった。

こうして事態は収拾がつかない状況まで発展してしまったのである。

「で？　私にどうしろと言うのだ？」

執務室の机に右肘を付き、右手で額を押さえて俯きながら役人の説明を聞いていたサルヴァ王子は、わずらわしそうに問いただした。

役人も内心この様な事に王子の手を煩わせるなど、と思いながらも他に方法が無く控えめに口を開いた。

「はい。後宮の序列は家柄と後宮の主、つまりサルヴァ殿下の寵愛によって決まります。家格での序列で解決しないとなると……。殿下のご決裁に頼るしかございません」

王子は大きくため息を付き
「止む得まい」と小さく呟くと椅子から立ち上がり、案内するように役人に言いつけた。

後宮にたどり着き、さらに廊下を進むと数人の侍女らしき者達の罵り合い、それを仲裁しようとする役人、さらにそれをおろおろと見つめる女、そして冷ややかに眺める女が目に入った。

「お前達。何を騒いでおるか！」

戦場の勇者であるサルヴァ王子の怒声に、今まで大声を張り上げ罵り合っていた両家の侍女が凍りつく。

だがその中でひときわ素早く動いた者がいた。他でもない、今まで冷ややかな目で事態を眺めていた女が、膝を折って王子に会釈する。

「まぁこれはサルヴァ殿下。いつも遠くからお姿を見る事しか出来なかった殿下にお会いする事が出来、光栄で御座います。セルジョ・ダルベルト侯爵の娘ヴァレリア・ダルベルトです。殿下の後宮に招かれ嬉しく思います」

サルヴァ王子は、招いた積もりはない。お前達の親が押し付けたんだろう。と思ったが、さすがにそれをそのまま言わないだけの分別はある。代わり別の台詞を言おうと口を開きかけたその時、それよりも早く、事態を遠巻きにしていた他の寵姫達もヴァレリアに遅れてはなるものかと慌てて王子の周りに群がった。

「アリオスト家のコンチェッタで御座います」

「オリアナと申します。父はバローニオ伯爵です」
「以前よりサルヴァ殿下をお慕いしておりました。ロレンツァと申します」

万事抜かりのないサルヴァ王子である。
寵姫の名前は当然把握していたが、好き勝手に口を開き名乗る寵姫達に、顔と名前を一致させる事すらままならない。
結局名前と顔を一致させる事が出来た寵姫は2人だけだった。

王子に群がる寵姫達を、あっけに取られた様に見守っていた一人の女が目に留まった。そして王子と目が合あうと慌てて
「カスティニオ公爵家のセレーナで御座います」と名乗り、その寵姫の名前と顔は覚える事が出来た。

覚える事が出来たもう一人の寵姫は、一番最初に名乗ったヴァレリアである。

結局寵姫達の部屋の配置は、王子が決断を下し寵姫達もそれに従った。

「部屋は、すでにそれぞれの家から家具なども運び込まれていよう。にわかに部屋替えなど出来るはずも無いではないか。今の部屋が気に入らないというのなら、空いている下位の部屋に行って貰うしかないのだぞ」

至極もっともな話である。当然役人達もそう言ってヴァレリアを宥め様としていたのだが、無理を言ってもそれが通用する環境で育ってきた貴族令嬢である。
どんなに大変でも、使用人と役人が汗水たらし行えばよい。そう考えていたのだ。

だが、王子にまで言われてはさすがに異論を挟む事は出来ない。渋々ながら了承した。

もっとも渋々なのは内心であり表面的には億尾にも出さない。それどころか

「皆さん。我がままばかり言うものではありませんわ。サルヴァ殿下のお申し付けどおりに致しましょう。セレーナ様もそれでよろしいですわね？」

と、まるでこの騒ぎの原因がセレーナと言わんばかりである。

しかも彼女のあまりの自然な口ぶりに、セレーナも自分の所為だったのかと錯覚し、つい

「はい。申し訳ありません」と頭を下げてしまったほどである。

ヴァレリアはそのセレーナの態度に、クスクスと上品に笑った。他愛の無い女。そう考えたのである。

もっともサルヴァ王子は、ヴァレリアの態度こそ辟易した。役人からは、そもそもヴァレリアが部屋割りに難癖をつけたのが原因と報告を受けている。

役人から王子へ報告がある事すら予測せず、この場を取り繕う事しか頭に無いヴァレリアこそが考えが足りない、と言うものだった。

「とにかく、あまり騒動を起すな」

王子はそういい置くと、その場から背を向けた。

僅かの時間で精神的にくたくたとなり、執務室へは戻らず自室へと足を向けた王子は、１５０年ほど前のランリエル王国国王ゴドフ

レードの事を考えていた。例の後宮に四桁の美女を集めたという王である。

今までこの王の事を、王位に就いたにも拘らず遊興に耽った、と軽蔑していた。

だが、後宮を開いた初日に一桁の人数に疲れ果てた王子は、僅かばかりではあるが、生まれて始めて、ゴドフレード王への尊敬の念を抱いたのだった。

第１９話：後宮の邂逅（３）

寵姫達が後宮に入ってから数日が経っていた。
いまだサルヴァ王子が寵姫の部屋に通ったという話は無い。

初日の騒ぎにうんざりした王子は、これ以上面倒に巻き込まれるのは御免と後宮が落ち着くまで時を置いていたのだ。

そしてそろそろ良いだろうと判断したが、寵姫の部屋に向かうには事前に役人へ連絡が欲しいという。

「女の部屋に行くのに、どうして一々断りが必要なのだ？」

女を抱きに行くと他者に宣言せねばならぬなど、真っ平なのだが役人は規則なのだと言い、さらにその規則がある理由を述べた。
「殿下をお迎えするとなると、寵姫にも色々と準備が必要で御座います。それに……女性には月のものがあります。殿下が寵姫の部屋に向かった挙句その様な事にな……」
「もう良い！」

王子は役人の生々しい話を遮るとため息を付く。あまりにも煩わしい。

「それでどの方の部屋へとお出になるので御座いましょうか？」
王子の心中も知らず役人はそう問いかけた。寵姫の部屋に行くのならば聞く必要がある。

寵姫の部屋に行くのに、どうして断りがいるのか疑問に思ったのでまず聞いたのであって、明確に誰の部屋に行こうとまで考えてい

た訳ではない。王子は、役人の問いかけに考え込んだ。

そして、手っ取り早く名前と顔が一致しているセレーナを指名した。ヴァレリアの顔と名前も一致しているが、彼女を指名する気にはなれなかったのである。

勿論いずれは指名せねば成らず、結局ヴァレリアは一番最後に指名される事になる。だが、その事についてヴァレリアは

「殿下は、私を一番大事にして下さっているのですわ」

と吹聴し愉悦に浸る事になるのだが、それはまた別の話である。

今宵サルヴァ王子がいらっしゃる。セレーナの胸は緊張に張り裂けそうだった。

サルヴァ王子の第一印象は最悪と言って良かった。何せ初めて聞いた王子の口から放たれた第一声は

「お前達、何を騒いでおるか！」という怒声なのである。

戦を好み恐ろしい人と王子を見ている彼女にとって、それは、その考えを補強する事にしかならなかったのだ。

夜となり部屋の扉が軽く叩かれた。

来た！

セレーナの緊張は極限にまで高まり、つい

「サルヴァ殿下で御座いますか？」と問いかけた。

だが王子がくる事は前持って分かっており、他の者は遠慮してやって来る事はない。

本来ならばすぐさま扉を開け「ようこそお越し下さいました」とにこやかに返し、出迎えるべきなのだ。

もし火急の用事で王子ではない者が来ていたとしても、その時はその者が間違いを訂正するものだ。

もっともその様な決まりなど王子は知らない事だった。セレーナの問いかけに不思議とも思わず扉の前で立ったまま「ああ、そうだ」と返事した。

だがセレーナの方こそが自分の失敗に気付いた。

王子を扉の前で待たせるなどなんという不手際だろう、と、慌てて扉を開け不安げな顔を覗かせた。また王子に怒鳴られるのではないかと思ったのだ。

あからさまにビクビクするセレーナに、王子の顔が思わずほころぶ。

寵姫達の部屋への訪問を開始するにあたって、自分に取り入ろうとする者は誰か、自分の事を探ろうとする者は誰か、とを見極める為、王子なりに身構えている部分もあったのだ。

しかしこの娘は……。とてもではないがそのどちらとも思えない。まるで何かの間違いでやって来たのではないかと思われるほどである。

もっとも実際のところ彼女は「乱暴者の王子」の事を好きでは無かったのだが、まさかその様に思っている者が後宮に来ているとは、さすがの王子にも想像の範疇を超えていた。

王子の目には、この娘が初めての事に怖がっているのだと映ったのである。

セレーナは終始どう乱暴に扱われるかと緊張し、王子の一挙手一投足に過剰に反応し王子を苦笑させる。

「美しい髪だ」

と王子がセレーナの髪に触れると、彼女は反射的に目を瞑り身を縮ませ、抱き寄せれば王子の身体に押し付けられたやわらかい胸から、激しい鼓動の音が伝わってくる。

加虐趣味などないサルヴァ王子であるが、セレーナの反応は王子の「いたずら心」を暴走させるには十分だった。

セレーナが身を縮ませるのを承知の上で立って抱きしめたまま、背に、腰に、足にと手を這わせ彼女の反応を楽しんだ。

さらに首筋に口付けると、セレーナは微かにうめき声を上げる。

その声を耳ざとく聞き逃さなかった王子は、彼女の身体に手を這わせる一方執拗に首筋に口付け、時には舌を這わせた。彼女のうめき声は次第に大きくなり、はっきりと聞き取れるほどになると、王子は彼女の首筋から顔を上げた。

そしてことさらセレーナの目を正面から見つめると、恥ずかしさのあまり彼女は泣きそうな目を向け、つい王子はその胸に彼女を抱きしめた。

あまりにも初々しいセレーナの反応に、王子の心に愛おしさが込み上げ、

「俺はこれほど惚れっぽかったか?」と内心苦笑させた。

もっともあくまでこの場限りの気持ちであり、本気でセレーナを愛したといえる代物ではない。

道端で子猫を見つけひとしきり可愛がった後、名残惜しげにその場を立ち去っても、翌日になれば、その子猫の存在などすっかりと忘れている。

その程度の気持ちに過ぎない。少なくとも現時点では。

もしこれが自分を油断させる為の演技というなら、到底自分の手の負える相手ではない。そしてそれはおそらく無いだろう。

そう思ってセレーナの滑らかな髪に指を滑らせた。いたぶり過ぎたのを反省し、彼女を安心させる様に。

セレーナも王子に頭を撫でられながら、大人しくその胸に身を委ね、そして気持ちが落ち着いていくのを感じた。

もしかしたら、それほど怖い人ではないのかも知れない。あまりにも他愛無いともいえるし、純真ともいえるが、王子の胸に抱かれ素直にそう思った。

そしてしばらくすると王子は優しくセレーナをベッドの上に横たえる。

「怖がる事は無い」

そうセレーナの耳元で囁き、彼女に覆いかぶさった。

第１９話：後宮の邂逅（４）

朝目が覚めて起き上がろうとしたセレーナは、下腹部に激痛が走るのを感じた。

そうだ自分は昨日「女」になったのだ。そう思い昨夜の出来事を反芻した彼女の顔がたちまち赤くなる。

王子が考えていたよりも怖くなさそうな人だった事には安心したが、この「痛い事」をこれからもしなくてはならないのかと思うと気が重くなる。

だがそれ以上に憂鬱にさせたのは、彼女に仕える侍女達だった。

「昨夜はサルヴァ殿下が起しになられたとか。おめでとう御座います」

「他の寵姫様達に先駆け、お嬢様のところに起しになられたという事は、やはり殿下はお嬢様の事をお気に入りなのですね」

「殿下はお優しかったですか？」

と彼女達は口々に言うが、自分が女になった事を他の人間が「よく知っている」という状況は、逃げ出したくなるほど恥ずかしい事である。

しかも女の世界ではこの手の情報が広まるのは早い。

セレーナがサルヴァ王子から一番最初の「お情け」を頂いた事は、後宮中に広まっているだろう。

ヴァレリアあたりなら得々として後宮中を闊歩し、「偶然」顔を合わせた他の寵姫達に王子がどの様に自分を愛してくださったのかを赤裸々に語るであろうが、セレーナなどからすれば常軌を逸して

いるとしか思えない。

他の寵姫と顔を合わせるのも恥ずかしいと、部屋に篭ったセレーナが部屋から出たのは、結局王子が寵姫達全員の部屋を訪問した後だったのである。

自分が王子に抱かれたという事を、みんなに知られているのは恥ずかしかった。しかし、いつまでも部屋に篭っている訳にも行かない。

王子がすべての寵姫の部屋に足を運んだのなら、恥ずかしいのはみんな同じ事。そう考えたのだ。

朝、庭に出てみると、数人の寵姫達が集まり談笑をしていた。

後宮に来た初日の様にいまだにいがみ合っているのでは？　と心配していたが、どうやら自分が部屋に篭っている間にみな仲良くなっていたのだ。と安心し彼女達の傍へと歩み寄る。

「皆様、おはよう御座います」

セレーナが挨拶をすると寵姫達も

「これはセレーナ様。おはよう御座います」と挨拶を返してきた。

ずっと部屋に篭り出遅れた自分はもしかして仲間はずれにされるのでは？　と微かに不安に思っていたセレーナは安心して思わず微笑んだ。

だが、その微笑みはすぐに凍りつく。

彼女達の談笑の話題は、サルヴァ王子に「どうお褒め頂いたか」だったのである。

「私はこの髪をお褒め頂いたのですよ」

「私は声が美しいと」

ここまではまだ聞いていられたが、

「肌が滑らかであると言って頂きました」

「良い声で鳴くのだと、殿下は大変喜ばれ」

とまで来ると、聞いていられず赤面するしかない。

この女性達には、羞恥心というものが無いのだろうか？　とセレーナは思ったが、彼女達にしてみれば少しでも自分が優位に立とうと必死だったのだ。

後宮での順位は、王子からの覚えの良さが全てであると言って良い。いくら順位付けが家柄と寵愛の度合いからと言っても、所詮寵愛が優先されるのである。

王子にどうお褒め頂いたかは、彼女達にとって最も重要な事なのだ。

「それでセレーナ様は？」

遂に矛先を向けられたセレーナは戸惑った。

実際サルヴァ王子からは、髪の毛からつま先まで、さらに声からしぐさまで、他の寵姫達への言葉を全て合わせた数を超える言葉をセレーナ一人で掛けられていたのだ。しかし、緊張していたセレーナはほとんど覚えてはいなかったのである。

かろうじて髪をお褒め頂いた事は記憶にあるが、それもこの場で言う気にはなれない。

「いえ。お褒めの言葉は特に……」と申し訳なさそうに答えた。

すると寵姫達は「まぁ！」と驚きの声を上げる。

セレーナの美しさは美女揃いの寵姫達の中でも群を抜いている。寵姫達は彼女を一番の強敵と見ていたのだ。だが、その強敵はお褒めの言葉を頂いていないという。

この美しい女性に自分は勝てるかもしれない。と彼女達の心に微かな希望の光が灯された。確かに美しさでは敵わないかも知れない。しかし人には「好み」というものがある

どれほどセレーナが美しくてもサルヴァ王子の好みではないのだ。そしてお褒め頂いた自分は王子の好みなのだ。彼女達はそう考えたのである。

そして王子の好みではない、可哀想なセレーナをみんなで慰めた。

「セレーナ様の髪はこんなにもお美しくていらっしゃるのに……」
「この青く澄んだ瞳など吸い込まれそうですわ」
「この形の良い唇など、私と代えて欲しいくらいでありますのに」

慰めてくれる彼女達をなんて良い人達なんでしょう。と素直に思ったセレーナだったが、注意深く彼女達の言葉を聞いている者が居れば、ある事に気付いたに違いない。

セレーナの髪を褒めた者は王子から髪を褒められた者であり、瞳を褒める者は瞳を、唇を褒める者は唇を、それぞれお褒め頂いているのだ。

どんなに貴女のどこそこが美しくとも、自分のどこそこの方が王子の「好み」なのだ。暗にそう言っているのである。こうしてセレ

ーナは幸いにも、他の寵姫達に敵視されずにすんだのだった。

王子の訪問が二周目に入り、二周目もやはりセレーナが最初だった事から、やはり王子は美しいセレーナを選ぶのかと寵姫達に緊張が走った。だが、どうやら単に一周目と同じ順番で回っているだけらしいと分かると、それもすぐに収まった。

しかし王子の訪問が三周目、四周目となってもその訪問の順番は変わらず、これでは王子がもっとも寵愛しているのは誰なのか？が判断できない。

寵愛の度合いの判断は、王子が誰にもっとも足げく通っているかであるのに、王子はみなを平等に通っているのである。

もっともヴァレリアは

「サルヴァ殿下がみなに平等に接しているのはお優しい為。本当は自分こそがもっとも王子に愛されている」という態度をとり続けているのだが。

そしてその頃になると寵姫達にもいくつかのグループが形成されていた。

まずは自称「もっともサルヴァ王子の寵愛あつい」ヴァレリアを中心とするグループである。

ヴァレリアと彼女の言う事を信じ、王子の寵愛が篤いなら、もしかして将来は王妃になるかも知れない。と、そのおこぼれに預かろうという者達の集団である。

そして次に「反ヴァレリア同盟」ともいえるグループ。

このグループはヴァレリアのいう事を信じてはいるものの、彼女に負けてなるものか！　と諦めきれずに居る者達である。

そして最後のグループといえば、その二つのグループに属さない者達である。

ヴァレリアのいう事を信じてはいるもののおこぼれに預かるに気はなれない者。そもそもヴァレリアのいう事を信じていない者。そしてセレーナの様に、他の女性と争ってまで王子の寵愛を受けようとは考えていない者などである。

後にセレーナは、王子からの寵愛を失いたくないと焦燥にかられる事になるのだが、それはあくまでも将来の事だった。

王子の訪問が十周目近くになる頃、寵姫の数はさらに増えてきた。

美貌で名高いセレーナ・カスティニオ公爵令嬢の出馬に、勝ち目が無いと尻込みしていた他の貴族達だったが、一向にセレーナは王子の寵愛を独占しないらしい。

それどころか漏れ伝えられた事を聞くと、セレーナはサルヴァ王子からお褒め頂く事も少なく、もしかすると美貌のセレーナはサルヴァ王子の好みではないのではないか。と言うのだ。

この頃になると王子の訪問時にもセレーナの緊張も幾分ほぐれ、王子の言葉をすっかり忘れてしまう事も無いのだが、彼女がそのお言葉を他の寵姫達に漏らす事は、やはり無かったのである。

その為、貴族達は今からでも遅くは無いと、第一陣であるセレーナやヴァレリア達とほぼ同数の第二陣を後宮に送り込んだのだった。

しかし皮肉にも、この第二陣がサルヴァ王子の訪問を、セレーナ

に偏らせるきっかけになったのである。
王子は一番奥のセレーナの部屋から順番に回っていたのだが、それが第二陣の到着で把握できなくなったのだ。

第二陣と言ってもセレーナ達の様に纏まって来た訳ではない。数日おきに一名ずつやって来るのである。そうなれば王子も順番に訪問していたのを中断し、新たに遣ってきた寵姫の部屋を訪問する事になる。

そしてその様な者が4人、5人となるともはや順番とは言っていられなくなった。そもそも王子とて毎日後宮に足を向けえている訳ではない。
大体みんなを満遍なく回っているだろう、という感覚に頼っていたのである。

こと軍略に関しては、幾らでも細心の注意深さを発揮するサルヴァ王子も、女の部屋を回る順番について、その能力を発揮する気にはなれなかったのだ。

ところがある日、後宮を管理する役人がやってきて、王子に寵姫達の序列について判断を仰いだ。

「今まで、その様な話は出て来なかったではないか。突然どうしたというのだ?」

不思議がる王子に、役人は説明する。

「今まで殿下は、寵姫達を平等に訪問しておりました。その為序列を変える必要は無かったのですが、最近、殿下の訪問に偏りがありますので、お気に召された寵姫がいらっしゃるのかと……。そうな

れば序列を変える必要が御座います」

寵姫達を訪問している回数を管理されていたのかと王子は不愉快に思ったが、それをこの役人に言っても仕方があるまい。それがこの者の仕事であると、かろうじて我慢した。

「それでどう偏っていると言うのだ？」

王子自身はみなを均等に訪問しているはずと考えていた。誰かに偏って足を運んでいる積もりは無いのだった。

「カスティニオ公爵家のセレーナ様を他の寵姫達の2倍から3倍の回数ご訪問なさっております。他にはダルベルト侯爵家のヴァレリア様の訪問数が激減しております」

「セレーナが3倍だと!?　いくらなんでもその様な事はあるまい」

王子は驚いたが、役人は間違いないという。しかしサルヴァ王子には合点が行かない。

セレーナは美しく気立ても優しい。王子も気に入っているのは確かに認める。

しかしセレーナに溺れている訳ではないし、他の寵姫達の部屋も同じ様に足を向け、セレーナばかりを贔屓としている積もりはない。

役人にはとりあえず序列はそのままにと言い置き、そして馬鹿馬鹿しいと思いながらも、わざわざ紙に書いて寵姫達への訪問を管理する事にしたのである。

こうして、あえてセレーナを一番最後にするように順番を決め、改めて寵姫達を訪問していた王子だったが、現在人数も増え１５名

となっている寵姫達の、三分の一も回ったところで苦痛を感じ始めたのだった。

だが、なぜ苦痛に感じてしまうのか王子にも分からない。寵姫達はみな、王子を楽しませようと至れり尽くせりに奉仕した。

王子が喜ぶと思ってと言って部屋に花を飾り、お口に合いますでしょうかと珍しい飲み物や料理を王子に勧める。

そして王子が抱き寄せると、しな垂れかかって身を任せる。

何の不満も無いはずであり、苦痛を感じる事など無いはずだった。にも拘らず実際心楽しくなかったのである。

それでも王子はそれから2人、3人と寵姫の部屋を訪問したがやはり苦痛を感じる事に変わりはない。結局、順番を変更し、セレーナの元へと身を進ませたのだった。

四桁の寵姫を集めたというゴドフレード王に言わせれば、なんと不甲斐ない事よ。と笑ったであろうが、サルヴァ王子にしてみれば、どうして自分の為であるはずの後宮の事で、自分が我慢せねばならぬのか。と言うところである。

苦痛に耐えてまで、寵姫への訪問の順番を守る必要を認めなかったのだ。

第１９話：後宮の邂逅（５）

その夜、王子が部屋を訪問すると、セレーナは
「ようこそ、おいで下さいました」とにこやかに迎え入れた。
この頃になると、王子を笑顔で出迎える余裕も出てきていた。

部屋に通された王子の鼻腔を微かな甘い芳香が擽る。香りがすると思われる方に目を向けると白い小さな花が飾られていた。

「あれはどうしたのだ？」

「後宮の庭に咲いていたのです。管理する方にお伺いすると、摘んでも良いという事でしたので摘んでまいりました」

王子が椅子に座るとセレーナは酒を満たした杯を王子の前に差し出した。杯に一口付けると口中に甘味が広がる。

「甘い酒だな。どうしたのだ？」

「家から送られてきたのですが、殿下のお口には合いませんでしたでしょうか……？」

セレーナは不安そうに聞いた。確かに王子は甘い酒は好みではないが、飲めないと言う訳ではない。

「まぁ構わん」と、さらに杯に口を付けると、セレーナは安心した様に微笑んだ。

そして口を湿らせて人心地つき、セレーナを抱き寄せると、彼女

はいまだに身を固くした。
この点だけは、他の寵姫達と違い従順とは言えぬセレーナだった。にもかかわらず、他の寵姫達では味わえぬ居心地の良さを、王子は感じていたのである。

事が終わると、傍らに寝具に身を隠して寝そべる彼女の横で、王子は上半身を起して座り彼女を見つめた。
セレーナは、事が終わった直後に見つめられるという事に恥ずかしさを覚え、目を逸らしたが、王子から視線を逸らせる事が不敬とでも思ったのか、おずおずと視線を戻した。
だが、その顔は恥ずかしさのあまりか朱に染まる。

その様子に王子の顔に笑みが浮かぶ。そして笑われたと思ったセレーナは、さらにその肌を赤らめさせるのだった。

不意にセレーナの両脇に手をやり軽々と引き寄せ、その胸に抱きしめた。その為寝具から彼女の身体は抜け出し、裸体があらわになる。

「殿下？」
事の最中ならまだしも、事が終わった後に裸を晒す恥ずかしさに、セレーナは身も縮む思いだったが、彼女を抱き寄せたまま王子は微動だにしない。

次第にセレーナも落ち着きを取り戻し、鍛え上げられた王子の逞しい胸から、トクトクと心臓の音が聞こえるのに気付いた。
その規則正しい鼓動に、セレーナは不思議と安らぎを覚えたのだった。

セレーナを抱き寄せていた王子は、微かに彼女が重くなったのを

感じた。改めて見ると、なんと微かな寝息を立てている。

王子を差し置いて寝てしまうなど、寵姫としてあるまじき行為である。だが王子は怒るどころか笑みを浮かべ、彼女を起さない様にそっと、その髪に指を絡ませた。

すでに王子は、なぜ他の寵姫達には苦痛を感じ、セレーナには居心地の良さを感じるのかを理解していた。

他の寵姫達が、寵愛を得ようとして王子を持て成しているのに対し、セレーナは、王子に喜んで貰おうとして持て成しているのである。

それゆえ他の寵姫達と比べ押し付けがましくなく、それが居心地の良さを感じさせているのだった。

セレーナには他の寵姫の様な打算が無い。王子が来るので精一杯持て成す。それだけを考えている。

さらに言えば、他の寵姫達はみな一様に全員が同じ様な印象を与えていた。その為、数人の寵姫を訪問しただけで、全員を回ったのだと錯覚させていたのだ。

そして数人の寵姫に足を向けた後、王子はセレーナの部屋の扉を叩いていたのである。

王子の顔に苦笑が浮かぶ。これでは確かに役人の言うとおり、セレーナと夜を過ごす回数が、他の寵姫の3倍になるのも当然だったのだ。

だが……。それでは自分はセレーナを愛しているのだろうか？

父であるクレックス王は母である王妃以外の女を知らないという。

そしてそれは王妃を愛しているからという事だった。

それに比べ自分はセレーナ以外の寵姫を、言ってしまえば「平気」で抱いている。

セレーナは、あくまでもお気に入りの寵姫と言うだけでしかないのか？

それとも自分には何か人として欠陥があるのだろうか。と、王子はいささか大げさに考えたが、結局結論には至らなかったのだった。

セレーナが目を覚ますと、自分がいまだサルヴァ王子の胸の中にいる事に気付いた。

王子を差し置いて寝てしまうなんて、とんでも無い事をしてしまったと思ったが、その王子は寝息を立てていた。

夜はまだ開けきらず、窓の外は暗闇が支配している。

王子を起してはいけないと、そのまま抱かれていたが、やはり王子の逞しい胸は彼女に安らぎを与えてくれる。

自分は戦を好む男性は好きではなかったはずなのに、好きな男性の好みが変わったのだろうか？　セレーナはそう思ったが、ふと、気付いて赤面をした。

それはサルヴァ王子の事を好きだという事なのだろうか？　そう考えると、改めて緊張し胸の鼓動は早くなった。

はじめは確かにサルヴァ王子の事は怖かった。

しかし、すぐに考えていた様な怖い方ではないと知って嬉しくな

り、ならばと自分なりに忠実に仕えようと思ったのだ。

そして王子の自信に満ちた立ち振る舞いに惹かれ、力強い肉体に頼もしさを感じ、時折見せる優しさに喜びを感じていた。

もっとも、セレーナの感じる王子の優しさとは、一般的に言われるものとは少し違っているかも知れない。

その優しさとは、何かをしてくれる。という優しさではなく、セレーナが何かを失敗なり問題なりを起した時に、笑って許してくれる、または言葉を掛けて下さる。と言ったものだった。

いうなれば、支配する側がされる側に示す優しさ、と言って良かったが、仕える為に後宮にやって来たセレーナにはそれで十分だったのである。

その胸で抱かれ続けるセレーナに、王子に対する愛おしさが込み上げ、悪戯心が疼いた。いや、魔が差したと言った方が適切かもしれない。

彼女は少し頭を浮かせると、王子の胸にそっと唇を近づける。つい先ほどまでそれ以上の行為をしていたにもかかわらず、たったそれだけの事にセレーナの胸は早鐘の様に鳴り響いた。

そして微かに王子の肌に触れるだけの口付けを行うと、この秘め事に満足し、小さくクスリと笑いまた王子の胸に顔を埋めたのである。

しかし次の瞬間セレーナは凍りついた。

「起きていたのか？」

突然声を掛けられ、顔を上げると、果たして王子が見下ろしている。

戦場で、敵襲に備え寝る事も多いサルヴァ王子である。自分の身体の上で身じろぎされて、起きない訳は無いのだった。

「申し訳御座いません！」

慌てて王子の胸から離れようとしたが、逞しい腕が、がっしりとセレーナを抱きしめ、それを許さない。

セレーナは消え入りたい様な羞恥心に包まれていた。まるで相手に読ませない積もりで書いた恋文を、当の相手に読まれてしまったかの様な居た堪れなさである。

王子の事をお慕いしている事がばれてしまった。寵姫として後宮に居ながら、今更何を言っているのかというものだが、セレーナは全裸をまじまじと見られるに勝る恥ずかしさを感じたのだった。

勿論、サルヴァ王子にもセレーナの気持ちは伝わっていた。そしてセレーナと他の寵姫達との違いに、また一つ気付いたのだった。

他の寵姫達は事あるごとに

「殿下を愛しておりますわ」

「私は殿下のもので御座います」

と媚びた様に言うが、セレーナが王子に対する感情を言葉にした事など、今まで一度も無かったのである。

いや、今回の事も言葉にしたとは言えない。しかし、千の言葉を

並べ立てるよりも雄弁に、セレーナの心を感じる事が出来た。

サルヴァ王子はセレーナをさらに抱き寄せると、その唇に自らの唇を重ねた。唇から王子の心が流れ込んでくるのをセレーナは感じた。

王子はきっと数日後には他の寵姫の部屋に足を向ける。それはセレーナにも分かっている。

しかし、この瞬間は、紛れも無く自分を愛してくれている。いや愛し合っている。セレーナは強く信じた。

第１９話：後宮の邂逅（６）

セレーナが後宮に入ってから２年の歳月が流れた。

後宮の寵姫の数はさらに増え２３名となったが、もはや誰もがサルヴァ王子の最も寵愛あついのはセレーナ。そう見ていた。

そうなると自然セレーナの周りには取り巻きの様な者が集まってくる。

セレーナに自分の周りに取り巻きをはべらす趣味は無いが、どの様な思惑の者であれ自分に親しげに近寄ってくる者を遠ざけるなど、セレーナには出来ない事だったのである。

そしてセレーナはその者達から宮廷女の戦い方と言う、王子からすれば余計な事を吹き込まれ、僅かながらも毒された感もある。

だがそれでも彼女は王子に愛され幸せな日々を送っていたのだが、ある日その幸せは陰りを見せた。陰りは２４人目の寵姫がもたらした。

かつて後宮は、権勢を誇っていたヴァレリア嬢のグループと反ヴァレリアグループ。さらにその他グループといえる物が存在し、セレーナはその他グループに属していた。

そして新しい寵姫が来ると自然その他グループが面倒を見て、その後グループに留まるか他のグループへと移るといった流れだった。

その経緯でセレーナは新しく来た２４人目の寵姫の世話をする積もりだったが、その寵姫は他の寵姫達の集まりにも参加せず、庭を

散策する事も無い。

セレーナはどうなされたのだろうと心配になったが、自分が後宮に来た時の事を思い出し、気恥ずかしさに部屋に篭っているのだろうと判断した。ならば今はそっとして置きべきだった。

だがしばらくしてサルヴァ王子の様子が変わったのに気付いたのである。

自分を抱く王子が上の空とまではいかないが、他の者に心奪われていると感じたのだった。

他の寵姫を抱いていても自分の傍らに居るときは自分の事だけを愛してくれる。それがセレーナの救いだった。しかし確かに王子は自分以外の者を思い浮かべていた。

そして今までに無い事が起こったならば今まで居なかった者、つまり２４番目の寵姫であるアリシアが原因なのは間違いない。

もっともこれは若干の誤解があった。

確かに王子はセレーナのみの事を考えずアリシアの事も思い浮かべてはいたが、アリシアに心奪われていた訳ではなく、ましてやアリシアをセレーナ以上に愛しているなどという事は決してない。

もっとも、セレーナを抱きながら他の女の事を思い浮かべているだけで、十分失礼な事ではあっただろうが。

ともかくセレーナはアリシアに対して対抗する決意を固めた。そして侍女達に命じ、アリシアの事を調べさせたのだった。

「アリシア様は、確かにサルヴァ殿下が特別に命じて後宮にお召し

になったのは間違いないのですが、なぜ殿下がアリシア様をお召しになられたのかまでは調べる事が出来ませんでした」

「そう……仕方ないわね」

一番重要な事ではあるが、後宮を管理する役人の口は堅い。王子の意向について詳しく調べられないのは仕方がなかった。

セレーナはその事については諦め、次にアリシアの人となりと立ち振る舞いについての報告を受けた。

「アリシア様は、かなり地味な服装をしているようです」

「地味？」

「はい。容姿はそれなりといえるのですが、着ている物が地味なのです。後宮で支給されている服を着ているだけで、自分で衣装を新調したり装飾品で身を飾ったりはしてはいないみたいです」

「そうなの……」

ではどうして王子はそのアリシアという女性を好むのだろう。もしかして王子の「好み」が変わったのだろうか。

その考えにセレーナは身震いした。

今まで王子が自分の事を一番寵愛してくれているのは、自分が王子の好みなのだと考えていたのだ。しかしその肝心の王子の好みが変わったとなると手も足も出ない。

王子は地味な女性が好みになったのかしら？

それとも、もしかしたら以前から地味な女性が好みだったけど、後宮に今まで地味な女性が居なかっただけなのかしら？

「私も地味な服装をした方が良いのかしら？」

だがこのセレーナの考えは侍女達の猛反対を受けた。

「いえ。セレーナ様は今までどおりでよろしいのです！」

「その様な人の真似をする事などありません！」

「でも、サルヴァ殿下はその方の様な服装を好まれているのかも知れないわ」

だがまたもや侍女達は抵抗した。

「いえ。殿下は物珍しさに一時的に興味を持たれているだけです」

「そうです。それにセレーナ様には持って生まれた華やかさがあります。服装を地味にしても似合いません」

「そうかしら……」

納得は出来なかったが、侍女達の協力が得られなければ地味な服装をする事は出来ない。セレーナはやむを得ず諦めた。

その後庭に出たセレーナはアリシアを見かける機会を得た。

侍女の一人がたまたま部屋から出て廊下を歩いていたアリシアを、庭から目ざとく見つけセレーナに耳打ちしたのである。

あの人が……。とセレーナはアリシアをまじまじと見た。

確かに服装は地味だったが、自分を含めた寵姫達と違いその目は意志の強さを感じさせた。

サルヴァ王子はあの様な女性を好まれるのかしら……。とセレーナを不安にさせる。王子を失いたくないという気持ちが、セレーナを必要以上に動揺させるのだ。

そしてまたしばらくした後、カーサス伯爵を招いた宴がサルヴァ王子主催で開かれる事となり、寵姫達も参加する事になった。

宴の準備はセレーナ以上に侍女達が張り切った。自慢のお嬢様を美しく飾り立てるのは彼女達にとっても楽しい事なのである。

そして宴当日、着飾ったセレーナはその華やかさにみなの賞賛を集めた。

うぬぼれの強くないセレーナであるが今まで何度も宴には出席し、そのたびに賞賛を受けている。素直にその言葉を受け入れた。

そんな中視線を感じそちらに目を向けると、一人の男性が自分を一瞥したらしいと気付いた。そして、その男の横に、はたしてアリシアが居るのが見えた。

もっとも男とアリシアは、親しげとは言いがたい雰囲気である。

アリシアの服装は普段の服に毛が生えた程度の物だったが、それがいっそうセレーナの心に火をつける。

セレーナが着飾るのは、王子に着飾った姿を見て欲しいという気持ちが強い。その為、熱心に準備を進めてきたのである。

にもかかわらずアリシアはこの様な時ですら着飾らない。アリシアには着飾らなくとも王子を虜にする自信があるのだろうか？

八つ当たりに近い感情ではあるが、自分が一生懸命になっている事を他人が適当にしているのを知ると、人は自分が侮辱されたと感

じるものである。
ましてや適当にしている者に負けるかも知れないともなれば、なお更だった。

セレーナは意を決してアリシアに近づき、アリシアと対決したのだった。

だが結局その対決はサルヴァ王子の仲裁により、決着は付かず引き分けに終わった。

しかしその時見せたアリシアと王子とのやり取りは、セレーナに孤独を感じさせるものだった。

セレーナには2人の関係が侵しがたいものに感じられたのだ。
自分はアリシアに勝てないのだろうか？　そうも思ったセレーナだったが、2人が愛し合っているというのとは少し違う気もする。

それに最後にはサルヴァ王子は自分をダンスに誘ったのだ。最終的にはセレーナの勝ちだったはずである
にもかかわらずアリシアは悔しそうな顔一つ見せなかった。

宴の後部屋に戻ったセレーナは侍女達に訴えた。

「あの人はどうしてあそこまで平然としていられるのかしら？」

サルヴァ王子の心を射止めるのが使命である寵姫の一人ならば、最後にセレーナがダンスに誘われた事は、悔しくてたまらない事のはずである。
顔色一つ変えないアリシアはどういう積もりなのか？

最後の最後には、王子は自分を選ぶという強い自信があるのだろうか？

種明かしをしてみれば、単にアリシアは王子からの寵愛など求めていない。というだけなのだが、セレーナにしてみれば想像の範囲外だった。

寵姫が王子の寵愛を求めないなど、蝶が花を求めないのと同じ事である。

セレーナや侍女達にはアリシアの態度は理解不能だったのだ。

こうしてセレーナと侍女達によるアリシア対策会議は、深夜まで続く事になったのである。

第２０話：ケネスの戦い（１）

ケネスはその日、友人達との集まりに参加していた。

ケネスの父はディアスの叔父であるが、早々に軍人としての未来に見切りをつけ、商家へと婿入りしていた。その息子のケネスも商家の子という事になる。

その為、友人には同じ商家の子が多かったのだが、ディアスの従者として軍部に出入りする様になると、自然同じく従者の者達と親しくなった。

彼らはケネスとは違い、父も軍人である者が大半である。信頼できる同僚の将軍に息子を従者にと頼み、そこで修行させると言うのが基本的な流れだった。

そういいう意味ではディアス家の厄介になりながら、その従者になったケネスは

「保護者の従者になるなんて甘えている」と陰口を叩かれる事も少なからずあった。

だがそのあたりはケネスも心得ており、図に乗っていると思われる言動に気を付け、爪弾きにされる事も無く周囲に受け入られていた。

もっともその中には、彼と仲良くする事により、ディアス家との繋がりを目論む者も居たのだが……。

今日の集まりは、兵法の勉強会である。

バルバール軍にはディアスは勿論の事、兵法に明るい者が多い。毎年の様に攻め寄せるコスティラに対し、半分ほどの国力しかないバルバールである。

確かに天険の地形に守られてはいるが、そればかりに頼っては居られない。物量で勝てないならば、作戦で勝つしかない。その為、兵法の習得は、他国に比べても遥かに奨励されているのだった。

集まった彼らは、ある者は兵法書を読み耽り、ある者は互いに兵法書の一文から問題を出し合った。

ケネスも友人マルティと、その様に勉強をしていた。

ケネスの初陣は遅れているが、本来初陣の時期や正式な騎士になる年齢は大体決まっている。従者仲間である彼らの年齢も近い者ばかりだった。

マルティもケネスと年は近く1つ年下である。だが、体力面において兵士には向かない為初陣が遅れているケネスと違い、すでに初陣を済ませていた。

短い赤い髪に茶色がかった瞳を持ち、背はケネスよりも僅かに低いが体格は一回り大きい。もし2人が戦えばマルティの腕の一振りでケネスは弾き飛ばされるだろう。

2人は小さい円卓を挟んで椅子に座り、マルティの問いにケネスが答える。

「向かってくる敵軍の戦塵が低くて広いのは？」

「それは歩兵がやって来るんだ」
「じゃあ、高くて狭いのは？」
「それは騎兵だ」
「敵陣で槍を杖代わりにしている者が多い場合は？」
「敵軍の食料が尽きているんだよ」
「水汲みに来た敵兵が、水を汲むより先に自分で水を飲むのは？」
「敵は水不足なんだ」
「敵が使者を送って勇ましげに戦いを挑み、軍勢に出撃準備をさせていたら？」
「それは実は退却しようとしているんだ」
「それでは、和平の使者を送って下手にでて来たら？」
「油断させておいて戦いに挑もうとしているんだよ」

これらの兵法の文言は、本来敵の動向に対しての警句であるが、ディアスがコスティラとの戦いで立てた作戦は、これらの応用と言うべきものだった。

バルバールは国境に軍勢を派遣し、さらに使者を派遣するという、ランリエルに敵対と見える行動を起した一方、結局使者は戦いを挑むわけでもなく悪戯に交渉を長引かせるだけだった。
だがその実、バルバール王都に軍勢を集結させた。

その為、コスティラはバルバールの思惑を、軍備増強をやめさせる為の牽制としてか、さもなくば本当にランリエルと戦う為の、どちらかを目的に軍勢を集結させたのだ、と判断した。交渉を長引か

せているのも、軍勢を集結させる為の時間稼ぎだと考えたのだった。

しかし、交渉を長引かせたのは、軍勢を集結させる為の時間稼ぎである、という事は正解だったが、その攻撃目標はランリエルではなく、コスティラだったのである。

こうしてコスティラは、真の攻撃目標が自分達であるとは夢にも思わず油断したのだった。

もっともディアスが常々言う様に、今後はコスティラも警戒し、二度とは引っかからないであろうが……。

「さすがだな」

すべての問いに淀みなく答えるケネスに、マルティは賞賛の言葉を送った。

「ありがとう。でもやっぱり早く実践に出てみたいな」

「確かに実戦では、兵法書に書かれている通りの状況はあまり起こらないから、実戦を経験しないと分からない事も多いな」

「マルティは戦いに出た事があるんだろ？」

自分より年下にもかかわらずすでに初陣を済ましているマルティに、内心羨ましく思いつつ問いかけた。

「ああ。前回のコスティラへの侵攻した時に父の同僚のラハナスト将軍の従者としてお供させて貰ったんだ」

「やっぱり書かれている事とは違った？」

「そりゃあ、違うさ」
マルティはそう言って肩をすくませたが、初陣を済ませた者の余裕が感じられたのはケネスの妬みだろうか。
「そうか……。ディアス将軍も兵法は法則を掴んでそこから応用する事が重要って仰っていたけど」
「さすがディアス将軍だね」
現在ディアスは、軍人を目指す少年達の憧れの的というべき存在であり、マルティの声にも尊敬の念が篭っている。
「うん」
「そう言えば、みんな噂しているけど、次はコスティラじゃなくてランリエルと戦う事になるらしいじゃないか。ディアス将軍は、それについて何か仰っていなかったか？」
ランリエルと戦う事になるだろうという事は、軍事機密というのも馬鹿馬鹿しいほどに周知の事実としてみなに受け止められていた。
勿論、予想開戦時期や迎撃体勢などは機密という事になっているのだが、それに関しても来年には戦いが行われるだろうと噂され、そして戦いになるならば国境付近であろうと予測されている。
「ディアス将軍は、ランリエル軍総司令官の戦歴を調べているみたい。過去の戦いからどんな癖があるか調べるんだって」
「ランリエルの総司令官ってランリエルの第一王子って人だよな？どんな癖があるって？」

「いや……。それは教えては貰えなかったけど……」

「そっか……」

２人の声には共に残念そうな響きがあるが、それはやむを得ない。

各国情報を得る為、あらゆる事を行っている。

場合によっては軍事機密を得ようと、それを知っていそうな者を誘拐する事すらある。

身内にすら不用意に情報を漏らさないのは、その身内を守る為でもあるのだ。知らないとなれば、敵も手出しをしないものである。

そしてケネスにすら漏らしてはいないが、実際ディアスによるサルヴァ王子の戦いについて分析は進んでおり、その傾向を掴んでいた。

ディアスの分析したところ、サルヴァ王子は常に攻勢に出て、戦いの主導権を握ろうとする傾向があった。

ランリエル軍がカルデイ帝国を征服する事になった戦いでも、その傾向が見られた。

戦いはまず、帝国軍が隣国ベルヴァース王国に攻め込んだ事が、発端と成っている。それを援軍として出陣したランリエル軍が撃退。

そしてその余勢をかって逆にランリエル、ベルヴァース連合軍がカルデイ帝国に攻め込み、遂には帝国を征服する。と言った経緯で行われた。

だがサルヴァ王子は、まず戦いの第一段階であるベルヴァースに攻め込んだ帝国軍の撃退にしてからが、積極的に攻勢に出たのである。

この時王子が取った作戦は、重要拠点を攻めている敵主力と戦わず敵の本拠地を突き、敵を撤退させる。という兵法の基本ともいうべき作戦だった。

もっともそんな基本的な作戦を帝国軍も警戒しない訳もなく、本拠地であるカルデイ帝都ダエンへと続く国境は、厳重に守られていた。

その為サルヴァ王子は段階を踏んだ。

ランリエル軍主力は、まず国境と帝国軍主力との中間にある軍事拠点を攻めたのである。

帝国軍主力は退路を断たれてはと軍事拠点に援軍を派遣し、そこで連合軍と帝国軍とによる激しい攻防が行われた。

その後ランリエル軍は軍事拠点を奪取する事を諦めたのか、王子は抑えの兵を残し今度は帝国軍主力へと軍勢を向けたのである。

だが、軍事拠点の兵力は援軍もあり、帝国全軍の3分の1にまで達していた。その為、ランリエル軍も相応の兵力を抑えに残さざるを得なかった。

しかし、それこそがサルヴァ王子の狙いだった。僅かなお供だけを引き連れた王子は、密かに抑えの軍勢に舞い戻ったのだ。

王子は、多勢が居る様に見せかけておけ、と残す僅かな兵に言い置いて、深夜暗闇に紛れ、抑えに置いていた軍勢のほとんどを出陣させたのだ。

ここを空にしても、多勢に見える様に擬態さえしておけば、軍事拠点の帝国軍は守りを固め出撃しては来ない、と看破していたのである。

そして国境を固めていた帝国軍は、突然現れたサルヴァ王子率いるランリエル軍により壊滅したのだった。

サルヴァ王子による軍事拠点への攻撃は、国境を守っていた帝国軍の目を他に向けさせ油断させると同時に、国境を攻め落とせるだけの戦力を持った別働隊を、敵にそうとは気付かせずに国境近くで編成する事が目的だったのである。

国境を破られた帝国軍は、王都ダエンを攻め落とされてはと退却を開始したが、主力と軍事拠点の軍勢を合流させる事は出来なかった。

帝国軍主力と対峙していた連合軍主力は先手を打って行動し、帝国軍主力と軍事拠点との中間地点を抑さえ、帝国軍主力と軍事拠点の軍勢を分断してしまったのである。

合流を断念した帝国軍主力は、中間地点を押さえたランリエル軍を迂回して帝国へと退却しようとしたが、その動向はランリエル軍により厳重に監視され、捕捉されていた。

この時帝国軍主力は、戦いの初期の軍事拠点での攻防で援軍を派遣した事もあり、兵力は削減されている。

サルヴァ王子率いる軍勢は、国境を突破した後再度舞い戻っており、さらに中間地点を抑さえていたランリエル軍も出撃した。
結局帝国軍主力は、2倍近い敵と戦う事を強いられ、壊滅したのである。

余談ではあるが、この時退却を開始した帝国軍主力から一人の武将が離脱し、軍事拠点を抑さえていた帝国軍に合流。帝国軍主力が壊滅している間に、その武将に率いられた軍事拠点の軍勢は退却に成功した。
その武将こそがカルデイ帝都ダエンでの攻防戦で、サルヴァ王子を敗死寸前にまで追い詰める事になるのだった。

こうしてサルヴァ王子は帝国軍からランリエルを守りきるどころか、その軍勢の過半を撃滅する事に成功したのである。

そして今度は逆にカルデイ帝国内へと攻め寄せ、カルデイ帝都ダエンでの攻防戦では一時苦戦しながらも、遂には勝利したのだった。

この戦いについてのディアスの感想は「見事だ」の一言だったが、同時にの相性の良さを感じていた。勿論、自分に取ってである。

前回のコスティラとの戦いでは攻勢に出たが、本来兵法にあるところの「先ず勝つべかざるを為して、以て敵の勝つべきを待つ」つまり、守りを固め敵の隙を待つのがディアスの戦い方である。

これはコスティラとの戦いが以前までは常に防衛線であり、また負ける事は絶対に許されないバルバールの事情だった。
多数の経験があるものが、得意となるのは当然と言える。

戦いとは攻めた側に隙が出来るものである。
帝国との最終決戦時にサルヴァ王子が苦戦したのも、その攻撃時の隙を突かれたからと言われている。
ディアスもその攻撃時の隙を突く積もりだった。

その後ケネスは、みなと机上演習とその後の検討会を行った。
だが、今日の戦いは上等とは言えなかった。
山々に複数の陣を敷き守備を固めた守り手に、攻め手は一丸となり攻め寄せ守り手の陣を攻め破ったのだが、戦闘決着後の検討会が良くなかった。

「どうして一丸となって攻め寄せたのか？」という質問に対して攻め手は答えたが、その答えは
「敵が分散しているので、こっちは軍勢を集結させて攻めれば勝てると思った」という物だったのだ。

いや、これだけ聞けばもっともかと思われるが、ケネス達が見るところ守り手も巧みとは言えず、攻められている箇所以外の軍勢をまったく動かさず、完全に遊兵と化していた。

もし、その軍勢を動かして攻め手の背後を突いていれば、守り手が勝っていただろう。

攻め手がそれを認識しており、その事に付いての対策も考えた上での攻勢だったなら良かったが、そうで無いならば、たまたま勝っ

ただけに過ぎない。

実際の戦いでは、文字通り勝った者が勝者であり、勝てばそれで良いとも言えるが、学問の一環としても机上演習では、まぐれでの勝利では、まったく意味が無いのである。

ケネスがマルティをちらりと見ると、マルティは肩をすくめて見せ、ケネスも肩をすくめて返した。

第２０話：ケネスの戦い（２）

その後一息ついた彼らは、場所を提供してくれたサウリの勧めでおやつにありついた。

育ち盛りの彼らである。みなは争う様に手を出し、出されたおやつは瞬く間に無くなる。そして腹を満たした後は、お茶を飲みくつろいでいた。

軍人を目指す、いや、将来の名将たらんとする彼らの話題は、自然当代の名将達のものが中心となる。

そして当代のバルバールの名将といえばディアスである。

「ケネスはディアス将軍から直接兵法をご指南頂く事もあるんだろ？」

「うん。極たまにだけどね」

ケネスは友人の言葉に何気なく答えたが、すぐにあちこちで羨望の声が上がる。

「それは凄い」

「僕も一度で良いからディアス将軍から教えて貰いたいな」

現総司令官から直に指南して貰うなど、彼らにしてみれば夢の様な話である。羨ましがるのも無理はない。そこへ場所の提供者であるサウリが提案してきた。

「まったくケネスが羨ましいよ。一度で良いからディアス将軍にお

越し頂けないかな？」

「それは良い。ディアス将軍に頼んでみてよ」

「お願いだからさ」

みなから羨望の眼差しを受け、そう言われると悪い気はしないが、ディアス将軍に迷惑をかける訳にもいかない。

「いや……ディアス将軍も忙しいし」と、ケネスは断った。

だが、みなは諦め切れないのか執拗に食い下がり、ケネスもそれに対して断り続ける。そういったやり取りが繰り返されていると、突然部屋中に怒鳴り声が響いた。

「あんまり、いい気になってんじゃないぞ！」

みなの視線が怒声の主に集中すると、それは先ほど机上演習で「まぐれ勝ち」した者だった。そして怒声の主は、さらに怒鳴り声を上げた。

「大体ディアス将軍なんて、自分で戦う事もしない臆病者じゃないか！」

「それは違う！　ディアス将軍は臆病なんかじゃないぞ！」

そう言い返すと、続いてディアスを尊敬する者達が加勢してきた。

「自分は戦わずに勝つから凄いんじゃないか」

「そうだ。総司令官が自ら剣を持って戦う事こそ恥だ！」

だが、その加勢に怯まず、怒声の主はさらに叫ぶ。

「叔父上が言っていたぞ。ディアス将軍の真似をして戦おうとしない者が増えてきて困るって」

現総司令官のディアスを批判するなど、ただの従者でしかない者にあるまじき行為である。だが意外にも、それに同調する声が上がった。

「そうだ。みんなが戦わない様になっては、戦いに負けてしまうだろ！」

「ディアス将軍の真似をすべきじゃない」

まさかディアスを批判する者が何人も居るとは、と意外に思っていると、マルティが耳打ちしてきた。

「あいつは、タルヴォって言ってシルヴェン将軍の甥なんだ。同調している奴らはその取り巻きさ」

シルヴェンがディアスの事を常日頃中傷しているのは良く知られていた。

それは自分の能力を棚に上げてのディアスへの嫉みだったが、ディアスさえ居なければバール軍曹司令官は自分だとシルヴェンは考えていた。

勿論、ディアスが居なかったとしても無能で有名なシルヴェンが総司令官になる事などありえないのだが、シルヴェン自身はそう信じているのである。

そして甥にもその事を吹き込んでいたのだった。

タルヴォはシルヴェンの姉の息子である。

体格が良く、身長ばかり高くて身体の線は細いケネスと違い、身長はケネスと匹敵し、横幅は叔父のシルヴェンに匹敵した。つまりけっこうな巨漢である。

髪と目の色は叔父と同じくこげ茶と黒である。

ケネスも初めは気付かなかったが、言われてみれば確かにシルヴェンを若くしたらこうなるのではないか？　と見えなくも無い。

そして、現当主は不甲斐ないが、軍部でのシルヴェン家の影響はまだまだ大きい。

そのおこぼれに預かろうという者も少なからず居たのである。

もっともその様な者達は、自分の才能に自信の無い者や、シルヴェンの様に名門の血筋を誇る者達ばかりだった。

大国に囲まれたバルバールでは、血統だけを頼りにつける職など高が知れているのだから。

親ディアス派と反ディアス派との口論は続き、当初は双方それなりの根拠を持った言葉の応酬だったが、次第に感情的な中傷へと変わっていった。

そして遂に決定的な一言がタルヴォから放たれた。少なくともケネスにとっては。

「ディアス将軍なんて、１２歳の女の子を嫁にする倒錯家じゃないか！」

「なんだと！」

ケネスはその言葉に激怒し、タルヴォに飛び掛った。

しかし残念な事に体格の差はいかんともしがたく、飛び掛った勢いでタルヴォをぐらつかせはしたが、あっさりと踏みとどまれてしまう。

タルヴォはケネスの両肩を掴むと無造作に「ふん！」と地面に向かって振りぬき、床に投げ飛ばした。

「ぐっ！」

床に叩き付けられたケネスは、その衝撃に声を上げた。

全身を打ち付けた痛みに体中が軋む。

「従弟がこの程度じゃ、ディアス将軍も高が知れているな」

タルヴォの嘲笑にケネスは唇を噛んだ。自分が不甲斐ない所為でディアスが馬鹿にされるとは、と目に悔し涙が滲む。

「じゃあ、シルヴェン将軍の甥はどの程度って言うんだ？」

みなの視線が声の主に集まると、マルティの姿があった。

「今のを見ていなかったのか！　俺がどの程度かは、そこで倒れている奴と比べて見るんだな」

タルヴォはマルティを睨んで言ったが、当のマルティは平然としたもので、むしろ鼻で笑った。

「ふっ。俺達は将来一軍を率いる将軍になる事を目指しているんだろ？　だったら力で勝ってもしょうがない。ケネスに勝ってると言うなら、知略で挑むんだな」

「知略でだと」

「そうだ。ケネスと机上演習でもしてみるか？」

「ちっ！」

マルティの言葉にタルヴォは大きく舌打ちをした。

ディアスの薫陶よろしく、さらに勉強熱心なケネスは、元々軍人の子であるみなと比べ当初は出遅れていたが、今では仲間内でも一、二を争うほど机上演習は強い。

机上演習で戦えば、タルヴォはケネスの敵ではないのだ。

舌打ちをし、黙り込んだタルヴォを無視して、マルティは助け起す為ケネスに近寄る。

だが、そこに取り巻きの一人がタルヴォに耳打ちをし、何を吹き込まれたのかタルヴォはにやりと笑う。

「ああ、良いぜケネスと戦おうじゃないか」

「なに？」

上半身を起したケネスの肩に手をやり、助け起そうとしていたマルティが、その声に振り向き驚きの声を上げた。

力比べ以外にタルヴォがケネスに勝てるとは思えない。いやそれはタルヴォにも分かっているはずなのだ。

「ただし机上演習じゃなく、俺とケネスを大将に実際に軍勢を率いて戦うんだ！」

ケネスとマルティは顔を見合わせた。

「シルヴェンの甥とかいうのと戦う事になったんだって？」

ディアス家の晩餐で、料理に舌鼓を打ちつつディアスが問いかけた。

今日の料理もミュエルが手伝った。

メインはチキンのチョコレート煮である。

以前にはチキンのオレンジ煮を作った。

どうしてこの娘は鶏肉を甘いもので煮るんだろう。と、ディアスも思わないでもなかったが、実施食べてみると意外と旨いので特に問題ない。

「……ええ。そうなんです」

ディアスの言葉にケネスは力なさげに答えた。

「まぁでも、どうしてその様な事になったんですか？」

ミュエルが驚いた様な声を上げたが、ケネスは返答に窮した。

ディアスがミュエルを妻にした事を馬鹿にされたからとは、とてもではないが言えるものではない。

「いや……。まぁ売り言葉に買い言葉で……」

と言葉を濁したが、ディアスは見透かした様ににやりと笑う。

「それで勝算は？」

だが、それに対するケネスの答えは

「それが……どうやったら勝てるのか分からなくて」
と、やはり力ない。

「そうなんですか？　だって机上演習とか言うのではケネス様の方がお強いんですよね？」

「それはそうなんだけど、軍勢って言ってもお互い１０人ずつなんだ。これじゃ作戦も何も無いよ……」

「それで武器は？」

「全員槍です」

「それじゃあ軍勢を率いての戦いと言っても、作戦の差し挟む余地はなく強い者が勝つって事かい？」

「ええ。そうなんです」

「まぁ……」
ケネスの事を家族として好意を持っているミュエルであるが、そのミュエルから見てもケネスが強いとは思えず、かける言葉は無かった。

「そのタルヴォって言うのが向こうでは一番強いんだな。お前の方に同じくらい強い奴はいるのか？」

「マルティが強いです。同じくらいかは分かりませんが……。体格ではタルヴォに負けていますが、マルティは動きも早いですし、勝てないまでも一方的に負ける事は無いと思います」

「なるほど」とディアスは頷く。

「ディアス様、ケネス様に何か助言して差し上げてはどうでしょうか……」

ミュエルの遠慮がちな提案に、一瞬ケネスの顔に希望が浮かぶ。

ディアスの作戦なら、どんな敵でも勝利は間違いない。

だが……。

「いや、それは出来ないな。実際の戦いでも誰かに教えて貰いながら戦う積もりかい？」

とディアスはにべもない。

一瞬期待したケネスは、自分の力で戦おうとしなかった事に、顔を赤らめ俯いた。そしてミュエルも、つまらない提案をしてしまったと意気消沈した様子である。

その、２人の様子に、冷たすぎたかな？　とディアスは思わず苦笑した。だが、やはり直接助言をする気にはなれない。

食事もすっかり終わると、この後はミュエルの勉強をケネスが見てあげる時間である。

「それでは、邪魔者は席を外そう。私が戻ってくるまでに片付けておくんだよ」

ディアスはそう言って書斎へと向かう為席を立つ。

「あ。はい。行ってらっしゃいませ」

「はい。分かりました」

２人に見送られ、食堂に出る扉をくぐりながらちらりと２人に振

り向く。
まぁ、この程度の助言なら良いだろう。ケネスが気付かないなら、それはもう仕方が無い。
もっとも、これを助言と受け止めるには余程感が良くなくては難しいだろうが……。

第２０話：ケネスの戦い（３）

決戦の日を数日前に控え、ケネスは従者の仕事の合間に槍術の稽古に励んでいた。

見てくれているのは当然ディアスではない。

初めはディアスに槍の稽古をつけて貰えないかと申し入れたのだが、ディアスはケネスの肩を叩き首を振った。

その目は「むちゃを言うな」と訴えていた。

ディアスは歴代のバルバール軍総司令官で第一の名将ではないかと称される反面、歴代のバルバール軍総司令官で一番個人戦闘が弱いのではないか、とも言われているのだった。

ケネスはタルヴォに勝つべく稽古をしているのだが、下手をすれば、そもそもディアスがタルヴォに勝てないかも知れないのである。

それでは、誰が槍の稽古を付けてくれているかと言えば、エスコ・ヒルヴィストという仕官で、以前新兵の訓練についての見事さでディアスに褒められた人物である。

結局ディアスは、その者を一軍の仕官として抜擢したのだった。

意外と若くまだ２０代半ばという。

背も高く、標準的な身長を超えるケネスよりも、さらに僅かばかり高かった。

赤みがかった茶髪に、濃い茶色の瞳を持ち顔も中々整っている。

際立って体格が良いという訳ではないが、それでも十分水準以上

には鍛え上げられている。むしろ無駄な贅肉がないと言った方が適切だろう。

実はヒルヴィストは結構な名門の出である。

とはいえ、ディアスやシルヴェンの様に武門の名流という訳ではなく、貴族の名門の出なのだった。

彼は軍人を目指し、ディアスに認められた事からも分かる様に才能もあったが、彼の両親はいつ命を落とすかも知れない軍人になる事に反対した。

しかし彼は両親の反対を押し切り、無理やり軍人となったのである。

だが両親にとっては、やはり跡取りが亡くなってしまってはと、気が気でない。多額の金品を使い裏から手を回したのである。

息子を戦死する危険の無い、新兵の訓練所の教官になるよう働きかけたのだ。

その為、訓練所の教官から一軍の仕官へと抜擢したディアスはヒルヴィストに感謝される一方、彼の両親からは恨まれたのであるが、そこまではディアスも知らない事だった。

作戦においてはケネスに助言する事を断ったディアスだが、槍の稽古については手を貸してくれヒルヴィストを紹介してくれた。

「助言を受けながら戦うのは論外だが、戦いの前に訓練するのは当然だ」

ディアスはそう言ってケネスの特訓に手を貸してくれたのである。

「千単位。せめて百単位の歩兵ならば、全員長槍を持って密集隊形

を組んで突撃するのが通常だが、１０人では短槍を持つのが良いだろう。長槍は懐に入られたら終わりだ。名人は長槍でも巧みに使い懐に入られても戦えるが、ケネスにはまだ無理だろうからな」

「はい」

ヒルヴィストの言葉にケネスは素直に頷く。

実際、にわかに特訓したところでタルヴォに勝てる様になるとは思えないが、出来る事はすべてやって置くべきだろう。

しかしやはりケネスには武芸に対しての才能以前に、体力が追いつかない。すぐに根を上げた。

ヒルヴィストを相手に槍を打ち込んでいたのだが、それが１００本といかぬ内に槍を取り落としたのである。

「すみません！」

そう言って槍を拾おうとしたが、手が滑ってまた取り落とした。

その様子にヒルヴィストはため息を付いた。

「どうやら基礎体力から鍛えた方が良さそうだな」

「はい……」

結局ケネスは槍の稽古と言いながら、その稽古の時間の大半は基礎体力作りにと、長距離を走る事に費やされたのだった。

そして決戦の日。

「良く逃げなかったな！」
型どおりとも言える台詞を吐いたのはタルヴォである。

戦いは、王都の郊外にある林に囲まれた広場で行われる事となった。

両軍１０名ずつ。それぞれが槍を持っているが、タルヴォ隊が長槍を構えているのに比べ、ケネス隊はヒルヴィストの助言どおり短槍を持っていた。

勿論、双方槍と言っても穂先は取り外し、命の危険は無い。

両軍以外にも見物として多数の少年達が戦いを見守っている。

「ケネスがんばれ！」
「タルヴォに負けるな！」
と彼らから声援が上がるのが、その内容はケネス隊に対してのものばかりである。
タルヴォ隊の面々には面白くないがこれは仕方がない。

そもそもなぜ１０名ずつで戦う事になったかというと、やはり彼らの中でディアスの人気は高く、ディアスを批判しているタルヴォ派はタルヴォと取り巻き合わせて１０名しか居なかったのである。

その為、ケネス隊もタルヴォ隊にあわせて１０名に絞ったのだ。
そうなるとタルヴォ派全員が戦いに出ている為、見物人からタルヴォ隊への声援が無いのは当たり前なのだった。

ケネスは自分に声援を送ってくる者達に手を振って答えた。
そしてタルヴォを見てにやりと笑う。まるで味方が沢山居る事を

自慢するかの様に。

「いい気になるなよ。ケネス！」

タルヴォは怒鳴ったが、ケネスは平然としたものだった。

「別にいい気になってなんて居ないさ。応援してくれている人に手を振って何が悪いんだい？」

そう言って肩をすくめさらににやりと笑う。

タルヴォはケネスを激しく睨んだ。

「それでははじめるけど、準備は良いか？」

そう言ったのは審判を勤めるサウリである。

サウリの言葉にケネスとタルヴォは軽く右手を上げる。了解の合図だ。

「では。初め！」

サウリの掛け声と共にタルヴォが飛び出した。

「ケネス！　覚悟しろ！」

開始前のケネスの態度に腹を立てていたタルヴォは、真っ直ぐケネスに向かってくる。

両軍の大将は当然ケネスとタルヴォが務めている。ケネスが討ち取られてしまってはケネス隊の敗北である。

「ケネス危ない！」

と、見物人から叫び声が上がる。

だがタルヴォが近づくと、なんとケネスは背を向け逃げ出したのだった。

「はっ！　情けないぞケネス。それとも戦わないディアス将軍の物まねか！」

タルヴォはケネスを追いかけながら、ケネスの背に嘲笑を浴びせた。

ケネスはタルヴォの言葉に腹を立てながらも、歯を食いしばって耐え逃げ続け、林の中に入り込んだ。

逃げるケネスを、林の中を駆け抜けタルヴォは追うが、手にした長槍が邪魔で仕方が無い。

時には木の枝に長槍を絡め取られ、槍を取り落としてしまう。

今戦えば勝てるかも！　という誘惑に耐え、ケネスはさらに逃げ続けた。

「いつまで逃げ続ける気だ！　臆病者め！」

木々が邪魔で思う様に追いかけられないタルヴォは苛立った様に叫んだが、やはりケネスは逃げ続ける。

「実際の戦いでも敵が逃げる事はあるんだぞ！　敵に、待ってくれ！　とでも言う積もりか！」

ケネスは珍しく声を荒げ、タルヴォを挑発しつつさらに逃げる。

「貴様！」

その挑発に乗ったタルヴォはさらに追いかけ続けるが、やはり長槍が邪魔になり、ケネスとの距離は広がるばかり。

ケネスとタルヴォが走り疲れてくたくたになったころ、やっと2人は元の場所。つまり広場へと戻った。そこには7人の少年達が待ちかねていた。

マルティがへとへととなったケネスに声をかける。

「遅かったな。こっちはとっくに、邪魔者が居ないうちに片付けておいたぜ」

大きく息を乱しながらもケネスは、マルティに笑顔を向ける。

「いや、万一こっちがまだだといけないと思って……長めに走ってたんだ」

「まぁ、じゃあ後は任せておけ」

マルティは苦笑してそう言い、ケネスの肩を叩いた。

ケネスに遅れてやっとタルヴォも広場に戻って来たが、その光景に我が目を疑った。

「他の奴らはどうした!?」

広場に立つ7人の少年達はすべてケネス隊の者達だったのである。

両軍の大将はケネスとタルヴォだが、戦力としてみた場合タルヴォ隊の主力はタルヴォ自身だが、ケネス隊の主力といえるのはケネスではなくマルティであり、むしろケネスは最弱である。

ケネス隊は最弱の戦力で、タルヴォ隊主力を引き付けたのだった。

しかも、ケネスは大将である自分が不在になる事を見越し、マルティを副将として自分がいない間の指揮を任せていた。

だが大将が不在となる事など想定していないタルヴォ隊は、タルヴォの代わりに指揮する者も決まっていなかったのである。

結局、ケネスとタルヴォを除いた9名ずつの戦いは、タルヴォという主力と指揮官を欠いたタルヴォ隊の一方的な敗北に終わったのだった。

ケネス隊の損害は2名だけである。

マルティを初めとするケネス隊の面々は、ケネスを守る様に広がってタルヴォに短槍を構える。この期に及んで、万一ケネスがやられてしまっては馬鹿馬鹿し過ぎるというものである。

「貴様らどけ！　ケネスと一騎打ちをさせろ！」

タルヴォは叫んだが、勝利を目前とした軍勢の大将が、ただ一人となった敵将との一騎打ちに応じる訳がない。

「悪いな」

マルティが短く言うと、ケネス隊7名はタルヴォを取り囲んだ。

「ちくしょっっう！！」

タルヴォが叫び、まるでそれが合図かの様にケネス隊7名は一斉にタルヴォに対し槍を繰り出した。

タルヴォの巨体は7本の槍に突き立てられ、吹っ飛んだのだった。

「おめでとう御座います」
晩餐の場で勝利の報告をするケネスに、ミュエルが笑顔で言う。
ミュエルの言葉を嬉しく思いながらも、微かに胸がチクリと痛んだ。
やはり、まだまだミュエルへの想いを、完全に思い出へと昇華させていないとは言い難く、この笑顔が恋人として自分に向けられる事が無いと思うと微かに胸がうずく。
だが表面上はおくびにも出さない。
「ありがとう」とケネスも笑顔を作り礼を言った。

「よくやった」と言うディアスにも、ケネスは身体ごとディアスに向き直り
「ありがとう御座います。ディアス将軍のおかげで勝つことが出来ました」と礼を言う。

「ディアス様のおかげで？」
不思議そうに言うミュエルに、ケネスは視線をディアスからミュエルへと移した。

「ディアス将軍のご助言のおかげで勝つことが出来たんだよ」

「まぁ！」
ケネスの言葉に嬉しげに声を上げると、ミュエルは顔をほころばせてディアスを見つめた。
なんだかんだ言っても、やっぱり自分の夫はケネスを見捨てたりはしなかったのだ。そう思うと、自分がその妻だという事にも嬉しくなる。

だがそれに対しディアスはそ知らぬ顔である。
「さて、何の事かな？」
そう言うとディアスは、ミュエルの作ったチキンのミルクシチューを口に運んだのだった。

第２１話：償えぬ過ち

カーサス伯爵を歓迎する宴で、サルヴァ王子の後宮の寵姫であるアリシア・バオリスは、その王子の最も寵愛あつい寵姫セレーナと衝突した。そしてその後、彼女の取り巻き達からの嫌がらせに辟易していた。

取り巻きとはどの様な者達かといえば、王子からの寵愛をセレーナと争うのは諦め、その代わり彼女に取り入り、そのおこぼれに預かろうという者達である。

セレーナはかもすれば王妃にもなろうかと言われ、もし王子が他国の王女を娶る為と彼女を王妃にしなくとも、王妃よりセレーナを寵するのではないか、とも噂されていた。

もはや後宮でセレーナと寵愛を競おうなどという大それた者など存在せず、ある者はならばせめておこぼれに預かるべく近づき、ある者は万一の逆転に望みをかけ、彼女より先の懐妊に望みを託した。

その為、過去には他の男に通じて妊娠し、それを王子の子と偽った寵姫すら存在したのである。もっともこのたくらみは、その寵姫と男との間で、成功報酬について折り合いが付かず事が露見した。

「次期国王の子を産むとなればたんまり金が入るんだろ？」

そう言って金をせびる男に、始めはその寵姫も大人しく金を払っていたのだが、遂には払いきれなくなったのである。

確かにその寵姫の実家は裕福な伯爵家ではあったが、まさか、妊娠している子供の本当の父親に払うので金を送って欲しい。と言え

る訳も無い。
手持ちの金がなくなると支払いに窮したのである。

男と寵姫の、払え、払えない、というやり取りは何度も繰り返され、そして始めは慎重に連絡を取り合っていた2人だったが、長期のやり取りに、つい緊張の糸が切れ通常の手紙として相手に返事を送ってしまったのだ。

だが実は、後宮でやり取りされている手紙は、すべて後宮を管理する役人によって検閲されていたのである。

尊厳の侵害もはなはだしいが、万一重要な国家機密を漏らす事も考えられるし、また今回の様に王子以外の男と通じているという事を見張る為もあった。

役人は寵姫が出す手紙と寵姫宛てに届いた手紙の封印を、職人技ともいえる手際で痕跡を残さず開け、手紙を謁見し内容に問題がなければまた封印をおこなって、何食わぬ顔で手紙を元に戻すのである。

そして寵姫が孕んだ子供が、サルヴァ王子の子では無い事を掴んだのだった。

他の男の子供を王子の子と偽るなど、本来死罪となってもおかしくない大罪である。

しかし王子は事態をあまりにも馬鹿馬鹿しく感じ、また他の男の子供を自分の子と偽られたなど、自身の物笑いの種になると、事を秘匿する様に命じたのだった。

結局、王子の子は死産だったと公表され、寵姫は「その後」死産したショックから他の男と通じたとして後宮を追放された。
男は、王子の寵姫に手をつけたとしてその罪を問われたのだった。

ある時アリシアが、今日は冬にしては日差しが暖かく、散策するにはちょうど良いと珍しく庭に出てみると、遠くからクスクスという笑い声が聞こえる。
声のする先へと目を向けると、着飾った数人の女性が自分を見ていた。

「あれが地味で有名な……」
「私、下賤の娘が迷い込んで来たのかと思いましたわ」
「殿下も物好きな事でございますわね」

アリシアは、わざと自分に聞こえる様に喋っている女性達に一瞥をくれたが、相手をせずに無視をする事に決めた。
セレーナとの事もあり、自分とは相容れない人種なのだと判断していたのである。

せっかくの良い気分が台無しとなったと、後宮の建物にある自室へと向かったが、嘲笑を与えてくる寵姫達はなおも彼女の後を追った。
アリシアと同じ様に後宮へと足を向けながらも、繰り返し彼女を馬鹿にする様な事を言い続けているのだ。

気分を害して後宮へと進んだが、ここで足を速めるのも逃げる様で癪に障る。あえて急がず歩を進めていると、そこになんと親玉が現れた。

後宮へと向かうアリシアに対し、今まさにセレーナが後宮から出来てきたのである。思わず舌打ちをしそうになったが、それはさすがに下品すぎると我慢する。

挟み撃ちされた形になったが、我関せずとセレーナの横を通り過ぎ様としたのである。

しかし意外にもアリシアとセレーナの距離が縮みお互い間近まで近寄ると、セレーナは立ち止まった。しかも笑顔で、とは言えないが丁寧に
「こんにちは、アリシア様」と挨拶までしたのだった。

アリシアにとっては予想外と言っても生ぬるい。とてもとっさには反応できず、セレーナの顔にちらりと視線を向けただけで、つい無言でその横を通り過ぎてしまったのである。

だがこの事は、嘲笑を向けてきた寵姫達より遥かに彼女を傷つけた。

自分を嘲笑した寵姫達には、彼女達に対して「なんて嫌な女なんだろう」そう思うだけだった。しかし、セレーナの行動は、自分こそ嫌な女なのではないか。そう思わせるに十分だったのである。

アリシアはセレーナの横を通り過ぎた後、苛立った様な表情で後宮へと入ったのだった。

一方セレーナの方はと言えば、たとえ関係はどうあれ、挨拶くらいはすべき。そう考えたのだが、どうやら差し出がましかったらしい。と表情を曇らせていた。

そして改めて前を向くと寵姫仲間というべき女性達が居たので、彼女達へと近づき改めて笑顔で挨拶を行う。

「こんにちは、皆様」

すると寵姫達もセレーナに対し、口々に挨拶をする。

「セレーナ様。こんにちは」

「相変わらずお美しい事ですわね。羨ましいですわ」

「今日はいい天気で御座いますわね。セレーナ様も散策で御座いますか？」

「はい。そうです。皆様はもうお帰りですか？」

彼女達の足は、後宮へ向かっていたのでセレーナはそう思ったのだが、実際はアリシアを追いかけていただけであって、彼女達も後宮へ帰る積もりはない。

「いえ。セレーナ様が散歩なさるならご一緒しますわ」と、セレーナの取り巻きとしての存在意義を発揮する。

「それではご一緒しましょう」

こうしてセレーナを加えた一団は改めて庭へと向かったが、アリシアが彼女の挨拶を無視した事を、目ざとく見逃さなかった一人の寵姫が口を開く。

「セレーナ様が折角挨拶をして下さっているのに、まったくあの娘はなんて無礼なのでしょう」

するとすかさず他の寵姫達も便乗した。

「まったくですわ。下賤の身分の癖にサルヴァ殿下の寵を盾に身の程も弁えず、セレーナ様に無礼を働くなんて」
「いえ。殿下の寵などと言ったものではありませんわ。ただのもの珍しさに関心をお持ちになっているだけに決まっておりますのに」

彼女達は、セレーナの敵であるアリシアを扱き下ろす事は、彼女に対しての点数稼ぎになる。そう考えているのである。

もっとも彼女達にも誤解がある。

実際サルヴァ王子がアリシアの部屋へと足を向けたのは一度きりであり、目をかけているとはとても言えない状態だった。

セレーナがアリシアに対し危機感を持った事により、侍女へアリシアの事を調べる事を依頼し、そして侍女達の情報網からそれぞれの侍女の主人である寵姫に、王子がアリシアを寵愛している。という情報が伝わったのだった。

女達の情報伝達の速さは、男には計り知れないものがあるのだった。

だが、彼女達の追従に、セレーナは眉をひそめた。

セレーナとてアリシアの事は、自分の敵と認識している。

しかし戦うというならば本人と直接対決すべきであるし、サルヴァ王子からの寵愛を奪い合うというならば、アリシア以上に尽くすなり、王子の好みに合う様に努力するなりすべき。

それがセレーナの考えるアリシアとの戦いだったのである。

だいたい本人の居ないところで彼女への悪口を言っても。何も変

わる訳がない。むしろ自分の良心が痛むだけ。そう考えているのだった。

だが寵姫達に彼女の考えは理解できず、セレーナが表情を曇らせたのも自分達の都合の良いように解釈をした。

「あら。セレーナ様とあの女を比べるもの失礼でしたわね」
「これは失礼致しましたわ」
「セレーナ様には、あのような女の話を耳にするのもご不快ですのにね」

実際はアリシアの話と言うよりも、本人の居ないところでの悪口がセレーナの心に沿わないのであるが、寵姫達にとってアリシアの話はすなわちアリシアへの悪口である為、同じ事である。

「ええ。まぁ……」とセレーナにしては礼儀正しいとはいえない曖昧な返事をする事しか出来なかった。

そして話題を女性らしいお菓子やお茶の話へと変え、庭にたどり着いた彼女達は庭に備えられた椅子に座り、侍女に運ばせた話題通りのお菓子とお茶を楽しんだのだった。

挨拶をしてきたセレーナに対し、自身の心の狭さに自己嫌悪に沈んで自室に戻ったアリシアを、お付の侍女のライヤが待ち受けていた。

アリシアも一応は後宮の寵姫の一人である為、専任の侍女が付けられている。

もっとも他の寵姫達は自分の実家から侍女を呼び寄せており、王宮から侍女を派遣されている寵姫はアリシア一人だけだった。

しかもこの侍女は従順とは言い難く、隙を見ればサボってばかりだったのである。

だがライヤにも言い分はあった。

「どうして自分より身分の低い者に仕えなければならないのかしら」と。

王宮で働く侍女ともなればそれなりの身分の者しかなれない。

それなりと言っても、爵位のある貴族の子女とまでは行かないが、下級貴族や裕福な家などの「身元のはっきりとしている家」の出の者に限られている。

確かにアリシアの様な、下級貴族のさらに遠縁の両親も居ない娘と比べれば、身分が上と言えた。

だがアリシアにしてみれば、ずっとお付の侍女が自分の傍に居る事の方が煩わしく、必要のない時以外はどこかに行ってくれていた方が気が楽だった。

基本的に自分の身の回りの事は自分で出来るアリシアに取って、侍女が必要な事など殆どないのであるが。

その滅多に必要で無い侍女が部屋で待っていたのは、やはり滅多にない侍女にしか出来ない役目を果たす為だった。

とはいえ難しい仕事ではない。王宮に届いたアリシア宛の手紙を届けに来ただけである。

「お手紙が届いておりました」
どうやら自分より身分の低いアリシアを様を付けて呼ぶのも嫌らしく用件のみを口にするライヤから、アリシアは手紙を受け取った。
そしてあえてにこやかに口を開いた。
「それはありがとう御座います。ライヤさん」
我ながら人が悪いと思いながらも、先ほどセレーナからの挨拶を無視した事により、自分の狭量さを思い知らされたアリシアは、ライヤに対して同じ攻撃をしてみたのである。
ライヤはまさか丁寧にお礼を言われるとは思っても居なかったのか、目を逸らし
「いえ……」とだけ言うと、微かに頭を下げて部屋を後にした。
その背を苦笑しながら見送ったアリシアが手紙の送り主を見ると、恋人だったリヴァル・オルカの母親からだった。
彼女は、後宮に入った事で貰える年金の殆どを、オルカ家へ送っていたのである。その事についてのお礼の手紙だった。
リヴァルの母親は筆に優れた人と言う訳でもなく、送金について淡々と礼を言うのみの、ありふれた内容である。
にもかかわらずアリシアは、その手紙に書かれた些細な事に、目に涙を溢れさせた。
手紙の最後に「アリシア・オルカへ」と書かれていただけの事に。

アリシアが手紙を受け取る前日、ランリエル王国第一王子であるサルヴァ・アルディナは、執務室で後宮を管理する役人からお伺いを受けていた。

「私に確認したい事だと？」

役人は王子の問いかけに低頭し答える。

「はい。その通りで御座います」

「どの様な事だ？」

「はい。実は寵姫の一人であるアリシア・バオリス様の事で御座います」

「アリシアが何かしでかしたとでも言うのか？」

彼女に対し、あまり良い感情を持っていない王子は、偏見を持ちつつ役人に問いかけた。

役人は頭を下げたまま遠慮がちに口を開く。

「いえ……。しでかしたと言いましょうか。殿下がご認識していらっしゃるのかと思いまして……」

「ほう。私がどの様な事を認識しているというのだ？」

「はい。アリシア様は独身という事でしたが、実は結婚しているのではと。殿下がそれを承知していらっしゃるならよろしいのですが……」

後宮には未婚の女性だけではなく、未亡人や時には人妻まで入る事もある。アリシアが未亡人でも人妻でも問題はない。王子がそれ

を認識しているならば。

だが、後宮の主であるサルヴァ王子が、未婚と思っていたにも拘らず、そうでないなら大問題だった。

だが彼女の婚約者だったリヴァル・オルカは帝国との戦いで命を落とし、そして彼の兜は今も執務室に飾られている。

「いや、間違いなくアリシアは独身のはずだ」

と、返答した。だが役人は納得しかねる様に困惑した表情を見せた。

「しかし、この様な手紙がアリシア様のところに送られてきたのです」

「アリシアへ手紙が？」

「はい。これがその手紙です」

役人はそう言ってアリシア宛の手紙を差し出し、王子も受け取る。

人の手紙を読む後ろめたさを感じぬ訳ではないが、後宮とは、いや王宮とはそういうもの。個人の尊厳などよりも王族の知る権利の方が優先されるのだった。

手紙を一読した王子の顔色が蒼白に変わる。

常に泰然とし動じない王子の動揺に、役人はやはりと思いながら、口を開いた。。

「どうで御座いましょう。宛名の性がバオリスではなく、オルカと

なっているのです。これは結婚しているか未亡人であるか、という事ではないかと……」

「……あ、ああ」

そうは応じたものの、顔色を変えた理由は手紙の宛名についてではなかった、手紙の内容そのものについて王子は衝撃を受けたのだった。

「いかが致しましょう？　アリシア様は独身ではないかも知れないのですが宜しいでしょうか？」

「ああ、構わん」

と、返答したものの、王子の動揺は収まらない。声も僅かに震えていた。

「かしこまりました」

と役人は一礼したが、頭を上げた後困惑気味に王子へ視線を向けた。

「手紙をお返し頂けますでしょうか……。問題が無いのならばアリシア様へ届けなければなりません」

「そうだな。すまん」

王子はそう言うと、震える手で手紙を役人へと差し出した。

知略、武勇に優れたサルヴァ王子ともあろう者が、手紙を返さなくてはならないという事を失念していたのである。

「それでは失礼致します」

役人は再度一礼し王子の執務室を後にする。

そして王子の態度について次の様な感想を持ったのだった。

やれやれ、サルヴァ王子のあの様子では、きっと本当はアリシアが独身で無いとは知らなかったに違いない。それをあそこまで取り乱しながらも許すとは、そこまでアリシアに溺れているのか。

執務室に残されたサルヴァ王子は、アリシアに対して行った自分のさまざまな仕打ちを思い出していた。

アリシアが後宮に来たのは金に目が眩んだ為と思っていたのだ。だがそれは両親を、それもリヴァル・オルカの両親を養う為だったのである。

にもかかわらず王子はアリシアの身体を汚し、さらに売女と罵倒し、廊下ではその衣服を引き裂いたのである。

王子の胸中に飛来したのは、深い慚愧の念だった。

決して犯してはならない愚かな過ちに、戦場の雄であるサルヴァ・アルディナは全身を苛まれたのだった。

拳を握り締め、唇を噛み締める王子の背後に、リヴァル・オルカの兜が鈍く光っていた。

第２２話：叛乱（１）

その日、サルヴァ王子は、執務室でカーサス伯爵からの報告を受けていた。

ランリエルとカルデイ帝国との関係に、楔を打ち込もうとする者達の調査を命じていたのだ。

伯爵はサルヴァ王子が主催した宴の後、あえて定まった住居を持たず、自分にすり寄ってくるランリエル貴族からの招きに応じ、その者達の屋敷を転々としていたのである。

屋敷に招く以上、本心から歓迎しているか、さもなくば伯爵を失脚させる為手元に置いて探ろうとするかの、どちらかだろう。

自分を失脚させようとする者を探るのに大胆な、害される事を考えないのか？　とも思われるが

「表立ってサルヴァ王子に敵対せず、影から足を引っ張ろうとしている者がその様な手段には出るまい」

と高をくくっていた。この点伯爵も胆力に優れている。

もっとも貴族達の屋敷を渡り歩くのに、次はどの貴族の屋敷に招かれているかを、周囲の者達に明らかにする事も怠らない。

「もし屋敷に誘き寄せて私を害する気でも、私が屋敷に入る事はみなも知っている。人知れず葬る事など不可能ですよ」という牽制である。

慎重さを兼ね備えない大胆な行動など、匹夫の勇というものだ。

屋敷に客を招くならば屋敷の主人が客を持て成すのは当然である。

カーサス伯爵は屋敷の主人と会食し、時には共に乗馬を楽しみながら、その人となりと自分に接近する思惑などを探った。

だが腹に一物持つ者が容易に馬脚を現す筈が無い。むしろ滞在中よりも屋敷を辞した後、その屋敷を配下の者に探らせたのである。

伯爵に取り入ると言う事は、必然その後ろ盾であるサルヴァ王子に取り入る事である。その様は者達は成果を独り占めしたいものだ。

だが王子に対抗しようとする者は仲間を必要とする。現在ランリエルで単独で王子に立ち向かえる者など存在しない。

伯爵が屋敷を出た後、仲間が集まり、どの様な事が探れたか検討するはずである。

伯爵は自分が屋敷を出た後、にわかに人の出入りが多くなった貴族をリストにし、さらに客達も調べ上げた。そして同じ人物が客として訪れる屋敷の主を改めて調査したのである。

こうして炙り出された王子に敵対する者達の中には、かなりの大物も多く含まれていたのだ。

「ガスパーレ・ガリバルディ公爵に、ロターリォ・バリオーニ公爵、それにライモンド・アラビーソ侯爵か。2公爵、1侯爵とは中々壮観ではないか」

楽観できる状況とは思えぬが、伯爵には、王子の声がどこか楽しげにすら聞こえた。

「はい。もっともバリオーニ公爵は爵位は最高位でも最近では落ちぶれ、彼らの盟主といえるのは実力と爵位を兼ね備えたガリバルディ公爵と思われます」

「そうであろうな。そしてその下に無数の貴族達と言う訳か」

「はい。その通りです」

伯爵は、サルヴァ王子に首肯する。

もっともこの事については王子の予想の範囲内だった。次期国王であるサルヴァ王子に敵対するならば、自身も相応の力を集結させねば不可能だろう。

それよりも、王子に意外と思わせる者が含まれていた。

「ララディがか……」

「……はい」

またもや頷く伯爵だったが、その声は幾分遠慮がちだった。

ジェレリ・ララディ将軍は、サルヴァ王子がランリエル軍の総司令になる前の一軍の司令でしかなかった時から王子に仕え、常に先鋒を任されてきた猛将である。

確かに思慮深いといえる者ではないが、彼の打撃力を評価し信頼もしていたのだ。それが、まさかララディまで自分に敵対するとは……。

その為、カーサス伯爵が実は自分の陣営を混乱させる為の反間（二重スパイ）ではないのか。と一瞬疑ったほどだ。だが、それにしてはランリエルに亡命までした伯爵の行動の合点が行かない。

いくら不快でも、現実は直視せねばならず、ララディが自分に敵するという事を認めない訳にはいくまい。

問題は炙り出した者達をどう処遇するかだったが、これについてはすでに王子は決断していた。

バルバールとの戦いの最中、後方から打たれては致命傷ともなりかねない。その戦いの前に片付けてしまわなくてはならないのだ。

つまりサルヴァ王子は、今の内に彼らを挙兵させて一網打尽にしようと考えていた。

その事でバルバール侵攻が予定より遅れても仕方があるまい。すべてが自身の思い通りに行くと考えるほど王子は夢想家ではない。

侵攻が不可能となるよりはマシというものである。

そうなれば次に問題となるのは、どの様にして彼らを暴発させるかだった。それには、彼らに十分勝算がある、そう思わせねばなるまい。

勿論、彼らとて王位を簒奪する気はさらさらないだろう。何せサルヴァ王子はその呼び名が示す通り王子であって国王では無いのだ。

王子を捕らえ「精神の御病気になられた」とでも言って幽閉し、帝国対策の実権を握る事を考えていると思われる。

さもなくばいっその事、王子を亡き者にするかだ。殺した後でどうとでも理由は付けられるのである。

精々王子を捕らえる事が容易と思わせなくてはならない。

だがこのランリエル王都フォルキアでそれは不可能である。

王子は情勢を鑑みて軽々しくは王城の外に出ないようにしていた。

また、王城の内部に臣下が私兵を連れてくる事は出来ない。

狙うならば王都の外で行わなくてはならない。

「貴公は中々役に立つ者を多く召抱えている様だな」
勿論、伯爵が今回貴族達を調査させた者達のことである。

「その者達にはすまないが、もう一働きして貰おうか」

伯爵は王子との以前の会話を思い出し、確かにこき使われる。と考えながら深々と一礼した。

数日後、サルヴァ王子がカルデイ帝都ダエンに座するベネガス皇帝を訪問すると発表された。

帝国を威圧する為ではなく、あくまで親善を目的とした訪問である。その為万の軍勢は必要としないが、帝国には王子を敵視する貴族も多い。
その為、５千の軍勢を率いて向かう事となった。

随員はカーサス伯爵を含めた６名の文官。そして王子の配下の武将としてララディ将軍とならぶギラルデ・ムウリ将軍以下８名の武官である。
勇名を馳せるララディ将軍は随員とはならなかった。

「今回は帝国と戦う為に行くのではない。貴公がくれば戦いになりかねんからな」
サルヴァ王子は冗談めかして猛将にそう言い渡し、残留を命じたのだった。

王子が出立してから間もなく、王都ではこの様な事が囁かれる様になった。
「サルヴァ殿下は、帝国に僅か数千の軍勢で向かわれたが大丈夫だろうか？　もし王子に反感を持つ帝国貴族達に国境を封鎖されては、

帝国国内に立ち往生しよう。その様な事があれば、王子は敵の多い帝国国内で孤立する。お命も危ないのではあるまいか」

だがサルヴァ王子の一行は、その危険性にまるで気付いていないかの様に帝国国内を進み、１８日をかけて帝都ダエンへとたどり着いた。

「ベネガス皇帝にはご機嫌麗しく」

サルヴァ王子はカルデイ皇室の謁見の間で、カルデイ皇帝に対して跪いて恭しく一礼し、さらに長々と口上をたれた。

相手は皇帝、サルヴァ王子はあくまで王子。当然の礼節である。

もっとも前回２人が顔を合わせた時は、実質帝国の降服宣言である和平の誓約書に署名しあった時だった。その時はサルヴァ王子は勝者であり、ベネガス皇帝は敗者だった事を思えば、礼節の馬鹿馬鹿しさを思わずにはいられない。

いや、この状況をもっとも奇異に感じているのは当のカルデイ皇帝ベネガスだっただろう。

彼は王子の訪問の目的を、自身の廃位なのではないかと戦々恐々としていたのである。自分の死命を制する者に跪かれる居心地の悪さに、カルデイ皇帝は身じろぎした。

「サルヴァ殿下は大切な御客人、いつまでも跪いておらず寛(くつろ)がれよ」

あまりの居たたまれなさにベネガス皇帝は促したが、王子は応じず、

「いえ。ベネガス皇帝は我が父とも思う方。そうは参りますまい」

とさらに口上を続けたのである。

ベネガス皇帝の心理を察せられない王子ではないが、ここで尊大に振舞えば帝国貴族に無用の反感を覚えさせる事になるだろう。それは避けるべきだった。

結局ベネガス皇帝からの再三の言葉により、場の空気が王子への反感から、情けない皇帝よ。と矛先が変わるのを十分に確認してから跪くのを止めたのである。

その後ベネガス皇帝は連日贅を尽くした大宴を行い、王子の機嫌を取ろうとした。

当然帝国臣下達は財政難のおりに贅沢な、と渋い顔となったが、王子は抜け目無くその批判が自分へと向く前に手を打った。

「宴ばかりでは身体が訛ってしまいますので、明日は狩りにでもまいりましょう」

とベネガス皇帝に進言したのである。

臣下達は、王子は別に宴を欲してはいなかったのだと思い、無用の大宴で浪費したとベネガス皇帝へと白い目を向けたのだった。

そしてこの様な日々が続く中、王子が不在のランリエルでも動きがあった。

ガリバルディ公爵を中心とした、反サルヴァ王子の貴族達が挙兵したのである。

はじめは彼らも挙兵までは考えてはいなかった。

例の帝国貴族達が国境を閉鎖すれば王子の命が危険である。という流言の通りに事が起こるのを密かに期待していただけだったのだ。

もし流言の通りになればすべての問題は解決するのである。王子が亡くなればその責任を糾弾して改めて帝国に侵攻し、帝国貴族達から領地を取り上げてしまえば良いのだ。

しかし一向に帝国貴族達は立ち上がらず、国境を封鎖しない。もっとも帝国貴族達が行動に移さないのはサルヴァ王子の予想通りだった。

反王子の貴族達は流言に惑わされたが、ランリエル国境付近の貴族が国境を封鎖するのは現実的には困難なのである。

現在帝国には数多くの独立国が乱立しているが、その国々が成り立つのはランリエルの後ろ盾があってこそに他ならない。自然独立国はランリエル国境側に多く集中していた。

勿論、国境が独立国で埋め尽くされている訳ではないが、帝国貴族達が国境を封鎖しようとするのを妨げる程度の勢力は十分にある。

その為、国境は封鎖されずにいるのだが、反王子の貴族達にとってはなまじ期待しただけに落胆も大きい。だが、それでもまだ彼らとて挙兵に踏切るまでには至らない。

そこへまた新たな話が伝わってきた。

「サルヴァ王子は帝国貴族達と宴に狩にと親交を深めている。カーサス伯爵の様に、領地ともどもランリエルに属する事を欲する者達も、今後増えるのではないか？」

勿論この流言もカーサス伯爵配下の者達の仕業であるが、反王子の貴族達には面白い話ではない。

本来ランリエルにとっては好ましい話だが、彼らの主張は帝国貴族達から領地を取り上げろ。というものだ。それが帝国からランリエルに鞍替えされては領地を取り上げる事が出来なくなる。

いくら新参とはいえ名目上ランリエル貴族の領地を攻め取るのは、彼らも無理があると認めざるを得ないのである。

しかしまた流言である。

「いや。確かにランリエルに組しようとする帝国貴族もいるが、多くの帝国貴族はやはり王子に反感を持っている。むしろランリエルに組する貴族の出現を彼らは苦々しく思い、さらに不満を募らせている」

反王子の貴族達はこの話に安心したが、すぐに別の話も伝わってくる。

「多少の帝国貴族達が不満を募らせたところで何ほどの事も無い。実際ランリエルに組しようとする帝国貴族は日々増えているのだ」

王子は、貴族達を落胆させる話と安心させる話を交互に流させたのである。

流言に一喜一憂する彼らは、次第に今この時こそが千載一遇の機会であると錯覚した。

そして遂に、

「王子に反感をもつ帝国貴族達が挙兵に踏切れぬのは、万一王子に逃げおおせられた場合の事を恐れているのだ。何せ失敗すれば後が無いのだからな」

という流言に彼らは挙兵を決意したのだった。

挙兵するといっても国境を封鎖するだけで良いのである。王子の首は帝国貴族が取ってくれる。

国境閉鎖に関しては「ランリエルに不満を持つ帝国貴族が攻め寄せてくる、という情報が入った為」

と宣伝した。だがサルヴァ王子が帰国しようとしても通す積もりはない。

何かと理由をつけて追い返す考えだった。

ガリバルディ公爵を筆頭とする彼らは私兵を中心に兵士を集め、さらにラフラディ将軍など武官は指揮下の軍勢をも動員した。

軍隊において上官の命令は絶対である。出陣と言われれば従わざるを得ない。

もっともその上官は総司令官に弓引こうというのだが……。

反王子の貴族達が集めた軍勢は2万5千。

稀代の名将と呼ばれるサルヴァ王子とて、5千対2万5千では敵すべくもない。

いや、険阻な地形の国境で守りを固める2万5千に、5千で攻め勝てると本気で考えるなら、そもそも名将というに値しない。あまりにも非現実的である。

ランリエル国内には他に10万の軍勢が控えているが、それらの兵は動きようが無い。

ガリバルディ公爵は国内屈指の実力者である。もし公爵に敵対し、彼の唱える国境封鎖の理由が事実であれば、後々どの様な処罰が下されるか。

勿論、総司令官であるサルヴァ王子からの命令があれば動くのだが、当の王子は帝国国内に留められているのである。

だが、この状況に国王であるクレックス王が動かない訳は無い。ガリバルディ公爵を呼び寄せ問いただした。

サルヴァ王子と13歳しか違わぬ金髪碧眼の国王は、我が子の危機に普段の温厚さをかなぐり捨てて公爵に怒鳴りつけた。

「王子が帝国へと向かっていると言うのに、国境を封鎖するとはいかな所存か！」

「それは誤解で御座います。帝国に不穏な動きがある為、国境を固めただけで、むしろ王子が御帰国なさるのをお助けする所存」

「誠であろうな！」

「勿論で御座います」

「しかし他の者は、公爵が王子を害そうとしていると申しておるのだぞ！」

「それは私を陥れ様としている者の讒言で御座います」

とガリバルディ公爵は、国王からの追及をのらりくらりとかわし、その日は何とか追求から逃げおおせる事に成功した。

そしてこれ以上追求されてはボロが出かねないと、自身も国境へと向かい軍勢と合流したのである。勿論、バリオーニ公爵やアラビーソ侯爵を筆頭に主だった者達も追求を逃れる為、こぞって出陣した。

クレックス王は国境へと使者を派遣し公爵達を再度召喚しようと

したが、彼らはそれに対しなにやと理由をつけて応じず国境を固め続けたのである。

こうしてサルヴァ王子とその軍勢は帝国国内で孤立したのだった。

第２２話：叛乱（２）

「思ったより少ないものだったな」

これが挙兵した、反王子貴族連合の陣容を聞いたサルヴァ王子の第一声である。

「貴公ならば５千で２万５千に勝てるか？」

思ったより少ないと言いながら、にもかかわらず勝つのは難しいだろうと含みを持たせたサルヴァ王子の問いに、カーサス伯爵は苦笑した。

「到底無理ですな。それに、そもそも私は軍人ではありません」

「確かに」と応じる王子にも苦笑が浮かぶ。

王子が率いる５千に対し貴族連合は２万５千。

到底勝ち目は無いが、しかし伯爵はこの点は心配してはいなかった。貴族達の挙兵は王子が仕掛けたと言って良い。

それが挙兵されたので手も足も出ない。ではあまりにも馬鹿げた話だった。

目下の問題は帝国貴族達への対応だった。

「彼らの反応は？」

「やはり動揺が見られます。影ではこの機会に殿下を害しようという者も多く居るようです」

王子の後ろ盾無くば、帝国貴族達に真っ先に攻め寄せられるであろうカーサス伯爵だが、落ち着いた表情を崩さない。

軍事費を削られ兵力が激減しているカルデイ帝国だが、王子に反感を持つ貴族隊の私兵が集結すれば十分王子の５千を凌駕する。

しかし帝国貴族達はカルデイ帝都ダエンにサルヴァ王子が来訪する、という事で大半が王都に来ていたが、僅かばかりの護衛だけで私兵の大半は領地に留めてある。

これ幸いと王子を襲うにしても、領地から兵を呼び寄せねばなるまい。

王子はその前に手を打つ必要があった。

「しかし私を討とうとは、帝国貴族達も自分の立場を正確に理解していない様だな」

「先の戦いでの敗者であるという立場ですかな？」

伯爵の声には意外そうな響きが含まれていた。

立場と言うなら、今現在の王子の立場の方が弱いはず。それをそんな「過去」の勝敗を盾に立場を主張しても仕方が有るまい。

僅かながら、王子を見損なっていたか？　と王子を後ろ盾にしようとした自らの判断に伯爵も疑いを持った程である。

だがその伯爵に対し、王子は伯爵の心中を覗いた様に「ふっ」と微かに笑った。

今まで表情を崩さなかった伯爵に僅かながら動揺が走る。王子に失望されたかの様な気がしたのである。

伯爵の動揺に、サルヴァ王子は皮肉な笑みを浮かべた。
「彼らに自分達の立場を教えてやろうではないか。そして彼らにとって私がどういう存在なのかもな」

そして王子はカーサス伯爵に命じ、帝国貴族達を集めさせたのだった。

帝国貴族達は謁見の間に集められた。
王座にはカルデイ帝国国王ベネガスが座し、その横にサルヴァ王子が控えている。

集まった帝国貴族達はざわざわと落ち着きが無い。
自国の貴族からも見放されて何を偉そうに、と王子を蔑む者も居れば、もしや自分達が敵対し兵を集める前にここで一網打尽にする積もりか、と戦々恐々とする者も居た。

王子はざわめく彼らに一遍の誓紙を掲げる。
「これはカルデイ帝国とランリエル王国との和平の誓紙である！両国は信義によりこの和平の条約を守らなくてはならない！」

しかし帝国貴族達は冷ややかな目で王子を見つめる。
所詮ランリエルに利する条約ではないか。帝国にしてみれば破れるものなら破りたい条約である。もし、その条約を盾に自分の身の安全を保障しろと主張するならば、阿呆としか言いようが無い。

だが王子は冷ややかな視線が集中する中、平然と言葉を続けた。

「この条約を破り、両国の友好を乱そうとした帝国貴族達を私は討ってきた。そして今、ランリエル国内にも両国の友好を乱す者が現れた。彼らはこう主張しているのだ！　帝国貴族の領地などすべて取り上げ、ランリエル貴族で分配すれば良いのだと！」

王子の言葉に帝国貴族達はざわついた。

今までランリエルに跪く屈辱に耐えてきたのは、ひとえに先祖代々の領地を守らんが為。それを取り上げ様と言うのか！

だが王子の次の言葉に、帝国貴族達はさらに戸惑う事となった。

「和平の条約により帝国貴族の権利を守る為、私は彼らを討つ！」

カルデイ帝国を討伐したサルヴァ王子は、彼らにとって不倶戴天の敵である。

だが、領地を守る為には王子に勝って貰わなくてはならないとは、何という皮肉な状況であろう。

そこへ王子の更なる言葉が発せられ、帝国貴族達はどよめいた。

「そこで貴公らに依頼したい事がある。和平の条約を守る義務があるのはランリエルのみではなく帝国も同じ事。貴公らに出陣を要請する！」

かつてランリエル王国とカルデイ帝国との戦いは両国共々完全併呑を目指し、そして失敗してきた。

その事を考えれば今王子が討たれ、ランリエルによる帝国完全併呑を目指したとしても、やはり失敗するのではないか？　ならば王

子を討たせる方が帝国の為でもある。
そうとも考えられるが、現在は過去とは違う要素が含まれている。

それは帝国内に乱立した独立国の存在である。
王子が討たれランリエルと帝国との総力戦なった時、独立国はどう動くのか？

恥を忍んで帝国へと帰属するのか、ランリエルへと擦り寄るのか、それとも独立を守りむしろ領土拡大に乗り出すか。

しかも独立国は一国だけではない。それぞれがそれぞれの思惑に従い動くだろう。サルヴァ王子ですら容易には結末を見通す事が出来ない。

サルヴァ王子が討たれた後の激流を泳ぎきり、生き残る事が出来るだろうか？
泳ぎ切れれば良いが激流に飲まれればお仕舞いである。泳ぎきる自身がないならばサルヴァ王子を助けるべきではないか？

しかし王子の味方をするには
「どうして帝国を討伐した王子の為に、命を掛けて戦わなくてはならないのか」という心情的な抵抗がある。それゆえ帝国貴族達は自らの立場を決めかね、王子の言葉に即答出来なかったのである。

そこへ、彼らの心中を見通しているかの様に王子は次の言葉を続けた。

「何も反乱を起したランリエル貴族を貴公らに討伐して欲しいという訳ではない。貴公らには帝国側国境から奴らを牽制して貰えれば十分だ」

戦う必要が無いならば……。と、条件を下げて来た王子に彼らの気持ちは揺れ動いたが、まだ自らの去就を定めかねた。

そこへ突如、帝国貴族の列から声が上がった。

「それだけで良いのならば、出陣いたしましょう」

みなの視線が声の主に集中する。

「それはありがたい。失礼だが貴公の名をお聞かせ願えるか」

王子の問いに、その貴族は一礼して名乗る。

「マルシアル・セディーヨ子爵で御座います」

「では、セディーヨ子爵。よろしく頼む」

「かしこまりました。なに、和平の条約を厳守するのに協力しなかったと、後になって討伐されてはたまりませんからな」

「あっははは！　それは考えすぎと言うものだ。私はそれほど悪辣ではないぞ」

セディーヨ子爵とサルヴァ王子の応酬は十分冗談めかされていたが、帝国貴族達をギクリとさせるには十分だった。

王子に協力せねば、後々自分が討伐される事もあり得るのだろうか？　いや、それは王子も否定している。だがしかし……。と、彼らは心中穏やかではいられない。

そこへ更なる声が上がる。

「セルヒオ・イグレシア伯爵と申す。私も出陣させて頂こう！」

今度はみなの視線がイグレシア伯爵へと集中する。そしてそれを機に、乗り遅れてはならじと、あちこちで声が上がり始めたのだった。

王子に、帝国貴族達の力を借りて反乱軍を倒す積もりはない。反乱軍は自分の力で倒す。

戦力的な事だけを考えれば、実は反乱軍を討伐するのに帝国貴族達の協力は必要ない。彼らを味方につけたのはむしろ敵に回らせない為、と言って良い。

サルヴァ王子には、それよりも実績を作った事の方が意義は大きかった。

かつてカーサス伯爵の領土問題について、帝国国内の領土問題をランリエルの王子が決裁したという事に続き、ランリエルの王子の求めに帝国貴族達が出陣した。という実績をである。

この結果に満足し、謁見の間を後にしたサルヴァ王子が廊下を進むと、一人の男が廊下のすみに佇んでいるのに気付いた。

王子はその男を良く知っていた。エティエ・ギリス。帝国軍総司令。

帝国との最終決戦時に、サルヴァ王子を敗死寸前にまで追い詰めた人物だった。王子より僅かながら背は低いが引き締まった身体は見劣りしない。短い黒髪と黒い瞳の３０代半ばの男である。

自分を追い詰めたギリスであるが、その事について彼を恨んではいない。むしろ配下の将軍として招こうとしたほどである。

実のところギリスは作戦立案能力においてサルヴァ王子に劣るだろう。前線指揮においても、王子や老将グレヴィに一歩譲る。

では何を持ってギリスがサルヴァ王子を敗北寸前まで追い詰めたかと言えば、それは類稀なる洞察力によって王子必勝の秘策を看破したが為だった。

王子がギリスの佇むところまで来ると、彼は一礼して挨拶した。

「殿下。お久しぶりです」

「ああ。将軍も御健勝なによりだ」

「はい。御蔭様で」

ギリスはそう言って再度軽く一礼した。

「それはそうと、カーサス伯爵とはセディーヨ子爵は領地も近く親しくしておいでの様ですな」

ギリスの目が、探る様に王子の目を捉える。

「なに。それは偶然というものだろう」

そう応じたものの、言い終わる頃にはサルヴァ王子の顔に微かに不快な色が浮かんでいる。王子の言葉にギリスが苦笑を浮かべたからである。

「いずれまた、酒でも酌み交わそう」

王子はそう言ってギリスから背を向け、この場を後にした。その言葉は本心ではあったが、今それを行う気分ではなかった。ギリスに一本取られた後では。

セディーヨ子爵はカルデイでは目立った存在ではない。
それぞれの友好関係、血縁関係に目ざとい貴族達がとっさにカーサス伯爵とセディーヨ子爵との関係に気付かないくらいに。
ましてや武人であるギリスが、セディーヨ子爵の領地の場所など把握している訳は無いのだった。

そうセディーヨ子爵はカーサス伯爵を通じて以前より王子と接触していたのだ。いやそれどころかイグレシア伯爵もである。

帝国貴族達を謁見の間に召集する前に、彼らは呼び出され王子と打ち合わせを行っていたのだ。
勿論、セディーヨ子爵と王子との、冗談めかした掛け合いも含めてだった。

ギリスはサルヴァ王子の後姿を見送りながら、押し付けられた面倒について頭を巡らしていた。

今回王子の求めにしたがって多くの帝国貴族が出陣する。
帝国は軍事費を大幅に削られ、さらに多くの有力貴族が独立国として離反しているが、それでも反乱軍の2万5千は超えるだろう。

だが、なまじ反乱軍より多い為、勝算ありと、サルヴァ王子に取り入る積もりで抜け駆けして手柄を立て様とする者達も現れかねない。

その者が戦死しようが自業自得であるが、他の者まで巻き添えになる可能性もある。ギリスも同行し精々彼らを監督しなくてはならない。

サルヴァ王子に対して、一矢報いたくなるのも当然だった。そして多少は溜飲が下がったギリスは自らの執務室へと向かった。

今回の出兵に対して実行計画を立てる為である。

第２３話：反乱の余波

ランリエル王国で内乱が発生したという情報はバルバールにも伝わっていた。

バルバール軍ではその対策ついて検討する為、幕僚達を招集しディアスは軍議を開いた。

「みなも既に知っているだろうが、ランリエルで内乱が発生した。我々はどうすべきかを検討したい。意見のある者はいるか？」

ディアスが幕僚達を見渡すと早速活発に発言がなされた。

「いずれランリエルと戦いになるのは目に見えています。ならばこれを好機に、こちらから攻め込むべきでしょう」

「ランリエルを攻めるといっても大義名分がありません」

「奴らが我が国を攻める為の準備を進めているのは歴然。それを攻めるに大義名分など不要でしょう」

「攻めるのは良いとしても、二派に分かれた奴らの両方と戦っても仕方があるまい。どちらかと手を組むことを考えるべきだ」

「ではどちらと組むべきか？」

「それは当然劣勢な側に付く事により、戦いを長引かせランリエルを疲弊させるべきだ」

「いや戦を長引かせると言っても永遠に続けられるわけも有るまい。優勢な側に付き、友好関係を築くべきだ」

「その様な甘い考えが通用するか！」

「戦いを長引かせるなどと言う方が非現実的だ！　永遠に戦い続ける訳もないのだからな。戦いの決着が付いた時、不要に恨みを買うだけではないか！」

議論は次第に白熱して行くが容易に結論は出ない。

ディアスは問題を整理し、そして自分の意見を述べるべく口を開いた。

「みなの意見は介入すべし、という事で異論なさそうだな。私としても介入すべきとは思う。そして手を組むならば反乱軍側だろう」

「では、総司令官は反乱軍側が勝利する目算が高いと仰るのですか？」

「いや、反乱軍が勝つ確立はかなり低いだろうね」

幕僚の1人の問いかけに平然と答えたディアスの言葉に、諸将にどよめきが広がる。何せ状況は圧倒的にサルヴァ王子が不利と思われているからだ。そもそも反乱軍は勝算高しと考えたゆえに行動を起したのだから当然だった。

「ですがどうやって、サルヴァ王子はこの状況をひっくり返す事が出来ると言うのです？　サルヴァ王子が率いる軍勢は僅か5千。反乱軍は2万5千。しかも王子は帝国国内に閉じ込められています。そして帝国貴族にとってサルヴァ王子は亡国の仇敵。まさに絶体絶

命と言って良い状況です」

「確かに状況はサルヴァ王子に有利とは言いがたい。帝国貴族達が敵対すれば王子の勝利は難しいだろう。だが帝国貴族達にとって王子を倒す事が自身のためだろうか？　反乱軍は帝国の領地をランリエル貴族で分配すべきと唱えている。彼らにとって王子を倒す事は決してためにならない。それどころか……」

だがそこに突然急報がもたらされた。扉をノックする事のなしに飛び込んだ伝令の騎士は、帝国貴族の軍勢が、サルヴァ王子に向けてではなくランリエルとの国境に向けて進軍を開始した。と伝えてきたのだった。

その報告に諸将は驚きそしてどよめいた。そしてディアスは、説明ぐらい最後までさせてくれと肩をすくめた。

「まあ……と言う訳だ。こうなっては反乱軍の勝算は低い。だがとはいえ今更手も引けないだろう」

そこに今まで沈黙していたグレイス将軍が口を開いた。

「総司令官の御明察恐れ入ります。確かにこうなっては反乱軍の勝算は低いでしょう。ですが総司令はそれを理解した上で反乱軍と手を組もうと仰る。どういう事でしょうか。ご説明をして頂けますでしょうか」

みなの疑問を代弁するグレイスの言葉に、ディアスは諸将を見渡しその考えを披露する。

「必要なのは勝つ事じゃない。勝って何を手に入れられるかだ。サ

ルヴァ王子と手を組み勝ったところで何を手に入れる事が出来る？
あの王子が我々に感謝してバルバール攻めを止めるようなタマか？　だが反乱軍側が勝てばランリエルと帝国との間で戦いが生じ、バルバール攻めどころではない。勝っても何の利益も無い確実な戦いと、勝てば得られる物が大きい勝算が低い戦い。介入するというならば後者しかないだろう」

ディアスの説明に多くの者は納得したが、それでも納得しない者。いや、新たな懸念を感じた者がディアスに問いかけた。

「確かにみなの意見は介入すべしでした。ですが、勝算が低いのならばいっその事介入自体を止める事も、改めて考えるべきなのではないでしょうか？　勝算の低い戦いを行い、兵を損ねるべきではないと愚考いたします」

別に愚行とも思っていないだろうに。と思わず考えたディアスだったが、表面上はおくびにも出さず答える。

「もちろん、戦った挙句負けてしまい損害を受けただけ、となるのは馬鹿馬鹿しい。それゆえに参戦するタイミングが重要だ。勝算が低いなりにそれでも最も勝算が高い時を狙って参戦すべきだ」

ディアスの言葉は最もだが、それゆえに決して無能ではない諸将からすれば言われるまでもない事でもある。ディアスにとっても前置きの言葉に過ぎない。

「サルヴァ王子の軍勢が反乱軍と戦闘を開始した、その時を狙って介入する。反乱軍は元々サルヴァ王子を国内に戻さぬ為の布陣だ。守りを固めている。たとえ兵力でサルヴァ王子、帝国貴族連合軍が勝っていようとも、数日で勝敗が決する事はない。そしてその時狙

うのは……帝国だ」

「帝国ですと！？」

思いがけないディアスの示唆する攻撃目標に、諸将は驚きの声をあげる。

「ああ、帝国本国が攻められれば彼らも王子への支援ばかりはしていられないだろう。隣人の火事の火消しにかまけて自宅の消化を怠る訳には行かないのだからな」

「その理屈は分かります。ですが……」

バルバールに対し、なんら敵対行為を取った事がない帝国を攻めると言う言葉に、諸将は二の足を踏んでいるのだ。ディアスは再度みなを見渡し答える。

「確かにみなが躊躇するのも分かるが、なあに、現在ランリエル軍の何割かは、帝国からランリエルに対して支払われる賠償金によって養われている。そのランリエル軍がバルバールを攻めようとしているのはほぼ確実。帝国がバルバールに敵対していない、とはいえまいよ」

ディアスの言葉は詭弁に過ぎないが、諸将は無理やり自身を納得させた。あえてディアスの欺瞞に乗ったのだ。もっともディアス自身は自分の言葉に騙されたりはしていない。

ディアスの考えは基本的に、バルバール軍の存在理由はバルバール王国及びその国民を守る事。という事だ。その為には他国を攻めるのに躊躇はしない。所詮軍人など人殺しなのである。人殺しが良

い人やましてや人格者と呼ばれたいなど、あまりにもずうずうしいと言うものだった。

バルバールが生き残る為には帝国を攻めるのが必要なのである。帝国を攻めれば当然その民にも被害は出る。しかしそれを躊躇した挙句ランリエルに攻められ、バルバールの民に被害が出ては、何の為のバルバール軍なのか？

帝国を攻めない事によって、自分の命を失うだけで済むのならば好きにすればよい。だがバルバールの民の命が失われてしまうとあっては、自己満足どころの話ではない。

もっともディアス自身は達観しているが、他の人間がどう考えるかまでは責任はもてない。苦しい言い分でも精々逃げ道を作ってやるべきだった。そしてその逃げ道を通り抜けた者の１人が、ディアスにその先の質問を投げかけた。

「ですが、ランリエルを越えて帝国を攻めるとするならば、海軍による兵員輸送に頼るしかありません。それでは精々１万が限度。帝国は現在大幅に国力が低下しているとはいえ、元はランリエルに匹敵する大国。今ですら我が方に匹敵する動員力は維持しておりましょう。それを海からの１万だけでは……勝算はお有りでしょうか？」

「なあに『必ず勝てる』」

おそらく数倍の敵軍を相手にせねばならないであろうこの状況で、必勝を言い切るディアスにみなが目を見張った。ディアスはその視線を満足げに受け止めると、ずっと背後に控えていた従者であるケネスに振り返った。

「帝国沿岸部の地図と、机上演習用の駒を用意してくれ」

諸将との軍議の後、残務も片付けたディアスとケネスは自邸へと向かう。その途上馬上のディアスにその轡を取るケネスが問いかけた。

「ランリエルとの戦いは来年の春になると思ってたんですけど、この分では早まるようですね」

「ああ、向こうの準備が整い次第攻めてくるという予想だったのが、向こうの内乱に乗じて逆に我々が攻め込む事になりそうだからね」

戦いは近づくというのにいつも通り特に気負った態を感じさせぬディアスに、ケネスは見上げ遠慮がちに口を開いた。

「ですがそれでは……」

「それでは、なんだ？」

「ミュエルとの結婚は、如何なさる御積もりですか？」

すでにほとんどディアスの妻として扱われているミュエルだったが、実際結婚式は来年の2月を予定している。そして式を行い神の前で誓いを立ててこそ正式な夫婦となるのである。だからそれが中止とは行かないまでも、延期となればミュエルが悲しむのではないか。ケネスはそれを懸念しているのだ。

「止むを得んだろう。まさか結婚式をしたいから戦いを先に延ばし

たいとは言えないからね。お前それくらいの事も分からないのか？」

「まっまさか！」

ディアスの言葉にケネスは慌てて否定した。当然ケネスもディアスのいう事は理解した上で、ミュエルの心情を心配しているだけなのだ。本気で戦いを延期したいと考えていると思われては、軍人としての見識を疑われる事になってしまう。

「なに冗談だ。ミュエルには私の方から言っておくよ」

ディアスはそう言うと視線を前方に向け、ケネスも前へと向き直りその後は言葉を発せず黙々と歩を進めたのだった。

自邸につくとミュエルの出迎えを受け、邸内に入る。そして晩餐が済み、ミュエルがケネスに勉強を見てもらった後は、ディアスとミュエルは寝室で2人きりとなった。

寝具の上で並んで座ると、ディアスはミュエルに正面から視線を合わせ口を開いた。

「ミュエル、もしかしたらランリエルとの戦いが早まるかも知れない。そうすればお前との結婚式どころではなくなるだろう」

「結婚式が……延期？」

「ああ、そうだ」

ディアスの言葉に戸惑い問いかけ返したミュエルに、そう短く答

えた。

「あの……それだけなのですか？」

「それだけとは？」

「いえ……別に何でもありません……」

明らかに言いたい事があるという態度にもかかわらず口を噤むミュエルに、ディアスは微笑んだ。すまんの一言なり、もっと詳しい説明なりを欲しているのは明らかだった。

「まさか式を行っていないから、私達はまだ夫婦ではないというんじゃないだろうね？」

「え？　でっですが……」

ミュエルの戸惑いは当然だった。神に誓うからこそ夫婦なのだ。その誓いが無いのならば、どこまでいってもあくまで他人。精々恋人同士なのだ。しかしディアスはミュエルの言葉に構わず少女に顔を近づける。

ディアスはミュエルの体のどこにも手を触れていない。まったく拘束の無い状態からのディアスの口付けをミュエルは戸惑いながらも受け止めた。そうディアスとの始めての、あのディアスが「お前は私の妻だ」と誓った時の様に。

ディアスは重ねていた唇を僅かに離すと、喋れば微かに唇同士が触れるほどの間近で口を開く。

「私の誓いより、会った事も無い神への誓いの方が信じられると言うんじゃないだろうね。式など挙げなくても、お前は私の妻なんだよ」

「ディアス様！」

ディアスの言葉に改めて自身から唇を重ねたミュエルを抱きしめながら、ディアスは真剣に悩んでいた。

自分には少女嗜好は無かったはずなのだが……。と。

第２４話：寵姫達の逃避行（１）

「アリシア様。申し訳ございません」
セレーナは馬車の荷台から、御者台に座り馬車を進ませるアリシアに声をかけた。

「気にしなくて良いわ」
と答えたもののアリシアも内心、早まったか。と思わないでもない。

奇妙な取り合わせだがこれには事情がある。それには話を数日前にさかのぼる必要があった。

サルヴァ王子がカルデイ帝国へ出立した後、ランリエル王国王都フォルキアではさまざまな流言が飛び交った。

それはサルヴァ王子が、自分に反感を持つ貴族達に一喜一憂させ炙り出す為に流させたものだったが、流言に一喜一憂したのは貴族達ばかりではなかった。

サルヴァ王子の寵姫であるセレーナも、貴族達以上に流言に惑わされ焦燥にかられたのだった。

この点、王子も迂闊といえるかもしれないが、寵姫の心情を慮って策略を変更したり実行を止めるなど出来ない以上仕方が無いと言える。

セレーナだけには策を打ち上げておく。と言う事も、もし事が露見すれば寵姫に大事を語って策を謝ったと、歴史に残る大失態とな

り物笑いの種である。

王子にしてみればやむを得なかったのだが、セレーナは王子の身を案じ心を痛めた。

そしてアリシアも、王子が死んでしまうと後宮が閉鎖され、年金が貰えなくなると王子の身を案じていた。

しかもそうこうしている内に、なんとガリバルディ公爵を中心とする貴族達が挙兵し帝国との国境を封鎖してしまうという事態が発生したのだった。

「サルヴァ殿下はご無事かしら？」

セレーナは焦燥にかられ、その胸は張り裂ける様な苦しみを感じ思わず呟いた。

その呟きを聞き逃さなかった侍女が

「きっと大丈夫で御座います」と慰めてくれたが、セレーナの不安は少しも晴れない。

慰めてくれた侍女の気持ちは嬉しいが、あまりにも根拠が無さ過ぎた。

サルヴァ王子とて今まですべての戦いに勝利してきた訳ではなく、幾度かの敗戦を経験している。

だがセレーナが後宮に来た年には戦いが行われず、後宮に来て２年目にして勃発した帝国との戦いにはサルヴァ王子は勝利している。

セレーナが知る限りでは王子はいつも勝っている事になるが、だからと言って安心出来るものではない。ましてや流言では、帝国に

取り残されるという事は、絶体絶命を意味すると言うではないか。

「もうサルヴァ殿下とお会いする事は出来ないのかしら……」

そう思うとセレーナの目に留めなく涙が溢れ、自室のベッドに突っぷして泣き続けた。セレーナは自分の無力を呪った。

自分には何もする事が出来ないのだろうか。この後宮の一室で目を泣き腫らしながら待つしか無いのだろうか。

でも、この様な気持ちのまま王子を待ち続けるなど耐えられない。いや、待ち続けるも何も王子は帰って来ないのかも知れないのだ。

王子が帰って来ないならば……。

ある日の朝、セレーナは後宮の庭へと散策に出た。

勝手知ったる後宮内の事であり警護も厳重で危険などありはしない。

侍女達もセレーナが特にと言いつけない限り付いてくる事は無く、この日も彼女は一人で部屋を後にした。

ただ、庭を散策するにしてはセレーナが多数の装飾品を身につけていた事に、侍女は微かに奇異を感じたが、それ以上深く考える事は無かった。

セレーナは庭を通り過ぎ後宮の外へと通じる門に向かう。彼女は待ち続けるより、自分からサルヴァ王子に会いに行くと決意したのだった。

「殿下お待ち下さい。すぐに参ります」と思わず歩む足も速くなる。

だが侍女達には内緒にした。帝国に向かうなどあまりにも危険で侍女達が引き留めるであろう事は、彼女にも分かっていたのだ。

後宮の外へ出て身につけた装飾品を差し出して馬車を雇い、帝国へと向かう。現金は侍女達が管理している為持ち出せなかったのだ。

だがセレーナが完璧と考える作戦は、すぐに破綻した。

後宮の外へと続く門をくぐろうとしたところで、

「駄目です」と後宮の門を警護する兵士に止められたのだ。

「でも、後宮の外に用事があるのです」

セレーナは食い下がったが、兵士はにべも無い。

「寵姫の方々が後宮の外に出るには事前の申請が必要です。申請無き方に門をお通しする訳にはまいりません」

「そんな……」

兵士に冷たく拒絶され、言葉に窮した。

セレーナも侍女達をお供に今まで何度も後宮の外に出た事はある。

だが外に出る時の侍女との

「今日は何をなしますか？」

「今日は後宮の外に出てみようと思うの」

という何気ない会話の後、侍女達が急いで申請を出していた事などセレーナは知らなかったのだ。

しかも寵姫が侍女も連れずに一人で後宮を出るなど、とても見過ごしては貰えない。

王子の元へと会いに行く作戦の第一段階どころか、はるか手前で作戦が頓挫したセレーナは、門に背を向けトボトボと庭へと戻って行く。

歩きながらも、あまりの情けなさにポロポロと涙が頬を伝う。だがそこへ心優しきセレーナの為、神が救いの女神を派遣した。もっともこの女神はあまりお淑やかとは言えなかったが。

セレーナとは違い正真正銘申請も行い、後宮の外へ出る許可を得ているアリシアが彼女の前からやって来たのだ。

後ろには、面倒くさそうにアリシア付きの侍女であるライヤも控えている。

本来ならば通り過ぎるだけの関係でしかない2人だが、セレーナの日頃の行いが彼女へ、女神から救いの手を差し伸べさせたのだった。

涙を流し視界も霞む彼女はアリシアに気付かなかったが、アリシアは彼女に気付いた。

そして前回セレーナと顔を合わせた時、彼女が挨拶をしたにもかかわらず、自分は無視をしてしまった事をアリシアは思い出したのだ。

今度は自分も挨拶をしなくては。と幾分緊張しながらアリシアは足を進ませ、セレーナとの距離を近づけて行く。

「おはよう御座います。セレーナ様」

こわばった笑顔に微かに上ずった声でセレーナに挨拶をした。その声に反応しアリシアに顔を向けたセレーナは涙に目を泣き腫らし

ている。

そして目の前にアリシアが居る事に初めて気付いた彼女は、緊張の糸が切れたのか、本来自分の敵であるはずのアリシアの胸に顔を埋めて抱き付いたのだ。

抱きつきつつもさらに涙を流し続けるセレーナにアリシアは問いかけた。彼女が抱きついて来るなど本来ならあり得ない。何か事情があるに違いなかった。

「どうしたのです？」

するとセレーナはアリシアの胸に顔を埋めながらも答える。

「殿下が……」

「殿下？」

「はい。殿下にお会いしなくては……」

殿下にお会いする？　いやサルヴァ王子様は帝国に行っている。どうやって会うというのだろう。アリシアにはセレーナの言う意味が分からない。

「でも殿下は帝国に居るのではないのですか？」

その声にセレーナは顔を上げてアリシアを見つめた。

「私は帝国まで行きたいのです」

「はぁ……」

あまりの事にアリシアは呆れた様に言った。

とりあえずセレーナを自室へと連れて行ったアリシアはライヤには席を外させ、どうする積もりなのかと問いただした。

ベッドの縁に座り問いかけるアリシアに、その横に座るセレーナが口を開き、身に付けた装飾品を差し出して馬車を雇い、帝国へと向かう作戦を説明した。

話を聞いたアリシアは「うーん」と唸った。どこから指摘すれば良いのだろう。と。

装飾品の真贋の鑑定など専門家でなければ出来るはずも無く、馬車の乗り手に差し出し、これで馬車に乗せて欲しいと言ったところで偽物と疑われるだけだった。

しかも今帝国との国境は軍勢により封鎖されているのだ。帝国まで行って欲しいと頼んだところで、行ってくれる訳も無い。

万一行ってくれると言う者が居たとしても、それこそ胡散臭すぎる。おそらく馬車は帝国には向かうまい。女一人で旅をしようとするセレーナがどの様な目に合うかは容易に予測できた。

セレーナの計画はあまりにも無謀だったのだ。

あまりにも世間知らず過ぎ、これで本気で帝国まで行けると考えているなんて……。と思わずアリシアはクスリと笑った。

その笑いは徐々に大きくなり遂には大きく笑う。

そして笑いながらも忠告を始めた。

「あはははははっ。いくらなんでも無謀過ぎます。諦めた方がよろしいのでは……」

だが、このアリシアのありがたいご忠告は遮られた。

突如セレーナがアリシアに襲い掛かりベッドへと押し倒したのだ。

両手でアリシアの両肩を押さえつけるセレーナのその顔は、悔しさのあまり涙を流し頬を濡らしていた。

「……それほど可笑しいですか？」

セレーナの頬を伝う涙はポタポタと滴り落ち、アリシアの頬をも濡らす。

「……ごめんなさい」

そして2人はそのまま見詰め合う。セレーナの涙はなおアリシアの頬を濡らし続けた。

セレーナの気持ちを笑った事には反省したアリシアだったが、やはり彼女の作戦が現実的ではない事に変わりは無い。

「ですが、セレーナ様のお考えになった方法では、帝国には行けないのです」

涙を流し続けるセレーナの顔がさらに悲しげに歪む。そして流す涙を増やしアリシアの胸に顔を埋めた。

そしてその胸で嗚咽を漏らした。

アリシアはそっと彼女の頭を抱きかかえた。

「殿下を、愛していらっしゃるのですね……」
後宮の女など権力者に媚を売りそのおこぼれに預かろうという者達の集まり。
アリシアはそう考えていたのだ。
「……アリシア様は違うと仰るのですか？」
セレーナがアリシアの胸に顔を埋めたまま問いかけると、アリシアは抱えていた彼女の頭を少し強く抱いた。
「ええ……違います」
セレーナは勢い良く上半身を起し、その為彼女の頭を抱えていたアリシアの腕は弾き飛ばされた。
驚いた顔で見つめるセレーナに、アリシアは苦笑を向けた。
「驚きました？」
「あ。い……いえ」
嘘である。十分驚いていた。
寵姫といえどすべての女性が後宮の主を慕っているとは限らない。そもそもセレーナとて当初はサルヴァ王子の事を好きでは無かったのだ。
だが、セレーナはアリシアの事を王子を取り合っている敵。しかも強敵と見ていた。そのアリシアが王子を慕っていない可能性など、考えた事も無かったのだった。
「ですが……アリシア様は殿下が特別に招かれた方とお伺いしております」

ならば特別な関係ではないのか？　とセレーナは考えていたのだ。

アリシアはサルヴァ王子が被っている兜の事について話すべきか迷ったが、ここに至っては誤魔化す気にはなれなかった。彼女に嘘は付きたくはない。

この娘と王子を取り合って争うなどあまりにも馬鹿馬鹿しい。それに王子から口止めされている訳でもないのだ。

アリシアが上体を起こすと、セレーナも慌てて身を引き2人は改めてベッドの縁に並んで座った。

「殿下が最近お使いになっている兜の事はご存知ですか？」

彼女の言葉にセレーナは戸惑った様に口を開いた。

今その兜がどう関係あるというのか。

「それは勿論知っております。殿下から直接お聞きした訳ではないですが……聞いた話では殿下のご親友の形見の物とお聞きしております。」

サルヴァ王子のご親友。ただの噂とはいえ、そう言われていると知ればリヴァルは喜ぶだろうか。いや、もしかすると恐れ多いと言うかも知れない。そう思うと思わずアリシアに顔に笑みがこぼれた。

「殿下のご親友かは分かりませんけど、私はその兜の主の婚約者だったのです」

「アリシア様が？」

驚きの声を上げるセレーナにアリシアはまたも苦笑を浮かべ答えた。

「ええ。そうです」

素直に感情をあらわにするセレーナを可愛い女性だと思った。

「殿下がどの様なお考えで私を後宮に招いたか、正直私にも分かりません。ですが殿下が私の部屋に起しになったのは一度きり。セレーナ様が心配する様な事は無いのです」

実際は、兜の主の婚約者である彼女の生活の面倒をみる積もりで後宮に招いたのだが、王子のその気持ちは彼女に伝わっていない。だがそれは、彼女が恩知らずという訳ではなかった。

アリシアの言う、たった一度の訪問の時、王子自身が己の気持ちを台無しにしていたからである。

そしてその一度きりという言葉に、セレーナも困惑の表情を浮かばせた。それではやはり一度はそういう関係になったという事ではないのか。

アリシアはセレーナを安心させる様に抱きしめた。

「大丈夫です。殿下はセレーナ様を愛していらっしゃいますよ」

それはセレーナをなだめる為の方便だったが、口に出した瞬間それが当たっているのではないか。アリシアはそう直感した。

セレーナは後宮が整えられた当初からの寵姫であるという。そうなると3年近く後宮に居る事になる。

3年間も欲望の対象としてだけ抱かれていた女性が、この様に素直なままで居られる訳が無い。そう考えたのだ。

きっと王子はセレーナを大事にしていたのだろう。本人に自覚があるかはともかく。

アリシアは、後々後悔する事になるこの言葉をセレーナを抱きしめながら発した。

「ご安心下さい。私が貴女をサルヴァ殿下のところまで連れて行って差し上げます」

第２４話：寵姫達の逃避行（２）

アリシアは、僅か後ろを歩くセレーナに前を向いたまま話しかけた。
「セレーナ様。落ち着いて下さい。俯いて黙ってて頂ければよろしいですから」

「はい。分かりました」

セレーナはアリシアの地味な服を借り、髪はいつもの様に肩に流さずきっちりと固めていた。顔を隠すならば流した方が隠しやすいが、セレーナの設定はアリシアの侍女である。
髪を流す侍女など存在しない。侍女ならば髪はきっちりと結っておくべきだった。

セレーナが大量に身に付けていた装飾品は皮袋に入れて彼女が持っている。彼女に持たせるのは危なっかしいとは思ったが、今は主人と侍女である。金品は侍女が持っているもの。
この設定は、せめて王城を出るまでは崩さない方が無難だった。

庭を越え後宮の門へとたどり着いた彼女達は、緊張を必死で抑えて門番へと近寄る。

「アリシア・バオリスです。外出の許可を頂いているはずですが」

門番は懐から紙片を取り出し「確かに」と頷いた。

アリシアは内心ほっとし
「それでは」とセレーナを伴い門を通り過ぎ様としたが門番は彼女

達を呼び止めた。

「侍女はいかが致したのです？」

まさか寵姫付きの侍女の顔を覚えているというの？　とアリシアは冷や汗をかいたが、努力して平然と答えた。

「ここに居るでは有りませんか」

そう言いながら一瞬セレーナへと目を向け、そして門番に視線を戻す。

「しかし侍女の制服を着ていないではありませんか」

確かに門番も侍女の顔など覚えては居なかったが、侍女が制服を着ていない事が問題らしい。内心しまった！　と思いながらも、平然と答え続けた。

「それがなにか？」

「宮廷に使える侍女が傍らに控えているからこそ、恐れを抱いて誰も手出しをせず安全なのです。それを知らしめる為には制服を着ている必要があります。その者が侍女ならば制服を着させて下さい」

アリシアは内心舌打ちをした。まさかその様な決まりがあるとは。しかしここで引き返す訳には行かない。

「今日くらいはよろしいではありませんか」

「駄目です」

アリシアと門番のにらみ合いは数瞬続いたが、にらみ合いを続け

ても問題は解決しない。

後ろに控えるセレーナの耳元で囁いた。

「小さい宝石を出してちょうだい」

幾分偉そうな言い方だが、万一門番の耳に届くかも知れないと考え、侍女に対する口調で話しかけたのだ。

セレーナは装飾品が詰まった皮袋に手を入れ、ガチャガチャとかき回し小さい宝石を付けた耳飾を一つ取り出して、アリシアに手渡した。

アリシアはその耳飾をそっと門番に握らせた。

「侍女の制服を着ていては入り難い場所も有るのです。お分かり頂けます？」

だがそれでも門番は断ったが、心が揺れ動いたのか

「いやしかし……」と拒否する言葉は力なかった。

もう一押しとアリシアはまたもやセレーナに声を掛けた。

「耳飾を片方だけ差し上げても仕方なかったわね。もう片方も出してちょうだい」

こうして2人は後宮の門を突破したのだった。

王城の門を通るのは簡単だった。

後宮は寵姫達に万一不祥事があってはと人の出入りに厳しかった。

だが、王城は防衛の為入る者には気を使うが、出る者にはさほど注意を払わなかったのである。

つまり2人は何の障害も無く、テクテクと普通に歩いて門を通り過ぎたのだった。

城下町に出た2人はまず装飾品をお金に替えなくてはならないと、宝石商へと向かった。

「ようこそいらっしゃいました」

にこやかに出迎える店員に、アリシアは早速要件を切り出した。

「実は引き取って頂きたい物があるのですが、よろしいでしょうか？」

「勿論で御座います。それでどの様なお品でございましょう」

2人は個室に通されアリシアは勧められた椅子に座る。侍女であるセレーナはその後ろに立つ。

アリシアが後ろに控えるセレーナに頷くと、彼女はテーブルの上で皮袋を逆さにし、宝石達をテーブルの上に山積みにした。

だがこの行為に店員は驚きの声を上げる。

「貴方達は何をやっているんですか！」

突然の店員の大声に2人は目を丸くしたが、そこから店員のお説教が長々と続いた。店員にとって2人のしている事は、相手が客である事を忘れてしまうほどの暴挙だったのだ。

原石ならともかく、磨かれた宝石を一つの皮袋に入れて持ち歩くなど、宝石を扱う者からすれば正気の沙汰とも思えない行為である。

ダイヤモンドは硬度が高く傷付かないと言われるが、ダイヤモン

ド同士をこすり合わせればやはり傷は付くのだ。

ましてやダイヤモンドと、それより硬度の低い他の宝石を一緒の皮袋に入れるとは……。

だがこの様な知識を貧乏なアリシアが知る訳も無く、セレーナが知っておくべき知識である。アリシアは何とか店員をなだめ、傷付いた宝石とはいえ、いくらになるかと問いかけた。

店員は苦い表情ながらも鑑定を開始したが、またもや店員は驚きの声を上げた。

「これはカスティニオ公爵家に伝わると言う名品、アウロラの瞳ではないですか？」

「よく似ていると言われるのです。それではこれはやめて置きますわね」

慌てて店員からアウロラの瞳を取り上げた。

そしてちらりとセレーナを睨む。

こっそりと抜け出して帝国まで行こうと言うのに、なんと目立つ上に足が付きそうな物を持ってくるのかと。

アウロラの瞳は、貧乏で宝石などとは縁の無いアリシアすら、名前だけは聞いた事があるくらい有名な宝石だった。聞いた話によると光の加減で七色に光り輝くと言うが、今はその輝きを楽しむ余裕は無い。

しかしすべての宝石を鑑定した後の店員の言葉は2人を落胆させた。

「すみません。私どもではこれらの宝石達は買い取れません」

まさか買い取っても貰えないとは。宝石とは傷付くとそれほど価値が無くなる物なのか。と2人は焦ったがそうではなかった。

「傷が付いている事を差し引いたとしても、この様な見事な宝石をすべて買い取る資金は当店には無いのです」

店員はそう言うと無念そうにため息を付く。

ランリエルでも屈指の実力者であるカスティニオ公爵が、次期国王を攻略する為にと娘に持たせた名品の数々は、一宝石商の手に負える物では無かったのである。

「……買い取れるだけで良いです」

アリシアは力なく答えた。

「上手く行きましたわね」

店を出るとセレーナは嬉しそうに言ったが、アリシアは早々に彼女を帝国まで連れて行くと言った言葉を後悔し始めていた。

結局売った宝石は持ってきた物の１０分の１にも満たず、この女性は世界の果てまで旅する積もりだったのかとアリシアは思った。

しかも売らなかった宝石は、また皮袋に入れられるのかと心配した店員が、一つ一つ布で包んでくれ、セレーナは次に宝石を売る時に怒られなくてすむと喜んだ。しかし、今回売った分のお金でだけで十分お釣が来る。

いや、この様な大金と名品の数々を持ち歩いていると知られればむしろ危険だった。

「セレーナ様、沢山お金を持っている事はあまり口にしない様にして下さいね」

「どうしてなのです？　お金があると言った方がお願いし易いのではないでしょうか」

セレーナは不思議そうに首を傾げた。

彼女もお金に物を言わせて無理を通すと言っている訳ではない。御代の心配は無いですよと言った方が相手も安心するのでは？　と考えているのだ。

「勿論、ある程度のお金を持っている事を示すのは当然ですけど、あまりにも大金を持っているとそれを奪おうと考える者も居て危険なのです」

「まぁその様な方がいらっしゃるなんて……」

とセレーナは驚いているが、アリシアにとっては当たり前の事過ぎて、今後も一々この様な事を指摘しなければならないのかと先が思いやられた。

だが乗りかかった船である。日が暮れても2人が後宮に戻らないと騒ぎになるだろう。出来ればその前に王都を出たかった。

「セレーナ様、急ぎましょう。次は馬車を用意しなくては。それと食べる物も必要です」

「はい！」

サルヴァ王子に会いに行く計画が着々と進む事にセレーナは元気良く答えた。

第２４話：寵姫達の逃避行（３）

２人は馬車を手に入れる為町中を彷徨ったが、これが中々難航した。
子供の頃田舎暮らしをしていたアリシアは、二頭立ての馬車までなら操れる自信はあったが、中々目的に合う馬車が見つからないのである。

王都内の舗装された道を走る個人客相手の辻馬車では、車輪が細く帝国までの舗装されていない道のりに耐えられそうにない。
王都外の村々を巡る人々が乗り合う駅馬車は頑丈だが、あまりに巨大でアリシアには御する自信が無かったのだ。

しかもよくよく考えると、辻馬車や駅馬車をいきなり売って欲しいと言ったところで、すぐその場で売ってくれるものなのか？　という疑問もある。

アリシアがどうしたものかと考え込んでいると、セレーナが突然彼女の袖を引っ張った。
「あれなどよろしいのではないですか？」

セレーナが指差す先に目をやると、そこに一台の馬車があるのを見つけた。

その馬車は一頭立てだが車輪は太く丈夫そうだし、荷台にはちゃんと屋根（ほろ）もある。長距離の旅にも耐えられそうだった。

ただ使い込まれた感があり、あまり清潔とは言えない。しかし、お嬢様育ちであるはずのセレーナがそこに目を瞑ったのは、それほ

ど王子に会いたい気持ちが強いのだろう。とアリシアには好感が持てた。

とはいえ問題もある。

荷台には干し肉や野菜などの食料が満載されており、どうやら遠い村から王都まで行商に来ている者の馬車らしい。

今まさに自分が乗ってきて、帰りも乗って帰ると思われる馬車を売って欲しい。と言っても無理に決まっている。アリシアはそう考えたのだ。

それに馬車を売ってしまっては、あの大量の荷物をどうするというのだろう。

「あの馬車を売って貰うのは難しいと思います」

「どうしてなのです？」

「あの人は遠くから馬車に乗ってきたと思うのですが、帰りにも馬車は必要でしょう。私達に売ってくれるとは思えません」

「そうなのですか……。あの馬車なら食べ物も沢山乗っていますし丁度良いと思ったのですけど……」

「荷物ごと買うお積もりだったのですか？」

「はい。食べ物も必要と仰っていたので」

確かにそうは言ったが、アリシアが言う食料とは2人で帝国に行くまで、精々往復するのに必要な量であって、荷台いっぱいの食料

ではない。アリシアには思いも寄らない発想だった。

しかし……。とアリシアは、はたと手を打った。そしてセレーナに向けて不敵に笑った。

「確かに食料は必要ですわね」

「貴方、ちょっとよろしいかしら？」

さあ、今から露天を開き荷台に満載した商品を売ろうとしていた男は、その声に顔を向けた。

すると露天が立ち並ぶ街角には場違いなほど着飾った女性が立っている。後ろには金髪をきっちりと結った地味な服装の、だが稀に見るほどの美貌の女性が控えていた。

勿論、セレーナが所有する名品の数々を身に纏って、にわかにご令嬢に扮したアリシアと、侍女を装うセレーナである。

「今日屋敷で舞踏会があるのです。その料理に使うので荷台に乗っている物をすべて売りなさい」

かなり無茶な要求である事はアリシアにも分かっている。だが、おかしいと思われてもそれは問題ではない。

男にしてみれば商品をすべて買ってくれるというならば、少しくらいおかしくてもどうでも良い。相手はお金持ちそうだ。と

「ええ。勿論よろしいですよ」と笑顔で答えた。

アリシアは、ここからが勝負。自分は喜劇に出演する喜劇役者なのだと己に言い聞かせた。

アリシア自身、あまりにもおかしいと思いながらも、意を決して口を開く。

「それでは、馬車ごと頂きますので、御代はおいくらになります？」

「はぁ？」

あまりの事に、何を言ってるんだ、という口調で聞き返す男に、心中赤面しつつ平然と繰り返す。

「ですから、馬車ごと商品を頂きます。御代はおいくらかしら？」

理由がむちゃくちゃでも、馬車を買い取って合法的に手に入れてしまえばこっちのものである。

女2人で馬車を強引に奪う事は出来ないし、出来たとしても通報され後を追われるだろう。素直に馬車を売ってくれと言っても、なぜなのかと聞かれて理由を説明する訳もいかないのである。

男もどうやら本気らしいと思ったが、この馬車は帰りも乗って帰るのだ。売ってしまう訳にはいかない。と、戸惑いながらも答える。

「それはいくらなんでも無理ですよ」

「どうしてです？」

「この馬車はまだ使うんです。売っちまったら帰りの足が無くなってしまいますよ」

「ならば、新しい馬車を買えばよろしいでは無いですか」

「そんな事言われても、新しい馬車を買う金なんてありやしませんし、道端で売っている物でもありやせん。依頼して作って貰うにも日数がかかります」

アリシアも男の言い分に内心頷く。アリシア自身、馬車を手に入れるのに日数がかかるのが嫌だから、この男に売って貰おうとしているのだ。

「では、この馬車を新しい馬車を買える金額で買い取り、馬車が出来るまでの滞在費もお支払い致しましょう。それでよろしいですわね？」

「え？　よろしいんで？　でも、どうしてそんなにまでしてこの馬車が欲しいんですか？」

男の言葉にアリシアは「おほほほほ」と笑う。

「だって、荷物を積み替えるのは面倒ではないですか」

積み替えるのが面倒というだけで、大金を払って馬車ごと買うなど、とてもまともな思考とは思えないが、アリシアは当たり前でしょ？　という風に平然と言ってのけた。

だが男は困惑した。

そうは言っても女性2人以外に馬車を操る乗り手は見当たらない。後から連れてくるのだろうか。

しかし、この馬車はまだまだ使えるが多少くたびれて来てもいる。新しい馬車が手に入るというのは悪い話ではないのだが……。

「でも、商品を買って頂けるなら荷物を積み替えなくても、私がそのお屋敷まで馬車で運びやすよ」

ちぃ！　と、アリシアは内心舌打ちをした。どうしてそんな良心的な事を言うのだろう。素直に売ってくれれば良いのに！

「おほほほほ。お分かりにならないの？」

アリシアは、そう言って男を笑ったが、実は何も考えていない。なんと言えば良いのだろうと、適当な言葉で時間稼ぎ必死で頭を巡らしていた。

男の方もアリシアの言葉に考え込んでいる。

アリシアは早く理由を言わないと、と焦り、それがいっそう頭を真っ白にし言葉が見つからない。

すると意外にも男の方が先に口を開いた。

「もしかすると、私が屋敷に行くと何か不味いんで？」

どうやらアリシアの言う舞踏会を、秘密めいたものらしいと男は勝手に解釈したらしい。彼女も男の言葉に飛びついた。

「そうなのです。やっとお分かりになりました？」

「ええ、まぁ……」

やれやれと、ほっとため息をつきセレーナに代金を支払うように言った。

セレーナは男に言われた金額を素直に払う。男は多めに代金を言ったかも知れないが、それはどうでも良いことだった。

これで晴れてこの馬車は2人の物なのである。

もしかすると、変な奴が居たと噂になるかも知れないが、今はそれを気にしている場合ではない。まさか代金を受け取っておきながら通報する事もあるまい。

今は、追っ手がかからなければそれで良いのである。

馬車の荷台に侍女が乗り込み、令嬢が御者台に座り馬車に鞭を入れて走り去る様を、男は呆然と見送った。

「恥ずかしかった……」

アリシアは、先ほどのやり取りを自分の記憶から消去する決意をすると、一刻も早くその場から立ち去りたいと、さらに馬車に鞭を入れた。

その後一旦馬車を止めてセレーナを番に残し、水や街道を記した地図など必要な物を手に入れる。

さらに装飾品さえ外せば元々は地味な着ていた服より、さらに地味な、というより田舎者っぽい服を手に入れた。

田舎娘が家の用事で馬車を走らせている。そう偽装するのだ。

買った店で服を着替えたアリシアは改めて馬車を走らせた。

そして王都の外へと通じる門をくぐり、遂に2人は王都からの脱出に成功したのだった。

第２４話：寵姫達の逃避行（４）

セレーナを荷台に乗せ馬車を走らすアリシアは、王都が見えなくなるほど離れると一旦馬車を止めた。そして２人で荷台から余分な物を捨てる。

なるべく日持ちしそうな物を残し、野菜など生物（なまもの）は腐らす前に食べられそうな分だけ残す。もったいない話だが、荷を満載していては２人が荷台に乗る場所が無いし、馬車を引く馬にも負担になる。

こうして場所を空けた荷台に改めて２人は乗り込み、地図を広げた。

「帝国に向かうなら北東に向かうのが一番近いんだけど、初めは南東に進みたいと思います」

アリシアは地図を指でなぞり、王都から一旦南東に進んだ後、海岸線に近い場所を進む順路を示した。

「どうしてなのです？　遠回りになるのではないでしょうか」

一刻も早くサルヴァ王子に会いたいセレーナにしてみれば、遠回りなどなぜするのか分からない。

「まっすぐに進むと、殿下に立ちふさがろうとする者達と同じ道を進む事になるの。それは危険でしょう」

「そうですか……」

セレーナは意気消沈して言ったが、地図を見て改めて口を開き

「それでは東に真っ直ぐ進んではどうです？」と地図を指でなぞった。

南東に進むよりは東に進んだ方がまだ遠回りではない。という積もりの提案だったが、アリシアは首を振った。

「そこを通るには山道が多いから危険と思うわ」

「馬車が通り難いのでございますか？」

「いえ。この様な山道は山賊などの野盗がよく出没するの。それどころか人気の無い山道では、女2人しか居ないと知れば、ただの旅人でも襲ってきかねません」

「まぁ！　その様な事があるのですか？」

驚くセレーナに

「ええ」と答えたアリシアに苦笑が浮かぶ。

本当にこの娘は、ほって置くととんでもない事になりそうだった。

いつ戦いの巻き添えを食う分からず、野盗の襲撃にも備えなければならない田舎暮らしでは当たり前の配慮も、丈夫な城壁に守られた王都や領地の城で生活する公爵令嬢にはまったく縁がなかったのである。

「最後の最後で国境を越える時は山道を進む事になるけど、それまでは出来るだけ山道は避けたいと思います。確かに遠回りだけど、たどり着けないよりはいいでしょ？」

だがセレーナも頭ではアリシアの言う事も理解できるが、やはり遠回りになるのは残念なのだろう。
「はい。そうですね」と答えたものの幾分残念そうだった。

「大丈夫です。きっと会えるわ」
アリシアはセレーナに微笑んだ。

それから改めて馬車を進ませた。アリシアの提案どおり南東に向けてである。

夜になると馬車を道から逸らせて進ませ、林の中へと入り込んだ。
馬を馬車から外し、綱を木に括り付ける。そして荷台から干草を運んで馬の前に置いてやった。そして2人は干し肉やパンと言った火を使わない物を食べた。

冬の最中である。
火を焚き暖かい物を食べたかったが、その火に誘われ旅人が「ちょっと火に当たらせて欲しい」と言ってきては面倒だ。

女の2人旅である。目立たない様にするべきだった。

当然寝る時も火を焚かず、食事の後は狭い荷台で2人は毛布に包まりくっつく様にして横になった。

そもそもセレーナに火の番など出来ず、馬車を御する必要があるアリシアはセレーナ以上に休む必要がある。その為、火の番をする者が居ないのだ。

「後宮では騒ぎになっているでしょうか……」
荷台の屋根の隙間から僅かに差し込む月明かりに照らされながら、セレーナが心配そうに言った。

「ええ。そうでしょうね」
今更な上に当然としか言えない言葉にアリシアも苦笑する。

しばらく沈黙が続いたが意を決した様に、またセレーナが口を開いた。

「どうしてアリシア様は、私をサルヴァ殿下の元へと連れて行ってくれるのですか？」

それこそ今更な質問だが、王子に会いたい一心で気持ちがいっぱいになっていた彼女には、なぜアリシアが手を貸してくれるのか、今まで考える余裕が無かったのだった。

アリシアは、僅かな月明かりに照らされるセレーナへと目を向けた。
「私の婚約者は戦いに出てそのまま帰って来ませんでした。出て行く時はまさか帰って来ないなんて思いもよらなかったのに……」

「アリシア様……」

リヴァルが帰って来ないなど考えもしなかったアリシアだったが、もし今のセレーナの様に、愛する人と二度と会えないかもしれない、と、それを知る事が出来ていたなら、自分もきっとリヴァルに会いに行っていただろう。
今のセレーナの様に……。

アリシアは無意識にセレーナと過去の自分とを重ね合わせていた。
彼女は過去の自分に手を貸しているのだった。

「大丈夫です。貴女は殿下に会えます」
アリシアはそう言うとセレーナへと微笑み、彼女を抱きしめた。
セレーナもアリシアの胸に顔を埋める。

可愛い女性(ひと)だ。そう思ったアリシアは、不意にクスっと笑った。

「どうしたのですか？」

不審に思ったセレーナは、抱きしめられながらも微かに顔を上げて問いかけた。

するとアリシアは、セレーナを少し強く抱きしめる。
「いえ。とても宴の時のセレーナ様と同じ人とは思えなくて」

アリシアの言う宴の時とは、勿論カーサス伯爵を招いた宴の時の話である。
あの時セレーナはアリシアに対し散々嫌味を言ったのだった。だが今のセレーナはその時の片鱗も見せない。

「あ、あれは……」
微かな月明かりしかない為アリシアには見えなかったが、セレーナの顔がたちどころに赤くなる。

「あれは？」

「その……。ああいう立ち振る舞いをするところなので……」

「立ち振る舞い？」

「はい。貴族たる者、公の場では優雅に振るまわなければならないと……」

「はぁ……」

アリシアは呆れた様な声を出した。

どうやら貴族様達は、ああいう公の社交の場では、意識して紳士然、貴婦人然といった立ち振る舞いをしているらしい。

お行儀が良いといえばそうなのだろうが、言ってしまえば宮廷を舞台に貴族達全員で大掛かりなお芝居をしているとしかアリシアには思えない。

あまりに馬鹿馬鹿しいにもほどがあった。

宴の時、王子の出現にセレーナの顔つきが一瞬変わった様に見えたのは、突然の事に驚いて一瞬演技を忘れたという事だったのだ。

「私は今の貴女の方が好きよ」

「私もアリシア様の事は好きです」

2人は共にクスクスと笑うと、抱き合ったまま眠りに付いたのだった。

朝になるとせめて朝くらいはと火を起して暖かい物を食べる。

万一旅人が寄って来ても人の心理として、朝方は襲ったりはしないものである。そもそも朝なら火を焚いても目立たないだろう。

昼食は時間がもったいないと、馬車に乗りながら食べた。

「私こんな事した事ありませんでした」

状況も忘れ無邪気に笑うセレーナにアリシアも思わず笑みがこぼれる。

公爵令嬢が馬車に揺られながらモグモグと干し肉を齧り、パンを食いちぎっていると知れば、お父様であるカスティニオ公爵は卒倒するだろうか。

こうして数日かけ南東へと進んだ彼女達は海岸線近くにたどり着き、今度はそこから東へと向かう。

だがアリシアが馬車を進ませていると、遥か前方が光り輝くのが見えた。

道が光っている!?　一瞬その様に見えたが目を凝らすと、なんと矛先を縦に並べアリシア達が進む道を逆にたどって来る軍勢の姿だった。

道が光っていると見えたのは、街道を埋め尽くす軍勢の規則正しく並べられた槍の穂先に、日の光が反射した為だったのだ。

まさかこんな所に兵隊がいるなんて！　とアリシアの胸はドキドキと鳴り響いた。

どうしよう……。

馬車を返して逃げた方が良いだろうか？
ランリエル軍旗をはためかせているが、国境方面から来るならサルヴァ王子に敵対する者達の軍勢に違いない。

サルヴァ王子の寵姫だと知られればどの様な目に合うか……。
しかし軍勢には騎兵も居るだろう。馬車で逃げても逃げ切れるとは思えない。

下手に逃げてはそれこそ怪しまれて追いかけられると、アリシアは道を外れて馬車を進ませそこに止めた。そして軍勢が通り過ぎるのを待つ事にした。

軍勢と鉢合わせた時の、民の基本的な振る舞いだが、万一不審だと調べられては万事休すである。

セレーナの美貌は目に付き過ぎるし、有名でもある。
兵士の中でも仕官以上で王宮に出入りした事がある者なら、見知っていてもおかしくは無いのだ。
そうでなくとも、こんなところで美貌の女性を見つけた兵士達がどの様な行動に出るか……。

アリシアは一旦荷台に入ると
「ここに隠れて！」とセレーナに干草の山を指差した。

「ここに？　どうしたのです？」
セレーナは訳が分からず首を傾げた」

「前から軍勢がやって来ます。見つかったら大変だわ。私が良いと言うまで出て来ないで！」

そして急いで干草の山に潜り込んだセレーナの姿が完全に見えなくなる様に、干草を被せてやる。

「何があっても私が良いと言うまで決して出て来てはいけませんよ」

その言葉に、干草の中から「はい」とセレーナの声が聞こえた。

改めて御者台に座ったアリシアは俯いて軍勢が通り過ぎるのを待った。

手綱を持つ手が震える。

セレーナを守る。もし兵士達が女を求めたら自分の体を差し出す。

アリシアはそう決意していた。

だんだんと軍勢が近づき、アリシアの鼓動も激しくなる。

そして遂に僅か５０サイトほどまで近づくと、軍勢の先頭に立って進む白馬に跨る騎士の姿もはっきりと見えた。

だがその騎士は……。

「リヴァル！？」

まさかそんなはずは無い。アリシアの婚約者であるリヴァル・オルカはすでに亡くなっている。

ならばこれは……。

「サルヴァ王子？」

どうして帝国に立ち往生しているはずの王子の軍勢がこんな所に？

だが、つま先から首の下までは見事な細工がなされた光り輝く銀の鎧に、兜のみ頑丈だけが取り得の不恰好な物。

リヴァルの兜を被るサルヴァ王子に間違いなかった。

「殿下！　サルヴァ殿下！」

その声にリヴァルの兜に頭を委ねる騎士が右手を上げると、その僅か後方に居た騎士が叫ぶ。

「行軍停止だ！　止まれ！」

軍勢の行進が止まると、叫んだ騎士が近寄ってきた。それに応じてアリシアも馬車から降りる。

「今殿下のお名前を呼んだな。どういう積もりか」

戦勝時のパレードではあるまいし、馬車に乗る田舎娘が殿下に対して名前を叫ぶなど、とんでもない不敬であるし、不審とも言える。王子自身が来ず、他の者が問いただしに来たのも当然である。

どうやら本当にサルヴァ王子らしいと安心したアリシアは、騎士に会釈をして答えた。

「サルヴァ殿下の後宮に仕えるアリシア・バオリスです。殿下に宝物をお持ちいたしました」

「殿下の寵姫だと？」

「はい」

騎士はしばらく馬を御しながら考え込んでいる様だった。

余裕が出てきたアリシアは、騎士はきっとあまりの事に、自分の言葉の真偽をはかりかねているのだろう、お気の毒にと微かに笑っ

た。

そして結局結論は出なかったのか、

「そこで待っておれ！」

と言い残して、騎士は馬首を返し、指示を仰ぎにサルヴァ王子の元へと戻っていった。

「アリシアだと？」

騎士の報告にサルヴァ王子も驚きの声を上げた。

罠か？　と一瞬王子の頭によぎる。

だが罠を張るとしてはアリシアを口実に使うのは考え難い。と、王子は思い直した。

罠の為に名を騙るなら、アリシアなどの名を騙らず、セレーナの名を騙るべきだ。ならば本当にアリシアが来たというのか？

一部でアリシアは王子の寵愛あついと噂されているが、当の王子はその噂を知らなかったのだ。それゆえ罠にかけるのに、寵愛薄いアリシアの名を出す訳が無いと考えたのだった。

「はい。しかも殿下に宝物をお持ちしたと」

「宝物とはどの様な物なのだ？」

だが王子の問いに騎士は口ごもる。

「いえ、それは……」

こんな所に寵姫と名乗る者が居るという事に驚いた騎士は、そこまで気が回らなかったのである。

「聞いてまいります！」

騎士はそう言うと急いで馬首を返し、再びアリシアの元へと向かった。

だが馬車の元へと戻り、宝物とは何かと問いただした騎士に、アリシアはにべもない。

「この宝物は殿下に直接お渡しする必要があるのです。殿下にお越し頂く様にお伝え下さい」

王子を呼びつけるとはと、憤った騎士だったが相手は王子の寵姫である。それほど王子と親しいのかもしれないと考え、また王子の元へと戻る。

「殿下にお越し頂きたいと申しております」

騎士の報告に王子は、子供の使いかとため息を付いた。

だがこんなやり取りを繰り返しても仕方があるまい。

アリシアが後宮に来た理由を曲解し、彼女を傷付けてしまったと後悔し悔やんでいた王子だったが、どうしてこの様な場所に居るのかと問いただす必要もある。

サルヴァ王子はたずなを引き、馬首をアリシアへと向けると、身を預ける白馬の腹を軽く蹴った。

馬車へと近づき、その横に立つ者の姿がはっきり見えると、確かにアリシアだった。そしてその傍まで来ると馬から降り、被っていたリヴァルの兜を脱ぐ。

「この様なところまで来るとはどういう積もりか！」

思いがけない王子の怒声にたじろくアリシアだったが、確かに寵姫がこの様なところにまで来るとは非常識この上ないだろう。

だが、おそらく王子も愛しているであろうセレーナを折角連れてきてあげたのに。と気分を害し、いっその事このままセレーナを連れて帰ってやろうかとも思ったが、それをしてはセレーナが泣いてしまうと思いとどまった。

「そんなに大声を出さないで下さい。折角王子の宝物をお持ちしたのに」

「私の宝物だと？　何の事だ？」

アリシアの言葉に王子は訝しげな視線を送る。

どうも話せば話すほど面倒になりそうだと判断したアリシアは「少しここでお待ち下さい」と王子をその場に残し馬車の荷台へと姿を消した。

次期国王陛下を呼び付け、さらに待たせるなど寵姫としてあり得ない暴挙なのだが、アリシアは平然とやってのけた。

「出てきて良いですよ」

その声に干草の山から姿を現したセレーナは、全身干草だらけである。

干草の山に隠れろと言ったのは自分だし、あの場合は仕方が無かったのだが、少し悪いことをしたかなとアリシアは思った。

「もう大丈夫なのですか？」

干草の山に入っていた所為で、どうやら外の会話が聞こえて居なかったらしい。

全身に付いた干草を取ってやりながら答えた。
「ええ。もう大丈夫よ。ちょっと馬車から降りましょう」

出来るだけ取ってやったが、服に付いた干草がそう簡単に取れる訳も無い。セレーナはまだ干草だらけだったが、いつまでも王子を待たせる訳にも行かない。

王子は御者台側、つまり馬車の前の方に居るのを、あえて馬車の後ろからセレーナと共に荷台を降りた。アリシアに少し悪戯心が疼いたのだ。

荷台の影から馬車の前の方を覗くと、いらついた様に立っている王子の姿が見える。アリシアはにやにやと笑うと、セレーナの後ろに回り込む。
そして「殿下。宝物です！」という声と共に、セレーナを後ろからドンッ！　と押した。

声に振り向いたサルヴァ王子と、押されて飛び出したセレーナの目が合った。

「セレーナか？」
サルヴァ王子の前に、干草だらけの服に身を包んだセレーナの姿があった。

「殿下？」
セレーナの前に、銀の鎧に身を包んだサルヴァ王子の姿があった。
そして王子の元へと駆け寄りその胸に飛び込んだ。
その身体は硬い鎧に覆われていたが、それでもセレーナには嬉しかった。

だが王子の方はいまだこの状況に戸惑った様に問いかける。
「どうやってここに？」

その声にセレーナは顔を上げ王子を見つめた。その目には涙が溢れている。
「アリシア様が連れてきて下さいました」

「アリシアが？」
王子の目が驚きに見開く。

「はい」

視線を巡らしアリシアの姿を探すと、馬車の後ろの方で佇んでいた。そして王子と目が合うと微笑む。

さすがの王子もこの状況に気持ちが追いついていない事と、手紙の事、などといった複雑な心境にいつもの闊達さが無い。

本来なら、それでもこの様なところまで来るという非常識さに怒鳴るところであるが、目を泣き濡らして己の胸に顔を埋めるセレーナを思うと怒鳴る事も躊躇われた。

「そうか。礼を言う」
と、王子は結局無難な言葉を発するに留まった。

実際アリシアが行った苦労に比べ、あまりにも物足りない言葉だが、彼女も王子からの礼を期待していた訳ではない。まったく困った王子様だ。とやれやれと肩を竦ませただけですました。

あくまでセレーナの為にしたという思いが強く、彼女が喜んでいるならそれで良い、という気持ちだったのだ。

そして意外にもアリシア自身は、王子からの仕打ちに対して、まったく傷付いていないといえば嘘になるが、王子が思うほどには頓着していなかったのである。

アリシアの貞操観念が低いという訳ではない。

リヴァルが亡くなってからというもの、死んでも良いと考えている彼女は、自分の身について無頓着になっているのだった。

今回の事でも、自分の身を差し出してでもセレーナを守ると決意したが、リヴァルが亡くなる前だったなら、どうすれば2人とも助かるかを必死で考えていただろう。

アリシアが改めてセレーナに目をやると、彼女は嬉しそうに涙を流しながら王子の胸に顔を埋めていた。

第２５話：バルバールの現実主義者

サルヴァ王子が帝国国境を突破し本国に戻ったという情勢は、バルバールにも伝わっていた。とはいえ他国、しかも方角は正反対の帝国国境の事である。正確な情報など集められようも無く、かろうじて知りえた情報は僅かなものだった。

「詳細は不明だが、とにかくサルヴァ王子とその軍勢はランリエル王都フォルキアに戻り、そして改めて数万を動員。帝国国境に展開している反乱軍を背後から包囲した。って事かい？」

バルバール王都チェルタでの、幕僚そして主だった諸将が出席する軍議の席で、ディアスはランリエルの情勢を報告した士官に、そう問いかけた。

「はい。その通りです」

と短く応えたその仕官に、内心詳細が不明ではまったく報告の意味が無いだろうと愚痴をこぼしたが、言ってもせんなき事と口をつぐんだ。そもそもこの仕官も貧乏くじを引いただけで、彼１人が情報収集からすべての実務をこなしている訳ではないのだ。

そしてこの状況に、１人の将軍が意見を述べた。

「ディアス将軍。いかが致しましょう。計画ではサルヴァ王子と反乱軍が戦うその時、我らは海上より帝国に攻め込む予定でした。ですがこれでは……」

途中で閉じられた言葉の意味を正確に読み取ったバルバール軍総司令官ディアスは、目を瞑りため息をついた。そしてその語られな

かった問いに答える。

「ああ、帝国を攻めても意味は無い。我々が帝国軍を引き付けても、サルヴァ王子と反乱軍の戦いになんら影響を与えない。国境を固める帝国軍が我らの迎撃に引き上げても、王子は少しも困りはしないさ」

軍議の席からもそこかしこからため息が聞こえる。仮想、いや、ほぼ現実の敵国に対して打撃を与えられると思っていたにも拘らず、その相手にするりとかわされたのだ。やはり落胆は大きい。

そしてそれを諦めきれない者が、夢を捨てきれず食い下がる。

「ですが、いっその事、陸路からランリエルに攻め込むというのはどうでしょうか？　反乱軍とサルヴァ王子の軍勢との戦闘が開始されたその時、我が軍が国境を越え攻め込めば、反乱軍と我が軍とでサルヴァ王子を挟撃出来る筈です」

それに対し、バルバール軍随一の現実主義者が答える。

「コスティラに大打撃を与えたとはいえ、我が軍がランリエルと戦闘状態となればコスティラが、傷付いた体に鞭打って攻め寄せてくる事も考えられる。その為、コスティラへの備えも必要。ゆえに対ランリエルに動員できる兵力は４万ほど。反乱軍は２万５千。サルヴァ王子が王都に帰還した以上、その動員は１０万を超える。王子は我が軍に十分な戦力を差し向けた上で、反乱軍を倍以上の戦力で包囲し続ける事が出来る。我が軍が抑えられている間に、反乱は鎮圧されてしまうよ」

「ですが、ディアス総司令ならば、我が軍に差し向けられた軍勢を

撃破する事が可能なのでは。そして我が軍がランリエル王都フォルキアを突けば、サルヴァ王子は進退窮まります」

ずいぶん自分を高く買ってくれるものだ。とディアスは苦笑した。

「そうだな。私は自分の能力を謙遜する積もりは無い。我が軍がランリエルに攻め寄せた場合、迎撃に来る戦力はほぼ同等だろう。同数ならば勝ってみせる。そう言いたいところだが、そう簡単に行かない」

「いえ、ディアス総司令なら必ずや……」

「サルヴァ王子は、反乱軍に対しては倍以上の戦力を投入するだろう。ならば他の者に任せられる。そして我が軍に対しては、サルヴァ王子自身が出てくる。私も王子と戦って必勝を誓えるほど自惚れてはいないよ」

「しかし総司令は常勝。サルヴァ王子が相手でも必ずや」

だがその言葉にディアスは首を振った。

「常勝と言っても前回のコスティラへの侵攻を除けば、基本迎撃戦のみ。戦いとは守る側が有利。しかも国境は天然の要害で守られている。その様な有利な状況での常勝に自惚れるほど私は愚かではないよ。こちらからランリエルに攻めるとなれば、その有利な状況は逆転される。サルヴァ王子に不利な条件で勝つ。ちょっと難しいな」

ディアスはそう言うと肩をすくめてにやりと笑った。深刻な状況にもかかわらずいささか不謹慎な態度であったが、あえて冗談めかす事により、しつこい追従者の口を封じたのだ。もっとも内心では

口に出せばまさに不謹慎では済まされない事を考えていたのだが。

「とにかく現状、ランリエルの内乱について、我らバルバール軍が介入する目は無くなった。短期間足を引っ張るだけなら色々手は有るが、そんな事をしてもしょうがない。それよりも、いずれあるランリエル軍によるバルバール侵攻に対する、迎撃の準備を整えるべきだろう」

ディアスはそう総括し、軍議は幕を閉じた。

その後、従者であるケネスと共に執務室に引き上げたバルバール軍総司令官フィン・ディアスは、執務室の重厚な机の椅子に座り、改めてランリエル王国に思いを巡らせる。

今回の内乱で、ランリエルはどの程度の被害を受けるのか。今回の反乱軍の兵力は2万5千。それは当然反乱に加担した貴族の私兵だが、各国の軍勢は王国所属の騎士団を中心とした直属兵と、貴族達の私兵の混成軍。

反乱軍が消耗すれば、それはそのままランリエルの動員兵力が差し引かれる事となる。そしてそれを回復するに必要な時間は、消耗した軍勢の数に基本そのまま比例する。当然サルヴァ王子の軍勢もだが、ディアスは王子は圧勝すると読んでいた。損害のほとんどは反乱軍のものとなるだろう。

問題はどの程度の損害を受けるかだ。反乱軍2万5千すべてが一兵残さず消滅するなどありえない。通常全軍の3割を失えばその軍勢は壊滅と言われている。王子が圧勝する事を考えればそれ以上の損害を与える事も予想されるが、希望的観測はすべきではない。ここはその3割と見ておくべきだろう。

つまり7千から8千。ランリエル全軍で考えれば5%ほどとなる。ランリエルの国力から、ディアスはその回復に2ヶ月を要すると見ていた。バルバール軍では、元々ランリエルとの戦いは来年の春を想定していた。それが最低でも2ヶ月は先になる。

バルバール軍はその得た時間で、迎撃態勢をさらに強化する事が出来る。内乱に介入できなかった事は残念ではあるが、そもそもその内乱はディアスが裏で手引きしたものなどではなく、バルバールにしてみればまったくの僥倖。これだけでも天からの贈り物と、ありがたいと感謝すべきだった。

そしてディアスは思考を切り替えた。軍議の席で考えた、あの不謹慎な事についてだ。

「ケネス。どうやらミュエルとの結婚式は行えそうだよ」

超常の力を有せず、ディアスの思考を読めぬケネスは、従兄であり上官でもある男の突然の言葉に戸惑った。いや、確かにランリエルに攻め込まぬなら、ミュエルとの結婚式を行う予定だった来年2月に出陣はしない。だがランリエルに打撃を与えるチャンスを失いバルバール軍としては不運としかいえない状況である。それを幸いとする様な発言を、総司令官であるディアスがするとは思わなかったのだ。

「良いのですか？　確かに結婚式を行うのは可能ですが、他の人が総司令の事を悪く言うのでは無いですか？」

ケネスの言葉は彼を思っての事だが、ディアスにとっては苦笑するしかない。

「私がその様な評判を気にするほど、神経が細い男と思っているのかい？　言いたい奴には言わせておくさ。ミュエルは私の大事な妻だからね。自分の外聞の為に、その妻を悲しませる様な事は出来ないよ」

その言葉にケネスは赤面した。そしてやはりミュエルには自分より、この度量の広い総司令が相応しかったのだと改めて思った。自分に同じ様に考える事が出来る日があるだろうか？　人に言われて気付くのではなく、自分で自然とそう考えられる様にだ。

赤面するケネスに、ディアスは改めて苦笑した。また買いかぶられたか。そう思ったのだ。

「そう難しく考える事は無いよ。中止しなければならないから中止し、中止しなくて良くなったか中止しない。ただ、それだけなんだからな」

「それはそうかも知れないですけど……」

「まあいい。どちらにしろいずれランリエルとは戦いになる。その時はケネス。お前の初陣にもなる。覚悟を決めて置けよ」

そう。今まで体質的に兵士として戦うには向いていないという事で、とっくに初陣を飾っても良い年齢になっているにもかかわらず、戦いに出た事がないケネスだったが、次の戦いではディアスの従者として戦場に出るのだ。

「はい！　必ず総司令のお役に立って見せます！」

意気込んで答えるケネスに、ディアスは今日何度目か、数えるのも馬鹿馬鹿しくなりながらもまたも苦笑する。

「次の戦いでは、お前は戦場の空気を掴み取ればいい。それと私や他の将軍達の指揮から何かを得られれば御の字だ。他に何も期待しないよ」

だがケネスは顔に不満の色を浮かべた。確かに自分はまだ未熟だが、それでも活躍を期待しないなどあんまりな言葉である。ケネスの表情からそれを読み取ったディアスは、ため息をついて少年に口を開く。

「私が前線に出ない総司令という事はお前も知っているだろう？まさか従者が総司令をおいて前線に出る積りじゃないだろうね？」

あっ！　っと、初陣に気負った為か、迂闊にもそんな簡単に気付かなかったケネスは赤面した。だが、それでも控えめながら反論をしてみせた。

「ですが、万一敵が本陣にまで攻めてくる事だってありえます。その時は必ず」

そしてディアスは、その言葉にも首を振ったのだった。

「敵が本陣にまで攻めて来た時の、従者の活躍ってなんなんだろうね。私は自分の腕がどの程度か知っている。とても敵と戦おうとは思わない。総司令が戦死すれば戦いは負けだ。だから敵が来たら私は逃げる。その時お前はどうする？」

そうだディアス総司令は戦わない事で有名な男だった。改めてそ

う認識してみると、自分が戦場でどうすべきなのか？　ケネスは自問しその回答を口にした。

「それは当然最後まで総司令に付き従います。僕は総司令の従者ですから」

その答えに何を思ったのかディアスは椅子から立ち上がり、傍に控えて立つケネスと向き合った。そして自分より背の高い少年の頭に手をやる。

「違う。その時の優秀な従者の活躍とは、身を挺して敵を防いで、私が逃げる時間を稼ぐ事だ。だが私は、お前にそんな活躍はして欲しいとは思わない」

従者は上官が逃げる為の捨石になるべき。その言葉にケネスは絶句した。

「戦場では命の価値は平等じゃない。戦場にある時、私の命はバルバール全軍の誰よりも尊い。戦場で一兵卒を偉い将軍閣下が身を挺して庇い命を落す。なんて美しい話だろうね。だが指揮する者が死ねば戦いは味方の負けさ。そして数千、数万の将兵が命を落とす。1人の命の為に数千、数万が死ぬんだ。1人の為に数万の命を預かっている者が命を落とすなんて馬鹿馬鹿しい話さ。私は誰の命を犠牲にしても死んではならないんだよ」

ケネスはディアスの事を、将兵を大事にする将軍と考えていた。しかし今語ったその言葉はそれとは反対だ。いや、普段のディアスの言動からも将兵を切り捨てる様なところは見当たらない。

そしてディアスは、そのケネスの疑問を察しているかの様に、その回答を続ける言葉に乗せた。

「兵法にもある通り、率いる兵士を我が子の様に大事にすれば、兵士は指揮官の為に命をかけて戦ってくれる。だから兵を率いる者は将兵を大事にしなくてはならない。だがその裏で、命の価値の違いを計算しなければ行けないんだ。攻勢に出る時、自らが先頭に立つ。退却する時、自分は最後まで戦場に留まる。その様にする将軍も多々居る。もちろんそれは間違っちゃ居ない。それによって将兵の信頼を得られ士気は上がる。戦いには士気が重要だからね。だが私はしない。私がそんな事をすれば、たちどころに戦死してしまうよ」

そう言うと、ディアスはケネスの頭の上に乗せていた手を放し、自分の頭を軽くなでつけた。そして自嘲の笑みを浮かべる。

「幸い私の剣の腕がまるっきりなのは有名だからね。お陰でいつも逃げ回っていても、大抵の人は文句を言わないので助かっている。もちろん何にでも例外はあるが」

その例外とはもちろん、シルヴェン将軍を筆頭とする、家柄を頼りにディアスの台頭を快く思わない一派である。

「ディアス総司令は、どうして僕にその様な話をなさったのですか？」

ケネスは今までディアスからさまざまな戦略、戦術の話を聞いていた。しかしこの様な話をされたのは今日が初めてだったのだ。しかもその内容とは、将兵の命を計算によって切り捨てよ、と言う、その当事者である将兵に聞かれればディアスの人望が失墜しかねない事なのだ。

「さて、どうしてかな。それはお前が考えてくれ」

そう言ってディアスははぐらかしたが、実際は明確な理由があった。ケネスの体質では好むと好まざるに寄らず、戦場での武勇など期待できない。そのケネスが軍人を目指すなら、ケネスの目標どおりディアスと同じ型の軍人を目指す事になる。

それには今語った事を理解する必要がある。そして今語った事を聞いて、軍人と言うものが嫌になったと言うのなら、初陣を向かえる前に軍から去るべきだ。その判断をケネスに委ねたのだった。

「それでは、家に帰るとしよう。ミュエルに結婚式が行えそうだと伝えなくてはいけないからね」

そう言ってケネスから背を向け、執務室から廊下へ通じる扉へと向かうディアスを、少年従者は慌てて追いかける。

そしてその背を見ながら思った。

もしかして、歴代総司令随一の弱さを誇るこの男は、そう見せかけているだけで、実は剣の達人だったりするのだろうか？　と。いや、すぐにそれは思い直した。ディアスの体は貧弱とは言わないが、到底鍛えられているとは言いがたい。実は剣の達人などとはありえないだろう。あまりにも夢見がちな妄想だった。

だがさらに考えた。剣が上達しないように、わざと剣の稽古をしていないのではないか？　と。もっとも、それを当のディアスに問いかければ、いくらなんでも買いかぶり過ぎだと大笑いしただろう。真偽の程は別として。

第２６話：反乱軍の末路

セレーナ、アリシア、２人の寵姫と合流したサルヴァ王子の軍勢は、帝国国境を封鎖する反乱軍を避け王都に帰還した。

王都では、帝国に取り残されたと思われていたサルヴァ王子の突然の生還に沸いた。これは王子があえて、先触れの使者を王都に向かわせず、さらに目立たぬ様に海岸線にそって進軍し、しかも通過する村々にも緘口令を布いた為だった。

なぜその様な事をしたのかと言えば、それには当然理由がある。反乱軍は王子が無事と知ればすぐさま軍勢を解散させ、何かと理由を付け敵意は無かったと申し開く事は目に見えていた。それでは折角不満分子を炙り出した意味が無い。

それをさせぬ為には、国境にいる彼らに申し開く間を与えぬ事が必要だった。サルヴァ王子は素早く軍勢を展開し、彼らを有無を言わせず包囲してしまったのだ。

サルヴァ王子はバルバールに対し十分な備えを残し、５万の軍勢を持って反乱軍を包囲した。

「反乱軍は守りを固めています。そして今回の事は誤解であると使者を送ってきております。いかが致しましょう」

本陣で、副官ルキノからの報告にサルヴァ王子は頷いた。

「まあそんなところだろうな。私が率いる倍の軍勢を相手にして勝てるとは、さすがに彼らも考えてはおるまい。すべて予定通りだ」

「では、こちらも予定通り事を運びますか？」

あまりにも予定通りな状況に微笑んで答える副官に、王子は不敵な笑みで応じる。帝国、ベルヴァースの名将と戦い、しのぎを削ってきた王子である。今まで戦いに際して私兵を派遣するも、指揮する者についてはすべて代理人を立てていた名門当主など相手にならない。

もっとも王子にしても、遊兵を作る余裕の無い戦場で、無能な名門当主などが指揮官として来られても迷惑だ。代理人を派遣してくるのは望むところだった。

王子は忠実な副官に、かねてからの計画通りに命じた。

「ああ。カーサス伯爵と、上手く連携をとり事に当たってくれ。その対応により今後の展開が大きく変わってくる。もっともすでに最善の結果への道筋は付けられている。後はそれを踏み外さぬ事だけだ」

カーサス伯爵は、情報操作にその才能を発揮していた。帝国に居て正確にランリエルの内情を読み取り、サルヴァ王子に組する判断をした男である。その手腕は傑出している。

「承知いたしました。サルヴァ殿下」

ルキノは一礼し本陣を後にした。すべて計画通りであり後は彼らに任せればよい。そう考えた王子は、その後の事について思いを馳せる。来年春に予定しているバルバールとの戦いについてだ。

戦力だけで考えれば、バルバールはランリエルの半分以下。勝って当たり前の勝負である。だが現実はそう甘くは無い。バルバールとランリエルを断する国境の天険が、その戦力差を生かす事を許さない。

バルバール軍を率いる総司令ディアスは、音に聞こえた戦巧者。ランリエルと同じく、バルバールを大きく上回る戦力を有するコスティラに対し、勝利を積み重ねている男だ。同数では負けぬまでも勝てない。サルヴァ王子はそう想定していた。

いや、厳密には、勝てぬと想定して戦略を立てる。そう考えていたのだった。ならばどうすべきか。一つはディアスを凌駕する戦力をぶつける。ならば勝てる。だが国境の天険が邪魔をしてそれは難しい。ならば残る手は……。

ある日、ガリバルディ公爵を盟主とする反乱軍に、サルヴァ王子の名前で降服の使者が訪れた。その条件にガリバルディ公爵は青ざめ、絶叫した。

「私の首を差し出せだと!?」

サルヴァ王子の出した条件は、通常あり得ない条件だった。首を差し出すくらいなら最後まで抵抗するに決まっているからだ。もちろん部下思い、将兵思いの主君ならば、自分の首を差し出す代わりに他の者の命を助けて欲しい。そう考える事も無いではない。だが、自分の利益の為に反乱を起した者が、その様な殊勝な考えをする訳が無い。

事実、ガリバルディ公爵は王子の申し出を一笑した。

「馬鹿馬鹿しい。確かに状況は不利とはいえ、この様な条件を飲むくらいならば、全軍打って出て一矢報いてくれるわ！」

むしろ戦意を高揚させた公爵は、そう吐き捨てたのだ。自分は王国でも屈指の名門の当主である。なぜ配下の命を救う為、自らが犠牲にならねばならないのか。

だがそれを反乱軍の副盟主といえるバリオーニ公爵とアラビーソ侯爵が制した。

「ガリバルディ公爵。落ち着きなされ。これは王子の我が軍を激し無謀な攻撃をさせんが為の策略で御座いましょう」

「さよう。バリオーニ公爵の言うとおりです。確かに王子の軍勢は我が軍の2倍。しかし守りを固めていれば、早々負ける事もありますまい。そして情勢の変化を待つのです」

「我らが粘りランリエルの情勢が不安定となれば、王子に組した帝国諸侯の動向もどうなるか分かりませぬ。帝国に不穏な動きがあれば、王子も我らといつまでも対峙している訳には参りますまい。その時こそ譲歩を引き出し、有利な条件で和睦すべきです」

元々帝国をランリエルに完全併呑せんと目論んでの挙兵にもかかわらず、その帝国頼みの策などあまりにも不甲斐ない。しかし、他者が自分に奉仕するを、当然として生きてきた彼らである。他者を利用する事に何の呵責も感じない彼らには、帝国を頼りにするのも、また自然な発想だった。

ガリバルディ公爵も両名の言を良しとした。突撃命令も、死ぬく

らいならと考えただけである。生き残る算段が残っているならば、それにかけるのは当然だった。

「良かろう。ならば、もうしばらく様子を見てみるとしよう」

公爵はそう言って気を落ち着かせた。

だが実は、両名の提言は公爵を思っての事ではない。単にガリバルディ公爵の自殺行為といえる暴挙に対しての、もっともらしい逃げ口上にしか過ぎなかった。両名、我ながら即興で良く上手い話を作れたものだ、と、内心得意となっていたのだった。

だがその数日後、カルデイの動向を見守っている彼らに、王子から新たな降服の条件がもたらされた。反乱軍に参加した諸侯が集まる中、使者が口上を述べる。

「折角多くの命を救わんが為、ガリバルディ公爵御1人のお命で事を収めようという、サルヴァ殿下のお心を分からず抵抗し続けるとは、あまりにも不心得。殿下におきましては、反乱軍の副盟主たるアラビーソ侯爵も同罪とし、ガリバルディ公爵とあわせて御二方の命で事を収拾させよ。とのお言葉で御座います」

使者の言葉に、諸侯はざわめきそして1人の男に視線が集中した。ほかならぬバリオーニ公爵にである。副盟主と呼ばれるのはこのバリオーニ公爵と、そして死を命じられたアラビーソ侯爵の2人だ。なぜバリオーニ公爵は死を命じられないのか。諸侯に胸中に穏やかならぬもの波うち、渦巻いた。

そしてバリオーニ公爵自身も内心穏やかではいられない。どうして自分には死を命じられないのか。自身の潔白を知っている公爵には、諸侯から自分へと、疑惑の目が向けられている事など、夢にも

思わぬ事だった。公爵が考えたのは、自分がアラビーソ侯爵より下に見られている。それゆえに、死を命じられなかったのではないか。その疑念だった。

落ちぶれたとはいえ公爵、との自尊心は存在した。どうして侯爵ごときの風下に着かなくてはならないのか。だがもちろん死にたい訳ではない。自分にも死を賜りたい。そうとは言えずバリオーニ公爵は口をつぐんだ。

そして使者が引き上げると、改めて諸侯はそれぞれ親しい者達と集まり、使者の口上について話し合った。

「やはり、ガリバルディ公爵もアラビーソ侯爵も殿下からの申し出は断る様ですな」

「それはそうでしょう。お二方とも、自らの命で他の者の命を救おうなどと、考える方では御座いません」

「確かに……」

「それにしても、もしやバリオーニ公爵はサルヴァ殿下と通じておるのやも……」

「確かに考えられぬ事ではありませぬ。ですが、そうであったとすれば、あからさま過ぎでは無いですかな？　バリオーニ公爵はアラビーソ侯爵より下に見られている。それだけの事でしょう」

「しかし仮にも公爵ですぞ。公爵とは王族と血縁で連なる家柄。単に侯爵より爵位が1つ上という事とは訳が違います。それを公爵を下に見るなど……。王国の体制にもかかわる問題」

「では、だから公爵がサルヴァ殿下と通じている。そう仰るか？」

「そうは申しません。盟主たるガリバルディ公爵のお命はやむを得ぬとはいえ、やはり公爵は別格。副盟主でしかないバリオーニ公爵のお命は減免なさるという事なのでは」

「なるほど、ありそうな事ですな……」

諸侯が思い思いに意見を述べるなか、数日後さらに使者が到着する。使者はさらなる命の提供を求めた。だがその者の名に諸侯は驚愕した。

「ボンディーノ伯爵ですと!?　伯爵など、ただの物資運搬の責任者ではないか？」

いくらなんでも、次に死を命じられるならバリオーニ公爵。誰もがそう見ていた。諸侯の疑惑はさらに深まった。そしてここまで来ると、さすがに公爵自身も、己に向けられる諸侯の白い目に気付かぬ訳には行かなかった。

どうしてこの様な状況になってしまったのか。公爵は焦りその為行動を起した。とはいえ特に上手い方法がある訳ではない。反乱に組している血族に連なる貴族達を招き、自身の潔白を訴えたのだ。

彼らも一族の長のいう事である。公爵の必死の弁明に、もちろん信じますとも、と答えた。しかし心中の疑惑は晴れきれない。それどころか一族外の者にしてみれば、公爵が一族を集めなにやら密談を行っている。そう見えたのだった。

反乱軍は猜疑心の渦に巻き込まれた。もちろんこの状況はサルヴァ王子の指示によるものだった。反乱に組した諸侯を疑心暗鬼に陥れる為、あえてバリオーニ公爵に死を命じないのだ。もちろん諸侯の中にはそれを見破り、離間の策でしかない。そう断ずる者も存在した。

だがみながみな、その様な賢明な者達ではない。我が子を賢人と信じる母すら、3人の人間から我が子が罪を犯したと讒言されれば、母はそれを信じ子たる賢人を疑うという。そしてバリオーニ公爵は賢人ですらなく、疑う人間は3人では利かない。王子の策を感じ取った者すら、周囲の者から公爵への疑惑を耳に入れられ続ければ、その言に染まる有様だった。

この様な状況の中、バリオーニ公爵の一族の甥に当たるクレパルディ子爵が、伯父である公爵に面会を求めた。公爵の率いる軍勢の天幕で、人払いをし2人は対面した。

「私は伯父上の潔白を信じております。しかし伯父上の高潔も、他者から信じられなくては意味はありません。彼らが伯父上を疑うならば、いっそその期待に、応えてやれば良いではないですか」

公爵は裏切りを進める甥の言葉に険しい視線で答えた。

「しかしそれではみなに、やはりそうだったのか。そう思われるだけではないか。その様な屈辱耐えられるものか」

だが子爵は目を瞑り首を振って、伯父の見解を否定した。

「伯父上……。もはや我々は、屈辱を感じずにはすまない状況に追い込まれているのです。確かに王子に組すれば、それ見た事かと言

われましょう。しかしこのまま手をこまねいていれば、どうなると思うのですか？　我々は無実の罪で諸侯から罰せられます。それこそ屈辱ではないですか。それとも己のみ潔白と胸中に秘めながら、無実の罪で罰せられのが、名誉とでも仰るのですか」

　甥の容赦ない追求に公爵は唸った。確かにどう転んでも屈辱にまみれるのは避けがたい状況である。そして同じ屈辱を受けるならば、生き延びた方がマシ。そう考えるのが普通だろう。しかし公爵は古い人間だった。

「屈辱にまみれ生き延びるぐらいならば、真実を胸に死した方が、名誉ある公爵家当主としては当然であろう」

　公爵の古風なヒロイズムに酔った言葉に、子爵は内心ため息をついた。彼も公爵個人の問題で済むならば好きにさせるのだが、その下には多くの一族郎党がぶら下がっているのだ。伯父の自己陶酔に一族を道連れにさせる訳にもいかない。当然その一族には子爵自身も含まれているのである。

「伯父上、ですが名誉を守り、さらに生き延びる道があるとすれば、いかがですか？」

「なに？　私の潔白を証明する手立てが有ると言うのか？」

「いえ。それは無理です。もはや伯父上が生き延びるには、王子に組するを事実とするしかありません」

　話が同道巡りするかの様な甥の言葉に、伯父は激する。

「馬鹿者が！　だからそれでは、裏切り者の汚名を着ると言ってお

るのではないか！」

だが甥は激した伯父に平然と答えた。

「いえ、伯父上は、ガリバルディ公爵やアラビーソ侯爵を裏切るのではありません。サルヴァ殿下の命を受け、初めから彼らを監視する為に、彼らに組したふりをしていただけなので御座います。これこそ王室に対し、忠義の行動ではありませんか」

公爵は甥の言葉に驚愕の目を向けた。

「お前……。まさか初めから殿下と通じて……」

「伯父上、何事にも保険は必要です」

クレパルディ子爵はにやりと笑った。

数日後、ガリバルディ公爵、アラビーソ侯爵両名にバリオーニ公爵から使者が届いた。

「近頃不愉快な醜聞が飛び交っておりますが、私が裏切り者などとは、とんでもない話。名誉あるランリエル王国の公爵として、恥じぬ事を証明しよう。その為に是非お二方を招きしたい」

両名は、そこまで言うならと招きに応じた。だが、バリオーニ公爵の天幕に入ったところで、公爵の私兵に取り囲まれたのだった。

「バリオーニ公爵！　やはり我らを裏切っておったのではないか！　それを名誉を証明しようなど！　このランリエル貴族の面汚しめ！」

ガリバルディ公爵は、薄汚い裏切り者を血走った目で睨んだ。だがバリオーニ公爵は内心の動揺を隠し切り、構えて平然と切り返す。

「ランリエル貴族として、サルヴァ殿下に弓引くなど持っての他。我は殿下の命を受け御主等を監視しておったのだ。御主等こそ王室に歯向かう裏切り者ではないか！」

「おのれ……。あれほど王子への誹謗を述べながら、よくも抜けぬけと……。わが身惜しさに、我らを売る積もりであろうが！」

「おのが良心に恥じぬのか！」

両名は怨嗟を込め公爵をなじったが、それが両名の命数を縮める事となった。彼らの声に耐え切れなくなった公爵が脇に控える私兵に命じる。

「これ以上の問答は不要！　２人の首を落とし、サルヴァ殿下に献上差し上げるのだ！」

こうして反乱軍は戦闘をする事無く、盟主と副盟主が打たれ、残った副盟主はそもそもサルヴァ王子の手の者だった。と言うあっけない結末で幕を閉じた。当然王子は、残余の諸侯はすべて不問とした。ガリバルディ公爵、アラビーソ侯爵の血縁に連なる者達すら、一族の当主に反乱に組せよと命ぜられれば断る事が出来なかったのだろう。とむしろ労いの使者を送るほどだった。もっともボンディーノ伯爵だけは、生贄の羊として処罰されたが……。

王子は、国内の身分制度改革などを目指している訳ではない。自身に敵対する者達を抑える事さえ出来ればそれで満足だった。そして、自分に内心不満を抱く者の存在すら許さぬほど、潔癖症でもな

かった。

今回の反乱を、戦闘をせずに終結させたのには複数の理由があった。まず第一はバルバール軍総司令官ディアスが認識していた通り、反乱軍の兵を討つなど、自国の戦力の低下でしかなく、王子にとっては馬鹿馬鹿しい事でしかなかった。もちろん戦闘が不可避な場合もあるが、避けられるならば避けるべき事なのだ。

第二には、戦う事すら出来ず盟主、副盟主と言った首謀者のみが首を取られただけで終ったという事実が、更なる反乱を未然に防ぐ事に繋がる。

王子は、最終的に寝返ったとは言えバリオーニ公爵をそのまま許す積もりは無かった。もちろん表立っては、我が為に尽力してくれたと、みなの前でその労をねぎらい、かねてより王子の命で反乱軍内を暗躍させていたかの様には装った。しかし、その裏でカーサス伯爵を使い、実はやはりバリオーニ公爵は、形勢不利と見て反乱軍を寝返ったのだ、という風聞を流したのだ。

その為、反乱を起したところで形勢不利となれば首謀者が生贄にされ、裏切った者や他の者は不問とされる。諸侯はそう認識した。この様な状況で、誰が反乱の首謀者と成りえるだろうか？　そして首謀者無き反乱などあり得ないのだった。

こうしてランリエル王国の内乱は、ディアスの予想通りサルヴァ王子の圧勝に終わり、ディアスの予想に反しランリエル軍にまったく損害を生じさせなかったのだった。

反乱終結後、カーサス伯爵の邸宅の一室にクレパルディ子爵は招

かれていた。

子爵にソファーに座るように進めた後、伯爵は手ずから客人のグラスにワインを注いだ。

「それでバリオーニ公爵のご様子は如何です？」

「かなり精神的に参っているようです。やはり反乱軍を裏切ったのだ。という風聞を気にしているご様子で……」

その風聞を流した当の本人は、自らのグラスにワインを注ぎながら、さも気の毒そうに同情の言葉を吐いた。

「それは……。心労のあまり倒れられたりせねば良いのですが。しかも、公爵には跡取りとなる子息もいらっしゃらず、頼りになる者も居ないとか……」

「はい。ですが公爵には一人娘のクラリーチェ嬢がいらっしゃります。せめて私が公爵のお力になろうと、そのクラリーチェ嬢との婚約の許しを伯父上に申しでる積もりです」

「なるほど……。それは公爵も立派な跡取りが出来安心なさるでしょう」

微笑みながら気遣う様な伯爵の言葉に、子爵は神妙に謙遜する。

「いえ、私など微力なものです……」

その言葉の応酬の裏で、両名は同じ事を考えていた。いつ、この茶番を切り上げ爆笑しようかと。

第２７話：総司令の結婚

ランリエル王国で起った反乱の結末に、バルバール軍司令部の重厚な机に添えられた椅子に座る、その部屋の主は深いため息を付いた。

先ず始めに反乱に介入しようと計画し、カルデイ帝国侵攻の準備を進めていると、するりとかわされ、せめてある程度の損害をと見込んだにも拘らず、その思惑すらも外れた。

ランリエル王国第一王子サルヴァ・アルディナ。予想以上の曲者らしい。ディアスはサルヴァ王子の戦歴を調べ上げていた。それによって推測したサルヴァ王子像は「戦闘を好み、後手に回らず先手を取って攻勢に出る者」というものだった。

だが今回の反乱において、かの王子は先手を取って攻勢に出る以前に、戦闘自体を回避したのだ。王子は反乱を収め、さらに再発させない事を意図していた。その為内部分裂させようと画策し、その通りの結果を得た。ディアスも賢明な判断だとは思う。だが反乱を収め再発させない為には、他の手段もあった。それは反乱軍を完膚なきまでに叩き潰す事だ。

それによって、到底サルヴァ王子には勝ち得ぬ。そう思い知らせれば、次なる反乱を企む者も居なくなるだろう。王子はこの手段を取るのではないか。かねてより調査していたサルヴァ王子の性格、戦歴からディアスは読んでいたのだ。だがその読みは外れた。

「私も耄碌したのかな？　それとも単に相手が一枚上手なのか？」

その独り言に近い総司令の呟きに、忠実な従者が律儀に返答を試みようと思案した。だがディアスが耄碌したからとも、サルヴァ王子の方が上手だからとも言いかねるケネスは、結局返答に窮する。そしてその挙句口に出たのは、問いかけに対しての返答とは言えなかった。

「サルヴァ王子と言う人は、それ程凄い人なのですか？」

その問いかけにディアスは、顎に手をやり調べ上げた王子の経歴を思い起こしながら答えた。

「そうだな……。指揮官としても優れているんだが、それよりも戦略家、策謀家としての手腕に、その才を発揮しているね。いや、指揮官としての才も他に抜きん出ているが、やはり実戦指揮には経験の積み重ねが必要だ。サルヴァ王子はまだ２７歳。その経験が不足しているのは否めないね」

「じゃあ、指揮能力にはあまり優れていないという事ですか？」

「いや、そうじゃない。うーん。そうだな……。戦略家、策謀家としての能力が超一流とすれば、指揮能力は超一流未満というところかな。指揮能力も多くの者よりは優れている」

最もディアスにしても今だ３５歳であり、老練とは言いがたい年齢である。だがサルヴァ王子が主に敵として戦っていたカルデイ帝国は、近年まで膠着状態が続き大きな戦は無かった。それ故毎年の様にコスティラ王国に攻め込まれているバルバール王国の総司令官ディアスとは、経験においては格段の差がある。

「では、戦えばディアス将軍が勝つのですか？」

尊敬する総司令に全幅の信頼を寄せる従者に、ディアスは思わず吹き出しそうになった。王子の指揮能力が超一流未満なら、超一流のディアスが勝つに違いない。ケネスはそう言っているのだ。

「いや、そうと言っている訳じゃない。王子は戦闘開始前に勝つ算段を立てそれを実行に移すタイプだ。確かにその算段が崩れた時、王子は体勢を立て直すのに若干手間取る傾向がある。だが、それも今後経験を積めばやがては、克服するだろう。それに、そもそもサルヴァ王子が立てた算段を崩すのが至難の業だからね。それを無視して、指揮能力だけを比べて勝ち負けを予想しても意味は無いよ。もっとも王子はカルデイ帝都での戦いで苦戦した。その時はまさに、帝国の敵将は、王子のその算段を崩したらしい」

「ディアス将軍が凄いと認めるサルヴァ王子の策を見破るなんて、帝国の将軍も凄い人なんですね。でも、カルデイ帝国はランリエル王国に征服されたんですから、結局はサルヴァ王子が勝ったんですよね？　王子はその状態から軍勢を立て直せたんですか？」

「いや、王子がその時に軍勢を立て直せたのは、ランリエル、帝国両国と国境を接するベルヴァース王国の老将の手腕のお陰らしい」

「え？　そうなんですか？　じゃあ、そのベルヴァースの老将はサルヴァ王子より上ですか？　凄い人って沢山居るんですね」

ディアスの口から出る知将、名将の数々に、それを目指す少年は驚きの声をあげた。まったく世の中には無能な人間も多いが、それらの頂点に立つ者達はやはりみな有能なのだ。隣国と戦い続けている国の軍事の頂点に、無能者が立てる訳が無い。

ケネスの率直な言葉に苦笑で応じるディアスに、少年はさらに素朴な質問を浴びせた。

「ですが、コスティラには名将や知将は居ないのですか？　ずっとうちが勝ち続けていますけど」

「いや、幸いな事にサルヴァ王子ほどの者はいないが、コスティラにだって優れた者が居ない訳じゃない。コスティラに攻勢をかけた時に戦った、アウロフ将軍はなかなか有能だったね。バルバールが勝ち続けているのは、結局国境、海峡の天険の利のお陰だよ」

だが、ケネスは敵国の将軍を讃えるディアスの言葉に首をかしげた。聞いた話では、そのアウロフ将軍はディアスに手も無く敗れたはずだからだ。

「ディアス将軍のお言葉ですが、僕にはアウロフ将軍がそれ程有能とは思えません。それは……僕がアウロフ将軍に勝てるかと言えば、絶対にそんな事は無いんですけど……」

「あの時彼は、私達の突然の攻勢に狼狽するばかりのコスティラの諸将の中で、軍勢を集結させ、そして分散している我が軍の本陣の位置を割り出し、一気に突いて来た。並大抵の者じゃないよ。戦いは私が勝ったから、それ程評価されてはいないけどね。だが私に勝っていれば、彼は5千の軍勢で4万のバルバール軍に勝利した名将。そう呼ばれていただろうね」

その言葉に、ケネスは表面的な勝敗しか見れず、その過程に意義を見出せなかった未熟さを恥じ赤面した。だが最終的に勝てなければ意味が無いのではないか、とも思い食い下がった。

「ですが、４千の軍勢しか率いていなかったディアス将軍に、５千の軍勢で勝てなかったのは、やはり指揮能力に問題があったのではないのですか？」

「そうだな……。例えば私が彼の立場だったら、戦わなかっただろね。なぜかと言えば……。私が戦ったとしても多分負けていた。軍勢とはそれぞれの兵科が揃ってこそ力を発揮する。彼は急いで軍勢を集めた為騎兵を用意出来なかった。時間的な余裕がなかったから仕方が無いんだけどね」

騎兵のみで編成された騎兵部隊や、長槍を持った兵士が整然と整列する密集隊形。それらが初めて戦場に現れた時、それぞれの兵科はそれだけで無敵と言える程他を圧倒した。だがそれも過去の話だ。今ではそのような偏った編成では勝利は望めない。

「極端に偏った編成でもその長所を生かせる戦場、相手なら勝てるが、実際そう上手く行くものじゃない。多分彼も勝算は薄いと分かってはいたと思うよ。だが、ここで我々を止めなければコスティラ全土が蹂躙される。それも分かっていたんだろう。だから一か八かの賭けに出たのさ」

もっともディアスには、一か八かの賭けに出る考えは無い。それは能力の差ではなく、考え方の違いだった。或いは立場の違いと言ってもいい。それは、一度の敗戦で国が滅ぶバルバールの将軍と、負けても後があるコスティラの将軍との立場の違いだった。

いくらアウロフ将軍が有能でも、その後の国境での戦いで、コスティラ軍が３万５千もの死者を出す大敗を喫するなど、予測できようも無いのだから。

「とにかく、幸いにも我々は先の戦いで、コスティラの名将と言ってもいい指揮官を討ち取る事が出来た。これでコスティラ方面はさらに安泰だ。しかし、人の死を喜ぶなんて、ろくでもない人間だよ、私は」

「いっいえ！　ディアス将軍は、……えーと、そんな事はありません」

ディアスの言葉が、軍人になるのならお前もそう考えねばならない事になるのだよ。という自分に対しての遠まわしの訓戒と気付かない少年は、慌てて発言者を宥めた。その様子にディアスは肩をすくめた。

「さあ、家に帰るとするか。だが、ミュエルには今の会話は内緒だよ。自分の夫がこんなに酷い人間だと知られれば、妻に愛想を尽かれてしまう」

そして返答に困る少年に、また肩をすくめ、苦笑した。

年も開け、2月となった。

ランリエル王国の反乱は、予測通りに事は進まず軍勢の損害無し。との結果に終ったが、それでも当初予想の春に戦いになる、という想定が前倒しに成った訳ではない。

バルバール王国では予定通りバルバール軍総司令官フィン・ディアスと、ハッシュ伯爵家令嬢ミュエルとの結婚式が行われる事となった。

ハッシュ家からはミュエルの両親もやって来た。そして母親は愛しい娘に、自分が結婚式で来た花嫁衣裳を採寸しなおし贈った。

大好きな母親と同じドレスを着られた事を、愛娘は素直に喜んだ。

「お母様。ありがとう御座います！」

ディアス家で暮らす事となってから早5ヶ月。ハッシュ家を出た頃より幾分背も伸びた花嫁衣裳姿のミュエルは、髪も綺麗に結い上げ、まるで精巧な人形の様な非の打ち所の無い造形と、人形では決して持つ事の無い生命の輝きを放っていた。

「ミュエル。お前はバルバール一の花嫁だよ」

新婦の控え室で、お父様はそう言って自慢の娘を抱き寄せ頬に口付けし、そして次にお母様が包容しお父様と同じところに唇を重ねた。

そこに花婿衣装に身を包んだ花婿が現れた。軍人としては良い体格とは言えないディアスだが、武門の名門にしてバルバール軍総司令としての地位。それらから得る財力によってあつらえた、純白に金糸、銀糸で精緻な刺繍を施した衣装は、十分彼を際立たせていた。

戦場では、身を守る鎧すら地味な物を身につけている彼だが、今日だけは特別だった。折角美しく着飾る妻の横に立つのだ。夫として、並ぶに相応しくあろうとするのは当然である。

「綺麗だよ。ミュエル」

衣装の効果で、なんとか人目を引く程度には垢抜けた新郎は、新

婦の頭に手をやりかけたが、折角整えた頭髪を乱してはいけないと、その寸前で手を止めた。その変わりに軽く肩に触れる。

「ディアス様も、とてもご立派です」

見上げ微笑む妻に夫も微笑み返す。そして夫は自分の義父、義母となる年下の伯爵夫妻に改めて顔を向けた。

「まず先にご挨拶をする所を失礼致しました。大切な御息女は私が必ず幸せにして見せます」

バルバール軍総司令官である義理の息子の言葉に、伯爵は恐縮して答える。

「ディアス殿は、バルバール一の婿。安心して娘をお任せ出来ます」

その伯爵の言葉に伯爵夫人も微笑を添える。ディアスはそれに応え右手を差し出した。伯爵もそれに対し右手をそえ、硬く握りあう。

そしてもう一度新婦の肩に軽く触れた。

「じゃあ、また後で」

「はい。ディアス様」

ディアス様……。実際これからミュエルは、ミュエル・ディアスになるのだから、そう呼ばれるのは相応しくないのだが。とも思ったフィン・ディアスだったが、まあそれ程気にする事も無いかと思い直し、控え室を後にした。新郎の控え室に戻ると、総司令をその従者が待ち構えていた。

「ディアス様。ミュエルはどうでしたか？」

こちらも相応に着飾ったケネスが、関心ありげに問いかけた。それに対しディアスは苦笑しつつ応じた。

「そんなに気になるなら、お前も見てくれれば良いじゃないか」

「それはそうなのですが、なんて声をかけたら良いのか……」

ミュエルにほのかな恋愛感情を抱いていたケネスである。すっぱりと諦めたとはいえ、やはりその心中は複雑だった。頭では、にこやかに笑って新婦の控え室に出向き、おめでとう、と一言言えばいい。それくらいは分かっている。

だが、その、やってみればどうせ簡単に出来るのだろうと、自分でも思う事にケネスは躊躇していた。そこに新郎が幾分強い口調で命じた。

「いいから、行って来い。簡単な事だろ？」

「ですが……」

だが、ディアスの言葉にもケネスは煮え切らない。ディアスはため息をつくと、ケネスの傍に近寄りその肩を叩いた。

「頼む。行ってくれ。お前が行かないと、祝って貰えないと思ってミュエルが悲しむんだ。お前はミュエルの家族だろう？」

その言葉にケネスは、はっとした。ディアスの様に、自分の事よ

り相手の事を考えられる人間になりたいと思ったのではなかったのか。にもかかわらず結局自分の事しか考えていなかったのだ。

「すみません、僕自分の事ばかり考えて……。今すぐ行ってきます！」

大声で返事をし、急いで駆け出す少年の背を見送りながらディアスは思った。自分の方こそ自らの妻の事を優先に考え、ケネスの心中に配慮していないのだが、と。

ディアスは自他共に認める現実主義者だった。目的の為には手段を選ばない。だが現実主義者のその目的が、必ずしも理性的な物ばかりとは限らない。今の彼のその目的は、妻を幸せにする事だった。

彼の浅はかな軽い言葉から、愛する両親から引き離され、にもかかわらず妻として扱われず、自ら死を望ませてしまった少女。その彼女に対しての、贖罪の気持ちがある事は否定はしない。だが、それ以上に、この素直で優しい少女は、幸せになるべきだと考えていた。そして自分はその少女を幸せにし得るのだ。

ミュエルは誰からも愛される少女だ。もちろんディアスからも。

ミュエルには娘に対するように愛情を注いでる。だが少女が花開くのは早い。それによって娘の様に思う感情が消え去るものではないが、それでも、少女を女としてみる日もそう遠くはないだろう。

ケネスが帰ってきて、

「やっぱり行ってきて良かったです！」

と報告し、そのしばらく後に結婚式が行われた。

２人は神の前で誓いの言葉を述べた後、接吻をする事になっている。だが花嫁はなんと言っても１２歳の少女なのだ。その誓いの口付けはお互いの頬にする事になっている。

そして予定通り式は進行し、誓いの口付けをする段となった。１２歳の少女の結婚式。珍しいが無い訳でもない。列席者も新婦が幼い時は、誓いの口付けは頬にするもの。そう認識している。

このお人形の様に美しい花嫁が、新郎から頬に口付けされ恥ずかしそうにはにかむ姿。なんと可愛らしい事か。それを予想してすでに笑みを浮かべ、人々は手を叩く姿勢でその時を待ち構えていた。

だが実際にそれが行われた時、人々は手を打ち合わせる事無く固まった。列席した老婦人は笑みを湛えたまま呼吸すら忘れた様に微動だにせず、ケネスですら唖然とした。ミュエルの両親すらも。

少し横を向いて頬を差し出す美しい花嫁に、そこそこ見られる花婿の唇が触れようとしたその時、花嫁の顎に手を添えていた花婿がすっとその手を動かした。その為少女の可憐な唇は正面を向いた。公衆の面前で行われた３５歳の男と、１２歳の少女のまぎれも無い接吻に、人々の思考は停止したのだった。

花嫁自身も目を見開いて驚き、そしてディアスの唇が離れると自らの口元を両手で覆って、頬を赤く染めた。そしてその時になってようやく、我に返った１人の参列者が手を叩くと、その音で他の参列者達も我に返り手を叩く。式場に拍手の音が響き渡った。

「ディアス様！　手順と違います！」

披露宴の前に、一旦奥に下がったミュエルは、あまりの恥ずかし

さに、珍しく大きな非難の声をあげた。剣幕をあげる妻に、怒った表情も可愛いものだと、余計怒らせそうな事を考えながら、ディアスは謝った。

「いや、すまない。私も始めは手順通りにしようと思ってたんだが……。なんて言ったらいいのかな。頬にするのは、正式なやり方じゃないと思ったら、つい……ね」

「つい、では、ありません！」

ディアスの言葉は、ミュエルとちゃんとした式をしたかった。と言う事でもあり、その意図を正確に察する事が出来ればミュエルとて頷いただろう。だが恥ずかしさのあまり、それを察する余裕の無い少女は頬を羞恥で染めながら、正式に夫となった男を再度非難した。珍しく怒声を上げる少女に、その姿も愛らしいと夫は思った。

しかし、そうは言ってもいずれ時が経てば「私は恥ずかしいから嫌だったのに、この人ったらみんなの前で私に口付けたんですよ」と、そう言ってミュエルは、人々に惚気る事になるだろう。その時は、笑みを讃えながら幸せそうに、そして誇らしそうに。

だが、それも次のランリエルとの戦いの結果如何によっては「あの人はみんなの前で私に口付けたのですよ」と過去を懐かしみ、影を落とした顔でいう事にもなりかねない。

そうはさせる訳には行かない。彼の妻は、悲しむ為ではなく、幸せになる為に彼の妻であるべきなのだ。以前より自ら戦う事を避けていたディアスであるが、改めて誓った。敵が来れば逃げる。たとえ誰に笑われようと。

もっとも彼をそこまで追い詰める事が出来る人間はそう居ない。
だが、残念な事に次の敵は、そのディアスを追い詰める事が出来る
可能性を秘めているのだった。

第２８話：王子の結婚（１）

ランリエル王国では反乱も戦火無く収束し、次期国王たるサルヴァ王子の名声はさらに高まっていた。

そしてその妃には、寵姫のセレーナ・カスティニオがなるべき。民衆はこぞって持てはやした。

そもそもアリシアは例外とするとしても、寵姫という身分の女達は家柄も良く教養もあり、宮廷内では評価され敬意もはらわれている。だが、それを理解せぬ民衆達からすれば、王子の寵姫といえど市井の金持ちに媚びる妾と区別はつかず、蔑む者も多かった。

当然、サルヴァ王子の寵愛第一位というセレーナに対しても、王子が一番お気に入りにしている妾。ただそれだけの認識だったのだ。

だが、先の反乱を機にそれが一変した。セレーナは「ランリエル一有名な妾」から「王子の危機に、公爵令嬢にもかかわらず身の危険を冒し王子の元に駆けつけた、神話に出てくるかの様な賢婦人」とみなの認識が変わったのだった。

そしてセレーナら寵姫達が暮らす後宮でも、セレーナの地位は不動のものとなった。他の寵姫達にしてみれば、もはや張り合うのも馬鹿馬鹿しい。ある寵姫は、次期王妃など望まず本当の意味での妾として暮らすしかないと諦め、ある者は将来の王妃たるセレーナに媚びようと群がった。

とはいえそれらの者達の前には突破すべき障害があった。以前からのセレーナの取り巻き達にしてみれば、今更セレーナに媚びよう

と近づいてくる者達など、厚顔もはなはだしい。せっかく苦労して耕し芽を出し実をつけた果実を、その苦労をせずのこのこと現れた者に、どうして分け与えてやらねばならないのか。

新参者達はセレーナに媚びる前に、古参の者達に媚びてその仲間に入らなくてはならなかったのだ。

だがその早くからセレーナと競う事を諦め取り入った「未来の王妃の古くからの友人達」にも、目の上のたんこぶと言える者が居た。

セレーナが行った「賢婦人の険路行」に力を貸し、一躍その「親友」となりおおせたアリシアの存在だった。彼女達はそのアリシアにさんざん嫌味を言い苛めの標的にしていたのだ。しかしそれが、「大切なお友達」であるセレーナの親友になりおおせてしまった。

彼女達にして見れば、セレーナがアリシアを敵視していると思ったからこそ、アリシアを標的にしたのだ。それが突然手を取り合って後宮を抜け出し、王都を脱し、カルデイで孤立していたはずのサルヴァ王子の元に揃ってはせ参じた。青天の霹靂と言っても生ぬるい状況の変化である。

いつの間にアリシアはセレーナに取り入ったのか？　いや、それどころか、セレーナの方から「アリシア様、アリシア様」と彼女を慕っている様に見える。その為セレーナとアリシアは共に過ごす事が多く、セレーナの古い友人達は彼女を独占出来ない。

彼女達はセレーナに大切な話があるのに、その話がいっこうに進まない。セレーナが王妃になったあかつきには、セレーナからサルヴァ王子にお願いして貰い、自分の父を大臣にして貰わなくてはならないし、自分自身の嫁ぎ先もお声がかりとして名門の子息を選ん

で貰わなくてはならないのだ。

それはまさに彼女達にとっては死活問題であり、自身が王妃になる事を諦めた今、後宮にいる存在理由だった。いくらサルヴァ王子が、才能が有り自信に満ち溢れ純粋に男としての魅力があったとしても、妾として抱かれるだけでは意味は無い。次期国王として得られる利益が重要なのだ。利益を望まず、純粋に王子からの寵愛のみを望む寵姫など誰も居ないのだ。

いや、唯一1人だけいた。その唯一の寵姫は、後宮の中庭で侍女に用意させた紅茶の味を、姉とも慕う親友と楽しんでいた。ティーカップに軽く口をつけ、そして彼女にすれば珍しく苦笑の表情を浮かべる。

「みなさん、私の事を王妃になるとおっしゃっておいでですけど、殿下は私を王妃とはしないと思います」

彼女の対面に座る姉と慕われる女性は、その言葉にティーカップを持った手を止め、カップをソーサーに戻した。

「どうして？　殿下も貴方の事を愛していると……そう思うけど？」

「そう言ってくださるのは嬉しいのですが……。ですが、殿下は大望のあるお方です。その大望をなす為に必要な方を王妃になされるでしょう」

「それって、たとえば手を組みたい国の王女様とかって言う事？」

「……はい」

カップに視線を落としそう呟くセレーナの姿に、アリシアは心の中で舌打ちをした。今のセレーナの言葉は彼女にそぐわない。知能は低くないセレーナだが、その能力は貴族令嬢としての教養と王子への気配りに注がれている。今語ったような政治の話は彼女の発想には無いはずだ。

「サルヴァ殿下がそう言ったの？」

セレーナはアリシアの予想通りに頷いた。アリシアは大きく息を吐き、テーブルに肘を付いた右手で額を押さえ俯いた。その様は「まったくあの男は！」と言う台詞を態度で表していた。

聴覚によらず視覚によってその言葉を聞いたセレーナは、慌ててアリシアをなだめる。サルヴァ王子に遠慮ない態度を自然に取れるアリシアを羨ましく思うこともあるが、あまり人目のつくところでそれを行うべきではない。ここは後宮の中庭なのである。

「アリシア様。良いのです。考えてみれば当たり前の事なのです。それに……」

その言葉に、アリシアは額に手をやったまま微かに顔を上げ、上目遣いにセレーナを見た。

「それに？」

「前までと何が悪くなったという訳ではありません。今までも私は殿下の傍に居れて幸せでした。それで……十分なのです」

アリシアはまた、大きく息を吐き額に手をやったまま再度俯いた。その態度は「まったくこの子は！」とセレーナにぶつけるものだっ

た。

セレーナは困った様な表情で、俯くアリシアの額を見つめ、その視線を感じたアリシアが視線を上げると2人の目が合った。

セレーナの表情を見止めたアリシアは、彼女を困らせてしまったと顔を上げて気を取り直す様に口を開いた。

「さあ、お茶が冷めてしまうわ。頂きましょう」

そしてすでに冷め始めてしまっているお茶を口にしながら、彼女は、まあ、お似合いと言えるのかも。と、無理やり自分を納得させた。

同じ王宮にある軍部の執務室で、サルヴァ王子は配下の猛将ラディと面会していた。

ランリエル軍全軍を指揮する者が使用するに相応しい重厚な机に座るサルヴァ王子は、その机を挟んだ対面に直立する猛将にねぎらいの言葉を掛けた。

「今回の反乱ではお主も色々と大変だったであろう。何かと言う奴も居るだろうが、気にすることは無い。今まで通り励んでくれ」

「は！　お心に添える様、精進いたします」

軍部では虎とも称される男は、まるで猫の様に縮こまり低頭する。勿論虎が猫に変ずるほど恐縮しているのには、理由があった。

長年王子の配下として仕え、その片腕とも称されていたにもかかわらず、虎は恩知らずにも理性を発揮せず、先の反乱時にはなんと反乱軍側に身を投じたのだ。万事抜け目ない王子にしても予想外の事態であり、わが耳を疑った。

王子と共にカルディイ帝国内でその報を聞いた諸将の中には、ララディと戦う事になったと戦慄した者も数多く

「ララディならば相手にとって不足なし！」

と口々に、勇ましく、或いは、強がって吼えたのだった。

もっとも、反乱はサルヴァ王子の指示の元暗躍したカーサス伯爵等により戦闘無く鎮圧された。その為、それは現実のものとはならなかった。

だが戦闘にならなかったとはいえ、ララディが反乱軍に組した事実は変わりない。他の武将達は、ララディへの処罰を訴えた。

サルヴァ王子は反乱軍の首謀者であるガリバルディ公爵、アラビーソ侯爵ら首は差し出させたが、反乱に組した他の貴族達対しては不問としている。ゆえに彼らの意に反しララディに対しても処罰は行われない事となった。

しかし諸将の追及は止まない。敵対行為をとったと言う事もあるが、ララディが失脚すれば、彼に代わってサルヴァ王子の片腕と呼ばれる地位を狙えるのである。せめてサルヴァ王子の幕僚からの更迭。当然といえる要求だった。

だがサルヴァ王子にララディを更迭する意思は無かった。反乱に組した事から分かる様に思慮には欠けるが、そこは王子自身が補え

ばよい。王子の指示に従い、突撃せよ！　と命じられれば突撃し敵を粉砕する。それが彼の役目なのだ。

とはいえ、ララディを幕僚に残留させるにしても諸将の感情をまったく無視する訳にもいかない。たとえ次期国王であるサルヴァ王子と言えどもである。諸将の間に遺恨が残れば組織として正常に機能しない。

諸将がいがみ合った結果、抜け駆けが横行し作戦が崩壊する。疎まれている武将が率いる部隊への物資の補給が滞る。例を挙げれば枚挙にいとまない。

それゆえサルヴァ王子は手の者を使い、ララディの血縁関係を数世代にさかのぼって調べ上げさせた。そして望んだ結果を得たのだった。

反乱の首謀者であるガリバルディ公爵、アラビーソ侯爵は名門の当主であり、その一族は多い。当主を討たれたその者達が敵対すれば無視できぬ勢力となる。王子はそれらを封じる為に手を打った。

彼らとて当主を打たれた恨みだけで王子に敵対しようと考える訳ではない。当主が反乱の首謀者として処罰されたのだから、その一族もいずれ家を取り潰されるのではないか。その恐れが大きいためだ。

王子は彼らのその不安を取り除いてやる為、彼らにはむしろ「当主からの要請では、断りきれなかったのは仕方が無い」と労わりの言葉を掛けたのだ。その為極一部の心から当主の仇を討とうと考えていた者すら、他の大勢の者達から

「せっかくの殿下の御温情を無駄にし、家を絶やす気か！」

と一喝され、矛を収めるしかなかった。

サルヴァ王子は、ララディの母方の祖父の従兄弟が、反乱の首謀者の1人であるアラビーソ侯爵の妹の夫の叔母の夫の父である事を探り当てた。このララディ本人ですら把握していなかった「アラビーソ侯爵家の一族」という事実に、王子は他の一族と同じ様にララディにいたわりの言葉を掛けた。

「いかなランリエルの虎といえど、一族当主からの要請ならば断りきれぬのも仕方が無い。すでに済んだ事と気に病ます出仕せよ」

自邸で自ら謹慎していたララディの元を訪れた使者は、そう王子からの言葉を伝えたのだ。そしてその後同僚の武将もララディ邸を訪れ言った。

「サルヴァ殿下の御温情を忘れず、これからも忠勤に励む事だな」

猛将ララディは感激し、そして今日の出仕となったのだった。勿論同僚の武将がララディ邸を訪れたのは王子からの依頼によるものなのは言うまでもない。

結局反乱は王子にとってなんら損失とはならず、それどころか利益のみをもたらした。

国内の不満分子は核を失い分裂しその力を失った。さらに大きいのはカルデイの諸侯が王子の求めに応じて、軍勢を出陣させた事だ。もはや彼らも未来を王子に託すしかあるまい。カルデイ貴族達はカーサス伯爵の様に続々とランリエルに鞍替えするだろう。

カルデイ帝国は徐々にやせ細り、従う貴族の居ない名ばかりの帝国となるだろう。勿論カルデイ帝室は残してやる、帝室と名乗るの

もはばかられる小国としてではあるが。

かつてカルデイ帝国と共に、ランリエルと3国鼎立の一角をなしていたベルヴァース王国にしても、ランリエル王国第三王子ルージが、ベルヴァース王女第一王女アルベルティーナ・アシュルと結婚する予定だった。王女は国王夫妻の一人娘。その夫が国王となるのだ。ベルヴァース王国もいずれランリエルの傀儡となる。

そして次の標的は西に国境を接するバルバール王国。総司令官フィン・ディアスは強敵だ。指揮能力に優れ、ランリエルとさほど劣らぬ国力のコスティラ王国との戦いに常勝を誇っている。戦いはコスティラからの攻勢を防ぐというものがほとんどであり、戦いとは守る側が有利と言われるが、それでも尋常な事ではなかった。

だがサルヴァ王子にはその総司令に勝利する算段があった。そしてその準備は着々と進められている。

すべて順調だった。もはや王子の進み行く道を阻む物は何も無い。

ララディ将軍が退出した後の執務室で、一息付いていたサルヴァ王子の元に、1人の男が飛び込んできた。服装から軍人ではない。後宮を管理する役人の1人と思われた。

まさかまた寵姫同士の諍いでも起こったのではあるまいな。と、王子は自らの後宮が整えられた当時の騒動を思い出し、懐かしく思った。

当時は、セレーナすら王子にとって、他の寵姫と違いは無く大勢居る女の1人に過ぎなかった。それが……。王国の次期国王として育ち、傲慢の気がある王子にして、自分がセレーナを愛していると

認めざるを得なかった。

だが、たとえそうであっても彼女を妃には出来ない。王子には野心がある。今はバルバール王国との戦いに心を砕いてはいるが、それで終わりではない。バルバールの次にも征服すべき国々は存在し、その時次期ランリエル国王の妃の座は高い値で売れる筈だ。

なに。セレーナは自分の傍にいる。ただそれだけで満足する女だ。よい条件の妃を迎えた後もセレーナの元に通ってやればよい。この時王子はそう考えていたのだった。

後宮の中にはでお茶を楽しんでいたセレーナとアリシアの元に、同じく後宮の寵姫であるヴァレリア・ダルベルト侯爵令嬢が近寄ってきた。

ヴァレリアは、かつて自分こそはサルヴァ王子の寵愛第一位と吹聴し、一時は多くの取り巻きを従えていた。だがそれだけに現在の状況を考えれば、滑稽な事この上ない。

かつての取り巻きは、むしろ彼女との関係をなかった事にしたいかの様に手の平を返した。そしてセレーナの取り巻きの、さらに取り巻きに転落していた。そればかりかセレーナの取り巻きに取り入る為、ヴァレリアを笑い話の種としたのだ。

「よく殿下の寵愛第一など言えたものですわ」

「まったくです。私など初めて殿下がこの後宮にいらっしゃった時、セレーナ様を見つめる殿下の目を見て、ピンっと来たものですのに」

「それを、どう勘違いしたのか」

その後、上品に、おほほほ。と笑う彼女らの声はヴァレリアにも聞こえた。その笑い声は一日中耳から離れず、常に誰かに嘲笑されているかの様な幻覚にヴァレリアは襲われた。彼女はその様な日々を送っていた。

そのヴァレリアはセレーナの傍に来ると、
「こんにちは。セレーナ様」
と上品に挨拶をしてきた。

勿論セレーナも
「こんにちは。ヴァレリア様」
と行儀良く、椅子から立ち上がって挨拶を返した。

「おめでとう御座います。殿下との御結婚が近いと聞いております」

微笑み祝辞を述べるヴァレリアにセレーナは、慌てて否定した。

「いえ。みなが言っているだけで、その様な事は無いのです。殿下にはしかるべき王国の王女を妃に迎えるのが相応しいのですから」

「そうなのですか？」

「はい。ですから、私は他の方々となんら変わる事はありません」

その言葉にヴァレリアは見る見る間に目に涙を浮かべさせ、溢れた雫は頬を伝った。

「お優しいセレーナ様……。思えばいつも貴女は優しかった。私が貴女を敵視している時ですら……」

「いえ。そんな事は……」

「申し訳ありませんでした。貴女には酷い事ばかり言って……」

顔を覆って泣くヴァレリアをセレーナは抱き寄せた。

セレーナを敵視しているはずのヴァレリアの出現に、アリシアも内心身構えていた。しかしこの光景に胸を撫で下ろし、和解できたのだと喜んでいた。

ヴァレリアはセレーナの胸に顔を埋めたままか細い声で言った。

「お優しいセレーナ様。最後に……一つだけお願いがあるのですが聞いて頂けますでしょうか？」

「私にですか？　ええ、私に出来る事でしたら」

「いえ、貴女にしか出来ない事です。それに簡単な事」

「ええ、それでしたら喜んで」

この光景を微笑みながら見ていたアリシアはふと気付いた。最後に一つだけお願い？　それはどう意味なのだろか。

「居なくなって下さい」

そのヴァレリアの言葉の後、現在の寵愛第一位の寵姫は地面に崩れ落ちた。そして顔を涙で濡らした、かつての寵愛第一位の寵姫が立ち尽くしていた。その手を血で赤く染めながら。

第２８話：王子の結婚（２）

セレーナを刺したヴァレリアは、駆けつけた警護の者にすぐに拘束された。そしてセレーナは急いで部屋に運ばれる。

「セレーナ！　気を確かに持って！」

部屋へと向かいながらアリシアは懸命に彼女に声をかけた。だが微かに意識はあるものの、セレーナにはその声に応える力はない。そして部屋に着くと間もなく医師も到着した。

「出来る限りの事は行います。今夜が峠となるでしょう」

医師のその言葉により部屋から追い出されたアリシアは、部屋の扉に張り付く様にして立っていた。中の様子を窺う為にではない。少しでもセレーナの傍近くに居たいが為だった。

冬ももう過ぎようとしていたが、木製の扉は冷たく、張り付いた彼女の頬と手を容赦なく凍て付かせた。だがアリシアはそれを意に介さず、むしろ抱き締めるかの様に手の平に力を込めた。それはまるで扉を暖めれば、血を失い冷たくなっていくセレーナの身体を、温める事が出来ると考えているかの様だった。

ヴァレリアは何故セレーナを刺したのか？　彼女への嫉妬なのか？　それとも寵愛第一位の座は自分の物と思い、それを奪ったセレーナへの憎しみか。それとも道連れの……心中の積もりだったのか。

だがアリシアには、ヴァレリアがセレーナを刺した理由などどうでも良かった。どの様な理由を聞かされても納得など出来ないのだ

から。

そこに報告を受けたサルヴァ王子が、副官のルキノを従えやって来た。

「セレーナは無事か！？」

アリシアの姿を見止め問いかけた王子に、彼女は扉から身を離しその問いに答えた。

「今夜が……峠との事です」

「そうか」

王子はそう呟くと、彼女を押しのけ部屋に入ろうとした。だが扉に伸ばした王子の手を、アリシアは押し留めた。

「殿下。今殿下が部屋に入っても邪魔になるだけです」

そのアリシアの言葉に王子は激し

「どけ！」

と彼女を改めて押しのけようとした。だがアリシアは頑として動かない。そして、王子に対しての無礼な振る舞いに、いつもなら王子に加勢するはずの忠実な副官は、どうすべきか態度を決めかねていた。アリシアの言動はあまりにも無礼。しかしその内容は彼女の方が正しいのでは、と、ルキノにも思われたのだ。

王子とアリシアはしばらく睨み合っていた。だが……不意にアリシアが身を引いた。この思いがけない行動に、傍観者であったルキノは思わず目を見開いた。

今まで王子が部屋に入るのを拒んでいたアリシアが、何故身を引いたのか。もちろん、王子の地位や剣幕に今更恐れをなした訳ではなかった。彼女はある可能性に思い至ったのだった。それは考えたくも無い事だったが、無視出来ない事でもあった。そしてアリシアが今更自分に恐れ入る事などないと知る王子も、何故突然彼女が身を引いたのかを察した。

サルヴァ王子は、僅かでも音を鳴らさぬ様にそっと扉を開けると、静かに部屋に入った。そしてゆっくりと愛する寵姫の傍へと歩み寄る。そして震える唇からその名を呼んだ。

「セレーナ」

その声は、治療の邪魔にならぬ様に小さく、それでいて彼女からの返答を期待する様にはっきりと聞こえた。そしてその声に、王子の意にそってか意に反してか、セレーナは微かに瞼を持ち上げた。

だが、その彼女の反応に王子がさらに傍に寄ろうとした瞬間、また瞼は閉じられた。近寄る事も出来ず、離れる事も出来ない王子はしばらくその場に間立ち尽くしていたが、不意に数歩後ずさったかと思うと、背を向けた。そして扉をもくぐり廊下に出る。

「殿下！　セレーナの様子は？」

部屋から出たサルヴァ王子に、アリシアは声をかけたが、王子はその問いに答えず、ほとんど駆ける様にして部屋から遠ざかる。その後をルキノが慌てて追いかけた。

王子の背を見送ったアリシアは、扉に寄りかかると崩れるようにその場に座り込んだ。

その夜遅く、アリシアが、見るとも無く部屋の一点に視線を向けて椅子に座っていると、ノックの音も無しに扉が開け放たれ、黒衣の男が部屋に入ってきた。そしてその後にサルヴァ王子が続く。どこに置いて来たのかルキノの姿は無かった。

黒衣の男は、王子に無理やり連れて来られた様で、この部屋にも入ったというより、王子に押込められたという方が正しかった。

アリシアは、何をする積もりなのだろう？　とは考えたが、それでも特に声をかける必要を感じず、黙ってその2人を見ていた。王子はなにやら黒衣の男にさせたい事がある様だが、男はそれを必死で首を振り拒んでいる。

しかし、王子が腰の剣に手をかけると、遂に男は屈した。そして重い口を開き、王子が望む通りの口上を述べ始めた。その男の言葉に、今まで思考が停止していたかの様に無関心だったアリシアの目が、次々と変わった。はじめは驚愕の色を呈し、次に恐怖が広がった。

「殿下……。何をなさるお積りなのです？」

サルヴァ王子は、その声に顔を向けずに応えた。

「決まっているだろ。セレーナとの結婚式を行うのだ。セレーナは私との結婚を望んでいたからな」

アリシアは、横たわるセレーナの傍に立ち、黒衣の男、神父に顔

を向けるサルヴァ王子の背に言葉を掛けた。

「ですが……セレーナはもう……死んで……亡くなっております」

それは彼女の認めたくはない、目をそらし続けていた事実だった。だが口に出したその言葉は、彼女自身の耳を打ち、それが現実だと認めさせた。そして気付いた時にはすでに涙が頬を伝っていた。

セレーナの両親であるカスティニオ公爵夫妻の元には、彼女がヴァレリアに刺されてすぐ早馬が発した。だが、折悪く公爵夫妻は避寒の為別荘で過ごしており不在だった。その為セレーナの最後を見取ったのは、アリシアだったのだ。

すでに医師達は引き上げ、今セレーナの部屋には、アリシアとセレーナの侍女、そしてサルヴァ王子と王子が連れてきた神父のみ。いや、もう1人と言うべきか、セレーナがベッドの上に横たわっている。白い肌を透けるほど白くして。

セレーナと傍に立つ王子の前に神父は居たが、アリシアの言葉に、自分は無理やりさせられているのだと、目で訴えた。侍女達は、王子の所業に部屋の隅で身を竦ませ、アリシアに救いを求めるかの様な視線を投げかけた。そして王子も部屋に入って初めてアリシアに顔を向けた。

その顔にアリシアはぞっとした。サルヴァ王子は笑みを浮かべ言った。

「アリシア、あまり私を馬鹿にするのではないぞ？　まさか私がセレーナが生きていると勘違いしていると思っているのではあるまいな？　セレーナは死んだ。だが、だからどうしたというのだ？　死

者と結婚しては行けないと誰が決めたのだ？」

サルヴァ王子は気が狂った。アリシアがそう思った瞬間、王子の表情は激したものに変じ、怒声を発した。

「誰が決めたのだと聞いている！　セレーナはそう望んでいたのだ！　その通りにして何が悪い！」

宿敵カルデイ帝国を打倒し、三ヶ国鼎立の一角をなしていたベルヴァース王国をも従え、さらに領土を広げんとバルバール王国への侵攻を目論む稀代の英雄。だが今の彼には、それらをなしえるに発揮した、理性と知性の欠片も存在しないかの様だった。

死者との結婚。その忌わしい行為に、それを行う神父もそれを見守る侍女達も恐怖に怯えていた。単にその儀式に携わる事への恐怖ばかりではなかった。

今や並ぶ者無き英雄にして、大国の次期国王たる第一王子。それが後宮の一室で死者と婚姻したなどと知られれば、大問題では済まされない。次期国王の座からの失脚すらあり得た。この儀式の事を少しでも漏らせば命は無い。いや、場合によってはこの儀式の後、口封じに人知れず殺される事すら考えられる。

自らの命に執着しないアリシアにしても、この儀式はすべきではない。そう思えた。この様な事をしてもセレーナは喜びはしないだろう。この事によって誰も幸せにはなれない。その程度の事が分からぬとは、やはり王子は気が違ったのか？

だが、返答をしないアリシアから背を向け、神父に向かって儀式の再開を促す王子の背を見詰め、アリシアはある事を悟った。王子

は気が違ったからこの様な儀式、セレーナとの結婚をしようとしているのではない。こうしなければ、気が違ってしまうから、セレーナとの結婚をするのだ。

セレーナは王子との結婚を夢見ていたはずだった。だが、己の妃の座の政治的価値を知る王子はそれを拒み、あくまで寵姫の1人としての立場に彼女を留めた。そしてその結果がセレーナの死だった。

王子の妃とする。そうなればセレーナは後宮には居なかっただろう。後宮から結婚の儀式の場へと向かうなどあり得ない。その準備を行う為、一旦実家である公爵家へと返されていたはずだ。

もちろん、それでもヴァレリアの凶刃から逃れられたかは怪しい。たとえセレーナが王子の妃になったとしても、何かしらの理由をつけてセレーナに面会する事は可能なのだ。だが、セレーナが王宮に居ないその間に、ヴァレリアも現実を見詰め、冷静になっていた可能性も否定は出来ない。

王子はその可能性に気付き、己の意思でセレーナの死を回避しえたという思いに囚われているのだった。重く、深く。

居なくなってから大切な人だと気付く。その誰もが聞き飽きるほど聞き、それだけに間違いの無いその言葉は、今、王子の心を実体として引き裂いていた。それはその言葉の悲しみゆえ、涙が重ねられたかの様に、その先端は鋭利ではなかった。

こうすれば良かった。そうすべきだった。そう思うたびに、その鋭利ではない物体は、王子の心に、完治し得ない傷跡を穿っていくのだ。

それを止める為の行為。王子の精神が逃げ込んだ、今からでもセレーナと結婚する。その行為。それを理性に寄らず直感によって悟ったアリシアは、この忌わしい行いを止める言葉を失い、元の椅子に倒れ掛かる様に座り込んだ。そして両手で顔を覆った。

万人に見守られ、祝福されながら、サルヴァ王子とセレーナは結婚すべきだった。そうでなければならなかった。なのに何故……。この様な場所で、僅かの人の前で、忌わしげな視線を受けながら……。アリシアの嗚咽が響く中、サルヴァ王子と死せるセレーナとの結婚式は静かに進められた。

第２９話：バルバール軍出陣

まもなく春という時期、ランリエル王国が王都に軍勢を集結させている。その報がバルバール王都にもたらされた。

住民達は慌てふためいたが、これありと準備を進めていたバルバール軍総司令部の者達には今更驚く事ではない。だが緊張は駆け巡った。

「サルヴァ王子は擬態を行わずに正面から堂々と侵攻してくるようだね。もっとももはやどう小細工したところで、狙いがバルバールというのを誤魔化せる状況でもないが」

総司令部の会議室で、幕僚、諸将達を前に総司令官フィン・ディアスがそう口火を切った。

それに続き、参謀の１人が壁に掛けられた地図を差し棒で示しながら現状を説明する。

「先の戦いでコスティラに大打撃を与えたとはいえ、ランリエルとの戦いが長引けばコスティラもどう動くか予断を許しません。その備えを残すとすればランリエル国境に展開出来る我が方の軍勢はおよそ４万です」

「ああ、コスティラにして見れば我がバルバールは長年恋焦がれている想い人。それを横からランリエルに寝取られるとなれば、黙っては居られないだろう。ずいぶん一途に想われ、ありがたい話じゃないか」

総司令の不謹慎な表現に眉をひそめる者も皆無ではなかったが、大半の者はいつもの事と受け流す。そして気を取り直した将軍の１人が挙手しつつ発言する。

「現在コスティラが介入すると想定した場合、どの程度の戦力をバルバールに向ける余力がありますでしょうか」

その問いかけに、ディアスは別の作戦参謀に視線を向け説明を促した。その参謀は進み出て説明を始める。

「は！　コスティラの海軍戦力については、ほぼ壊滅状態に追い込みましたので、回復には数年掛かると想定されます。こちらは１０隻も海峡の入り口に展開させれば封じ込める事、間違いありません。陸戦戦力についても、最後の決戦だけでコスティラ軍は３万５千の死者を出しておりますが、それ以前の段階でも多くの損害を出し、文字通り戦力は半減。そしてコスティラとて国境を接するはバルバールのみではありません。今までは充実した国力でそれらの国とは争い無くすんでおりましたが、半減した戦力をさらにかき集め、全軍こぞって我が方に攻め寄せるのはあまりにも無謀。我が方に向けられる戦力は精々２万程度かと」

するとその説明に、武門の血筋だけならばディアスを超えるシルヴェンが疑問の声を上げた。椅子から立ち上がり、参謀にではなく総司令ディアスを睨み付けながら口を開いた。

「しかしコスティラの陸戦戦力はそもそも１０万を超えよう。そして以前はそのほぼ全軍の１０万を差し向けて来ていた。半減なら５万ではないのか」

この発言に幕僚、諸将はざわめき、誰もが反射的に口を開こうと

し、そして慌てて口を噤んだ。腐っても武門の名門の当主である。無用に恥をかかせ恨まれてはたまったものではない。

みなの視線はついこの場の最高責任者、ディアスへと集中した。みなから責任を押し付けられた総司令官は内心舌打ちしながら口を開く

「コスティラ軍１０万が我がバルバールと戦っている隙を狙い、その背後を他国が攻め寄せたとしてどうなる？　緒戦を優勢に進められても引き返してきたコスティラ軍１０万に巻き返される。彼らもそれが分かっているから今までは空となったコスティラを攻めなかった。だが現在の５万のコスティラ軍ではその巻き返しは難しい。コスティラがバルバールに攻め寄せるとしても、国内を空にする事が出来ず十分な戦力を国内に残さねばならない。その為、バルバールに攻め寄せるコスティラの軍勢は精々２万と推定されるんだ」

このディアスの言に、シルヴェンは

「ならば初めからもう少し分かり易く説明して欲しいものですな」

と憎まれ口を叩き不満げに腕を組んだ。諸将は密かに冷ややかな視線を彼に送る。

ディアスはシルヴェンにかかわってはいられないと、気を取り直し参謀に視線を送り先を促した。

「それでは、続けさせて頂きます。最大２万を想定されるコスティラ軍に対し、我が軍は王城に３千。国境の砦には７千を篭城させます。砦には武器、食料、燃料など必要な物は十分蓄え、たとえコスティラ軍が砦を尻目に国境を越えようとも、討っては出ず立て篭もり続けさせます」

敵軍を素通りさせようという作戦に、武将の1人が表情を歪ませ懸念を口にする。

「それでは、領内がコスティラ軍に蹂躙されるではないか」

だがその危険性に参謀は落ち着いて答える。発表しているのは彼だが、その内容は総司令官ディアスが入念に検討したものである。武将の指摘も承知の上であった。

「はい。勿論そうなりますが、国境付近の住民にはすぐに避難出来る様に勧告を出します。それに後背に7千の我が軍を残したままでは、コスティラ軍も我が領内深く進攻する事は出来ません。物資の輸送も困難となり、住民に避難させれば現地調達もままなりますまい」

そこにまたもやシルヴェンが口を挟んだ。彼は今度こそはと自信に満ちた表情で口を言った。

「我らがランリエル軍と対峙している間に、コスティラ軍が国境でもたもたせず一気に王都を突いたらどうする積もりか！　我らは進退窮まり窮地に陥るではないか」

その顔はバルバールの危機を訴えているはずにもかかわらず、下品な笑みを浮かべていた。シルヴェンの本心が、母国への愛情からではなく、単にディアスへの揚げ足取りの発言なのは誰の目にも明らかだった。そしてまたもディアスへと視線が集中する。

「確かにそれをやられると我が国は窮地に陥るだろうね。だがコスティラ軍がそれを行って、誰が得すると言うんだい？」

「誰が……」

単にそれを行われては危ないとだけ考えていたシルヴェンに、ディアスの問いかけは答えられない。ディアスは返答を待っても無駄と、話を続ける。

「コスティラ軍2万に王城を突かれても、王城に3千が立て篭もればしばらくは持ち堪えられる。だがそうなれば、国境でランリエル軍と対峙する我らも王城へと引き換えせざる得ないだろう。コスティラ軍2万は、背後を7千の軍勢に塞がれつつ、引き換えしてきた4万の我が軍と戦う事になる。全滅は必死だ。勿論、そうなればランリエル軍は国境を突破する。我が国は滅亡し、ランリエルの物となるだろう。コスティラ軍の犠牲の元にね。シルヴェン将軍。コスティラが多くの犠牲を出してまで、ランリエルに利する行動をする理由を聞かせて貰えるかな?」

シルヴェンはディアスの質問に答えることは出来ず、絶句した。ディアスは大きく溜息を付いた。もはや馬鹿馬鹿しさを隠そうともしない。

「我が国に2万しか派遣できない状況では、コスティラはランリエルに勝って貰っては困るんだよ。万一コスティラに損害無く我が軍が消滅しても、１０万を超える派兵が可能なランリエルと、コスティラは2万でバルバールの覇権を争う事になるんだからね。彼らが考えているのは、精々国力が回復したその時に備え、国境付近に足場を作る。それくらいなものさ。我が軍がランリエルに負けてしまわない様に気を付けながらね」

そして幕僚、諸将を見渡す。今言った事などシルヴェン以外はわきまえているとは思うが、一応他に意見を述べる者が居ないのを確

認し、改めて参謀に目をやった。

「さて、コスティラへの備えは以上として、ランリエルへの対応を説明してくれ」

軍義の後、総司令の執務室で疲れきって椅子に座るディアスにケネスが労いの言葉を掛けた。

「無駄に沢山説明させられて、大変でしたね」

結局ランリエルへの対応の説明時にも、シルヴェンからの的外れな追及は連発され、その度に総司令としてディアスが説明をせねばならなかったのだ。

慰められた上官は、忠実な従者に力なく答える。

「なに、表面上は分かっているふうに装っていても、本当はシルヴェンの様に分かって居ない者もいるだろう。その者の為にも、ちゃんと説明する事も必要だよ」

「なるほど。そういう事もあるんですね」

感心するケネスに、ディアスは肩をすくめて見せた。

「いや、そうとでも思わないとやってられないだけさ」

そして、ランリエル国境に向け出陣を翌日に控えたある日。

いつも通りにミュエルと共に寝床に着いたディアスは、目を瞑りながらも明日の出陣を考え眠れずに居た。すると隣で寝ているはずのミュエルの身体が近寄って来るのに気付いた。

夫が翌日には出陣するのだ。妻が心配のあまり寝付けなくともし方があるまい。そう考えていたディアスだったが、その幼い妻は近寄るばかりか恐る恐る自分に触れて来たのだった。

ミュエルの指先がディアスの腕に微かに当たり、慌てて引っ込むかと思うと次には軽く触れ、そして遂にディアスの腕に手を置いた。

ミュエルの身体がさらにディアスに近づく。小さな手は、今度は襟の隙間からディアスの胸の辺りに置かれる。

何の積もりかと妻の好きにさせていたディアスだったが、その意図を察し口を開いた。

「どうした。ミュエル？」

ディアスの言葉に慌てて手を引きかけたミュエルだったが、すぐにまたディアスの胸に手を置いた。

「私は……ディアス様の妻です」

やはり……。とディアスは思った。妻は夫ならば出陣する前に自分を抱けと言っているのだ。

ディアスはミュエルの標準的な１２歳の少女に比べてもさらに小さな体を抱き寄せると、自分の体の上に乗せた。

そして力を入れれば折れてしまいそうな薄い体を抱きしめ、小さ

な唇に己の唇を重ねる。ミュエルはされるままになっているが、緊張の為腕を胸の前で縮込ませ、微かに震えた。

純粋な愛情以外の成分を僅かながらに含んだ口付けを終えた後、ディアスはミュエルを見詰めて口を開く。

「今日はここまでだ。続きはまた今度にしよう」

「どっ、どうしてなのです！」

勇気を振り絞りディアスに触れ、そして夫も応じてくれるのかと思っていたにもかかわらずの言葉に、ミュエルは取り乱した。

自分はフィン・ディアスの妻のはず。それが今まではともかく、夫の出陣を前にしても抱かれないなんて。

ディアスは幼き妻をなだめる様に優しく語りかける。

「どうして今お前を抱かなくてはならないんだい？　まさか出陣すれば私が死んでしまうなんて思ってるんじゃないだろうね」

「いえ……そう言う訳では……」

だがそうは言ってもミュエルの声にはまだ不安な響きが含まれていた。ミュエルは、戦いに出るのならばやはり危険なのではないかとディアスの身を案じていた。

そして……万一の事がある前に、ディアスの妻である証が欲しかったのだ。

「いいかい。お前の夫はバルバール軍史上最高の総司令官フィン・ディアスなんだよ。そう簡単に死ぬ訳が無い」

妻を安心させる為とはいえ大言壮語が過ぎるな。とディアスは内心苦笑した。そして自分の身体の上に乗る軽い身体を改めて左手で抱きしめ、右手は妻の真っ直ぐな黒髪を撫でる。

「お前にはちゃんと私の子供を産んで貰う積もりだ」

「本当でございますか？」

ディアスに抱きしめられさらに頭を撫でられているミュエルは、動く事が出来ずディアスの胸に顔を埋めたまま言った。

「ああ。勿論だとも。だがまだお前は幼い」

「はい……」

世には１３歳、１４歳で子を産む女も居る。世間体を考えなければ１２歳のミュエルが今妊娠しても産むのは１３歳の時になるであろう事を思えばおかしい話ではない。だがミュエルは一般的な１２歳と比べても身体が小さい。それはミュエル自身自覚していた。

「でも、いずれお前には沢山子供を産んで貰うんだから、覚悟しておきなさい」

ミュエルは抱きしめられて首が動かせない為、心の中で首を傾げた。何をどう覚悟するのだろう？　と。

だが、幼く知識の少ないミュエルは、それが沢山お前を抱くのだ

と遠まわしに言われていると気付かず、とにかく夫がそう言うのだからそうしなければならないのだろうと判断した。

「分かりました。がんばります」

と自分の腕の中で素直に返事する妻を抱き寄せて、改めて軽く口付けた。

そして夫は考えた。さて、このままミュエルを身体の上に抱いたまま寝る事は出来るだろうか。

翌朝目を覚ましたディアスは、ミュエルが自分の身体の上ですやすやと寝息を立てている事に、案外寝れるものなのだな我ながら感心した。

むしろそれより、眠りの浅いらしいミュエルが大人しく寝ている事の方が意外だった。だが、実はやはりミュエルは何度も目が覚め、朝方になってやっと眠りに付いた所だったのである。

もっとも夫の上で寝るという事が嫌だった訳ではなく、夫に抱かれながら寝るというのは彼女にも嬉しい事だった。

ディアスが起き僅かながら身じろぎするとミュエルも目を覚ました。

「おはよう」

「おはようございます」

間近で行われた挨拶の後、妻は夫の上から降り夫は体を起こす。

「いててっ」

３０歳半ばのディアスに、いくら幼いとは言え、人一人を乗せたまま眠るのは体勢に無理があったらしく、身体のそこかしこが痛い。

だが幼い妻に年齢の事で弱音を吐くのは躊躇われ、

「どうなさいました？」と心配そうに聞くミュエルに

「いやなんでもない」と強がって答えた。

そして二人は部屋を出て朝食を取るべく食堂へと向かうと、そこにはすでにケネスが先に座っていた。

「おはようございます」と挨拶するケネスにディアス達も挨拶を返す。

だが椅子に座るときディアスはついまた、「いててっ」と声を出し、寝不足のミュエルは小さく欠伸をした。

その二人にケネスは不審に思い問いかける。

「大丈夫ですか？」

「ああ。昨日の夜ちょっとな」

ディアスは何気に答えたが、その答えにケネスは赤面した。そして視線をミュエルに移す。さっきから頻繁に欠伸をし明らかに寝不足の少女に。

ミュエルは何の事かと首を傾げたが、その夫は従弟の勘違いを敏

感に察して慌てて口を開く。

「ケネス。誤解するなそういう事じゃないからな」

ケネスも急いで首を振る。だがその顔は赤面したままだ。

「いえ。そんな僕は別に……。それにお二人は御夫婦なんですから特におかしい事じゃないですし」

するとやっとミュエルもケネスの言っている意味を理解し、狼狽して弁解する。

「ちっ違います！　ディアス様の上で寝ただけです！」

その言葉に夫と年上の従弟の動きが止まる。そして自分の発した言葉の意味気付いて幼き新妻も固まった。

結局三人は使用人が朝食を運んでくるまで終始無言でお互いに目を合わせることもなく、その後も続いた気まずい空気の中で黙々と朝食を食べたのだった。

自邸の前でディアスが馬に跨り、その轡を従者であるケネスが持つ。

「では行って来る」

馬上から妻に声を掛けるディアスにミュエルも答える。

「行ってらっしゃいませ。御武運をお祈りしております」

と武人の妻らしい挨拶をした後、

「必ず生きて帰ってきて下さい」と付け加えた。

ディアスは妻に微笑む。
「分かった。必ず生きて帰ってくる」
そしてケネスに視線で合図を送ると、彼が率いる幕僚達が待つ王城へと向かったのだった。

第３０話：ランリエル軍出陣

セレーナの葬儀の夜、後宮にあるアリシアの部屋の扉を叩く者が居た。

「誰？」

この様な時間に寵姫の部屋を訪れる者など、後宮の主であるサルヴァ王子しか居ないはずなのだが、王子が来るならば前もって役人から連絡があるはずだった。だがアリシアの言葉に返事は無く、またもや扉が叩かれる。

アリシアは仕方がないと扉へと向かった。厳重に警護されている後宮で賊が押し入る事もないだろう。アリシアが扉を開けると意外とも言え、当然とも言える男が立っていた。

「……殿下」

王子はアリシアの言葉に無言で答えると無造作に扉をくぐり、アリシアは体がぶつからない様に身を引いた。そのまま椅子に座る王子をアリシアの気遣わしい視線が捕らえる。

無言で来訪し、無言で部屋に押し入った王子の態度は礼儀を忘れたかの様だった。もはや言葉を発する事すら煩わしい、アリシアにはその様に見えた。

本来自分の部屋とはいえ王子が訪問している時に、王子の断りもなしに椅子に座る事など無いが、無言で椅子に座る王子に対し、アリシアも机を挟んだ対面の椅子に座る。

二人の間には暫く沈黙が流れた。

今日行われたセレーナの葬儀に、サルヴァ王子は列席しなかった。王子が何を考えているのかアリシアには分からない。だがどうしてセレーナの埋葬に来なかったのか。それは聞く必要があると思った。

「今日はどうなさったのですか？」

アリシアの言葉は僅かながら持って回ったものだったが、王子には正確にその意図が伝わった。だが王子の返答に、彼女はその意図を理解する事は出来なかった。

「……あそこはセレーナの墓ではない」

呟く様に言った王子の言葉に、アリシアはリヴァルの墓の事を思い浮かべた。

リヴァルの墓は礼儀的に一度訪れたが、それ以降一度たりとも足を向けては居ない。そこがリヴァルの墓とは思っては居なかった。何故ならリヴァルの遺体がそこに無いからである。アリシアの婚約者であるリヴァルはカルデイ帝国との戦いで命を落とした。遠い異国での戦いに多くの者が亡くなり、リヴァルを含めたそれらの遺体は、戦場となった帝国に埋葬されたのだ。

だがセレーナの遺体は間違いなくあの墓に納められている。なぜ王子はそれをセレーナの墓ではないというのだろう。

王子は気がふれたの？　もしかしてセレーナがまだ生きていると思っているの？　いや、さすがにそれは無い筈だった。王子はセレーナが死んだ事を理解していた。そう思い、王子を見つめ続けた。

アリシアの疑問に答える様に王子がまたポツリと呟いた。
「あれはセレーナ・カスティニオの墓だ……」
その言葉に、アリシアはそっと目を閉じた。頷く事の代わりの様に。
あの夜の事を知る者はアリシアを除いてすべて王宮を去っていた。神父は元の小さな教会に戻り、セレーナの侍女達は実家の公爵家へと戻っている。王宮に残って居るのはアリシア一人だった。彼らは一生あの事について語る事は無いだろう。
ならば王子は、埋葬に出る代わりにこの部屋に来たのだろうか。セレーナが、セレーナ・カスティニオではなく、セレーナ・アルディナである事を知る者の元に。だがそれも推測の域を出ない。
その後、また口をつぐみ沈黙を続ける王子に、アリシアも沈黙で答える。
アリシアは王子の目を見つめながらも、その思考はセレーナとの思い出の中を浮遊していた。嫌な女。それがセレーナの第一印象だった。初めてセレーナと会った時、彼女はアリシアに散々嫌味を言ったのである。
だがその考えはすぐに改められた。セレーナは王子を愛する事だけを考え、愛される事だけを望んでいた。セレーナのアリシアに対する態度は、王子を失う事への恐れだった。
そして危機に瀕する王子に会いたいというセレーナの思いに、リヴァルの最後に立ち会えなかった自分とを重ね合わせ、彼女が王子

に会いに行くのを手伝ったのだ。王子の元にたどり着くまでの道中、様々な障害を共に乗り越える中で、二人の間のわだかまりは消えた。

それからセレーナはアリシアを姉の様に慕い、アリシアもセレーナを妹の様に想った。

セレーナはいつも王子の身を案じていた。

セレーナに思いを馳せていた為、王子に視線を向けてはいたが見てはいなかったアリシアの視界に、弱い明かりに照らされる王子の横顔が映る。セレーナはこの男を愛していたのだ。

今この男は自分と同じ様に、俯くその視線の先に何も写さず、セレーナとの思い出に耽っているのだろうか。自分とは比べ物にならないほどすごしたセレーナとの時間を。

セレーナと過ごした時間も想いの質も違う二人だったが、アリシアにはセレーナに対する王子の想いが感じられた。勿論その想いのすべてを理解出来た訳ではない。ただ王子はセレーナを愛していた。その、単純だが、それだけで十分な事だけは理解する事が出来た。

今更ながらとも改めてとも思わない。無粋な言い方を強いてすれば、これほどとは、とアリシアが感じるほど王子はセレーナを愛していたのだった。

セレーナの事を語り合うかの様なその沈黙は、窓の外が白みがかるまで続いたが、不意に王子が立ち上がる。そして彼女から背を向け、扉へと体を向けた。

「お帰りですか？」

続いて立ち上がりながら、王子の背に声を掛ける。その声に王子は振り返り、顔をアリシアに向けた。

「今日は軍議があるからな」

「軍議？」

「ああ。バルバール攻めが近い」

この様な時に戦いの話をするとは、なんと血も涙も無い冷血漢なのだろう。以前のアリシアならば間違いなくそう考えたはずだった。だが今の彼女の脳裏に浮かんだのは、ただただ疑問であり、そしてその考えをそのまま言葉にした。

「なぜ？」

その寵姫が一国の王子に対するには不適切な問いかけに、王子はその無礼を咎める事無く、アリシアに体を向け素直に応じた。

「帝国との戦いで、俺はお前の夫のリヴァルを死なせた。いや、お前の夫ばかりではないだろう。そして今回の戦いでも死んで行く者がいる筈だ。今俺の妻が死んだからといって止める訳にも行くまい」

王子を見つめるアリシアの視線が変わった。痛ましげなものに。

ならば戦う事自体をやめる事は出来ないのか。今回のバルバールとの戦いの事だけではない。すべての戦いを。アリシアはそう言葉が出そうになったが、今それを王子に問いかけるのは躊躇われた。

自分を見つめ続けるアリシアに、王子はまた口を開く。

「リヴァルの兜をお前に返そう。あれはお前の物だ」

だがアリシアはその言葉に、視線を王子に向けたまま小さく左右に首を振った。

「いえ。……それは殿下がお持ち下さい。リヴァルは殿下をお慕いしておりました。リヴァルも……夫もその方が喜ぶでしょう」

「そうか……」

王子はそう言うとアリシアを見つめたまま沈黙した。そして何度か口を開きかけまた閉じるという事を繰り返した後、意を決し言葉を発した。

「お前にも済まぬ事をしたな」

「……夫の事でしょうか？　ですがそれは戦いでの事です。殿下の所為とは考えておりません」

今度は王子がアリシアの言葉に首を振る。

「そうではない。俺がお前にした事についてだ。数え上げればきりが無いが……まずはお前を売女と言った事だ」

だが王子の謝罪の言葉にアリシアは僅かに苦笑を浮かべ答える。その声には、自嘲の響きも微かに込められていた。

「私は確かにお金を貰う為にこの後宮に来ました。そう呼ばれても仕方が無いでしょう」

その言葉に、王子は一歩彼女に近づく。だが、アリシアを見詰め続けるその目は、自らの非を認めるかの様に力無かった。

「だがお前には、そうするしかない理由があったのだろう」

王子が近づいた為、背の高い王子と目を合わせるには見上げなくてはならなかったが、アリシアは王子の目を見据えた。その視線は幾分鋭かった。

「違います。それは違います殿下。私も、すべての、とは申しません。ですが女がお金の為に体を売るのに、そうするしかない理由が無い事などありません」

アリシアの言葉に王子は頬を打たれたかの様な表情となり、アリシアを僅かに見開いた目で見つめた。そして数瞬後、我に返る。

「そう……だな。すまない。埒もない事を……。いや、……とにかくすまない」

己の気持ちを表すに適切な言葉を見つけられぬ王子は、謝罪の言葉を繰り返しつつ背を向けた。そして廊下へと通じる扉に向かって足を踏み出した。だが、やはり寝ていない事が堪えたのか足を縺れさせる。

「殿下。大丈夫ですか」

アリシアは慌てて近寄ったが、王子は彼女に背を向けたまま、それを手を上げて制す。

「大丈夫だ」

そう言いながらすぐに体勢を持ち直した王子に、アリシアは心配そうな視線を投げかけた。しかし王子はアリシアに顔を向けなかった。

改めて扉へと足を進ませる王子の背にアリシアが声を掛ける。
「お体にお気をつけ下さい」

王子の体が扉に手をかけたまま止まる。そして暫く躊躇った後、アリシアへと顔を向けた。
「お前も体には気を付けろ」

王子はそれだけ言うとまた前に向き直り部屋の外へと姿を消し、扉は静かに閉じられた。アリシアはその扉に静かに頭を下げた。

数日後、ランリエル王都フォルキアにサルヴァ王子が率いる軍勢が整えられた。

軍勢の大半はすでに王都の外にて待機しているが、王子は近習の者や幕僚達と共に王宮から出陣するのだ。その光景は後宮のアリシアの部屋の窓からも見えた。先頭に、首から下に銀の鎧を身につけ、頭に無骨なリヴァルの兜を被るサルヴァ王子が白馬に跨り進む。

その光景が目に入ったアリシアは、突如部屋を飛び出した。服の裾を物ともせず階段を数段飛ばしに駆け下り、庭を走り抜けた。

門番達も出陣する軍勢に目を向けている事を幸いに門を一気に通り抜ける。門番達が慌てて追ってきたが、アリシアは裾を乱しながら構わず走り続けた。

「どいて！」

王子に声援を送る者達を掻き分けて進み、みなの声援を受ける為ゆっくりと馬を進ませていた王子にアリシアは遂に追いつく。

そして王子が乗る白馬の前に、滑り込むように飛び出した。飛び出してきた者に王子は思わず手綱を引いて馬を止める。そしてそれがアリシアである事に気付いた。

「アリシアか……。どうした」

そう言いながら白馬から降り、そしてリヴァルの兜を脱ぐ。王子の近習や幕僚達も王子が下馬した事により、続いて馬から降りる。

王子の行軍の前に女が飛び出し、その行軍を止めるという前代未聞な状況に、群衆も王子に続く将兵も戸惑った。だがその肝心の止められた王子が激する事も無く下馬した事に、誰もが手を出しかねる。

後宮からここまで走り抜けてきたアリシアは肩で息をし王子の問いに答える事が出来ない。その内彼女を追いかけて来た門番達も追いついて来た。だが追いかけてきた女を王子が見咎めない事に、門番も彼女を捕らえる事に躊躇した。

やっと息が整ってきたアリシアは、それでも荒い息で王子を見つめて口を開いた。

「どうかご無事で」

王子もアリシアを見つめる。

「ああ。必ず勝つ」

しかしアリシアは王子の言葉に首を振った。

「その様な約束はして下さらなくても結構です。ですが約束して下さるなら……必ず生きて帰ってくると……そう約束して下さい」

必ず生きて帰って欲しい。それは出陣のたびにセレーナが王子に向けた言葉だった。そしてその度にサルヴァ王子は、言葉を贈ってくれるなら武運を祈ると言えと、セレーナに言い聞かせていたのだった。

王子は天を仰ぎ、そこに誰か居るかのように視線を投げかけた後、またアリシアと向き合う。

「分かった。必ず生きて帰ってくる」

そう言うとアリシアを改めて見詰め、アリシアの視線も王子に応えた。アリシアを追いかけて来た門番。王子の近習、幕僚達。そして王子を見送る為に集まった多くの者達が見守る中、二人は見詰め合っていたが、おもむろに王子が動く。

「では」

と短く言うと改めてリヴァルの兜を被り、白馬に身を乗せた。他の者達もそれに続く。王子はもう一度だけアリシアへと顔を向けると白馬の腹を軽く蹴り、ゆっくりと進みだす。

その背をアリシアは見詰め続けた。そして王子が城門を通り過ぎ、その姿が見えなくなった後も、しばらくその場に佇んでいた。

第３１話：譲らぬ両雄

大陸歴６２９年春。

バルバール、ランリエル国境で、それぞれの陸軍、海軍は対峙した。

陸軍はバルバールが４万。ランリエルは５万。そして海軍は……。

「ランリエルの艦艇数が我が方の１．５倍だって！？」

普段取り乱す事の無いバルバールの総司令官は、その報告に思わず大声を上げた。

歴戦のバルバール海軍と、ほとんど戦闘経験の無いランリエル海軍とでは質が違う。その為互角に戦うには、バルバールの艦艇１に対し、ランリエルは１．５を必要とする。そうディアス及びバルバール海軍の提督達は認識していた。

そして、ディアスはサルヴァ王子も同じ様に考えていると断定していた。もし、経験、質の差を理解せず、同数で互角に戦えると考えているとすれば、サルヴァ王子など敵ではない。だが、間違いなくランリエルはバルバール海軍を大きく上回る数を揃えてくるに違いない。そうも確信していた。

逆に言えばランリエル海軍の艦艇数がバルバールのそれに対し１．５倍以下になるようにすれば優位に戦える。その為、バルバール海軍では、艦艇数を誤魔化す事に腐心していたのだった。

バルバール海軍では、老朽艦と新造艦を入れ替える際に老朽艦を

破棄すると見せかけ秘匿していた。そして先のコスティラとの戦いで、火を付け港に突入させた艦艇は、実はその老朽艦だったのだ。

そして海戦時に降伏したコスティラ海軍の艦艇からも、損傷が少なく性能的にも用を成す物は、密かにバルバール海軍の艦艇として組み入れていた。その為バルバール海軍の艦艇数はランリエルが認識してる数を大きく上回っているはずだった。

ゆえに開戦時にはバルバールとランリエルの艦艇数比は1対1．2から1．3。そうなるとディアスは考えていたのだ。だが、にも拘らずランリエル海軍が1．5倍の数を揃えてくるとは……。

報告は受けたディアスは、バルバール、ランリエルとを隔てる国境の山岳地帯から海に浮かぶ両軍の艦隊を見渡せる場所に移動した。そして付き従う従者に振り返った。

「中々思い通りにはいかせて貰えないようだよ」

「敵の数が1．5倍なら、戦力としては互角なんですよね？　海戦には勝てるでしょうか？」

「そうだな……。艦隊を率いる提督のライティラには、優位で無ければ戦端は開かないように言ってある。この状況ならライティラは攻撃を仕掛けないはずだ」

「ですが、ランリエル海軍の方から仕掛けてくるかも知れませんよ？」

「その通りだ。だが、ランリエル海軍が仕掛けてきてもバルバール海軍の質なら、十分戦いを避け、逃げる事は出来る。まあ、敵がそ

れでも追いかけてくれれば戦列は乱れ隙が出来る。逆にこちらの攻撃の好機だろうね」

「それが、敵の罠と言う事は無いのですか？」

「私も海戦の専門家ではないが、互角の戦力なら、浅瀬の位置や海流を知り尽くしたバルバール沖での戦いで、バルバール海軍が後れを取る事は無いよ」

専門家では無いと言いながらそこまで分析できるディアスの言葉に、ケネスは思わず赤面した。ディアスの分析は、ケネスですら考えてみれば分かるほど、もっともな話だった。

将来ディアスの様な将軍を目指す少年は、無意識に初めから自分には分かり得ないと考え、分析する努力すらしなかった事を恥じたのだ。

恥じ入る従者にその上官は苦笑しつつ、彼を救う為に話題を転じる。

「だが、敵もそこまで無理はしないだろうね。取り敢えずは様子を見るだろう。将来的にはその限りではないだろうが」

「将来的には攻めてくるとお考えですか？」

ケネスの何気ない問いかけに、ディアスは顎を摘み考えつつ口を開く。

「そうだな……。戦力が互角ならばバルバール艦隊は守りを固める。状況を打破したければランリエル艦隊から仕掛けるしかない。だが

……さっき私も言った通り、その時バルバール沖での戦いに持ち込めば、こちらが圧倒的に有利だ。敵もそれは分かっているだろう。攻勢に出るにしても何かしらの手は打ってくる」

「なるほど。そうですね。あ。そう言えば、ランリエルはどうやって艦艇を揃えたんでしょう？」

ディアスは再度考え込み、そして答える。

「うーん。それは我々の情報収集の網に掛からない様に、隠密に建造したとしか言い様がないな」

「そうですか……。でも、せっかくランリエルより戦力が多くなる様に数を揃えたのに、向こうも数を揃えてしまったのは残念ですね」

落胆した様子の従者に、総司令はその肩を叩き微笑んだ。

「なに、ものは考えようだ。こちらが数を揃えなければ、ランリエルにその数で負けていたんだからね。私達のしていた事は無駄じゃない。戦いとは万全の準備を行ってから戦端を開くものだ。そして敵が強敵であればあるほど、その準備の僅かな漏れが、致命的となる。今回はその準備によって、我々は隙を作らずにすんだ。そういう事だよ」

だがそうは言うものの、バルバール軍総司令官は、少年からの尊敬の眼差しを受けつつ、内心苦笑していた。敵こそが、その隙を作るであろうと期待していた自分に、我ながらまだまだ考えが甘いと、自嘲していたのだ。

一方ランリエル軍でも、この状況を副官のルキノから報告を受けたサルヴァ王子は、眉をひそめ、不快そうに問いただしていた。

「バルバールの艦艇数が予想より多いだと？」

「はい。今回の戦いではバルバールの１．８倍の数になる様にと計画していたのですが、バルバール海軍の艦艇数が想定を大幅に超えております。その結果我が海軍の艦艇数は敵に対し１．５倍にしかなっておりません」

サルヴァ王子もディアスの予想通り戦力比の分岐点はバルバール海軍の艦艇数に対し１．５倍。そう設定していた。そしてその１．５倍以上の艦艇数を備えれば優位に立てる。はずだった。

「まさかバルバールに、カルデイ帝国内でも艦艇を建造していたのを察知されたのでしょうか？」

副官ルキノの言葉通り、実はサルヴァ王子が帝国から強引に接収した軍事施設の中には造船所なども含まれ、そこでランリエル海軍の艦艇を建造していたのだった。

「いや、奴らも情報の収集には手を尽くしていようが、バルバールと帝国の間にはこのランリエルが行く手を阻んでいる。しかも帝国での建造は極秘に進めていた。その情報が漏れたとは考えにくい」

建造される軍艦は、表向きは商船として公表されていた。ランリエル国内ですら、王子とその腹心以外は、カルデイで軍艦が建造されているなど誰一人知る者は居なかった。

ランリエル国内で商船建造の予算を立て、艦艇数を管理する役人

達ですら、自分達は商船建造計画のすべてを把握していると信じて疑わなかったのだ。

だがランリエルと帝国との情報のやり取りは人の手を介して行われる。そしてその情報を伝えるのがサルヴァ王子の子飼いの者達だったのだ。商船１０隻分の予算を元に艦艇を建造すると帝国に伝えるはずのその者達は、帝国の造船所に到着すると軍艦5隻を建造する様に伝え、その完成報告はランリエルには商船１０隻の完成として報告された。

時折、建造計画に予算の流用や賄賂などの不正は無いかを調査する者達すら、王子の手の者だったのでその発覚には用をなさなかった。ランリエル国内ですらその事実を知る者はほとんど居ない状態で、バルバールがそれを察知するのは至難の業のはずである。

もしそれでもバルバールがそれを察知しえるとすれば、情報によらず推測によってであるはずだが、さすがにそれも難しいだろう。

去年末に起こったランリエル国内での反乱発生時に、サルヴァ王子の軍勢が国境を越えて国内に戻った方法が、実は、帝国国内で建造された軍艦を使用したものだった。などという事を遠く離れたバルバールから推測する事は不可能だ。

ランリエル、帝国は長年戦い続けていた。戦火に巻き込まれない為、その国境付近に住む者などほとんど存在しない。帝国から海路でランリエル国内に入った王子の軍勢は、その国境付近を選んで上陸した。

目撃情報も無く、推測だけでそこまで見抜ける者が居るとは思えない。たとえ王子が強敵と認めるバルバールの総司令といえどもで

ある。

だが現実は、ランリエルが艦艇数比1．5になる数をバルバールは揃えている。なぜか……。そう考え込んだ王子だったが、不意に「くくっ」と小さく失笑を漏らした。そして副官に自嘲の笑みを向ける。

「考えれば簡単な事だ。バルバールはこちらの策を読んで、それに対する数を揃えたのではない。奴らが考えたのは私と同じ事だろう」

「殿下と同じ事？」

「そうだ。その方法までは今すぐに推測出来るものではないが、向こうも相手より優位に立とうと艦艇数を誤魔化した。こちらと同じくな。ただそれだけの事だ」

「では……。この結果は偶然と言う事ですか？」

戸惑いながら問いかけるルキノに、王子は苦笑し答える。その目は笑ってはいたが、有能と信じている副官に対し若干落胆の色が混じっていた。

「いや必然だ。敵より優位に戦いを進めるには相応の準備が必要だ。私も奴ら……バルバールの総司令もそれを怠らなかった。その結果だ」

そして胸中で知略を尽くし戦う敵将に語りかけた。取り敢えずは、ここは引き分けという事にしておこうか。だが……、ここで引き分けなら、この戦い私の勝ちだ。フィン・ディアス。

結局双方の海軍は、思惑が外れた為海戦を行わず、海上で睨みあい夕刻と共にそれぞれの港に引き上げた。そしてそれ以降双方の艦隊は、お互い相手の出方を待つ為、港で息を潜める事になったのだった。

第３２話：剣戟無き戦い

バルバール軍４万とランリエル軍５万が国境で対峙し、すでに２ヶ月が過ぎていた。だがこれといって目立った戦闘は行われていない。精々がお互いの偵察部隊同士の遭遇戦であり、それも戦線が拡大する前に収拾していた。

守りを固めるべきバルバール軍が戦線拡大を回避するのは当然として、攻勢に出るべきランリエル軍も消耗戦を嫌うかの様に兵を引いた。バルバール軍諸将に疑念が湧き上がる。

我らは守兵側。手を出さぬのは当然だった。しかしわざわざ攻め寄せてきたランリエル軍が、無為に日を重ねるのは何の理由があってか。

バルバール軍総司令官ディアスは、本陣に諸将を召集し軍議を開いた。本陣は木造で小規模ながら砦としての機能を有している。長期の対陣になるのは想定されていた。天幕での長期対陣ではやはり体調が優れぬ者も出てくる。バルバール国境には、本陣ばかりではなく多くの砦が並んでいた。

「ランリエル軍の動向についてみなの意見を聞きたい」

開口一番そう述べた総司令の言葉に、自らの見解ある者が口を開く。

「サルヴァ王子は、カルデイ帝国侵攻時にも戦闘を行わず、長期にわたり対峙致しました。しかしそれは、一気に王都を陥れる策の準備を行う為だったのです。今回の一見無為な対峙も、何らかの策の

前触れかと思われます」

敵将の過去の戦闘を調べた上での発言に、多くの者が頷いた。

勿論情報を重んじるディアスも、カルデイ帝都攻略戦については詳細に調べ上げていた。ゆえに、今意見を述べた武官の見解も、ディアスの認識の範疇にあった。

そして入念な偵察、考察の結果、ランリエル軍に奇襲、奇策の気配は無いという結論に達していたのだ。つまりディアスの見る限り、ランリエル軍は正真正銘無為に日々を過ごしていた。

ディアスはその無為にこそ、ある可能性に思い当たり恐怖していた。軍議に諸将を招いたのは、自身の見解以外の意見を聞き、その可能性以外の道筋を見出さんが為のものだった。だがその目論見に反し、諸将の意見はディアスの見解を超えない。

ディアスは内心の落胆を隠し、頷き口を開いた。

「確かにその可能性は高い。みな警戒を怠らず持ち場を守ってくれ」

本心をたばかり、そう言ってその者の発言を認めた。ディアスの懸念は確定事項ではない。不要に諸将の間に不安の種を撒く必要は無かった。また警戒を強める事は無駄ではない。

その後も特にディアスの意に沿う発言は無く、すべてディアスが想定した範囲内の意見ばかりだった。軍議は早々に終了した。ディアスに認められた意見を述べた男は、大いに面目を保ち、足取り強く本陣を後にする。ディアスはその後姿を僅かに冷めた目で見送る。

諸将がみな去った後、ディアスと寝食を共にし、幾分はその顔色を読むのに長けたケネスは、上官の心中を敏感に察し、遠慮がちに口を開いた。

「ディアス将軍。何か心配な事でもありますか？」

「いや、なんでもないよ」

そう答えたものの、やはり少年に向けた総司令の顔色は優れているとは言い難かった。

さらに1ヵ月後。

ランリエル軍に動きがあった。対峙3ヶ月目にして、ランリエル王都フォルキアから、2万5千の軍勢が戦場に到着したのだ。

バルバール諸将に戦慄が走る。遂にサルヴァ王子の秘策が発動されるのか。警戒はさらに強化され一兵卒に至るまで緊張が広がる。

その中で総司令官フィン・ディアスのみ、冷やかな目でランリエル軍が構築した敵陣に、王都からの援軍が姿を消していく様を眺めていた。

数日後、敵陣から数千の軍勢が発した。しかしその方向はバルバール国境を示さず、ランリエルに向いていた。そしてその翌日にも数千。次の日にもまた数千。遂には2万5千の増援と、同数の軍勢がランリエル王都に向かった。結局は休息の為、軍勢の半数を交代させた。ただそれだけと思われた。

この動きにバルバール諸将は拍子抜けし、総司令官は戦慄した。これはやはり想定した最悪の状況。そう確信を持ったのだ。

本陣の執務室で、脇に従者であるケネスが控えているのを忘れた様に、部屋の主は、机に添えられた椅子に座り、硬く目を瞑って思案に耽った。

ランリエル軍に戦う意思はない。無為に対陣を続けるだけ、それがサルヴァ王子の秘策だった。今はまだ持っている。しかしいずれバルバール王都から急使が来るだろう。軍資金が尽きると。

バルバールはコスティラ国境の砦の軍勢をあわせ4万7千。ランリエルは5万。動員している軍勢はほぼ同数。しかし国力に対する総動員数との相対で考えれば、バルバールは最大動員に近いが、ランリエルは3分の1程度なのだ。海軍の動員を考えても、ランリエルの負担はバルバールの半分以下。

国庫に対する負担は比べるべくも無い。この危機に、バルバールは国民に対しての増税しかないだろう。そして国民も、仕方なしと応じるに違いない。だがこれが続けばどうなるか？

なにせバルバール軍はろくに戦っていないのだ。国民は戦費の浪費と見るだろう。下手をすれば増税拒否から内乱すらありえる。

それに対するには、守りを固める敵に対し不利を承知で戦いを挑む事だった。そして損害を出せば国民も、兵士も必死で戦っているのだと納得するだろう。だが、その様な事を出来る訳がない。

不利と分かっての損害を出す為の戦いなど、ただの自殺行為である。バルバール軍は、バルバール王国とその民を守る為存在する。

そう断ずるディアスも、さすがにこれには躊躇する。

いや、その行為によって確実にバルバールが勝利するというならその方法も有り得た。軍資金不足により兵糧が不足し軍勢が瓦解するよりは良いだろう。だが事実は、それを行ったところで僅かばかりの延命でしかない。その後しばらくすれば、また国民から不満が出るに違いない。その度に自殺行為の戦いをするのだろうか？

まさに腹を満たす為、自分の足を食らう大蛸の様な行為である。軍勢は消耗し疲弊する。遂にはランリエル軍に駆逐され、そしてバルバール王国は蹂躙されるだろう。それでは意味は無いのだ。

だが……それではどうするのか？　座して資金不足、食糧不足により軍勢が瓦解するのを待つか？　いや、何か手を考えなくてはならない。勿論、一戦しランリエル軍を撃破するという絵空事を除いてである。

今まさに、バルバール軍総司令官フィン・ディアスは敗北しようとしていた。一度も戦わずに。

このまま勝敗が決すれば、ランリエル国内では、サルヴァ王子はなんと楽な戦いをしたのだろう。そう囁かれ、みなはこの結果に拍子抜けするに違いない。

まさに兵法で言うところの、戦上手は簡単に勝つ為その功は理解されず賞賛もされない、の言葉通りである。だがその相手は、バルバール軍史上最高の総司令官とも称されるフィン・ディアスであった。決して楽な相手ではない。

だが、戦争に勝つという事はどういう事か？　敵軍を壊滅させる

事か？　敵将を討ち取る事か？　首都や城を落とす事か？　国王を討ち取る事か？

いや、それらの事をすべて行っても、新たな王を立て、新たな本拠地を作り上げ、新たな指導者が立ち、武器を持った民が集結する。戦う意思が存在する限り。

逆に言えば、戦う意思さえ奪えるならば、国王を討ち取る必要は無く、城を落とす必要も無く、敵将の首など不要で、敵軍と戦う必要すらなかった。

勿論、その後、国を平定するのに、まったく戦闘が起こらないという事は無いだろうが、大勢は決するのだ。

このままではバルバール王国は戦わずに消耗していき、遂に戦う力と意思を失っていく。国境のバルバール軍は資金不足から飢え、戦いどころではなく崩壊する。その後、ランリエル軍は悠々と国境を突破し、王都に達するだろう。そしてランリエルと違い、強固な城塞都市ではないバルバール王都は瞬く間に蹂躙される。その後ランリエル軍は各地で散発的に起こる抵抗を軽くいなし、バルバール王国を征服するのだ。

突如ディアスは、机の上に重ねられていた紙の束を右腕で打ち払った。机の周りに紙切れが散乱する。その紙くずは、数ヶ月をかけ心血を注ぎ書き上げた、攻勢に出るランリエル軍を撃退する作戦案の数々だった。だが敵が攻めてこないなら、まさにゴミでしかない。

調べ上げたサルヴァ王子の人となり、そして戦歴から、サルヴァ王子の戦い方を「戦いの主導権を握る事を望み、常に攻勢に出ようとする」と認識していた。それがここまで徹底して戦いを避ける策

に出るとは。

確かに、ランリエル王国で起こった反乱でも王子は戦わなかった。その時も違和感を感じてはいた。だが以前の王子と違いすぎる。何があったというのか。このあまりの違いは、ディアスの想定から外れていた。

「ディアス将軍……」

普段のディアスからは考えられぬ乱暴な振る舞いに、従弟であり従者でもある少年は心配そうに声を掛けた。

だがディアスはその言葉が聞こえていないかの様に、机に肘を付いた右手で顔の半分を覆い、さらに思案に耽っている。

上官に無視されたケネスは、無言で床に散らばった紙片を拾い集めた。そして俯いて考え込む上官の横に置く。その時になってやっとケネスの存在に気付いた様に、ディアスは顔を上げた。

「ディアス将軍。将軍なら必ずサルヴァ王子にも勝てます」

ケネスの言葉は、絶大なる信頼からなるといえば聞こえは良いが、実際には何の根拠の無い言葉だった。いや、彼にしてみれば、今までのディアスの実績からの当然の言葉なのだが、それでも身贔屓は否めない。

だがそれでもディアスは救われた。ケネスの言葉にではなくその存在に。普段ならしない乱暴な態度をケネスの前でして見せた。いや他の者の前ではしない、と言えた。それは紛れも無いケネスに対する甘えだった。その事に気付いた総司令は落ち着きを取り戻し口

を開く。

大きく伸びをし、あえて事も無げに彼の家族といえる従者に言葉を掛ける。

「サルヴァ王子は、私の予想とは違った行動を取っているみたいだ」

「戦わない事がですか？」

「ああ、そうだ。私は、王子はもっと積極的に攻勢に出ると考えていた。だが王子の狙いは、我が軍の全戦力を出陣させる事。それだけだった。しかもこちらが根を上げるまでずっと。国力に対しての負担は、ランリエルはこちらの半分以下ですむ。我慢比べをしては勝負にならない」

「では。こちらの戦力を減らす事は出来ないのですか？　ランリエル軍が5万ならこちらは3万に減らすとか……。国境に構築した陣地群を考えれば相手が5万なら十分守りきれると思いますけど。あ、すみません。ディアス将軍ならもうこれくらい考えてますよね」

「ああ、確かにそれも考えた。だがランリエル軍が増員すれば、こちらはまた戦力を増やす必要に迫られる。軍勢を王都に戻したり、また出陣させたりするのも、それはそれでかなりの負担になる。物資の輸送も必要になってくるからね。当然ランリエルにも負担になるが、国力が違うから同じ負担を受け続ければやっぱりこちらが負ける」

「そうですか……。すみません。つまらない事を言って」

申し訳なさそうに僅かに俯いたケネスに、ディアスは優しい視線

を投げかけ、その視線に相応しい優しい言葉を掛けた。

「いや、口に出して考えを言葉にするのも、頭が整理されて良いもんだよ。気付いた事があれば遠慮なしに言ってくれ」

ディアスの言葉に、ケネスは自分でも力になれるならと、その考えを口に出した。

「それでは、えーと。やはり目の前に展開するランリエル軍を倒すのは難しいのですか？」

「ああ、それはさすがに現状難しい。状況が変わればその限りではないが、今のところそれは望むべきじゃないな」

「だったら……。ランリエルにもバルバールと同じだけの負担を与える事って出来ないのですか？　あ、その方法は思いつかないんですけど……」

「同じだけの負担か……。つまりランリエルにも全軍を動員させる事が出来ればって事だな」

ディアスは顎に手をやり感心した様子で呟いたが、ケネスは慌てた。彼にしてみればそれ程深く考えての言葉ではないのだ。

「あ、いえ、そこまでも考えた訳じゃないんですけど……」

しかし、すでに少年の言葉が聞こえていないかの様に、ディアスは思考の海を漂っていた。

どうすればランリエル全軍を出陣させる事が出来るだろうか？

国境にこれ以上ランリエル軍を動員させる事は難しい。ランリエル軍は攻めてきたにも拘らず守りを固めているのだ。そして守りを固めるには5万でも十分過ぎる。たとえこちらがワザと隙を作って誘っても、サルヴァ王子がその誘いにのり、さらに軍勢を動員して攻勢に出る事は無いだろう。

やはり状況は八方ふさがり。だが、だからと言って手をこまねいて負ける訳には行かない。総司令官であるディアスには、その責任があった。敵将であるサルヴァ王子が、戦わずに勝つという高みにあるならば、ディアスはそれを戦いの場に引き摺り下ろさねばならない。

だが陸戦戦力はお互い強固な陣を敷き膠着状態である。先に手を出し、無理な攻めを行った方が負けるだろう。戦場に引き摺り下ろしたところで勝てるだろうか。

だが不意にディアスはある事に思い至った。サルヴァ王子に勝つ事が難しいなら、王子以外と戦えば良いのだ。サルヴァ王子の指揮が届かないであろう戦場。つまり海である。

元々バルバール海軍によってランリエル海軍を壊滅させる事を想定していた。ランリエル軍の陸戦戦力はバルバール軍のそれを大きく超えるのだから、海軍の方がまだ勝算は高い。

その為軍艦の数をごまかし、ランリエル海軍の戦力を超えようとしたのだ。だがそれもサルヴァ王子も同じ事を考え、数を偽装していた為、結局は互角の戦力となっている。

軍艦の数はバルバールが劣る。だが海軍の質は上回る。その事を想定しての戦力は互角であるという分析である。ならば海軍の将の

質で上回るしかない。

本来、味方の将が、敵より優れているという前提の作戦など噴飯物だが、今回、根拠が無い訳ではない。何せバルバール海軍とランリエル海軍とは、戦闘経験の実績に雲泥の差が有るのだ。

勿論ランリエル海軍にも才能ある提督が存在するだろう。だがその才能も、開花するのは経験が有ってこそだ。経験なき天才が大活躍するなど、物語の中だけである。もっとも万に一つはあるだろう。だが今のバルバール軍に、その万に一つを考慮する余裕は無い。

「ケネス。提督のライティラに会いに行く。準備を頼む」

バルバール艦隊は海戦当初の対峙以降は、ランリエルとの国境に一番近いカルナという港に駐留している。艦隊同士がお互い毎日出撃し、対峙するなど無駄な行為である。ライティラもカルナ港に居た。

「将軍が自ら出向くのですか？」

ディアスの思考が読めぬケネスは、突然の出立の言葉に驚きの声を上げる。陸戦と海戦の両方の知識を有する将軍などほとんど居らず、そして総司令官は陸戦の将軍がなる。その為海軍は、総司令の要請により出撃はするが、指揮系統はほとんど独立していた。とはいえ、序列で言えば当然一提督より総司令官ディアスの方が上なのは言うまでもない。

「ああ、どうせこちらの戦場は膠着状態だよ。私が居なくても困りはしない。それに各将には何があろうと持ち場を離れずに守りぬけと言い聞かせてある。問題ない。それより今は海軍が重要なんだ」

「分かりました。すぐに準備をします」

こうしてバルバール軍総司令官フィン・ディアスは、状況を打破する為、ライティラ提督の元へと急いだのだった。

第３３話：ランリエル王国沖海戦

「ランリエル艦隊を殲滅して欲しいと？」

カルナ港の臨時海軍司令部の一室で、従者であるケネスを背後に立たせたバルバール軍総司令フィン・ディアスの言葉に、ライティラ提督は探る様な視線を向けつつ言った。ライティラ提督は４０過ぎの背の高い男で、黒い瞳と黒い髪を持ち、その髪は短く切りそえられている。海の強い日差しと潮風に焼かれ肌も黒かった。

臨時の海軍司令部には、臨時の名に相応しく急いで用意したと思われる、新しいが重厚さの欠片もない机と椅子が並んでいた。その椅子の一つに座るライティラに向かい合って座るディアスは、数秒ほど前に言った台詞を繰り返した。

「そうだ。現状、陸での戦いは膠着状態だ。双方守りを固め、攻めた方が不利な戦いを強いられる。これでは動き様がない。この状況を打破するには海で勝つしかない」

「しかしランリエルから攻めて来ておるのですぞ。いずれランリエル軍が先に動きましょう。その時こそ戦えば良いではないですか」

ライティラのもっともな意見に、ディアスは自らが洞察したサルヴァ王子の思惑について説明した。バルバールを追いつめるその策略を語るディアスの顔色は明るいものとはなり得無い。

そして、戦わずにバルバールを追いつめるという恐るべき策謀に海将ライティラも唸った。目の前の敵を倒す事が勝利に繋がる。多くの軍人が考えるその常識が否定されたのだ。

しかし……と、海将は鋭く、そして幾分優越感を含んだ視線を、王子の策謀により苦悩する総司令に向けた。

「この現状を打破するに、我が艦隊の力が必要という事ですな？」

この危機的状況に対し優越感に浸れるライティラの思考に、まあそれも頼もしいと言えるかと、ディアスは苦笑した。そして、ならばと、その優越感を助長させる言葉を吐く。この手の男は調子に乗せれば乗せるほど御しやすく、そして力を発揮するだろう。

「そうだ。提督率いるバルバール艦隊の力が必要だ。提督にランリエル艦隊を撃破してもらわなくては、バルバールには後がない」

「わかりました。現状実数はともかく、戦力としては我が艦隊とランリエル艦隊は互角と言えます。ですが、互角の相手ならこちらに分があるでしょう」

互角なら分がある。言葉として矛盾を含んでいる、とも思われるライティラの発言だが、その自信も根拠なき妄想ではない。

ディアスの陰に隠れてはいるが、ライティラとて、コスティラ海軍に対し常に勝利している提督なのだ。そしてコスティラ艦隊は常にバルバール艦隊の戦力を上回っていた。地形による有利はあるとはいえ、戦力に勝る敵に勝ち続けているのだ。

確かに大言壮語の過ぎるきらいはある彼だが、同じく常勝であるディアスほどの名声を得てはいない。それは皆の戦いの目が陸戦に向きがちなのと、ディアスが総司令で、ライティラはその配下という事もある。ライティラの勝利はバルバール軍全体の勝利の一部と

して埋没してしまうのだ。そしてバルバールの勝利は、総司令ディアスの勝利だった。

ディアスに対し、己を誇示したいというライティラの欲求も無理はなかった。そのライティラにディアスは改めて現状を説明する。

「私は当初、海軍戦力で敵を上回り、敵艦隊を撃破しようと考えていた。だがどうやらランリエルも同じ様に考えていたらしく、敵もこちらの想定以上の艦艇をそろえて来た為、その計画は崩れた。だから提督には攻撃を差し控えて貰い、守るに有利な陸戦で勝敗を決しようと思っていた。だが、さっきも言ったとおりその思惑も外された。予想を大きくね」

そして、現状の深刻さに比べ、やや軽い動作で首をすくめたディアスは、それをおさめると改めてライティラに視線を向けた。

「ところで……、私が艦隊の出撃を止めていなければ、提督はすでにランリエル艦隊を撃破出来ていたかい？」

ディアスの視線には「もちろんだろ？」とでもいう風に、ライティラに対し自尊心をくすぐる要素が含まれていた。そして、ライティラは「当然です」と返答するとディアスは予測したが、その返答はディアスの予想を外した。良い方向に。

「いえ、それは無理です。今現在ランリエル王国沖の時間帯毎の潮の流れ、風向きを調査しているところです。もちろん平時は軍艦はともかく商船はバルバール王国沖とランリエル王国沖を自由に行き来しております。それらからも情報は得ておりますが、十分とは言えません。戦うにはまだ情報が不足しております。戦うならその情報が集まった後ですな」

自信過剰な者は、敵を侮り十分な準備を行わず戦う事が多々あるが、どうやらライティラの自信は、自らの実績と十分な準備を根拠としてのものらしい。そう判断したディアスは、少し侮り過ぎたかと内心反省しつつ、改めて勝算を問うた。

「それでその情報は集まったとして、戦力が互角の敵にどうやって勝つんだい？　いくら情報を集めても、やはり地の利はランリエル艦隊にあるんだろ？」

艦艇の数はランリエル艦隊はバルバール艦隊の１．５倍。だが、艦艇の性能、船員の質の差により、スピード、旋回能力においてバルバール艦隊は大きくランリエル艦隊を上回る。それを考慮しての、戦力は互角という判断である。

ライティラはわずかに姿勢を正すと、微かに笑みを浮かべディアスの問いに答えず、逆に問いかけ返してきた。

「ディアス将軍。１．５倍の数の敵を倒すにはどうすべきとお考えですか？」

ディアスはその問いにわずかに考え込んだ。難しい問いではない。だがそれゆえに何か裏があるのかとも思ったのだ。だがここで考え込み正解を当ててもしょうがないと、はじめに頭に浮かんだ事をそのまま口に出した。

「どうやって、というのは置いておくとして、最も単純な方法としては、奇襲や挟撃を行う事だろうね」

「ええ。その通りです」

それだけ言うとライティラの口は動きを止めた。ディアスはライティラの顔に探る様な視線を向ける。確かにそれらが可能ならば勝てるだろう。だがランリエル艦隊の提督とてそれくらいは分かっているはず。それにむざむざ敵が引っかかると思っているのか？　と、一瞬ライティラの能力に疑問を持つほどだった。

ライティラは、ディアスの考えを察したように笑みを浮かべたまま再度口を開く。

「ですが、視界が開けた海で戦う艦隊戦ではそれらはほとんど不可能なのです。奇襲、挟撃しようにも、近づくまでに敵艦隊に気付かれ、敵もそれに対応した動きをするでしょう。もちろん、視界の悪い入り江などに敵を誘いこめば話は別ですが、実際戦場と想定されるランリエル王国沖にはその様な場所はありません」

「では、海戦で戦力に勝る敵に勝つにはどうしたら良いと言うんだい？」

ライティラはディアスの問いかけにすぐには答えず、己に仕える従者に何やら話しかけた。その従者は足早に部屋を出る。そしてライティラは改めてディアスに視線を向け言った。

「ディアス将軍は、軍議にて諸将に、机上演習の駒で自らの作戦を説明する事があるとか。私も少しそれの真似事をさせて頂きましょう」

その言葉にディアスではなく、ケネスがわずかに身じろぎした。少しディアスを意識する事、過剰ではないか。と彼を尊敬する少年は不快に思ったのだ。だが当の本人を差し置いて、その従者が激す

る訳にはいかない。ケネスはディアスの後頭部に視線を向け、押し黙るしかなった。

そして持って来られた机上演習用の駒を机の上に置き、ライティラはそれを説明した。

「机全体を海。ランリエル王国沖に見立てましょう。私はバルバール艦隊を担当しますので、ディアス将軍はランリエル艦隊を担当して頂けますか？」

ディアスはその言葉に黙って頷いた。バルバール艦隊の作戦を説明するのに、ライティラがバルバール艦隊を担当するのは当然である。

そして軍艦に見立てた駒が2人に配られた。実際の戦力を模している為、駒の数はディアスがライティラの1．5倍の数を持っている。そして2人は、それらを相手に穂先を向けて並べた。

机上演習が始まると、まずライティラは艦隊を二つに分け、その分けた一隊でランリエル艦隊の側面を突こうとした。先ほどディアスが言ったとおり、挟撃をしようというのだ。そのディアスは、自らも艦隊を分け対峙する。分けた数はライティラが分けた数の1．5倍である。これでバルバール艦隊の挟撃策は封じられた。

だがライティラは分けた艦隊をさらにそれぞれ二つに分け、再度挟撃しようとする。ディアスもそれに応じさらに艦隊を分ける。しかしライティラはまたもや艦隊を分けたのだ。これで分かれた艦隊は8つ。だがディアスはそれには応じず、手を止め、その代りに口を動かした。

「敵艦隊の側面を突く為に艦隊を分け続けた行き着く先は、艦艇同士の一騎打ちって事かい？」

「はい。このまま艦隊の分割を続けていけば、そういう事になります」

互角に戦う為には、バルバール艦艇1に対し、ランリエル艦艇1.5が必要。だが現実に0.5隻などというものは存在しない。ランリエル艦隊が1.5倍の数でも、最終的に、バルバール艦隊とランリエル艦艇との戦いは、1対2と1対1の二つの組み合わせに辿り着く。

1対2となったバルバール艦艇は、ランリエル艦艇を上回るスピードを生かし逃げに徹する。そして1対1になったバルバール艦艇とランリエル艦艇との戦いの勝敗は明らかだろう。たとえランリエル艦艇が逃げに転じても、スピードが違う為逃げ切れない。そして1対1の勝負がバルバール艦艇の勝利で終われば、後は2対2の戦いだ。そして2対2でもバルバールの勝利は動かない。

だが、とディアスは顎に手をやり考えた。理屈は分からないでもない。とはいえ、あまりにも机上の空論過ぎるのではないか？　現実に敵が艦隊の分割に最後まで付き合ってくれるとは思えない。ある程度の段階で敵もこちらの意図を察し、何かしらの手を考えるだろう。

ディアスがその考えをライティラに述べると、ライティラはにやりと笑い口を開いた。

「もちろん、敵将が余程の馬鹿でない限り気付くでしょうな」

この夜、海軍司令部内の一室に泊まったディアスとケネスだったが、ライティラのディアスへの言動に普段は温厚なケネスは激怒し、ディアスは宥めるのに苦労したのだった。

それから数日後、ランリエル艦隊が駐留するランリエル王国のイオミ港に、バルバール艦隊来襲の報がなされた。艦隊を率いるランリエル海軍のカロージオ提督は艦隊の出撃を命じる。

カロージオは年齢も３０前半と若い。実戦経験こそ少ないものの、演習において抜群の成績を修め将来のランリエル海軍を担う人材と目されていた。もっともランリエル海軍に、海戦の経験が豊富な者など存在しない。経験が無いなりにもある程度の経験は必要という判断と、将来の成長を望むならある程度の若さも必要。それらの考えによる若き提督の任命だった。

その若き提督に率いられたランリエル艦隊はイオミ港から続々と出港する。バルバール艦隊をはるかに上回る数の艦艇はランリエル王国沖を進み続け、程なくして両艦隊は対峙した。

「敵の動きに注意を怠るな！　何か動きがあればすぐに報告せよ！」

実数はともかく戦力としては互角。この状況にサルヴァ王子からはこちらから手は出すな。そう厳命されている。その命令は、守りを固め対峙し続け、バルバールの財政を破綻させ勝利するという王子の作戦によるものだ。だが、取りようによっては、戦力が互角なら勝算は薄いから闘うな、とも取れる。

並の者なら、自らの能力を評価されていないと不満を持つところだ。いや、数はこちらが多いのに戦力は互角と思えという分析自体がそもそも屈辱的といえる。その根拠は海軍を率いる提督の力量を元にしているのではなく、海兵の質の差を根拠としているといえどもである。だが、将来のランリエル海軍を担う人材と目されるだけあってカロージオの器は大きかった。現状を素直に受け入れ、ならばと将来の成長を目指していた。

ランリエルがバルバールを平定すれば、熟練のバルバール海軍の提督達と交流を持つ事もあるだろう。その時は、彼らに教えを乞おう。カロージオは、そうとまで考えていた。そしてバルバール艦隊提督ライティラは、その教えを乞いたい人物の筆頭ともいえる者である。油断するなど夢とも思わず、敵の動きにすぐに対応できる様にと、バルバール艦隊の動きに細心の注意を払った。

そしてバルバール艦隊にその動きがあった。

「バルバール艦隊が二手に分かれました。我が艦隊を左右から挟撃しようと目論んでいると思われます！」

双方の軍艦は船首に衝角と言われる金属の角を装着している。そして帆に風を受けて進む帆走艦ではなく、オールを使って進むガレー船だった。大量の漕ぎ手を必要とするが、機動性において帆走艦とは比べ物にならない。その戦いは、衝角を敵船にぶつけて穴を開け転覆させる衝角戦。そして敵船の正面からぶつかってもお互いの衝角同士がぶつかるだけである。敵船を撃沈させるには船側を突く事が重要だった。ライティラの動きは正攻法といえる。

二手に分かれた敵艦隊の片方だけを追えば、残った一方に側面を突かれる。その為カロージオも、正攻法で来たライティラに対する

に正攻法で対応する。振り返って背後に控える幕僚に口を開く。

「こちらも二手に分かれ敵艦隊に対応せよ！　艦艇数はそれぞれの1．5倍だ」

カロージオの対応に、バルバール艦隊は距離を保ちながらも舵を切り、それぞれ対峙する艦隊の側面を突こうとした。だがその度にランリエル艦隊も舵を切りそうはさせず、むしろバルバール艦隊の側面を突こうとする。両艦隊は旋回しつつ相手の隙を窺い、ランリエル王国沖に大きな船の渦が2つ出来た。だがその2つの渦は徐々に距離を置き、離れていく。もちろん、バルバール艦隊の巧みな誘導によるものだった。そしてまたバルバール艦隊に動きがあった。

「それぞれの敵艦隊が、またも二手に分かれました！」

この敵艦隊の動きに、カロージオは背筋に冷たいものが走るのを感じた。さすがにランリエル海軍の将来を担う人材である。早々にバルバール艦隊の、ライティラの意図を察したのだ。艦隊同士の戦いとは、いかに組織的に艦艇を動かすかにかかっている。だがバルバール艦隊はそれを放棄し、各艦の個人運動。つまり艦艇による一騎打ちにかけてきた。そして確かにそうなればバルバール艦艇が圧倒的に有利なのだ。

ランリエル艦隊としてはそれに乗る訳にはいかない。カロージオはそう考えたが、数瞬の逡巡の後、彼が発した命令はライティラが望むものだった。

「こちらもさらに艦隊を分け、それぞれの敵艦隊に対応させよ！」

その命を受けた者は、一瞬の間もおかず手旗により各艦にその指

示を伝えていく。カロージオはその様を苦々しげに見つめながら、巡るましく思考を回転させた。

艦艇同士の一騎打ちではバルバール艦艇にランリエル艦艇は勝てない。だが……。現実に、艦隊の側面を突こうとする敵の動きを無視する訳にはいかないのだ。どうするか？　どうすればこの状況から脱却できるのか？　今現在、双方４つに分かれている。一騎打ちの状況になるまでにはまだ間がある。それまでにこの状況を打破する手を考えなければならない。

そこにまたもや敵艦隊が分かれたとの報告が入る。カロージオはこれで８つ。と思いながら、ランリエル艦隊もさらに分かれ、敵に対応する様に命じる。

まだだ。まだ大丈夫なはず。とカロージオは、敵の意図を破る手だてに頭を巡らす。そこに士官の一人が焦った声でカロージオに報告した。

「マイーニ艦長に、艦艇８隻の指揮させ分かれた敵艦隊に対応する様に命令を出したのですが、マイーニ艦長の艦と指揮を任せた艦が指示通りに動きません！」

だがカロージオは報告者の１００分の１も焦らず、落ち着いて指示を出し続けるように、と命じた。そのしばらく後、マイーニ艦長に率いられた８隻の艦艇は命令通りに動きだす。

伝令が行き来する陸の戦いとは違い、海戦では連絡は手旗信号で行われる。無いには越した事はないが、見落としなども考えれらる。また現在両軍の艦隊は数部隊に分かれ、乱戦に近くなっている。そしてそれに伴い命令も複雑化している。手旗信号での命令の伝達と

それに対する反応が少しぐらい遅れても無理はない。

だが、それはバルバール艦隊も同じはず。と考えたカロージオの脳裏に、すぐさま警鐘が鳴らされた。いや、バルバール艦隊に命令伝達の遅延、齟齬はない！

バルバール艦隊は、はじめからこの艦隊の分割運動を計画しているのだ。何隻の艦艇がどの艦の指揮下について分割し行動するか。それらは前もって決められ、旗の一振りで動いている事も考えられる。

だがランリエル艦隊はそうは行かない。カロージオの「敵に合わせてこちらも艦隊を分割せよ」の一言の命令の裏で、幕僚、士官達は、分割したバルバール艦艇の数に合わせてこちらも分割するのに、どの艦がどの艦の指揮下に入るかを検討するところから始めなくてはならないのだ。そしてその後に、その複雑な命令の手旗信号による伝達である。

しかも、バルバール艦隊の誘導により、その命令を発する旗艦と他の艦艇とは、徐々に距離が離れてく。ゆえに、その伝達は艦艇を介した伝言となり、さらに命令伝達の速さと確実性は旗艦との距離に比例し失われていく。

このまま行けば、艦隊同士の一騎打ちとなる前に、ランリエル艦隊の指揮系統は崩壊する。バルバール艦隊の動きに対応が取れなくなる。そうなれば、バルバール艦隊にいいように料理されるだろう。組織的な動きを放棄し艦艇同士の一騎打ちが狙いと見せかけ、だがその実、真の狙いはランリエル艦隊の指揮系統の破壊だった。バルバール艦隊はむしろ組織的に動き、ランリエル艦隊は壊滅させられる。

カロージオは艦艇同士の一騎打ちの状況になるまでは安全と考えていたが、ライティラの策はむしろその逆。艦艇同士の一騎打ちになるまでは安全と錯覚させる事だった。カロージオは有能ゆえにその策にはまり、艦艇による一騎打ちになる前に、その対応を考えようとバルバール艦隊の分割に付き合ってしまったのだった。

カロージオは、未来の師と考えていたライティラに恐怖を感じるとともに、その尊敬の念を深くした。自分など到底勝ちえぬ。だがこうなっては最後まで戦い。少しでもバルバール艦隊に損害を与えるしかない。その為には、これ以上の艦隊の分割には付き合わず、敵艦隊がさらに分かれたなら、その片割れに最大戦速で持って突入する。

分かれたもう一方からの挟撃は受けるが、それまでは数の優位を持って敵に対して損害を与えられるだろう。現在、双方艦隊運動に終始し、一隻の衝突も行われていない。だが艦隊の分割の繰り返しにより、すでに乱戦の状況を呈している。

バルバール艦艇の優位はその船足と旋回能力。乱戦により双方動きが鈍れば、バルバール艦艇のその長所の幾分かは失われる。だがそれによって勝てるとカロージオは夢見ている訳ではない。それでもやはりバルバール艦隊が勝つ。だが普通に戦うより、多くの損害を与えられる。ただそれだけの事だ。

一隻でも多く敵を道連れにする。カロージオはその命令を発する為、背後に立つ幕僚達に振り返った。そしてその者達の顔を一瞥する。この者達を死なせる事になる。だが多くの敵を倒す為には仕方がない。幸いにも戦いは乱戦……。

突然、カロージオは驚愕の表情で船首に向きなおった。その眼前に、入り乱れる両艦隊の姿が見える。なぜ乱戦になっている？　バルバール艦隊提督ライティラの手腕ならば、自分程度の者など、もっと綺麗に勝てるのではないのか？　彼がその気ならば、乱戦などにせず、わずかな損害で、我が方の艦隊を完膚なきまでに叩き伏せる事も可能だろう。そして、ランリエル艦隊は惨めに港へと引き上げる事になる。

その時、僥倖ともいうべき、気づき、がカロージオの全身を走った。錯覚に次ぐ錯覚。重ねられた誤認識。今カロージオが考えるべき事は、全く逆の事だった。ライティラに追い詰められたカロージオはまたもや彼の術中にはまっていたのだ。そして再度、幕僚達へと振り返る。

「全艦撤退！　イオミ港へと引き上げる。それが不可能な艦艇は、どこでもいい。とにかくどこかの港に逃げ込め！」

だが、このカロージオの命令に幕僚達は、戸惑いの色を隠せない。この乱戦の状況で撤退を開始すれば、敵の格好の餌食。半数も逃げ切れまい。しかも、まだ戦いは始まってすらいないのだ。せっかく出撃したにもかかわらず敵前で撤退するなど、ただ単に損害を出しに来ただけではないか。だがカロージオはそれを察し険しい表情で口を開く。

「お前達の言いたい事はわかる。これは私の判断の誤りだ。そもそも出撃した事が間違いだったのだ。出撃しなければ勝っていた」

カロージオのその言葉に、幕僚達は意味が分からず顔を見合わせた。

撤退を開始したランリエル艦隊に対し、バルバール艦隊旗艦の指揮卓に座していたライティラはすぐさま追撃の命を出した。その声には幾分焦りが見えた。

「目先の敵よりも、とにかく敵の逃げる先に回り込め！　一隻も逃すな！　急げ！」

敵は戦いもせずに撤退を開始した。まったく情けない限り。敵艦隊撤退の報に、そう考えていた幕僚達は、にもかかわらず、いつもの余裕を感じさせない提督に思わず視線を向けた。だが、その提督と目が合い慌ててそらす。

ランリエル艦隊の行動は、まったく損害を出す為に出撃して来たとしか思えない。並の者ならばそのあまりに無様な状況に耐えられず、わずかでもバルバール艦隊に損害を与えようと戦いを挑むはず。それがここまで潔く撤退を開始するとは……。海戦経験は少ないはずの、ランリエル艦隊提督の英断にライティラは唸った。

海軍戦略には「存在する艦隊」という思想がある。それは一言で表すと「艦隊は存在する事に意義がある」という事だった。極端にいえば、戦争において戦いに勝利する事自体に意味はない。正確に言えば勝利した結果何を得られるかが重要であり、それを得られなければ勝利しても意味はない。

そして海の戦いにおいてのそれは、海路による移動と輸送、そして連絡の自由だった。だが敵艦隊が存在する。その事がそれらの自由を奪う。話を単純化すれば、１０隻の敵艦がどこかに存在するなら、その襲撃に備え輸送船１隻派遣するのにこちらも１０隻の軍艦をつけねばならない。いや、輸送艦を守りながらの戦いなら、同戦

力でも不利と考えられる。

それゆえのライティラの焦りだった。ランリエル艦隊に半数。いや、3分の1でも逃げられれば、バルバール艦隊による制海権確保に大きな障害となる。到底自由な行動とは言えなくなるのだ。そういう意味では、出撃しなければランリエル艦隊の勝ちだった。というカロージオの言葉は確かに的を得ていた。

バルバール艦隊はコスティラに攻め寄せた時、港に潜む敵艦隊に対し火をつけた老朽艦を突入させて焼き払ったが、その事を知ったランリエルではその対策を取っている。同じ手は使えない。その為ランリエル艦隊を壊滅させるには海戦に引きずり出し、そしてそこで全滅させねばならない。

カロージオの考え通り、ライティラにはもっと華麗に、バルバール艦隊の損害を最小限に留める戦いも出来た。だがそれでは多くのランリエル艦艇を取り逃がす。その為の乱戦だった。乱戦になればバルバール艦艇の損害も増えるが、ランリエル艦艇の損害も増大するのだ。被害は少ない、だが意味のない勝利をする方が、はるかに無駄死にと言うものである。

ライティラは旗艦を前線まで進ませ、追撃の指揮を執った。散り散りに逃げようとするランリエル艦に対し、バルバール艦を一隻ずつ向かわせ、集団で突破しようとする艦隊は冷静に包囲した。

ランリエル海軍は全体としてはバルバール海軍にその質で劣る。だが先頭を逃げるランリエル艦隊旗艦の搭乗員は、さすがに選りすぐりの者ばかり。容易には追いつけない。だがイオミ港の手前で、ついにライティラ率いるバルバール艦隊は、ランリエル旗艦を捕捉した。

ランリエル艦隊旗艦に対し、その行く手を阻む様にバルバール艦隊旗艦が船首を向けて立ちはだかった。だが、立ちはだかるバルバール旗艦に向け、ランリエル旗艦は猛然と突進を開始する。

「敵艦突入してきます！　提督、回避を！」

正面衝突の恐怖にバルバール提督の背後に並ぶ幕僚達が叫びをあげた。だが幕僚達の叫びとは逆に、命令を発するライティラの口調はあくまでの冷静だった。

「こちらも前進せよ。敵艦の船首にこちらの船首をぶつけるのだ」

ランリエル旗艦は何度か船首の向きを変えたが、そのたびにバルバール旗艦は船首をその向きに合わせる。そしてついに両艦は正面から激突した。お互いの船首につけられた衝角同士が激突する。衝角自体は金属製で破損はなかったが、それを取り付ける木造部分は破壊され、両艦とも僅かずつながら船首から海水が侵入しだした。

ランリエル旗艦の行動は、敵旗艦を道連れにしようとのものだった。だが、バルバール旗艦の、ライティラの意図はそれに応えようなどという、安っぽい騎士道精神の産物ではなかった。敵艦が突入して来てその衝角から逃れられそうになければ、下手に船の向きを変え敵に船側をさらすよりも、こちらも衝角をぶつけるべき。その冷静な判断によるものだった。

両艦は船首がぶつかり合い動けなくなった。そしてランリエル旗艦の甲板にランリエル艦隊提督カロージオが姿を現す。ライティラはバルバール旗艦の指揮卓からその姿を見やった。

軍艦の構造などそう変わるものではない。カロージオもバルバール旗艦の指揮卓の位置へと正確に視線を向けた。未来の師となるはずだった男と、未来の弟子になるはずだった男の視線が混じり合う。そして弟子の唇が動いた。戦いのさなかの騒音でその声は聞こえず、唇の動きを正確に読み取れるほどの距離でもなかったが、不思議とライティラにはその言葉を理解出来た。

「生け捕れ！」

突然発したライティラの言葉に、一瞬の戸惑いの後、幕僚達が各艦にその命令を伝達しようとした。だがそれよりも早く、一隻のバルバール艦がランリエル旗艦の側面を突いた。せっかく敵旗艦が動きを止めているのだ。それを撃沈しようとするのは当然の行為だった。ランリエル旗艦は、船側に大穴が空き瞬く間に沈没する。船が沈没する時、海面にいる者も一緒に海の底へと引きずり込まれる。到底救助など出来ようもない。

だがこの勝利に、ライティラの心はすぐれなかった。膠着状態を打破する大勝利を挙げ、これで情勢はバルバールに傾く。少なくともバルバール総司令官ディアスはそう考えている。ディアスや他の者達もライティラの功績を認めない訳にはいかない。にもかかわらず、ライティラの胸中にはなぜか敗北感にも似たものがわだかまっていた。

あの時、ランリエルの提督は間違いなくこう言ったのだ。

「勉強になりました」

敵を侮るとまでは言わぬが、敵将を尊敬するなど思いもよらぬライティラは自答した。自分が敗北した時に、同じ言葉を言えるか、と。そして、言えぬだろう。と結論付けた時、自分が何か卑小な存

在の様に感じたのだった。

バルバール艦隊９６隻、ランリエル艦隊１４１隻で行われたこの戦いで、バルバール艦隊からの執拗な追撃を振り切り港に逃げ込む事が出来たランリエル艦艇は２４隻。帰還しえたのは全艦の２割にも満たない。ランリエル艦隊は１１７隻もの艦艇を失った。バルバール艦隊の損害はわずか１９隻だった。

あのままランリエル艦隊が乱戦に突入していれば、倍のバルバール艦艇を撃沈しえただろう。ただしその代償として、ランリエル艦艇は全艦、海の藻屑と消えていた。しかし２４隻残った事により、バルバール海軍の輸送、連絡に確かに障害を与える事になるのだった。

第３４話：突き付けられた幻影

ランリエル艦隊壊滅及びカロージオ提督の戦死の報は、すぐさま国境にあるランリエル軍本陣へと届けられた。それが諸将に伝わると彼らはざわめき、次に激した。

「敵戦力の１．５倍もの戦力を有しながら負けるとはどういう事か！　海軍提督のカロージオとはそれほど無能者であったか！」

「さよう。カロージオはわざわざ敵艦隊と乱戦状態にした挙句、一戦も交える前に撤退したとか。まさに負けに行ったとしか思えません」

「小児でも、もっとマシな指揮をするでしょうな」

陸戦の将軍達は、海軍とそれを率いたカロージオの不甲斐無さに怒りつつも嘲笑した。だが彼らにも間違いはあった。ランリエル艦隊は敵に対し数が１．５倍なのであって戦力が１．５倍なのではない。しかし彼らは戦力として互角と考えていたのだ。

だが兵士と民兵というならともかく、基本兵士同士の質がそこまで変わる事のない陸戦の将軍達に、艦艇の数は１．５倍だが戦力は互角、という認識は持ち得なかった。彼らには数が１．５倍なら戦力も１．５倍。１．５倍の戦力で敵に負けるなど信じられぬ。そうとしか思えなかったのだ。

軍議の席、今後の対策より海軍への罵倒に熱弁を揮い合う諸将の様を、見事な銀細工の鎧に身を包んだサルヴァ王子はじっと見つめていた。その表情は苦々しげだった。徒に海軍への罵倒を繰り返す彼らと違い、王子は両軍の海軍戦力を正しく認識していた。だが今諸将の認識不足を改める事はしなかった。

王子自身艦隊壊滅の状況に驚愕し、改めて戦況を整理するのに意識のすべてを奪われていた。その苦々しい視線の向く先は、彼らではなく己の内側に向いていたのだ。

両海軍の戦力は互角。ならば迎え撃つ側が地の利を得て有利。互角の戦力が地の利を得て守りに徹すればそうそう負ける事はあるまい。奇をてらった訳ではなく、常識的な判断。油断してはいなかった。だが結果的に敵を侮っていた。そう認めざるを得ない。それゆえの自身に対する苦々しい眼差しだった。

バルバール側にしてみれば今回勝ったとはいえ、万一艦隊が壊滅していれば、その打撃は致命的だった。ランリエル、コスティラにと全軍を東西に振り分けているバルバール軍に、もはや海上からの攻撃に備える余力はないのだ。もしランリエル艦隊が勝っていれば、上陸したランリエル軍の行く手を阻む者はない。濡れた紙を突き破るほどの障害も無く王都へと達する。そしてバルバールは滅亡するだろう。

彼らは海戦なら勝算は高いと判断していただろう。だが負けた時のリスクを考えれば軽々と戦いを挑める状況ではない。彼らはそれだけ危険な賭けをしたのだ。だがこの事で王子は二つの事を洞察した。

まず一つは、それだけ危険な賭けをした挙句、その戦果を活かさない訳がない。必ず確保したランリエル王国沖の制海権を駆使し海上からの攻勢をかけてくるという事。

そしてもう一つ……。バルバール軍総司令官フィン・ディアスが、自分の戦略を、バルバールの軍勢を攻めるのではなく王国の財政を

攻めるという策を、それを読んでいるという事だ。本来守勢側ならば攻勢に転じる必要はない。敵が疲労し撤退するまで守りを固めればいい。だが彼らは危険を犯し、負ければ滅亡するしかない海戦を挑んだ。挑まず守りを固めていては負ける。その判断があったのだ。

そしてその上で、こちらはどう動くか……。サルヴァ王子は思考を重ねていたが、不意に皆が静まり返っているのに気づいた。ひとしきり海軍への罵倒と嘲笑を終えた諸将の視線がサルヴァ王子に集中していた。海軍への不満は出尽くし、改めてその対策の軍議を仕切りなおそうと、ランリエル軍総司令官サルヴァ・アルディナの発言を待っているのだ。

王子は、自らの考えに埋没し皆に間抜け面を晒したかと苦笑した。そして取りあえず必要と思われる事を指示する。髪をかき上げながら口を開くそのさまは、幾分間抜け面をさらした事を誤魔化すかの様だった。そして殊更ゆっくりと、なおかつはっきりと言った。

「制海権を得た奴らは、間違いなく海から兵を上陸させてくるだろう。王都から軍勢を派遣し海岸線の防衛に当たらなくてはならない。防衛線構築の検討に入る」

そこに一人の老将が軽く手を挙げ発言した。その鎧は年齢に見合い使い込まれ、濁った光を放っていた。そして鎧よりも澄んだ光を放つ白髪頭を鎧の上に乗せていた。名をコッラーディと言い、指揮能力としては年を重ねた割に平凡という評価だった。だが、年を重ねただけあって思慮は深かった。もっとも、思慮が深すぎるから戦場での対応が遅れるのだという陰口をたたく者も居る。ともかく、せっつく敵もいない軍議の席で、彼はその思慮深さをいかんなく発揮した。

「今回殿下がお示しになった作戦では、全戦力を動員する敵に対し、我が軍は全戦力の半数以下の戦力しか動員せず、その上で対陣を続け、敵を経済的には破綻させる、というものでした。ですが、ランリエル王国沖の海岸線は長い。防衛線をはるとなると今敵と対峙している我らと合わせ、ランリエル全軍が必要となります。我が方の作戦こそが破綻するのではないでしょうか」

サルヴァ王子は、老将の発言に頷いた。まったく持ってその通りだった。敵将ディアスもその事を狙っていると思われる。いや、ディアスはさらにその先を読んでいるに違いない。王子はそう考えつつ、老将に更なる発言を促す。

「確かにお主のいう通りだろう。だがそれでは、この状況にどう対応すべきと考えるのか？」

ランリエル軍においてその軍略を称えられるサルヴァ王子に意見の正しさを認められた。そして、さらに発言を求められたコッラーディは大いに面目を保った。老将は姿勢を正し改めて勇み口を開く。

「海岸線に対しては、もちろんある程度兵力を割かねばなりません。ですが、バルバール軍が海上から攻めるには今われらの目の前にいる軍勢から、兵を割く必要がありましょう。逆に言えばその兵力を割けない状況に敵を追い込めば良いのです」

サルヴァ王子は、老将の発言にその続きまで予測して内心落胆した。いや、落胆するのはお門違いか。自分とて同じ結論にしか達しなかったのだから。そう考えている王子の耳を彼の予測通りの言葉が通り過ぎる。

「ランリエル全軍など必要ありません。後、５万、いや３万ほども

動員しこの国境へと向かわせるのです。そして我らと合わせ8万の軍勢でもって攻勢をかければ、奴らはこの国境に釘付けとなり、海上から軍勢を上陸させる余裕などありますまい」

同数ではない。兵力は倍。だがあの指揮能力に長けたバルバール軍総司令と戦う事になる。王子の体を戦慄が駆け巡る。王子とて自身がバルバールの総司令に劣るとまでは考えてはいない。だがカルデイとの戦いで一つの事を学んでいた。それは自分は万能ではない。という事だった。

現在、バルバール軍総司令を除いて自分を倒しうる者と王子が認める武将は2人。カルデイ帝国のエティエ・ギリスとベルヴァース王国のセデルテ・グレヴィ。とはいえ王子はこの2人に対しても自分が劣るとは思わない。総合的な能力では彼らに引けを取らない。指揮能力なら自分はギリスに勝っているだろう。政略、謀略においてグレヴィは王子の敵ではない。

だがカルデイ王都での決戦で、王子はギリスの優れた洞察力により策を見破られ敗死寸前にまで追い詰められ、グレヴィの冷静な指揮能力によりその窮地を救われた。他で勝ろうとも、敵の特化した能力に敗れる事もあるのだ。

得意とする政略、謀略、戦略を駆使し、敵将ディアスの特化した尋常ならざる指揮能力を発揮させないまま勝利する。その事を王子は計画していた。だが状況はそれを許してくれない。いや、状況がではない。バルバールの総指令がそれを許さず、王子を戦いの舞台に強引に引きずり出そうとしている。

王子は一度目を瞑り、大きく息を吐いた。そして敵将の思惑通りに事が運ぶ屈辱を隠し口を開いた。

「コッラーディの提案を採用しよう。すぐに王都へと急使を出し3万の軍勢を派遣させる。また海岸線には1万の軍勢を手分けさせ守らせよ」

ランリエル全軍の方針を決定する献策を行ったコッラーディは誇らしげな表情を作り、諸将もその深さを称賛する。だが王子はその様を無感動に見つめていた。

軍議の翌日。王都へと増援要請の急使が派遣されたとはいえ、その軍勢はまだ到着していない。その間に対陣するバルバール軍に動きがあった。見張りの兵士からの報告を受けた士官がサルヴァ王子の元へ駆け込んできた。

「バルバール軍の約1万ほどが姿を消しました。昨夜の内に撤退したと思われます！」

その報にサルヴァ王子はすぐさま対策を練る。

「王都からの増援は海岸線への兵を優先させて派遣させるように重ねて伝令を出せ！　そして海岸線に領地を持つ貴族達にも使者をだし、防衛に当たるよう命ぜよ」

敵軍が姿を消したのは海上からの攻撃に兵を割いたに違いない。そう判断した王子は矢継ぎ早に指示を出し、副官のルキノは手分けし伝令を出す。王子はさらに指示を続ける。

「だが王都からの増援は、いくら急いでも今からでは間に合うまい。この陣からも防衛の兵を向かわせよ！　数は1ま……」

王子の覇気ある声は突如中断し、傍に控えるルキノは思わず王子

を凝視した。王子は愕然とした表情で口に手をやりしばらく黙りこんだ。そして動く事を再開したその口は、中断した言葉とは全く別の台詞を吐く。

「バルバール軍の1万は間違いなく撤退しているか再度確認せよ」

その言葉は、落ち着いた声と言えば聞こえは良いが、ルキノには覇気なく感じられた。王子には余程気にかかる事があるらしい。そう判断した彼は、急ぎ見張りを担当する士官の元へと駆けつける。

「サルヴァ殿下からの御命令だ。敵軍が間違いなく撤退しているか確認せよ」

だが王子の命を伝えたルキノに、士官は困惑の表情を向けた。男は、困った様なそれでいてどこか憮然とした表情で言った。

「御命令とあらば改めて敵陣を観察します。ですが、間違いなく撤退しているかと聞かれても、敵陣の向こうまでは見えぬ以上、こちらからは敵の数が減っているとしか分りません」

その言葉にルキノは眉をひそめた。確かにその通りだろうが、命令を遂行するに部下に厳しい王子がこの答えに納得するだろうか。だが確かに敵陣の向こうの事までは分りようがない。一応改めて敵陣を観察させはしたが、結局敵の数が減ったとしか言いようがない、という報告を王子の元へ持って帰るしかなかった。

怒声を浴びせられる事を覚悟し王子の元へと戻ったルキノは、内心のびくつきを隠しながら、幾分緊張した表情で報告した。しかし幸いといって良いのか王子からの怒声はなかった。ルキノの報告に怒声を浴びせる余裕すらない。王子はそれほど自らの思案に没頭し

た。

バルバール軍は本当に海上から攻める為軍勢を割いたのか？　実はこちらの監視の目の届かぬところに潜んでいるのではないのか？

この陣から海岸線防衛の為１万の兵を割けば、国境のランリエル軍は４万。そこに潜んでいたバルバール軍が舞い戻ればバルバール軍も４万。この時を狙って敵が攻勢に出れば、倍の軍勢で戦うどころか互角の戦力で戦う事になる。それに気づいたサルヴァ王子は、改めて敵将の武略に背筋に冷たい物が走るのを感じた。

いや自分は敵を過大評価しているだけかもしれない。敵は単に海上からの攻撃を目論んでいるだけで、自分の考えすぎだ。一瞬そうも考えた。だがそう思うには、ディアスの影は王子の中で大きすぎたのだった。

結局王子の指示は中途半端なものにしかならなかった。ランリエル軍５万の内、１万をバルバール軍の監視からは見えないところまで後退させる。そう指示を出したのだ。この処置により、バルバールには１万の軍勢が海岸線防衛に向かったと敵を牽制できる。そして万一敵軍が国境を攻めてきてもその軍勢を直ちに戻せば互角以上の戦力で戦える。だがこの配置すら敵将は読んでいるのではないか。その疑惑を王子は拭い去る事は出来なかった。

ランリエル軍から１万の軍勢が消えた。その事はバルバール軍もすぐに察知した。本陣の一室でその報告を受けるバルバール軍総司令官ディアスの傍らに立つ従者は、その報告を行った士官が退出するとすぐさま総司令に話しかける。総司令に気軽に話しかける従者というのもあまり褒められたものではないが、当人達は特に気にし

てはいなかった。

総司令としての執務を行う為の椅子に座るディアスにケネスは言った。机も椅子もバルバール王都にある執務室の物とは比べ物にならないほど粗末な物だが、戦場では贅沢など言ってはいられない。

「サルヴァ王子は海岸線防衛に兵を割いたみたいですね。この隙に敵陣を攻めますか？」

その言葉にディアスは机に肘をつき顎に手を添え考えた。だがすぐに従者の問いに答える。

「まあ、今回は海上からの攻撃を行おう。ライティラのおかげで戦いの主導権をランリエルから奪う事には成功したが、一敗すれば滅亡なのは変わらないからね」

「ランリエルはまだ負けても後があるんですか？」

「ああ、一戦してサルヴァ王子を討ち取る、という事が出来れば別だけどね。ランリエルは負けても精々バルバール攻略の失敗だよ。国が滅亡する訳じゃない」

ディアスの言葉にケネスの表情が不満そうに変わる。負ければ滅亡に比べなんと理不尽な、そう思えたのだ。そして先ほどのディアスの言葉を思い出し、改めて口を開いた。

「でも一敗すれば滅亡なのに海上から攻めるという事は、それなら必ず勝てるという事ですか？」

「そうだな。そういう意味では、一敗すれば滅亡は言い過ぎかも知

れないな。海上からの攻撃が失敗してもそれで制海権まで失う訳じゃない。だから負けても致命的な敗北とはならない。だが……海上からの攻撃が失敗すれば打つ手が無くなり、じり貧になるのは確かだね」

「敵は海岸線防衛に1万の兵を派遣しましたけど、やはり敵もそれが分かっているのでしょうか？」

「いや、それがそう簡単な話じゃない」

「簡単な話じゃない？」

ディアスの言葉にケネスは首を傾げた。

「そうだ。さっきお前はランリエル軍が兵を割いたから敵陣を攻めるかと聞いたが、敵が本当に兵を割いたと思うかい？」

「え？　ディアス将軍は違うとおっしゃるんですか？」

ケネスは驚いた声を上げ、その声にディアスは苦笑した。そして幾分いたずらっぽく答える。

「さあ、本当はどうなんだろうねえ」

「どうなんだろう？　えーとそれは……ディアス将軍にも分からないと言う事ですか？」

バルバール軍史上最高の総司令官。そう信じる少年従者はディアスに分からない事などない、そう考えている。その総司令の曖昧な返答に思わずケネスは目を見開いた。

「敵陣の向こうの事はさすがに見えないからね。なんの情報も無しに判断は出来ないよ」

「ですが、敵が本当に兵を割いたのではないなら、何をやっていると言うんです？　まさか……」

「そう。そのまさかさ。敵もこちらから見えないところで軍勢を待機させている。私達と同じくね。もっともさっきも言ったとおり、本当のところは分らない。その可能性があるというだけだ」

「でも、どうして敵はその様な事をするのでしょうか？」

ケネスは次々とディアスに疑問をぶつける。その疑問に答えようと口を開きかけたディアスは、発しようとした言葉を飲み込み一つ苦笑を漏らした。そして少年に人の悪い笑みを向けた。

「お前も人に聞くばかりじゃなく、少しは自分で考えたらどうなんだい？　お前が従者になったのは勉強も兼ねているんだろ？」

その言葉に

「あ！」

と一言漏らしケネスは赤面した。そして必死に頭を巡らす。もっともそう難しい話ではない。何せバルバール軍も同じ事をしているのだ。

「海岸線に兵を派遣したと見せてバルバール軍をけん制し、そして国境では兵を少なく見積もったバルバール軍が攻め込めば、戻ってきて戦いに参加する。という事ですか？」

サルヴァ王子の感じた危惧は不幸にも的中していた。確かに消えたと思っていたバルバールの軍勢は後方に待機していたのだ。だが実際に行われている事はもう少し複雑だった。ディアスは軍勢を二

手に分け、一方を海上に、もう一方を後方に待機させていた。
自信ありげに答えたケネスにディアスも正解と笑顔で応じる。

「そう。その通りだ。もっともこちらが軍勢を隠しているのとは幾分意味合いが違うけどね。向こうは純粋にこちらの動きに対応する為に軍勢を隠している」

正解と認められたと喜んだケネスだったが、ディアスの言葉は気にかかった。バルバール軍はランリエル軍の動きに対応する為に動いているのではないのだろうか？　だが、その疑問を投げかけようとしたケネスは、自分で考えなければならないんだった、と思い直し慌てて口を噤んだ。そして少し考えた後、改めて口を開く。

「バルバールはランリエルの動きに対応する為ではなく、ランリエルの先手を打つ為に軍勢を隠しているという事ですか？」

ケネスの言葉にディアスは頷いた。しかし正解とは言い切れないのか解説を付け加える。

「そう言っても間違いではないが、正確にはそうだな……。こちらが軍勢を隠しているとサルヴァ王子に知らせる為に隠しているんだよ」

ケネスは両手を挙げ降参した。もはや彼にはいくら考えてもディアスの言葉の意味が分からない。降参した従者に苦笑しつつ、総司令は説明を始めたのだった。

第３５話：国境の攻防戦

その翌日、ランリエル王国沖からバルバール軍が上陸した。数は５百ほどだが、広い海岸線の手薄なところを狙って上陸した彼らの行く手を阻むものはなく、近隣の村々や小領主の館などが襲撃された。

サルヴァ王子は海岸線防衛の為軍勢を手配したが、万の軍勢が一朝一夕で整うはずもなくまだ到着していない。防衛を任されているその地域の大領主チェーザリ伯爵は手勢と小領主達を集結させた軍勢１千を率いて駆けつけた。だが、その時はもはやバルバール軍は海賊よろしく略奪品を船に積み海上へと身を逃していた。

「おのれ！　逃げ足の速い奴らめ！」

初老の領主は白髪が増え始めた頭髪を逆立て怒り、地団太を踏んで悔しがった。だが、泳いで追いかける訳にもいかずやむなく引き返す。そしてその報をサルヴァ王子の元へと送った。伝令は襲撃の翌日に国境のランリエル軍本陣へとたどり着いた。

バルバール軍襲撃の報告にサルヴァ王子は考え込む。海上からの襲撃があるもその数は５百。では、やはりバルバール軍の大半は背後に隠れているのだろうか？

バルバール軍は約４万。５百が抜けたところで約４万は約４万のまま。その５百が軍の中核をなす精鋭部隊という訳でなければ、そう戦力が変わる訳ではないのだ。いや、そもそも５百程度の軍勢など、初めから海軍所属の海兵。そうとも考えられる。

だが海上の敵は本当に５百のみだろうか？　５百と見せかけその

実その倍、その１０倍という事もありえるのだ。だが今それを知るすべはない。やむなく王子は、チェーザリ及び海岸線地域の防衛を任されている各領主達に、指示を出すだけに留めた。

「敵が５百以上居る事もありえる。王都からの増援が届くまで、目の前の軍勢の数に惑わされず慎重に対応せよ」

だが王子の懸念は不運にも正しかった。王子からの使者がチェーザリ伯爵の元にたどり着く前に、さらに翌日、入れ替わるようにチェーザリ伯爵の息子からの使者が送られてきたのだ。

「またもバルバール軍は上陸し、警戒していたチェーザリ伯爵はすぐさま打って出ました。こちらの素早い出撃に敵は海上に逃げる事も出来ず逃げ惑うばかり。われらは勇んで追撃を行いましたが、敵に追いつくと思ったその時、さらに２千の敵勢が背後から現れ……。チェーザリ伯爵は討ち死にし、軍勢も壊滅いたしました。防衛する軍勢が居なくなったと見た奴らは、好き放題に暴れ周り……多くの被害が……。無念で御座います……」

使者は唇から血が出るほどかみ締め、呪詛を吐くかの様に声を絞り出した。その言葉に、王子はやはり敵勢は５百ではなかったと考えたが新たな疑惑がある。では、敵は２千５百なのだろうか？　この調子で出撃する敵勢が増えていくたびに頭を悩ますのか？　まさに、いくら考えてもきりがない状態だった。

この状況に王子はある決断をした。その決断とは王都へと要請した増援の到着を待たず国境のバルバール軍に対し攻勢に出るというものである。その為一旦は後方に下げた１万も再度合流させる。敵軍１万が海上になくとも、敵勢４万に対し自軍５万。指揮するのは名将フィン・ディアスといえど優位に戦えるはず。

ここで無理をして勝利を目指す必要はない。優勢に戦いを進める。その事さえ出来れば、彼らは危機を感じ海上へ派遣した軍勢を引き上げさせるだろう。だがサルヴァ王子はもう一つ疑念を持っていた。この攻勢すら敵将ディアスの計画のうちなのではないか？

翌日、今まで息を潜めていたランリエル軍5万は、国境を守るバルバール軍3万に対し攻勢に転じた。険しい山岳地帯である国境、しかも斜面に位置する堅牢な陣地を攻める戦いに騎兵はその出番を失い、戦いは弓兵が主役となった。

守るバルバール軍は守勢の利点である堅牢な陣地に身を隠しながら矢を射り、攻めるランリエル軍は歩兵が持つ楯に身を隠しながらその数にものをいわせ多くの矢を射った。

元々ランリエル軍の方が数が多いのに重ね、ランリエル軍は長大なバルバール陣地の数か所に戦力を集中させている。だが陣地を空に出来ないバルバール軍は、敵が攻めてこない箇所にも守兵を置かざる得ない。その為それぞれの戦場の戦力差は数倍となっていた。

双方身を隠しながらの矢合戦に、時折その防御の隙間を縫った矢に射られ兵士が血に染まる。本来矢合戦なら、高所を占め打ち下ろすバルバール軍が有利である。だがやはり数の差が出た。長大なバルバール軍の陣地の、ランリエルから見て右翼、バルバールから見て左翼の箇所の矢勢が衰え始めた。

「殿下今です！　予備兵力をあの箇所に投入させましょう。敵陣内へ突入できれば敵の防衛体制は崩れます。勝利は間違いありせぬ！」

「さよう。陣地内から敵の弓兵に切りかかれば敵陣からの矢の雨はやみます。その間にさらに軍勢を突撃させれば、敵陣は崩壊しまし

ょう」

幕僚達はいきり立ち血走った目で進言したが、彼らの熱情に反しサルヴァ王子は冷静に戦況を眺めていた。

バルバール軍本陣ではディアスが、サルヴァ王子と同じく冷静に戦況を眺めていた。

どうやらランリエル軍はこちらの誘いには乗らない様である。敵軍があの箇所から陣地内に突入すれば、後方に隠していた騎兵がその後方を遮断し、突入してしてきた敵兵を一網打尽にするはずだった。その為騎兵が突入し易いようにと、巧みに隠されて入るがわざわざ後方からあの場所まで整地を行っていたのだ。

もちろん以前よりディアスが考えていた、攻勢にでるサルヴァ王子への対応策の一部である。サルヴァ王子が戦おうとしない為一旦は紙屑と化したそれらの作戦案だったが、やっと日の目を見たのだ。だが、やはり王子にはかわされた。そう考えたディアスだったが、その顔に落胆の色はない。

勝利に向けての万全の準備としてそれを行ってはいるが、そのすべてが活かされるとはディアスも思ってはいない。戦いは長く敵はこれまでにない強敵である。策の一つや二つ見破られて当然だった。

だが……と、敵将の思考を追ったディアスは、おそらく正しいだろうと思われる敵将の意図を察すると、小さく舌打ちを漏らした。その舌打ちを耳に引っ掛けたケネスが、舌打ちの主へと顔を向けた。

「どうなさったのですか？　わざと隙を見せた箇所を除けば、戦況

はそう悪くないと思いますけど」

ディアスはその問いかけに両手を組み合わせ裏返しにして伸ばしながら答える。その伸ばされた手の平からパキパキと音が鳴った。

「そりゃあ、戦況は悪くならないさ。サルヴァ王子は勝つ気が無いみたいだからね」

「勝つ気が無い？」

「ああ、その通り。こちらは敵を誘い出す為に擬態とはいえ劣勢を演じているが、やはりその時に多少なりとも被害が出る。それなのに敵に勝つ気が無く誘いに乗ってくれないんじゃ、こちらは無駄に被害を出しているだけだな」

「そんな……。じゃあこちらも、敵を誘い出そうとする事を諦め、純粋に防衛に徹するしかないという事ですか？　でも、攻めて来たにもかかわらず勝とうとしないなんて……」

自分で考えて答えを出そう。そう考えているケネスだったが、名将同士の戦いに思考が追いつかず、結局はディアスに問いかけるしかなかった。そしてもはやディアスもケネスに自分で考えろとは言わず答えを明かす。

「国境の我が軍を圧迫する事により、海上に派遣した軍勢を引き上げさせようと言うんだろう。攻勢に出てはいるとはいえ、長期対陣によるこちらへの軍事費の圧迫も続ける積りみたいだしね。それには精々互角の戦いをすればいい。さらに言えば元々ランリエル軍の方が数は多いんだ。互角に戦っていては先にこっちが消滅してしまう。しかも実際は向こうがやや優勢だ」

「まさかディアス将軍と戦って優勢に戦いを進めるなんて……」

指揮能力なら誰にも負けない、そう信じる上官の、自分達が劣勢という言葉にケネスは愕然とした。だがその言葉にディアスは苦笑して答えた。

「言い訳をする様だが、さすがに矢合戦のみに徹せられては軍勢の数の差しか出ないよ」

「そういうものなのですか？　ですがそれだったら多勢で攻める側は常に矢合戦のみに専念すれば良いという事になりませんか？」

将来の名将たらんとする少年用兵家の素直な言葉に、現在名将の中年用兵家は思わず苦笑した。

「理屈としては確かにそうなるが、陣地に籠った3万の軍勢を倒すのに矢合戦のみで壊滅させようとしたら、攻める側だって相当な被害を出してしまう。とてもじゃないが出来ないよ。通常は守勢の勢いが衰えればそこから軍勢を突入させる。その方が被害が少なくて済むからね。それを突入をせずに矢合戦のみを続けられては劣勢は免れない。たとえ相手がサルヴァ王子じゃなくてもね」

「じゃあ、もし敵将がシルヴェンでもですか？」

ケネスにとっては無能な将軍といえば真っ先に思い浮かんだ名前なのだが、シルヴェンに負ける自分というものを想像したディアスは、嫌なたとえをするものだと、幾分不愉快になり、無言で頷いた。そしてその不愉快な気分を敵将にぶつけた。

「しかしどうせこっちを劣勢にさせるなら、もっと派手にやって欲しいものだよ。そうじゃないと後方に隠した軍勢の出番が無い」

その言葉にケネスは驚いてすぐさま問い返す。

「せっかく隠した軍勢を敵に見せたいんですか？」

「当たり前だろ？　隠し切った軍勢など敵にとっては居ないのと同じだ。姿は見せるさ。ただしすべては見せない。一部を見せる。今ランリエル軍からは1万の我が軍が姿を消している。いや海上からは2千5百が出撃しているから残り7千5百。サルヴァ王子は今その7千5百がどこにいるかに頭を悩ませているはずだ。そこに国境にも軍勢を登場させる、ただしその一部だけだ。じゃあその残りはどこに居る？　海か？　陸か？　しかも軍勢は移動させる事が出来る。結局王子は海と陸両方に、1万の軍勢があるとして対応せざるを得なくなるのさ」

「なるほど……」

ケネスは、先ほどディアスが劣勢に立たされたと聞き愕然としたことも忘れ、改めて総司令に尊敬の眼差しを送る。だがその眼差しを向けられた男の顔に苦々しいものが浮かんでいた。

「その為には、陸にも兵を隠していたと印象付ける、その出番が欲しいんだ。今のままではその出番を失う。単に敵に優勢な戦いを続けさせる事になる。今はまだ隠した軍勢を出すほどではない。だが兵は消耗していく。あまり良くない状況だよ」

だがそうは言うものの、サルヴァ王子はバルバール軍が陸にも軍勢を隠している事など、すでに察しているだろう。そうも考えるディアスだった。だが確証は無い。確証無き事に状況を任せるなど現実主義者としての彼の主義に反した。そして決断を下す。

「仕方が無い。少し攻勢に出てみようか」

守りに徹するはずのバルバール軍総司令官の言葉に、従者は唖然とした。

ほころび始めているバルバール軍左翼の反対側。右翼からのバルバール軍の攻撃が開始された。

だが戦いは各所で行われている。右翼も激しい矢の応酬がなされ、軽率に突入できる状態ではない。そこでディアスは軍勢の突撃に先立ちバルバール軍陣地から、巨大な丸太を落とさせた。本来敵が陣地間際まで攻め寄せて来た時に、その敵を押しつぶす為準備されていた物である。

丸太はランリエル軍に向かい怒号を立て斜面を転がり落ちた。その様は下敷きになれば圧死する事を兵士達に想像させるには十分だった。

「丸太か！」

敵陣からの思いもよらぬ攻撃に、ランリエル軍兵士達はあせりの声を上げた。だが、敵陣間際まで攻め寄せているならともかく、距離を置いての矢合戦である。丸太がランリエル軍に到達する前に、敵弓兵は丸太の転がる先から逃げ出している。

だがその間にバルバール槍兵は陣地から出て、丸太を追いかける様にして突撃を開始していた。そして丸太を避け安心しきっていた彼らの間近にまで、すでに迫っていた。

ランリエル弓兵はあわてて弓に矢をかけるが、ランリエル槍兵の突入までに矢を射る事が出来た者はわずか。至近距離の戦いでその長所を失った弓兵達は次々と槍の穂先の餌食となる。

矢合戦の楯の役割を担っていたランリエル歩兵もあわてて応戦するが、丸太突入による陣形の乱れから効果的な反撃が出来ない。しかも逃げ惑う味方弓兵の為さらに混乱した。

味方左翼崩壊の危機に本陣へと救援依頼の使者が出された。その報に先ほどまで右翼から攻勢をかけるべき。そう勇ましく主張していた幕僚達の顔色は蒼白となった。

「すぐさま左翼へ援軍を、このままでは左翼の動揺が全軍に広がります！」

「さよう。そうすれば戦線は崩壊しこの本陣も危険となりましょう」

幕僚達の悲観的な意見が飛び交う中、そこにサルヴァ王子配下のムウリ将軍が口を開いた。王子の幕僚の中でも冷静沈着な指揮に定評のある男である。

「出撃した敵右翼を壊滅させる事が出来れば、逆にこちらにとって好機。敵は斜面を駆け下りる勢いを利用し攻勢に出ておりますが、撤退するにはそれが足かせになります。敵を本陣手前まで引き付け、そこで予備兵力を投入し迎撃いたしましょう」

「ああ。そうしよう」

ムウリの発言の正しさにサルヴァ王子は頷き、短く答えた。まさに王子自身そうすべきと考えていたところだったのだ。そして予備兵力に迎撃の準備を整えさせると共に、各戦線へは味方左翼の撤退

は作戦の内と報告させた。他の戦線の動揺を抑える為の処置である。

逃げ惑うランリエル弓兵を追いバルバール槍兵は敵本陣を目指した。逃げ惑う敵と共に突入すれば、その動揺はすぐさま他の兵士にも広がる。勝敗は早々に決するはずだった。だが敵本陣前の比較的平坦な場所まで進軍した時、そこでランリエル騎兵が襲いかかった。

騎兵にとって、槍衾を作る槍兵の列に突入するなど自殺行為。だがバルバール槍兵は、敵を猛追していた為その隊列を乱していた。敵騎兵の突入をいともたやすく許してしまったのだ。

両軍は、追う側、逃げる側、先ほどまでの役割を入れ替え戦う。バルバール槍兵は懸命に逃げ、平坦な個所を抜け出し斜面までたどり着いたが、そこで足が鈍る。長大な槍を持ちながら斜面を昇るのは思いのほか困難だった。しかも後ろから敵が迫っている。敵に背は向けられぬ。だが後ろ向きに昇るには困難な急斜面。バルバール槍兵進退きわまりこの場で全兵討ち死にするしかないかと思われた。

だがそこに突如バルバール陣地とは別の方面からバルバール騎兵が姿を現す。その騎兵は急斜面を駆け下りランリエル騎兵に突入する。激しい戦闘が開始されたが、斜面を駆け下り突入したバルバール騎兵が勢いにおいて勝った。

バルバールの予備兵力が投入された。この報告にサルヴァ王子はすぐさま指示をだす。

「その予備兵力の兵数を確認せよ。正確にだ！」

本陣で椅子に座ったまま鋭い視線で命じる王子に、命ぜられた副官のルキノはすぐさま偵察の兵士を複数だした。そして各自報告された数について誤差を検討し報告する。

「敵予備兵力はおよそ４千です」

「４千か……」

ルキノの報告に王子は短く呟いた。予想通りバルバール軍は軍勢を隠していた。だがこの４千がすべてだろうか？　他にも隠している可能性はあるのか。他にもあるとしてどうすればそれを炙り出せるのか？

ランリエルとてまだ予備兵力は残している。左翼の戦いにさらにそれを投入すれば、敵はそのすべてを見せるのか？　敵にまだ予備兵力があった場合、左翼での戦いはお互い予備兵力を出し切っての総力戦となる。しかも仕掛けてきたのはバルバール側。コスティラ相手に国境の防衛線を戦い続けてきた彼らである。その戦いは敵に一日の長がある。ここで無理をすべきではないかも知れない……。

その時王子は不意にある事が気にかかった。そしてそれを副官に問う。

「右翼で敵の矢勢が衰えていた箇所があったな。その方面の状況は今どうなっている？」

各戦線からは王子がすぐさま指示を出せる様にと、戦況が変わるたびに使者が送られてきている。ルキノは右翼からの報告の使者を王子の前に引き出した。

「は！　一時は勢いを失った敵でしたが、今は勢いを取り戻しつつあります」

使者は王子の前に跪き幾分緊張し答えた。その答えに王子は重ねて問いかける。

「敵は勢いを取り戻しつつあるというが、こちらの攻撃の手を休ませたのでは無いだろうな？」

重ねられた問いに使者は慌てて言う。

「敵の勢いが衰えたなら、さらなる猛攻を加えるのが常道。ましてや攻撃の手を休めるなど――」

「分かった」

王子は使者の言葉を、軽く手をあげ遮ると考え込んだ。王子の前で放置された状況となった使者は、王子の御前から下がる事も出来ず居心地悪そうに跪き続ける。だが王子はそれに構わず自身の思考に没頭した。

単純に敵の増援が来たとも考えられるが、それにしては簡単に回復しすぎる。これはそもそもがわざと劣勢を演じたという事ではないのか？　なぜその様な事をするのか？　我が軍をおびき寄せる為としか考えられない。だがその敵が勢いを回復しつつあるとすると……。

王子は突然椅子から立ち上がった。そして目の前で跪き続けていた使者に命じる。

「敵の勢いが完全に回復する前に、右翼をそこから突入させよ！既に敵の勢いが回復しているなら不要だ。急げ！」

使者はその命令に転がり出る様に本陣を後にした。ランリエル軍を誘き寄せ様としていた箇所がその口を閉じるという事は、誘き寄せては危険な状況に変わったという事だ。敵は右翼での戦いの為に隠していた予備兵力を、左翼への戦いに移したと推測出来る。それ

ゆえ今こそ右翼に突入させるべきだ。そして左翼は徐々に後退させる。

だが王子にもまだ迷いはあった。バルバール軍の予備兵力が４千以外にもいるのではないか？　と、いうのがその迷いの元だった。結局王子は残存する予備兵力を本陣に留めざるを得ない。

もし右翼の戦いにこちらの予備兵力のすべても参加させ、左翼にまだバルバールの予備兵力が隠れていた場合、さらに敵が予備兵力を投入し左翼を攻撃すればそれを救う軍勢は最早ない。そして左翼を破った敵軍は本陣に迫り窮地に陥る。それに備える為、王子は本陣の予備兵力を手元に置いておくしかなかったのだった。

「そっちに来たか」

隠した兵士の一部を効果的に見せる事に成功したディアスだったが、それ以外については思い通りに事が運ばず、思わず舌打ちしつつ言った。ディアスはまだ兵を隠してはいるが、そのすべてを見せる積りはなかった。所在不明の兵力の存在が、さらに敵を不安にさせる。その効果を狙っての事である。

だがバルバール軍右翼の戦いに、ランリエル軍がさらに増援を派遣すればそれには対応せざるを得ない。その為隠した兵力は右翼の後ろに移動させていたのだ。

だがランリエル軍はその右翼ではなく、敵を誘い込もうとしてわざと劣勢を演じさせていた左翼に、今頃になって攻勢をかけてきた。左翼は体制を整えつつあったが、完全に整う前の突如の猛攻に演技

ではなく事実として劣勢に追い込まれた。このままでは敵に陣地内への侵入を許し、全線崩壊の危機に陥る。

「右翼の状況はどうなっている？」

ディアスは内心の焦りを隠し、近くにいた士官に落ち着いた声で問いかけた。先ほどはつい舌打ちしたが、不要に他の者を不安にさせても仕方がない。その士官は総司令の落ち着いた声に、感染したかの様に落ち着いて答えた。

「我が軍右翼は、予備兵力の突撃で敵を食い止めている間に体制を立て直し、整然と後退を開始しております」

「分かった。右翼の撤退が完了すれば突撃させた予備兵力もすぐに撤退させるように。もし敵が追いかけてくれれば、もう一度陣地から丸太を落とせ。それで足止めできる」

ディアスはそう指令をだし、現在まだ隠したままの右翼後方の予備兵力を左翼へと移動させよと重ねて命じた。本来この兵力は敵が追撃してきた時、丸太を落とすのと呼応し再度突撃させる為のものだった。そうなれば敵に大きな被害を与えられる。だが状況はそこまでの欲張りを許さない。その予備兵力は左翼の危機にまわさざるを得なくなった。

結局、バルバール軍左翼、ランリエル軍右翼の戦いは、バルバール軍予備兵力2千の到着にランリエル軍は突入を断念した。バルバール軍にしてみれば本来敵を誘い込むはずの戦場だったが、演技による劣勢の仮面がはがされた今、それを行う余裕は無く純粋に防衛に徹するしかなかったのだ。

そして、バルバール軍右翼、ランリエル軍左翼の戦いはランリエル軍からの追撃は行われず、そのまま収束した。

この戦いによる両軍の損害は、激戦が行われたにも関わらず双方の総司令官が適切な対応をとった為大きなものにはならなかった。だが、バルバール軍総司令フィン・ディアスの思惑は破られ、バルバール軍は後方に隠した予備兵力全兵の姿を見せる事になったのだった。

第３６話：焦土

先日の戦いで秘匿しようとしていた軍勢を、サルヴァ王子によりすべてさらけ出されたディアスだったが、その事に悲観はしていなかった。確かに今回すべての軍勢を見せた。あの状況ではバルバール軍に余裕はなく、さらに軍勢を隠しているとは王子も考えないだろう。だが結局軍勢は動かせるのだ。

もちろん、どれだけ隠しているか分からない。その事による心理的効果が半減した事を認めない訳には行かない。だが致命的ではない。

ディアスは一旦はさらけだした軍勢を改めて後方に隠した。現在のバルバール軍の配置は、国境陣地に３万。その後方に６千。海上に４千である。ただし海軍は元々２千の海兵隊を有している。合計すれば海上の全戦力は６千。ディアスは今回あえてその配置を変えない事にした。

サルヴァ王子との戦いは高度な読み合いとなる。その次元においては、動かない。というのも大きな一手となる。相手は何か手を打ってくるに違いない。だがその実動いていない。それがサルヴァ王子を惑わせるのだ。

海上からの攻撃はさらに激しくする予定だ。ランリエル軍に海上防衛の兵を回させれば回させるほど、ランリエル王国の財政にも負担となる。全兵出兵により財政が逼迫しているバルバールは、そうやってランリエルにも同じ苦しみを与えなければならない。

ディアスは自ら海上攻撃の指揮を取る為、カルナ港に駐留するラ

イティラ率いるバルバール艦隊の元へと向かう事にした。幕僚の大半を国境陣地に残し、指示を与える。

「敵が矢合戦のみに終始しても耐えるんだ。我が軍からは打って出るな。こちらが耐えきれず打って出れば、敵は必ず待ち構えている。みすみす敵の手に乗る事はない。なに敵の方が数が多いのは今のうちだけだ」

全軍動員すれば１３万を擁するランリエル軍に対し、国境には４万しか動員しえぬバルバール軍が数で勝つ？　わが耳を疑う諸将を尻目に、人の悪い総指令はその説明をしようとはせず、早々に背を向けその場を立ち去った。

軍勢を引きつれずディアスと猛将グレイス数人の幕僚。そしてそれらの従者達。それらの少人数の一行はカルナ港へと向かう。前回カルナ港に行った時はライティラへの要請だけだった為、ディアスと従者のケネス。そして数名の護衛という人選だった。だが今回はディアスの指揮で上陸作戦を行う事になる。その為数人の幕僚も同行するのだ。

その中にはなんとシルヴェンも含まれていた。長期陣を空ける事になる。その時ディアスが不在なのをいい事に、シルヴェンがその血統を盾に騒ぎたて、出撃などされてはたまったものではない。気が進まないが同行させるしかなかったのだった。

道中、ディアスが乗る馬の轡を引きながら、その従者が問いかける。

「ランリエル軍に数で勝てるようになるって、本当ですか？」

未来の名将たらんとする少年にとっては、興味津々の話題である。是が非でも聞き出さなくてはならない。だが現在進行形の名将は素直な性格とは程遠い。

「なに、ああ言っておいた方が先に希望が持てて、自暴自棄にならなくて済むだろ？」

そう言ってはぐらかし、結局ケネスが何度問いかけようがそれに答える事はなかった。

そしてカルナ港に到着した一行は時を置かずライティラと面会する。ディアスは通された臨時の海軍本部の一室で進められた椅子に座った。以前会った時と同じ部屋だ。その左右に幕僚達も座り、その後ろにそれぞれの従者が立った。

しばらく待たされた後、太陽と潮風で肌を黒く焼いた海軍提督が現れた。だが再会を喜び談笑する間柄でもない。ディアスは、ライティラが向かいに座ると早速本題に入った。

「ライティラ提督のおかげでランリエル王国沖の制海権を奪う事が出来た。海上からの攻撃に敵も大慌てだ。これで膠着していた戦線は動き出した。だがその動きを、こちらの笛の音に合わせて踊らさせなければ意味がない。その為海上攻撃の指揮は私が執る。提督には兵員の輸送をお願いしたい」

「それは構いません。その為の海軍ですから。ですが、総指令の事ですから色々と作戦をお持ちでしょうが、始めに言っておかなくてはならない事があります。確かに海戦には勝利しましたが、制海権を完全に制したかと言えば残念ながらそうではありません。総指令の御注文に応じかねる事もあると、覚えておいて下さい」

総指令相手に一提督が「覚えておいて下さい」とは、なかなか居丈高な言葉だ。

言っている事は正しいのだが、他にも言い方があるだろうと思えるライティラの言葉に、グレイスら幕僚達の椅子が軋んだ音をたてた。彼らは激し、ライティラへと飛びかかりかけたのだ。それをかろうじて抑え込めたのは、前もってディアスから、海軍提督の言葉遣いは気にするな。と忠告されていたからだった。

ディアスはライティラの言葉づかいを気にしない風に、平然と口を開いた。

「敵艦隊は2割以下の艦艇しか残らない大勝だったと聞いたが、それでも制海権を確保しきれないものなのか？」

総指令とはいえ陸戦の専門家であるディアスにとって、そこまで敵が激減していれば制圧したも同然と思えた。もちろん、陸戦でも小勢で奇襲などを行い大きな働きをする事は出来る。だが、広く辺りを見渡せる海上では奇襲は出来ない、とはライティラ自身の言葉である。ディアスがその事を言うと、ライティラはだからこそと説明を始めた。

「辺りを見渡せるという事は、我々がランリエル王国沖を航行すれば敵にすぐさま知られるという事です。そして兵員を満載した輸送船の足は亀の様に遅い。そのランリエルの残存艦隊以下の戦力で航行すれば、たちまち餌食になりますよ。もちろん輸送船を見捨てて良いのなら、逃げられますが」

ライティラの説明にディアスも、なるほど、と頷いた。しかし、

だが……と疑問も残る。ディアスは海軍提督に探る様な視線を向ける。

「あえてその敵艦隊以下の戦力で航行し誘き寄せて、それを改めて壊滅させる事は出来ないのか？」

ライティラは目を瞑り俯き加減でゆっくりと首を振った。そして顔をあげディアスに目を向け言った。

「あの戦いを生き残っただけあって、その２４隻は他のランリエル艦艇と違います。我が艦隊にそう引けを取るものではありません。実は先日、油断し単独航行していた１隻の艦艇がその２４隻に追い縋られ、逃げきれず沈められました。たとえ誘き寄せる事に成功したとしても、こちらが追い付くまでにどこかの港に逃げ込まれます。そして日が暮れて我が方が引き揚げれば、翌早朝には別の港へと移動するでしょう」

ライティラの説明に確かに難敵だとディアスも理解した。そして、常では敵を軽視する事の多いこの男の、その声の響きにどこか敵を称賛するものを感じた。思わずディアスがライティラの目に視線を合わせると、ライティラは目を逸す。

「男と見つめ合う趣味はありませんな。とにかく海戦を生き残ったこちらの艦艇は７７隻。そして先日１隻沈められ残りは７６隻です。ランリエル艦隊２４隻への備えを考えれば、別々の場所に上陸させられるのは３ヶ所までとお考え下さい」

その言葉にディアスの表情が険しくなる。３ヶ所とはいかにも少ない。時には１０ヶ所を超える地点で上陸を行い、敵がそれに対応し戦力を分散させればこちらは集結し、各個撃破する。ディアスはその様な策を計画していたのだ。

せっかくランリエル艦隊を撃破し制海権を得たと思ったら、まさかこの様な足枷があるとは。敵もなかなか一筋縄ではいかせてくれないらしい。だが感心ばかりもしていられない。ライティラと改めて検討した結果。多少の時間差は出るが、3艦隊それぞれが2ヶ所分の軍勢を輸送する事は可能だろうという結論になった。つまり6ヶ所への上陸が可能という事だ。

「もう少し、どうにかならないか？」

6と10とでは大違いと、ディアスは未練たらしく食い下がった。しかしライティラは冷やかな目を向け、言い放つ。

「下ろすだけならば何ヶ所にでも下ろします。ですが、それをすべて乗船させるのは困難です。帰りは泳いで頂く事になりますが、よろしいですか？」

こうまで言われてはディアスも引き下がらざるを得ない。ディアスは最大6ヶ所と限定されながらも、ランリエル王国沖からの上陸作戦を開始した。

まず5百兵を3ヶ所から上陸させた。最大6ヶ所上陸可能とはいえ、初めから手の内すべてを見せる事はない。前回チェーザリ伯爵が討たれた事から伏兵を警戒したのか、ランリエル側からの迎撃はなかった。

それらの軍勢は近隣の村や港を襲い火つ。多くの民家や施設が燃え、民衆は逃げまどう。そしてもぬけの殻となったところを思うままに略奪する。

抵抗するならともかく、基本民衆には手をかけない様に厳命してある。バルバールの民より他国の民の命を優先させるなど、バルバール軍にとって存在意義の否定。そう断じるディアスだったが、殺戮趣味がある訳ではない。

もっともこれには、さらに現実的な意味がある。それは死体は物を食わない。という事だった。長期的にランリエルの国力を奪うなら、民を害す必要がある。しかし今必要なのは短期間でランリエルの財政を悪化させる事だった。

多くの流民を発生させ、残された食料を奪う。ランリエルは彼らに食糧を提供しなければならない。1万の流民は1万の兵士と同じだけ飯を食うのだ。攻城にて敵城を兵糧攻めする時にも使われる手だが、ディアスはそれを国家規模で行う積りだった。

もちろん話を単純化しただけで、流民には女子供も混じっている。それらが兵士と同じだけ食う訳ではないだろう。だが海岸線の村々からでる流民の数は膨大となる。それを養うには莫大な金額が必要となるはずだ。ランリエルの財政に全軍を動員する以上の負担となる。

しかしそれにはもう少し時がかかる。流民はまず近隣の縁者を頼る。そして次にその土地の領主。国に泣き付くのは最後となる。しかし最後になるがゆえに、その時には差し迫った状況となっている。他に食わせる者はいないのだ。

だがディアスはサルヴァ王子をある意味、信頼していた。そうなる前に危険性に気づくはず。そしてその危険を排除する為には、国境に配した軍勢以外のランリエル全軍を海岸線に張り付かせる必要がある。

それがディアスの狙いだった。

翌日も上陸作戦を行った。

国境の本隊からは、ランリエル軍による攻撃が開始されたとの狼煙が上がっている。海沿いの村が襲われたと報告を受けた王子が、また牽制の為に出撃したのだろう。だがそれは無視した。

国境が危険とはまだ言って来てはいない。戻るならその時だった。危険と言われてから戻っても、どう急いでも丸一日以上はかかる。間に合わないかもしれない。だが危険を侵さず安全策を取れる状況ではないのだ。

上陸地点は昨日と同じく3ヶ所。そして場所も同じだった。焼け払われた民家を健気にも立てなそうとする人々がいた。それらを再度追い払い、わずかに焼け残っていた民家を残らず焼き払う。

立て直しかけられていた家も焼いた。建造物はすべて消え去った。遠くから見れば、村など初めからなかったのだ。そう見えるかもしれない。

戦争が終わるまで村には帰れない。バルバール軍は声によらず、行動によってそれを宣言した。あまりにもひどい仕打ちなのは、命じたディアスが一番よく分かっていた。

だがそもそも攻めてきたのはランリエルだ。そして、これをせねばバルバールの民がランリエル軍に蹂躙される。

世の中には、自分の大事なものを犠牲にしてまで、他者にとって大事なものを守るという奇人が居る。世の中では、そういう輩を聖人とか賢人と呼ぶらしい。嘘だ、とディアスは思う。

ミュエルと他の男の恋人。どちらの命を助けるかと問われれば、答える事すら馬鹿馬鹿しく、鼻で笑うだろう。他の人間だって自分の愛する人を優先させるに決まっている。人は大事な者を捨てる事など出来ない。

それでも、他の者を優先させられるというのなら、大事に思っているというその言葉が嘘なのだ。

さもなくば、その大事な者より、自分が聖人、賢人と呼ばれる事の方が大事なのだろう。それならば逆に正直な奴だ。ディアスはそう思う。

ディアスは、バルバール軍総司令官となった時、バルバール王国とその民衆を守ると、そう決めた。他国の民より、バルバールの民の方が大事だった。

ディアスとその幕僚達は軍勢を指揮する為、百名程度で海岸に上陸していた。もちろん敵襲があればすぐに乗船できるように手配してある。シルヴェンは理由を付けて船上に置いてきた。

そこに、3ヶ所に上陸した部隊の一つに、近隣領主の軍勢が接近してくると報告があった。数は2百。こちらを小勢とみて侮った訳ではなさそうだった。

おそらく、焼け出された領民の姿に、見るに見かねて飛び出したに違いない。彼らは、領民を害したバルバール軍に対し、怒りの業

火で身と心を燃やしている。2百全員が死兵と化し、文字通り火の玉となりぶつかってくる。まともに相手をしては多くの被害が出ると予想出来た。

「領主勢が接近してくる部隊を引かせよう。その他の部隊は急行し、追いかけてくる領主勢の両側面から挟みこめ。引かせた隊はその時に反転。敵を包囲するんだ」

「相変わらず慎重ですな。2百程度の敵、5百で十分倒せるでしょうに」

猛将グレイスは、そう言って豪快に笑った。確かにその通りだ。率いているのは、敵中深く入り込んでの上陸作戦の為、選りすぐんだ兵士達だ。みな肝が座っていて、死兵と化した敵にも臆することなく戦い。そして勝つだろう。

「まあ、戦いは何があるか分からないからね。用心するに越した事はないよ」

ディアスはいつもの口調で言った。その表情も特に気負いなく普段通りだった。

グレイスはまた
「相変わらずですな」
そう言って笑う。別にディアスを軽視している訳ではない。彼はディアスを信頼している。心から「相変わらず」そう思っているだけの事なのだ。

領主勢2百を1千5百で囲み、槍衾を作り近寄らさせず矢で仕留めた。領主勢はバルバール軍に対し一矢報いる事すらできず全滅し

た。誰一人降服はしなかった。

敵の意気に感じ入り、軍勢をまともにぶつけて雌雄を決する。などという考えはディアスにはない。それをやって死ぬのはディアスではなく、バルバール軍将兵だ。領主勢より、バルバール軍将兵の方が大事なのだ。

そして、ついにランリエル王都から海岸線防衛の軍勢が到着した。その数1万。バルバール軍の6千を大きく上回る。だがバルバール軍を率いるは、歴代総司令官最高の名将と呼ばれるフィン・ディアスである。バルバール艦隊旗艦の指令室で、猛将グレイスを始め諸将は勇み、声をあげる。

「1万程度で我が軍を抑えられると思っておるのか！」

「あの援軍を壊滅させれば、海岸線はまた暴れ放題。腕が鳴ります」

彼らの発言にディアスは、危うい。そう思った。ほとんど無抵抗の民を相手の戦いに、気が大きくなっている。いや、それだけではなく自分への信頼も大きく加味されているのだろうが、本来の目的を見失っている。

「いや、その軍勢とは戦わない。戦う必要がない」

「必要が無いとはどういう事です！　敵は向かって来ているのですぞ！」

ディアスの言葉にグレイスが激す。普段ディアスに信頼を置き噛み付く事のない男が吠えた。領主勢に快勝した事で気が高ぶっているのだろう。

ディアスとて敵勢を倒せる絶好の機会があれば戦う積りはある。こちらの動きに敵が翻弄され兵力を分散させれば、その時こそこちらは集結しそれを打つ。

だが1万に対し6千で攻撃を仕掛ける気は毛頭ない。本来の目的は戦う事ではなく、あくまでランリエル経済への打撃。避けられる戦いは避けるべきだった。

「われわれの目的は海岸線撹乱による、敵財政への打撃だ。敵勢を討つ事が目的じゃあない。ランリエルのサルヴァ王子が我が国相手に戦わずにやろうとしていた事だ。それに対抗するにはこちらも同じ事をする必要がある」

「しかし敵勢を打ち破れば、それも易くなるではないか！」

シルヴェンが突然口を挟んできた。皆が、ディアスへの信頼を根拠に出撃を叫んでいた時は黙っていたのだが、グレイスがディアスに牙を剥いた事に加勢するつもりらしい。

ディアスは、またか。と思いながらも、いつもどおり辛抱強くそれに反論する。

「もちろんそうだ。しかし敵勢を打ち破らなくては不可能という事ではない。戦わないと目的を達成出来ないというならともかく、戦わずとも出来るのなら危険は冒せない」

シルヴェンはディアスを睨みつけたが、彼と睨み合っても仕方がないとディアスは目を逸らした。すると他の幕僚達が少し冷静になっている様子が見える。

シルヴェンは軍議で、常に愚にもつかない発言をする事で有名だった。その男が自分達と同じ主張をしだした事により、彼らは血の酩酊から酔いが醒めたらしい。

その後、冷静になったグレイスら幕僚達もディアスの主張を素直に受け入れ、ランリエルの援軍を避けて上陸作戦を続ける事に同意した。ある意味シルヴェンのお陰だった。人は使いよう。ディアスは改めて思った。

ランリエル軍を避けての上陸作戦が続けられた。とはいっても1万の援軍はひと塊りにはならず3つに分散し各地を守った。ただし各地の領主勢と合流し、その数はそれぞれが5千から6千程度となっている。やはり戦いは避けるべきだ。

海岸線は長い。それらの軍勢を避けても十分上陸は出来たが、ランリエル側も手を打ってきた。バルバール軍が村に到着するとすでにもぬけの殻になっている事が多くなったのだ。バルバール軍に襲撃される前に住民を避難させたらしい。

「まったく、これでは作戦は失敗ですかな」

シルヴェンはそう言ってディアスを糾弾したがディアスは取り合わない。ディアスの目的は大量の流民を発生させる事だ。バルバール軍を警戒し、自分達が襲わない町や村の者達まで避難させるというなら、願ってもない事だった。その時あるだけの食料を持ち出すだろうが、それにも限りはある。戦争中それで賄える訳もない。いずれ食う物は無くなる。

空になっている町や村にも火をかけて焦土と化した。住民さえ逃がせばバルバール軍は大人しく引き上げるはず。そうランリエルは

考えていたかも知れない。だが、ディアスにその積りはない。徹底的に燃やしつくした。再建するには長い年月と資金が必要だろう。

住民を逃がしたからもう大丈夫。海岸線の防衛兵力は僅かで良い。そう思わせる訳にはいかない。バルバール軍を放置する事は出来ない。一兵も上陸させないだけの防衛体制を敷く必要がある。サルヴァ王子にそう思わせなければならないのだった。

その間もディアスは、上陸させる兵力を3ヶ所5百ずつと限定していた。時折制止を無視したのだろう飛び出してきた領主勢と戦う事もあったが、その対応もこの合計1千5百だけで行う。1千5百以上の敵ならば逃げた。

もちろん上陸軍全軍で戦うより被害は出る。しかし敵にバルバール軍が1千5百しかいないと思わせる為の布石である。この損害は必要な損害だった。

そして、ついにその布石にランリエル軍が蹴躓いた。チェーザリ伯爵を打ち取った時、上陸した軍勢の総数は2千5百だったが、それはランリエル軍本隊による連日の国境攻撃に、国境防備の手が足りず陸に引き揚げた。彼らはそう判断したのだ。

今まで3ヶ所に拠点を構えていた彼らは、海上のバルバール軍を1千5百とみて軍勢をさらに分け拠点を増やした。しかしそれでも慎重を期し、敵勢より多い2千で各地を守る。

そこに例によってバルバール軍は3ヶ所からそれぞれ5百ずつで上陸した。あえて敵が防衛拠点を作った近くにだ。その、それぞれにランリエル軍2千が襲いかかる。5百の各隊は逃走を開始した。

「敵軍の背後に2千を上陸させるんだ。前後から挟み撃ちにする」

ディアスはそう命じ、その言葉通り5百を追っていたランリエル軍2千のうち一つが、前から5百、後ろから2千の軍勢に挟み撃ちにされた。

「しまった！　やはり罠であったか！」

その軍勢の隊長はそう叫ぶと共に、伝令を発した。自分がやられるのは仕方がないとして、その犠牲を無駄にする訳にはいかない。他の隊にバルバール軍の数を知らせなければならない。

しかし、軍勢を撃破したバルバール軍は余勢をかって他のランリエル軍にも襲いかかる。そしてその隊も撃破した。3つ目の部隊には、さすがに追いつけず逃げられた。しかしそれでもランリエル側に多くの被害が出た。

バルバール軍は1千5百と見せかけ、その実3千5百。そう見たランリエル軍はそれに対応して防衛体制を敷いた。だがバルバール軍の真実の数は6千。結局その体制も破られさらに多くの被害を出す。

「いったい、バルバール軍の数はいかほどなのか……」

ランリエルの援軍が拠点とする城の一室で、その将であるロンバルドは、机の上の海岸線の地図を、すぐ後ろにある椅子に座りもせず、立って見下ろしていた。初老の顔に深い皺を刻んでいる。だが彼の心に刻まれた苦悩はその皺よりも深い。

1万の軍勢で海岸線を守れと命ぜられた。しかし海岸線は長く、

1万に領主勢を加えた軍勢を3つに分けただけでは到底手が足りなかった。海岸線を守るなら防衛拠点を増やさなくてはならない。

その誘惑に負け、敵の1千5百しかないと見せかけた擬態に引っ掛かり、軍勢を分散させてしまったのだ。そして敵の罠により被害をだした。

だがそれでも、そこから敵勢は3千5百と知れた。そう思った。しかしそれすらもまだ偽りであり、敵勢はさらに隠れていたのだ。そして再度軍を損なった。

「今のところ総勢6千ほどと報告はありますが……」

ロンバルドの問いかけに、20代半ばの若い副官が遠慮がちに答えた。しかしその答えに上官は声を荒げる。

「そんな事は分っておるわ！　聞いているのは、今のところではなく、本当はどれくらいなのかと聞いておるのだ！」

実際にはバルバール軍の上陸部隊はすでに打ち止めなのだが、騙され続けた彼らは、まるで敵が無限にいるかのような錯覚に陥っていた。

その為、上官の意に沿う答えを、副官は持っていなかった。敵は海上にありその輸送船内に敵兵が何人いるかなど分りようがないのだ。

そして答えられない問いなのは、ロンバルド自身も十分承知していた。彼は海岸線防衛の任を果たせない屈辱に、唇を噛みしめ。拳を強く握る。その両方から血が滴った。

「国境にいらっしゃるサルヴァ殿下にお伝えしろ。ロンバルドは海岸線防備の任に耐えません、と。援軍をお願いします、とな」

そして崩れる様に椅子に座りこみ、机に肘を付いて両手で顔を覆う。無言で一礼し、踵を返して部屋を後にする若い副官の耳を、初老の将軍が洩らす嗚咽が打った。

第37話：決断（1）

サルヴァ王子は、国境本陣の一室で、海岸線防衛に任じたロンバルドからの報告を受けた。

副官のルキノを介して受け取った書簡に目を通し、目を瞑り大きく息を吐く。書簡を手渡した後、その背後に立っていたルキノは、あまり良い知らせではなさそうだと、王子が手にした書簡に興味深そうな視線を送った。

その内容は、自分には1万の軍勢と領主勢だけでは、長大な海岸線を守る事は到底不可能、というものだった。

さらに、それはすべて自分が無能の為、と書かれ、自身の処罰を望んでいる。だが、王子はロンバルドを無能とは思わない。自分を含めたランリエル軍全員がバルバール軍を、いや総司令官フィン・ディアスという男を理解していなかったのだ。

サルヴァ王子も、バルバール軍が海上から近隣の村々に攻撃を仕掛ける、そう考えてはいた。そうでなくて何の為の制海権の確保なのか。だがその程度が、想定していたものとは桁が違ったのだ。

調査させたバルバール軍総司令官の人柄に、残虐、非道、そういった類の項目は存在しなかった。だが報告にあるバルバール軍の行いは、サルヴァ王子から見ても、そこまでやるものなのか、そう思わせるほどのものだったのだ。

バルバール軍に襲撃された、海岸線付近の町や村は地図から消え去った。もはや、人も建物も家畜も、すべてが存在しないのだ。

だが、それでも人的被害は極少数に止まっている。しかしそれすらも、ディアスが聖人君主であるがゆえではない事は分かっていた。

ランリエルを経済的に苦しめる為だ。今、海岸線の内側の村々には流民が押し寄せ溢れている。それをどうにかして食わさなければならない。だが、バルバール軍があえて村民を害さなかった為、一つの村で発生した流民は、その村の総人口と言っていいほどの数である。膨大な食料が必要となる。

本来、バルバール軍にそれをさせない為に行っている国境の敵陣への攻撃は継続されている。海岸線への1万の援軍が到着して間もなく、この国境にも3万の増援が到着しているのだ。

元居た軍勢と合わせ、8万で敵陣を攻めに攻めている。だが国境の狭隘な地形では大軍を展開できない。戦闘に参加出来ているのは結局5万。王子はそれゆえに、そもそも5万で国境を固めたのだ。

浮く3万は、攻め続ける事により疲労した兵、そして死傷者との交代要員という事になる。ランリエル軍は新手新手を繰り出し、そしてバルバール軍は連日の防衛戦により疲労の極致にあった。

その疲れから、敵は動きにも精彩を欠いてきた。戦闘は優位に進んでいる。このまま戦いが進めば、いずれ敵の防衛線に穴があく。それで勝敗は決するはずなのだ。

だが、バルバールによる海岸線の攻撃が激しすぎる。放置する事は出来ない。海岸線防衛に急ぎ増援を派遣する必要があった。しかも大軍をだ。牽制する、という程度では不十分なのだ。

王子はやむを得まいと、副官に命じる。

「王都に連絡し、海岸線防衛の兵を回させよ。だが王都で兵が整うまでの間、バルバール軍に好き放題暴れさせる訳にもいくまい。先にこちらから４万の兵を出す」

はじめはもっともな命令と、子細漏らさぬように聞き入っていたルキノだったが、本陣から兵を割くとの言葉に耳を疑った。

「ですがそれでは、敵と同数の兵力となってしまいます！　それで堅牢な敵陣に攻撃を仕掛けるというのですか？」

今、敵が疲労の極致にあるのは、連日の猛攻により積み上げていった成果である。それを中断しては、敵に休息を与え、すべてが水の泡。攻撃は続けるはず、と考えての言葉だった。

しかし、普段王子を信頼しきっているルキノの耳を疑う言葉が、王子の口から再度放たれる。

「いや、攻撃は中断する。王都からは海岸線へさらに２万を向かわせ、こちらには１万を来させる。攻撃再開はその１万が来てからだ」

ランリエル王国の最大動員兵力は１３万。王都を空にはできず１万を残し、海岸線にはすでに１万。本陣から４万と王都からさらに２万で合計７万。本陣の残りが４万で、王都から１万の合計５万。

ランリエル軍全軍の動員となる。

だが海岸線の７万はどうしても必要だった。流民の問題を解決する最も効果的な方法。それは彼らを自分達の村に返す事だ。流民の

中には実際バルバール軍に襲われた訳ではなく、村や町を離れた者も多数いる。

彼らは、バルバール軍に襲われる事を恐れて逃げ出したのだ。故郷に戻すには、安心させるしかない。海岸線は7万の大軍で守る。だからバルバール軍に襲われる心配はない。そう宣布する必要があるのだ。

そして実際に村を焼かれた流民達にも、当面食い繋げられるだけの支援を行い、故郷に帰す。そして、改めて育ちの早い作物を育てさせ、一刻も早く自給させる。問題を解決する為にはこれしかない。

だが、ルキノはまだ納得しかねるのか、常にない事だが王子に進言を行う。普段、彼が王子の言に逆らう事など皆無と言ってよいのだ。

「敵軍の疲労は、今限界に来ています。後少しで、敵陣は破れます。民にはもう少し辛抱させれば良いではないですか。私とて、民がどうなっても良いと考えている訳ではありません。ですが、もう少しなのです！」

ルキノにしてみれば、王子からの怒声を覚悟の進言だった。副官が上官の作戦を否定するなど、王子は許しはしないだろう。厳罰を受けても仕方がない。そう決意しての行いだった。

しかし、予想に反して王子からの怒声はなく、王子は目を瞑り首を振るだけだった。そして無言で顔の前で手を振り、命令を実行する様に促した。

完全に進言を無視されたルキノだったが、王子から言葉が無かっ

た事が、逆に彼を冷静にさせた。

「失礼致しました。諸将への通達と、王都への伝令の手配をしてまいります」

そう言って深々と頭を下げ、部屋から姿を消した。ルキノの中で複雑な感情がせめぎ合い、注意力が散漫になっていたためか、その扉が閉められる時、王族がいる部屋から退室するには大きな音が鳴り響いた。

海岸線を7万で防衛すれば、海上のバルバール軍は国境の本陣に引き上げるだろう。だがそれでも、こちらはその7万を引き揚げさせる事は出来ない。海岸線防衛の軍勢が居なくなれば、民はバルバール軍の来襲に怯え、また故郷を離れる。

その後、再度海岸線に大軍を派遣しても、もはや彼らは、戦いが終わるまで故郷には戻るまい。民とて逃げたり戻ったりの繰り返しなど、やってはいられないだろう。

そして海上のバルバール軍が本陣に戻れば、ランリエル軍と同じく4万。兵力は互角だ。ディアスはこの時を狙って勝負に出るのだろうか？

現在バルバール軍は疲労の極致。こちらは無傷な者を選抜して本陣に残す。戦いはランリエルの有利に進むはずだ。それでも、バルバール軍は、疲労が完全に癒えるのを待つ訳にはいかない。

ランリエル軍が4万なのは、王都からの1万がこの本陣に来るまでの間。それが到着しては、こちらは5万となる。バルバール軍が勝負に出るなら、その前に挑まなくてはならない。

だが……。「これで良いのだろう？　ディアス」王子は胸中で敵将に語りかけた。自分が敵将の思惑どおりに動いているのは分かっている。だが、あえて敵将の作った道を歩いた。

ルキノが進言した事は、間違いではないのだ。敵も苦しい状況だ。後もう少し。敵味方、お互いがそう考えての我慢比べだった。

後もう少しで、敵陣を破れる。そうすれば敵は国内防衛に必死となり、海岸線攻撃どころではない。

後もう少しで、敵は根をあげる。そうすれば敵は海岸線防衛に戦力を回し、本陣への攻撃は止む。

そういう我慢比べだった。だが、その我慢比べに、自分は負けたのだ。

バルバール側で我慢するのは兵士達だった。だが、ランリエル側で我慢しなければならないのは、兵士達ではなく、民衆だった。

戦いの事は兵士が勝負をつける。兵力は互角。しかし敵は疲労の極致にあり、しかもランリエルは守勢である。条件はランリエルが有利なのだ。あとは、自分が敵将ディアスより、劣っていなければ、勝てる。雌雄を決する。

王子は、そう決断したのだ。

静まり返った部屋に、ルキノが遠ざかる足音が、かすかに聞こえてくる。

自分は以前よりも弱くなったのだろうか？

以前の自分ならば、その我慢比べに勝っていたのではないのか。

いや、我慢比べとも思わず、
「もう少しだから、待っていろ」
そう言って、構わず国境を攻め続け、そして、勝利していたのではないのか。
ふと、そんな気がした。

第37話：決断（2）

ランリエル王国沖に浮かぶ船上からも、海岸線防衛の兵力が増強されたのが見て取れた。

まず、国境のバルバール本陣から敵勢の半数が姿を消したとの報告があり、その数日後に、その軍勢らしき者達が海岸線に溢れたのだ。

「ランリエル軍は、海岸線に大兵力を持ってきましたね。やっぱり敵も苦しかったんですか？」

甲板の上で、海岸線の防備を固める敵兵を遠く望みながら、ケネスにそう問いかけた。その表情と声は、尊敬するディアスの思惑どおりに事が運んだのが嬉しいのか、すこぶる明るかった。

「ああ、そうだろうね。しかし、もう少し粘ると思っていたんだが、考えていたより早い決断だったな」

それに答えるディアスは、特に浮かれる事もなくいつも通り落ち着いたものだ。

「まあ、まだ上陸作戦を続ける事は可能だろうが、今は敵本陣が手薄のはずだ。我々は本陣に帰る。皆を指令室に集めてくれ。今後の話をする」

「はい。分りました！」

とケネスは元気よく答え、走って船内に向った。その後をゆっくりとディアスが続き船内に向かった。

船内の司令室に先に着いたディアスが椅子に座って待っていると、幕僚達が次々に集まってくる。シルヴェンが最後に到着し椅子に座る。

海軍提督ライティラも含めた幕僚達が揃うと、皆の顔を一通り一瞥し、普段通りの気負いない表情で口を開く。

「今後、ランリエル軍はさらに海岸線防衛に大兵力を派遣するだろう。そうなれば上陸作戦は難しい。だがそれは始めからこちらの予定通りだ。むしろ狙っていたと言っていい。これでランリエル軍の経済的負担も増大し、国境の兵力も減った」

その説明に、シルヴェン、そしてライティラの2人を除いた幕僚達は大きく頷いた。徐々に事態が好転していく事に、笑みを浮かべる者すらいた。

「そこでライティラ提督に要請がある。我々が本陣に戻った後も、ランリエル王国沖を艦隊で徘徊しい欲しい。隙を見せればまた上陸してくる。敵にそう思わせる為だ。輸送船は、まだある程度の軍勢が乗っているように見せかける為、石でも積んで喫水を深くして置いてくれ」

「簡単に言ってくれるものですな」

人の重さと同じだけ石を積む苦労を考え、海軍提督は憮然と答えた。

相変わらず総司令官に対し礼を欠いた言動だが、ディアスももはや気にしない事にした。こういう男なのだ、と平然と言葉を続ける。

「よろしく頼む。後、あまり無理をしなくても良いが、隙があれば海兵の上陸もして欲しい。上陸したところに敵が来れば慌てて乗船する。という程度でも良いんだ。とにかく我々が上陸する可能性がある。そうランリエルに思わせられればいい」

そして、他の諸将にも今後の方針などを話した。バルバール王国海岸に船が着くと皆は下船し、軍勢もすべて下ろして本陣へと向かわせる。だが幕僚達は先行し本陣へと向かった。

バルバール側国境の本陣に着いたのは、翌日の夕刻だった。

本陣の兵士達はみな一様に疲れきっていた。５万で展開し後方の３万と兵士を入れ替えながら戦うランリエル軍と、３万で展開し後方の６千と入れ替えながら戦うバルバール軍。いや、後方の６千は、時には危機状況となった戦線の援軍として戦う事もある。両軍の負担は比べるべくもない。

しかしそれも状況は変わった。今、目の前に対峙する敵勢は４万。上陸作戦に率いていた軍勢も帰ってくれば、敵勢と同数になる。

そして、海岸線に大軍を張り付けるランリエル王国は、全兵を動員する事になる。これで経済的負担は、ランリエルにも大きく圧し掛かるはず。ディアスはついに、サルヴァ王子を五分の状態に引きずり降ろしたのだ。

問題は、ここでランリエル軍に決戦を挑むかどうかだった。とはいえ、将兵は疲労困憊しているが、バルバールとしては挑むしかない状況ではある。

現在、両軍全兵動員で経済的負担は同程度と考えてよい。だが、

バルバール王国は戦争開始時点から、最大動員をかけているのだ。今、同じ負担だからと我慢比べを続けては、こちらが負ける可能性が高い。

そして、その我慢比べに勝てたとしても、西にはまだコスティラが控えている。我慢比べで僅差の勝利を得ても、その後コスティラに対抗できなくなるのだ。経済的負担の我慢比べでの勝利。それはバルバールにとって負けに等しい。

だがそれが分かっていて尚、ディアスは決戦を決断しえずにいた。サルヴァ王子は、ここでの決戦をディアスは望んでいる、この状況がディアスが演出した戯曲の終幕なのだ、と、そう考えていた。しかし、ディアスにはまだ、その終幕に参加させるべき登場人物が残っていたのだった。

それは2人。1人はまだ舞台に姿を現さず、もう1人は自分が戯曲の出演者だとすら思わず、観客席で傍観している。

1人は、向こうから気まぐれを起こしてやってくるのを待つしかなく、もう1人は、こちらから出演を頼みに行くしかない。

しかも、出向かなければならない方の屋敷は遠い。そこにディアスが出向き、その不在時に、気まぐれを起こしたもう1人の役者がやってくれば、演技指導を間違えるかも知れない。舞台の上で好き勝手に振舞われては、せっかくの終幕を台無しにされかねない。

その為、気まぐれな役者が登場するまで、ディアスは待たざるを得なかったのだった。

だが、もう時間の余裕はない。もうすぐ終幕は上がる。気まぐれ

な役者はその名に反し、気まぐれを起こさないまま、舞台が終わるまで現れない様だった。

ディアスは決断し、幕僚達を集めて軍議を開いた。そしてそれを宣言する。

「ランリエル軍と決戦を行う」

短く言うと、諸将からどよめきの声が上がる。彼らの中にはうすうす察している者も居たが、やはり総指令の口からその決定を聞くと、戦慄を隠せない。

しかし、状況はバルバール軍に不利な面も多い。将兵は疲れ切り、そしてこちらから攻めるとなると、敵は守りを固めよう。諸将の中には表情に不安の色を見せる者も多かった。ディアスはそれを払拭する為、再度口を開く。

「なに、ランリエルは確かに大国だが、それだけに、常に敵を上回る戦力で戦ってきた。今回の様な同数での戦いなら、こちらに分がある。それに、敵は今まで優位だったがゆえに、この五分の状況に持ち込まれた事に浮足立っている。彼等にして見れば、状況が悪化した事になるんだからね」

嘘である。あのサルヴァ王子が統率する軍勢が、この程度で浮足立つ訳がない。だが、古来名将と呼ばれる者達は、将兵の士気を高める為、大嘘をついてきた。

ある者は、喉の渇きを訴え進軍がままならなくなった軍勢に、この先に梅の木があるのだ、と嘘をつき行軍させた。またある者は、敵の大軍に怯んだ兵士を戦わせるた為、あの敵は戦いの後で疲れき

っているのだ、と嘘をつき突撃させたのだ。

諸将の中には、その嘘を見抜いた者も幾人か居た。しかし、それゆえ彼らはディアスのついた大嘘にのり、あえて大きく頷く。彼らは自分の部隊に戻れば兵士達にも同じ事を言って、士気の鼓舞に努めるだろう。

「だが、今すぐ攻撃を仕掛ける訳じゃない。敵に増援の可能性があるので、そう余裕がある訳でもないが、出来るだけ兵士達にも休養を与えたい。決戦はその時だ」

そして陣立てをみなに説明する。先鋒を仰せつかったグレイスは、

「お任せ下さい！」

と勇ましく胸を叩いた。他の諸将も己の部署を頭に叩き込み、軍議を解散した。

皆が退出した後、ケネスが声をかけた。

「いよいよ、決戦ですね。でも、必ずディアス将軍が勝ちますよね！」

その声は大きく張りがあり、断定的でもあったが、幾分意図的なものが含まれているように感じられた。やはり、ディアスを崇拝してやまないこの少年にも、わずかながら不安があるらしい。

「ああ、大丈夫だ。何せ私は新婚だからね。しかも新妻はバルバール一の花嫁だ。こんなところで死んでは、ミュエルをバルバール一若い未亡人にさせてしまうよ」

ディアスの言葉は、いつも通り冗談めかしたものだったが、ケネスに目をやると、彼が非難がましい目で睨んでいるのが見えた。

「ディアス将軍。いくら冗談でも、言って良い事と、悪い事があります」

少年従者の言葉に、バルバール軍総司令官は、バツが悪そうに目をそらして頭をかいた。

その後、船上にある間に本陣に届いた、ミュエルかの手紙を読んでいた。

本陣に着いてすぐにケネスが受け取り、さらにディアスの下へと渡されたのだが、軍議など慌ただしく動いていた為、今まで読む機会なかったのである。

まさか新妻からの手紙を読むので、軍議を遅らせて欲しいとも言えない。

その内容は、ディアスがいない間に家であった事と、ディアスへの労わりの言葉、そして誕生日祝いの言葉だった。

そうか、自分は３６になっていたのか。と自身それに気付かなかった事に苦笑した。しかし、ケネスからのお祝いの言葉はなかった。どうやら、戦場での生活に、ディアスを尊敬しているはずのケネスすら、失念しているらしい。

だが……。と、では今は何日かのかと考え、慌てて暦を確認する。そしてその日付にディアスは、大きく安著の溜息を付いた。新妻の誕生日まで、まだ半月ほど残している。

１２歳の新妻との年の差が、一時２３歳差から２４歳差へと、まさに3倍にも広がるのは不快だが、今は自分の誕生日が、ミュエルの誕生日の前だった事に感謝しよう。

急いで返答の手紙を書きあげる。当然誕生日祝いの言葉も添えた。そしてケネスを読んで手渡す。

「これをミュエルに届ける様に手配してくれ。危うく妻の誕生日を忘れるところだったよ」

その言葉にケネスは、あっと頭を抱えた。やはりケネスも失念していたらしい。そして手紙を受け取ると、自室に駆けていく。自分も急いでミュエルへの手紙を書き上げる積りらしい。

この期に及んでも、ディアスの誕生日を思い出さなかったらしいケネスに、こいつは本当に私を尊敬しているのか？　と、ディアスは少し疑いたくなった。

ばたばたと駆けていくケネスの足音が、部屋まで聞こえてくる。その音を聞きつつ、ディアスは考えた。

自分は以前より、悪人になったのだろう。

結局出番はなかったが、他の出演者に対してやろうとしていた事は、誰もが不快に顔を歪める様な事だった。

昔の自分なら、やりはしなかった。

いや、出演させよう。とすら、考えもしなかったはずだ。精々、ランリエルに対して行った事までだった。

なぜかは、分かっている。守るべきものが大きくなったのだ。

守るものが増えたのではない。守るべきものは、バルバール王国と、その民。それが変わった訳ではなかった。

だがその中に、まずケネスが入り、そしてミュエルが加わって、大きく膨れあがったのだ。

その膨れ上がったものを抱える為、自分は変わったのだ。

そう、理解していた。

両軍は決戦を前に準備を行う。互いの将兵は、矢を抱え、馬に飼葉をやりながら、ある者は不安そうに敵陣を望み、ある者は敵意の矢を放つ。そして時が熟し、決戦という時。だが、サルヴァ王子、ディアス。両将の決断に水を差す者が現れた。

決戦を前に殺気立つバルバール本陣に、王都から伝令が飛び込んだ。その伝令の騎士は、馬を駆けに駆けさせ本陣につくと、すぐさま馬上から地面に身を移し、その後は自分の足で駆け続けた。

そしてディアスの前に到着すると、膝まづきつつ言った。

「コスティラ軍2万が、国境を越え、我が国に突入する構えを見せております！」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7857u/

愚者達の戦記

2011年11月26日00時56分発行